

言語記述論集 第8号

JOURNAL OF KIJUTSUKEN
Descriptive Linguistics Study Group
Vol. 8

言語記述論集 第8号

目次

巻頭言	長田 俊樹	iii
論文		
ジンポー語の2つの民話資料と文法注釈	倉部 慶太	1
カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ	鈴木 博之・四郎翁姆	21
/ʃ/ が語る音変化史		
—カムチベット語香格里拉方言群における		
硬口蓋系列音素についての覚え書き—	鈴木 博之	91
コプト・エジプト語サイド方言における		
拘束形態素上のスープリニアー・ストローク	宮川 創	105
滋賀県湖北北部方言の命令形式について	脇坂 美和子	129
スワヒリ語カエ方言の「関係節」 —準体言としての記述—	古本 真	147
モンゴル語の第2音節以降における C _x と CV _x の対立について ...	植田 尚樹	173
ベンガル語の expressives をめぐって	大西 正幸・ドウルガ ポド ドット	193
琉球沖永良部語上平川方言の言語資料	山田 真寛・横山 (徳永) 晶子	231
書評		
Alexandra Y. Aikhenvald (2015)		
<i>The Art of Grammar —A Practical Guide—</i>	林 範彦	253
例会報告		273
編集後記		276

巻頭言

長田 俊樹

言語記述研究会は総合地球環境学研究所（略称：地球研）でおこなわれた『環境変化とインダス文明』というプロジェクト（略称：インダスプロジェクト）の一環として立ち上げ、インダスプロジェクトは長田がプロジェクトリーダーとして立ち上げたものだった。2003年10月に、地球研に赴任した際は、プロジェクトの名称は『言語学的手法による古代文明の生活環境復元とその総合的検証』という言語学を前面に出したものだったが、評価委員会からの要請もあって、『環境変化とインダス文明』として、環境調査を前面に押し出したものとなった。しかし、プロジェクトのタイトルが変わったからといって、言語学の研究をしてはならないということにはならない。そこで、2007年4月から、大西正幸さんが上級プロジェクト研究員として地球研に赴任したのを機に、この言語記述研究会を立ち上げ、2009年3月からはその研究会の雑誌として、『地球研言語記述論集』を発刊したのが、言語記述論集をはじめた経緯である。

インダスプロジェクトは2012年3月に終わり、今度は大西正幸さんが地球研で新たなプロジェクト「アジア・太平洋における生物文化多様性の探究」を立ち上げたため、『地球研言語記述論集』はそのまま地球研から発刊を続けたが、予算的に紙媒体で出版するのが難しいため、電子媒体として出版し、現在7号に至る。しかし、残念ながら、2015年2月の評価委員会で大西さんのプロジェクトは本研究にあがることができなかつたため、地球研を冠した言語記述論集は7号で終わることになった。

言語記述研究会には京都大学の言語学研究室から多くの学生、院生が参加してくださった。今後の運営を一手に引き受けてくださった千田俊太郎先生は、言語記述研が立ち上がった頃からのメンバーであり、論集の第1号に、「ドム語の多義一知覚動詞を中心に」を寄せている。一時、熊本大学に赴任しておられたが、2013年10月に京都大学准教授と赴任されて以後、研究会の運営や論集の編集は千田先生にゆだねられてきたので、地球研という冠が取れたからといって、実質的な運営や論集の編集が変わるわけではない。あんまり形式的な巻頭言とするのは良しとしないので、一言千田先生との思い出を書いておきたい。

1995年6月23日、2008年に88才で亡くなった大野晋さんを国際日本文化研究センターにお招きして、「日本語＝タミル語起源説を検証する」と題して、シンポジウムを開催した。大野晋と聞いても、今の若い人にはピンとこないかもしれない。当時、岩波新書『新版日本語の起源』が出版されたばかりで、日本語はタミル語と起源を同じくするという仮説を提唱しておられた。そのシンポジウムはドラヴィダ語を専門とする若手（熊本大学の児玉先生や京都大学の家本先生など）が大野晋に挑むとして朝日新聞にも取り上げられた。そんなシンポジウムに、若き日の、まだ学部生だった千田先生が参加したのだという。そのシンポジウムの司会をやっ

ていたの、庄垣内さんや大阪外大の橋本さんがいらっしやったのはわかったが、若き日の千田先生の勇姿はまったく記憶に残っていない。ただ、あのシンポジウムはなかなか面白い体験だった。後で、庄垣内さんにも「あれは面白かった」とほめられた。そんな会に若き日の千田先生が参加していたのは本当に貴重な経験だったのではないかと思う。

こちらが千田先生を認識するようになったのはその後ずいぶん経ってからだ。1997年から3年間、京大に非常勤講師として教えに行ったが、その講義には千田先生は受講されなかった。また、宮岡先生が主催した特定研究の国際会議などにも参加したが、そのときにも千田先生とお会いしたはずだ。しかし、あまりにも多くの人々が参加していたので、千田先生のごことはまったく記憶にない。ただ、大西さんに頼まれて、ブーゲンビル島から来たテレゼさんを自宅にお泊めしたことがあったが、そのとき、昼間の案内人が千田先生だったように記憶する。しかし、そのときも、会話を交わしたわけではなかった。結局、言葉を交わしたのは、2003年、オーストラリアのメルボルンでお会いしたときだった。長田は一家で、夏休みを利用して、在外研究でお世話になった、ニコラス・エヴァンズさんのお家に遊びに行ったのだ。ちょうどそのときに、ラトロブ大学に来ておられた千田先生にお会いした。こちらが次々と発する質問にあまり答えてくれなかった印象があるが、後で考えると、長田の好きなゴシップ話がほとんどで、そうしたゴシップにはとくに反応することはなかっただけなのかもしれない。

千田先生は本年度の授業で、ニコラス・エヴァンズと一緒に書いた論文“Mundari: The myth of a language without word classes”を取り上げてくれたそう。ほとんど日本では取り上げられることのない論文なので、大変感謝している。また、来年度は日文研で「日本語の起源はどのように論じられてきたか—言語学史の光と影」という題目で共同研究会をおこなう予定だが、それにも参加していただくことになっている。大野晋の時代には、日本語系統論あるいは日本語起源論は日本言語学の一大トピックだったが、今の時代には誰も関心を持たないテーマとなってしまう。まだ若かった千田先生が大野晋を囲んだシンポジウムに参加したように、この分野にも若い人が関心を抱いてくれることを願っている。千田先生への期待は記述研を引き継ぐだけではない。こうしたかつては大きなトピックだった分野にも取り組んでいただき、日本語学の将来を背負ってくれるのではないか。そう期待してやまない。千田先生の期待を表明して、この巻頭言を締めくくりにする。

記述研の益々の発展を心より祈り、ペンを置くことにする。

ジンポー語の2つの民話資料と文法注釈*

倉部慶太

日本学術振興会/東京外国語大学

キーワード：ジンポー語，カチン語，カチン人，民話，ビルマ（ミャンマー）

1 はじめに

本稿では、筆者が北部ビルマ（ミャンマー）に位置するカチン州ミッチーナ市において行った現地調査により収集した2つのジンポー語テキスト資料とそれらに対する文法注釈を提供する。以下、2節ではジンポー語の概況について、3節では本稿における表記法について記す。4節では「太陽を買った話」と題する民話資料の本文とその文法注釈を、5節では「ジンポー人が稲を手に入れた話」と題する民話資料の本文とその文法注釈をそれぞれ提示する。

2 ジンポー語

2.1 系統・地理・人口

ジンポー語 (Jinghpaw) は、シナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) に属する言語であり、北東インドのブラマプトラ溪谷上流から北部ビルマを通り中国雲南省西端部に跨がる地域に分布する。ジンポー人の人口は、ビルマに 630,000 人 (Bradley 1996)、中国に 37,000 人 (戴 2012)、インドに 5,000 から 6,000 人 (Morey 2010) が居住すると推定される。この人口に示されるとおり、ジンポー人の分布の中心は北部ビルマにあると言える。ジンポー語は、チャック語 (Cak/Sak)、カドゥー語 (Kadu)、ガナン語 (Ganan) などルイ語群 (Luish/Asakian) に属する言語と特別な親縁性を示すが (Matisoff 2013)、この言語群は東南アジア大陸部北西部に広く、しかし断続的に分布している。

2.2 北部ビルマの言語状況

ジンポー語が分布する北部ビルマは言語接触地域を形成しており、チベット・ビルマ諸語、漢語、タイ諸語、パラウン諸語などの話者が複雑に混ざり合う地域である。そのため、この地域において多言語使用は珍しくない。ジンポー語に関して特に重要な事実は、ジンポー語がカチン人 (Kachin) の用いる言語のひとつであるという事実である。カチン人は北部ビルマに居住するビルマ有数の民族であり、複数のチベット・ビルマ系言語を話す言語集団から成る。カチン人は言語的に多様であるが、婚姻連合など社会・文化的基盤を共有し、多かれ少なかれ、ひと

* 本稿を執筆するにあたり、オスロ大学/国立民族学博物館の鈴木博之氏から詳細なコメントをいただいた。ここに記して感謝申し上げます。なお、本稿に誤りがあれば、全て筆者の責に帰する。本研究は、JSPS 特別研究員奨励費 24-2938、26-2254 の助成を受けている。

つの社会・文化共同体を形成している。このカチンにおいてジンポー語は共通語として用いられており、カチンの人々を結びつけるひとつの紐帯の機能を果たしている。カチン文化圏における言語接触の総合的研究は未だ現れてはいないが、共通語としてのジンポー語が他のカチン諸語に与えた影響は決して少なくないと考えられる。

加えて、当該地域がタイ (シャン) 文化圏 (新谷編 1998) と部分的な重なりを持つ事実も無視できない。カチン地域において、本来、カチン人は焼畑を営む山地民であり、シャン人は水田稲作を営む低地人である。その生態学的対照性に関わらず、カチン人とシャン人は常に近い隣人であり、カチン人が時としてシャン人に「なる」という事実は当該地域の民族的流動性を反映している (Leach 1954)。タイ系民族のカチンへの影響は言語面にも反映されており、少なくとも 500 語を越えるタイ由来のジンポー語語彙はその証人である (Kurabe 2015)。

ビルマ語、漢語、アッサム語がジンポー語に与えた影響は、通時的には決して強かったわけではない。ただし、近年においては、ジンポー語はこれら近隣の大言語の強い影響下にある。ビルマ地域においてはビルマ語からの、中国地域においては漢語からの、インド地域においてはアッサム語からの影響が、各地域に分布するジンポー語方言にそれぞれ見受けられる。

なお、ジンポー人が現在のビルマのシャン州北部に移住したのは比較的最近ではあるが、Ethnologue によるとこの地域においてジンポー語はパラウン系の人々の間でもある程度の通用性を持つ (Lewis et al. 2014)。

2.3 ジンポー語の方言

ジンポー語には様々な方言的変種の存在が認められるが (Kurabe 2014)、本稿で対象とする方言はビルマのミッチーナ市、バモー市、クツカイ市などで通用する方言である。この方言はビルマのジンポー語における事実上の標準語とされており、他方言が分布する地域においても通用性を持つ。上述のとおり、ジンポー語は中国雲南省西端にも分布するが、雲南省のジンポー語とビルマの標準ジンポー語の方言差は大きくない。また、東北インドに分布するジンポー語方言は特にシンポー語 (Singpho) という名称で知られるが、シンポー語とジンポー語の方言差は大きく相互理解が容易ではない。

2.4 地域および類型的特点

本節ではジンポー語の概要を地域的・類型的観点から記述する。詳細に関しては戴 (2012)、Kurabe (2016, to appear) などを参照されたい。ジンポー語は、近隣言語同様、音節声調を持つ声調言語である。音節構造は C(C)V(C)/T と一般化が可能である。多くのモン・クメール諸語や複数のチベット・ビルマ諸語と同じく、ジンポー語は弱強格リズムを持つ二音節語を多く有する。三音節以上の単一形態素は極めて少なく、基礎語彙において、動詞は一音節語、名詞は二音節となる傾向が認められる。

形態論的には、複合、重複、接辞付加、ゼロ派生などの語形成規則が認められるが、このうち複合と重複の生産性が特に高い。複合には名詞と動詞が関与し、動詞と名詞から成る複合語においては主要部の位置に一貫性が認められないが、名詞のみから成る複合語の主要部は原則と

して右側主要部規則に従う。重複は、基本的に部分重複として実現され、最終音節が左から右へ複製される。重複により、習慣性、分配性、不定性、複数性などが示される。重複は副詞や譲歩の副詞節を形成する主要な手段のひとつでもある。

名詞と動詞が主要な品詞であり、名詞は名詞句の主要部になれるという基準により、動詞は否定辞を付加することができるという基準により定義する。名詞のうち、代名詞、数詞、類別詞、場所名詞、後置詞など閉じたクラスの名詞類は普通名詞と比較して取りうる連体修飾語に制約が認められる。東南アジア大陸部の多くの言語同様、形態統語的基準に基づく形容詞は動詞の下位類として位置づけられる。ジンポー語の副詞は、接辞付加、重複、動詞連続の副詞化などにより、動詞から共時的・通時的に派生されたものが大部分を占める。

ジンポー語は、大多数のチベット・ビルマ諸語がそうであるように、動詞後置型言語であり、述語動詞は常に節末に現れる。ジンポー語は、東南アジア大陸部の近隣言語同様、アスペクト卓立型言語であり、文法的時制は認められない。アスペクトは変化・非変化の二項対立を成す。変化相は事象の直近の変化を示すが、事象の限界性 (telicity) に基づき、始動・終了の両方を示しうる。ジンポー語は主格・対格型言語である。対格接語は DOM (differential object marking) として機能する。被動者の格標示には格の交替が認められ、原則として有生性階層において被動者が動作主に対して相対的に上位か同等の位置にある場合、被動者は義務的に対格で標示され、それ以外の環境では対格の生起は任意である。ジンポー語は、近隣言語同様、動詞連続を発達させた serializing language であり、動詞連続により事象間の継起性、同時性、目的性などが表される。また、動詞連続は補足節 (補文) を形成する主要な手段のひとつでもある。動詞連続の項構造は構成要素の項構造の組み合わせに基づくが、同じ意味役割を持つ項は、中核項であれ周辺項であれ、構成要素間で原則、共有されなければならない。動詞連続の構成要素には脱範疇化がしばしば認められ、V₁ は副詞へと、V₂ は助動詞へと脱範疇化する傾向にある。

3 本稿の表記

本稿の表記には以下に示した筆者の分析による音素表記を用いる。

頭子音					末子音				母音			
p	t	ts	c	k	ʔ	p	t	k	ʔ	i	u	
ph	th			kh						e	ə	o
b	d	dz	j	g						a		
		s	ɕ		(h)							
m	n			ŋ		m	n	ŋ				
ʔm	ʔn			ʔŋ								
w	l	r	y									
ʔw	ʔl	ʔr	ʔy									

ジンポー語は音節声調言語であり、声調として高平調 (H)、中平調 (M)、低下降調 (L)、高下

降調 (F) の 4 つが認められる。本稿では、それらをそれぞれ *má*、*ma*、*mà*、*mâ* と表記する。なお、促音節においては高と低の 2 つの声調のみが対立を成す。接辞付加が関与する以下の変調規則が認められ、一部の声調は基底形と表層形が相違する (以下の T は閉鎖音末子音を表す)¹。本稿の表記は音素表記に基づくため、表層形に近い表記を取る。

(A) Tone spreading

L → F / H __

(e.g. *ń-sà* → *ń-sâ* ‘not send’)

(B) Tone assimilation

a. H → M / __ M

(e.g. *ń-sa* → *n-sa* ‘not go’)

b. L → H / H __ T

(e.g. *ń-sàt* → *ń-sát* ‘not kill’)

4 民話 1 「太陽を買った話」

本節では「太陽を買った話」と題するジンポー語民話資料を提示する。本資料は、筆者が 2011 年 3 月にカチン州ミッチーナ市において、Du Kahtawng 地区の男性 (当時 70 代) から対面調査により得た一次資料である。調査では、まず、リニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にマイク (audio-technica AT9904) を接続して音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。対面調査後、筆者が正書法を用いて音声を文字に書き起こし、後日、コンサルタントの協力のもと、データの確認作業を行った。

4.1 「太陽を買った話」の本文

要約：昔、人間や動物たちは天の君主から太陽を買うためにそれぞれの身体部位を差し出すことになった。しかし、蝙蝠やムササビたちは太陽の購入に参加しなかった。そのために、今日、彼らは日中姿を現すことができない。

(1) *múnkan ńnán làt ʔay ɕəlóy múnkan nday gò jan wa ʔó-tsôm gərày*
 world newly be.born NMLZ when world this TOP sun TOP ADV-beautiful yet
ń-thôy ʔay dàʔ.

NEG-light DECL HS

世界が最初に誕生したとき、この世界は太陽がまだ十分には輝いていなかったそうだ。

¹ 変調規則 (A) と変調規則 (B) の b. は相補分布の関係にあるため、音韻論的に単一規則の異なる実現形と解釈することができる (藤原敬介氏のご教示による)。

(2) **yá? ná dərám jan í-thôy ?ay dà?**

now GEN about sun NEG-light DECL HS
 今ほどには輝いていなかったそうだ。

(3) **pha məjò í-thôy ?ay ?i ɲú yàŋ “nánthe múŋkan òtsa kó? ɲà ?ay ɕiŋgyim-məɕà ni thè? dùsət ni jan məri rà ?ay” ɲú ?ay dà?**

what because NEG-light DECL y/n.Q say when 2pl world above LOC exist NMLZ
 hominoid-human PL COM animal PL sun buy need DECL say DECL HS
 なぜ輝かないかという「お前たち地球上に住む人間と動物たちは太陽を買わなければならない。」と(天の君主たちが)言ったそうだ。

(4) **thó ləmù òtsa ná kho.khám ni tsun ?ay dà?**

up.there sky above GEN king PL say DECL HS
 あちら(上)の天の君主たちが言ったそうだ。

(5) **ɕəlóy ?è “gày, ráy yàŋ jan məri gə? lô” ɲú òná ɕiŋgyim-məɕà ni thè? dùsət ni dzùp-phòŋ ?ay dà?**

then SFP INTJ COP when sun buy HORT SFP say SEQ hominoid-human PL COM animal
 PL gather-assemble DECL HS
 その時、「さあ、それでは太陽を買いましょうよ」ということで人間と動物たちは集まったそうだ。

(6) **ɕəlóy gò “ɕiŋgyim-məɕà ni nánthe nó? məri m-ù?” ɲú ?ay ɕəlóy ɕiŋgyim-məɕà ni gò ɕánthe òmày phé? dò? òná jan məri káw ?ay dà?**

then TOP hominoid-human PL 2pl still buy pl-IMP say NMLZ when hominoid-human
 PL TOP 3pl tail ACC cut SEQ sun buy away DECL HS
 その時、「人間たち、あなたたち買いなさい」と言った時、人間たちは彼らの尻尾を切つて(尻尾と交換に)太陽を買ったそうだ。

(7) **òmày phé? dò? ?ay dà?**

tail ACC cut DECL HS
 尻尾を切ったそうだ。

(8) **ɕiŋgyim-məɕà ni ɕoŋ ɕò? ?ay dà?**

hominoid-human PL first pull DECL HS
 人間が最初に差し出したそうだ。

(9) **day phaŋ ɲa-wəloy ni gò nday læthà? məgá ná wa məló? ya káw ?ay dà?**

that after cattle-buffalo PL TOP this up side GEN tooth pull.off give away DECL HS
 その後、牛や水牛たちはこの上部の歯を(太陽を買うために)抜いて与えたそうだ。

(10) **dùmsu ni ŋa-wəloy ni məló? ya káw ?ay dà?.**

cow PL cattle-buffalo PL pull.off give away DECL HS
牛や水牛たちは抜いて与えたそうだ。

(11) **day phaŋ ?ù ni ráy jaŋ na wa dò? òná ya káw ?ay dà?.**

that after bird PL COP when ear TOP cut SEQ give away DECL HS
その後、鳥たちはというと(太陽を買うために)耳を切って与えたそうだ。

(12) **?ù ni útâ-?ù ni ?ù nùm-ji ni má? khrà gò na wa dò? òná ya káw ?ay dà?.**

bird PL house-bird PL bird NMLZ-small PL be.exhausted until TOP ear TOP cut SEQ give away DECL HS
鳥たち、鶏たち、小鳥たちすべては耳を切って与えたそうだ。

(13) **day phaŋ gù y ni ráy jaŋ ruŋ wa məló? òná ya káw ?ay dà?.**

that after dog PL COP when horn TOP pull.off SEQ give away DECL HS
その後、犬たちはというと(太陽を買うために)角を抜いて与えたそうだ。

(14) **wà? ni mùŋ ruŋ ni məló? òná ya káw ?ay dà?.**

pig PL also horn PL pull.off SEQ give away DECL HS
豚たちも角を抜いて与えたそうだ。

(15) **day cəloy gò yú ni kó? bá y sán ?ay dà?.**

that then TOP rat PL LOC again ask DECL HS
その時、鼠たちのところでもまた尋ねたそうだ。

(16) **yú ni phé? ŋú jaŋ yú ni gò sɨŋko məló? káw ya ?ay dà?.**

rat PL ACC say when rat PL TOP wing pull.off away BEN DECL HS
鼠たちに言うと鼠たちは翼を抜いてくれたそうだ。

(17) **yú ni gò**

rat PL TOP
鼠たちは。

(18) **sɨŋko lè.**

wing SFP
翼だよ。

(19) **sɨŋko məló? káw ya ?ay.**

wing pull.off away BEN DECL
翼を抜いてくれた。

- (20) **day phaŋ pətsíp phé? báy ɲú ?ay dà?**
 that after bat ACC again say DECL HS
 その後、蝙蝠にまた言ったそうだ。
- (21) **pətsíp phé? ɲú yàŋ gò “yá? ?ù ni məri ?ù?” ɲú jaŋ “?ê, ɲay gò ?ù
 bat ACC say when TOP now bird PL buy IMP say when SFP 1sg TOP bird
 ń-rê lô.**
 NEG-COP SFP
 蝙蝠に言うとき「今、鳥たち買いなさい」と言った時は「私は鳥ではないよ」。
- (22) **ɲay gò ?ù ń-rê.**
 1sg TOP bird NEG-COP
 「私は鳥ではない。」
- (23) **ɲay gò yú cè? rê.**
 1sg TOP rat indeed COP
 「私は実は鼠だ。」
- (24) **yú cè? rê.**
 rat indeed COP
 「実は鼠だ。」
- (25) **ɲay gò yú cè? rê.**
 1sg TOP rat indeed COP
 「私は実は鼠だ。」
- (26) **?ù ń-rê” ɲú ?ay dà?**
 bird NEG-COP say DECL HS
 「鳥ではない」と言ったそうだ。
- (27) **“yá? yú ni báy jaŋ məri m-ù?” ɲú jaŋ “ɲay gò ?ù cè? rê.**
 now rat PL again sun buy pl-IMP say when 1sg TOP bird indeed COP
 「今、鼠たちまた太陽を買いなさい」と言った時、「私は実は鳥だ。」
- (28) **?ù cè? rê” ɲú ?ay dà?**
 bird indeed COP say DECL HS
 「実は鳥だ」と言ったそうだ。
- (29) **day məjò pətsíp gò jaŋ məri ń-lóm ?ay dà?**
 that because bat TOP sun buy NEG-accompany DECL HS
 だから、蝙蝠は太陽を買うのに参加しなかったそうだ。

- (30) **day məjò yá? ɕəní ú-ŋâ lù ?ay, pətsíp gò.**
that because now day NEG-exist get DECL bat TOP
だから、今日、日中に姿を現すことができない、蝙蝠は。
- (31) **ɕi gò dáy-ní ɕiŋko mùŋ tu ?ay.**
3sg TOP this-day wing also grow DECL
彼は今日、翼も生えている。
- (32) **na mùŋ tu ?ay.**
ear also grow DECL
耳も生えている。
- (33) **ɨmày mùŋ tu ?ay.**
tail also grow DECL
尻尾も生えている。
- (34) **pətsíp gò.**
bat TOP
蝙蝠は。
- (35) **ráy tím ɕəní ú-ŋâ lù ?ay.**
COP but day NEG-exist get DECL
しかし、日中は姿を現すことができない。
- (36) **jan məri ú-lóm ?ay məjò.**
sun buy NEG-accompany NMLZ because
太陽を買うのに参加しなかったためである。
- (37) **yù-byì má day thè? mərên rê dà?.**
rat-flying.squirrel also that COM same COP HS
ムササビもそれと同様だそうだ。
- (38) **yú ni məri na ɳú yàŋ “ŋay ?ù ɕè? rê lô” ɳa ?ay.**
rat PL buy IRR say when 1sg bird indeed COP SFP say DECL
鼠たちが買うと言った時、「私は実は鳥だよ」と言った。
- (39) **?ù ni məri na ɳú yàŋ “ŋay yú ɕè? rê” ɳa ?ay.**
bird PL buy IRR say when 1sg rat indeed COP say DECL
鳥たちが買うと言った時、「私は実は鼠だ」と言った。

(40) **ráy ñmá yù-byì mùŋ jan ñ-məri ʔay dàʔ.**

COP SEQ rat-flying.squirrel also sun NEG-buy DECL HS
 そうしてムササビも太陽を買わなかった。

(41) **rê məjò yù-byì ni pətsíp ni cəní ñ-ŋâ lù ʔay dàʔ.**

COP because rat-flying.squirrel PL bat PL day NEG-exist get DECL HS
 だから、ムササビや蝙蝠たちは日中、姿を現すことができないそうだ。

(42) **jan thèʔ ñ-ŋâ lù ʔay.**

sun COM NEG-exist get DECL
 太陽と共にいることはできない。

(43) **cəní ráy jaŋ wó kətà dèʔ lægyím to, cənáʔ-ńsín cèʔ pyen khom lù day COP when over.there inside ALL hide CONT night-darkness only fly walk get ʔay dàʔ.**

DECL HS
 日中はあの奥の方に隠れていて、夜の暗がりでのみ飛び回ることができるそうだ。

(44) **day rê məjò jìŋphòʔ ni kháy ʔay màwmùy thàʔ ʔè pha ráy tím mənù jòʔ that COP because Jinghpaw PL tell NMLZ folktale LOC SFP what COP but cost give rà ʔay.**

need DECL
 だから、ジンポー人たちが語る民話では何であっても対価を支払わなければならない。

(45) **mənù ñ-jóʔ ʔay wa gò ñ-khâmçá lù ʔay ɲú ʔay màwmùy day khu tsun cost NEG-give NMLZ man TOP NEG-receive get DECL say NMLZ folktale that like say dá màʔ ʔay ráy.**

RES 3pl NMLZ COP
 対価を支払わない者はそれを享受することができないという民話をそのように語っているのだ。

4.2 民話1の文法注釈

本節では、4.1節で提示した民話資料本文に例示される文法項目のうち、特に注意を要するものに対する文法注釈を記す。以下の注釈番号は4.1節の例文番号と対応する。

1. 名詞 *múnkan* 「世界」の前部要素は単独で「国」という意味を表し、シャン語 *mɯŋ*⁴ 「国」に由来する。この語は他のカチン諸語にも広く借用されており、当該地域の地域語彙のひとつであるといえる (e.g. *Zaiwa meng*¹¹、*Lhaovo muŋ*^H、*Lacid moug*、*Leqi məŋ*³³、*Rawang mǒng*)。

ジンポー語の指示詞 *nday* 「これ、この」は意味の変化を伴わず、意味的主要部の前後どちら

にも生起しうる。

動詞 *tsòm* 「美しい」は副詞化接頭辞により副詞化されると「よく、十分に」という意味を表す。本例文では程度副詞 *?ó-tsóm* 「よく」と相副詞 *gərày* 「未だに」が共起しているが、このように副詞が単一節中に2つ以上現れた場合、アスペクト的意味を表す副詞は常に動詞に近い位置に生起する。

ジンポー語の叙述文を形成する法標識 *?ay* は名詞化標識 *?ay* と同形であり、これらの形式は共時的または通時的な関連性を持つと考えられる。ただし、これらの間には以下に示すような相違も観察されるため、本稿では異なるグロスを与える。(a) 名詞化標識 *?ay* により形成される節の **A** (他動詞節の動作主) または **S** (自動詞節の唯一項) は属格によって標示されうるが、法標識 *?ay* により形成される文はこの特徴を持たない。(b) 名詞化標識 *?ay* により形成される節には主題標識 *gò* が生起しえないが、法標識 *?ay* により形成される文には生起しうる。

3. 名詞 *dùsət* 「動物」はシャン語 *to¹s^hat⁴* 「動物」に由来する。

ジンポー語は、近隣言語同様、疑問文が真偽疑問文であるか疑問語疑問文であるかに従い、異なる疑問文末詞を用いる。基本的に、真偽疑問文は文末詞 *?i* によって形成され、一方、疑問語疑問文は文末詞 *ráy* や *tá* によって形成される。このように、原則として疑問語は疑問語疑問文の文末詞を誘発するが、引用節中ではこの現象がキャンセルされる。例 (3) はまさにその例である。

ジンポー語の名詞節はこの例に観察されるとおり、関係節としても機能し、関係節化は名詞化の一機能であると見なすことができる。なお、ジンポー語では、関係節に加え、補足節 (補文) や副詞節の一部も名詞化により形成される。この種の名詞化と従属節化の密接な関係はチベット・ビルマ諸語に広く観察される特徴である (Matisoff 1972)。

4. 名詞 *kho.khám* 「王」はシャン語 *ho¹k^ham⁴* 「王宮」に由来するが、ジンポー語において換喩的意味変化が起きている。

ジンポー語の遠称指示詞は直示中心からの相対的高さにより三分割され、直示的中心より高い位置を指す *thó*、直示的中心と同位置を指す *wó*、直示的中心より低い位置を指す *lé* の三項対立を成す。

5. ジンポー語の引用節の内容は必ずしも実際に発せられた発話でなくともよく、実際には発せられなかった意図を表すことも可能である。例 (5) に観察される引用節は、実際に発せられた発話とも実際は発せられなかった発話とも解釈できる。

並列複合動詞 *dzùp-phoj* 「集まる」は2つの類義動詞から成る。ジンポー語の並列複合語の構成要素の順序は、以下の2つの規則に従って決定されるが (倉部 2011)、例 (5) における並列複合動詞の順序は規則 (1) が関与している。

(i) Higher first rule

構成要素間の音節数が同じ場合、相対的に高い母音を持つ要素が先行する

(ii) Shorter first rule

構成要素間の音節数が異なる場合、相対的に短い音節数を持つ要素が先行する

なお、例 (9) に観察される並列複合名詞 *ŋa-wəloy* 「牛や水牛」は2つの類義名詞から成るが、その構成要素の順序は上記の規則 (2) が関与的である。

12. 動詞 *máʔ* 「尽きる」と接続助詞 *khra* 「まで」は全体で「全て」という意味の量化子として機能する。

18. 文末詞 *lè* はビルマ語の確かさを表す文末詞 *lè* に由来する。ビルマに分布する現代ジンポー語はビルマ語の強い影響下にあり、文末詞や間投詞にビルマ語からの借用形式が散見される。

29. この例において、動詞 *məri* 「買う」と動詞 *lóm* 「同行する」は補文関係の動詞連続を形成している。動詞連続が補文形成の一方略として用いられる現象は東南アジア大陸部において珍しくない。

30. 動詞 *lù* 「得る」は主動詞とともに用いられると状況可能を表す助動詞のように機能する。ただし、助動詞的機能を担う場合においてもこの動詞に直接、否定辞を付加することが可能である。この事実は、自動詞的に用いられる場合であってもこの動詞が未だ動詞性を保っていることを示唆する。なお、動詞「得る」が可能を表す形式へと文法化する現象は東南アジア大陸部諸語に系統を越えて広く観察される (Enfield 2004)。

44. 譲歩の接続助詞 *tím* は接続助詞 *tíʔ* 「しかし」と副助詞 *mùŋ* 「も」の融合により成立した形式である。

45. 動詞 *khàmçá* 「受ける」はビルマ語 *khànzá* 「受ける、味わう」に由来する。

3人称複数を表す標識 *màʔ* は義務的ではない。この形式は通時的に *m-àʔ* (pl-3rd) と分析可能である。ただし、動詞の一致を持たない周辺言語との言語接触により、現代ジンポー語では本来有していた動詞の一致がほぼ消失している。複数標識 *màʔ* も本来は分析可能な動詞語尾であったが、現代語においては3人称を示す人称接辞 *-àʔ* はこの語にしか保存されていないため、*màʔ* は現代語においては分析不可能な形式と母語話者に認識されている。

5 民話2「ジンポー人が稲を手に入れた話」

本節では「ジンポー人が稲を手に入れた話」と題する民話資料を提示する。本資料が依拠するデータは4節の最初に記したものと同様である。

5.1 「ジンポー人が稲を手に入れた話」の本文

要約：昔、稲には籾殻が付いていなかった。しかし、人間や動物があまりにも稲を食べたがために稲は天界へと逃げ帰った。天の精霊は稲に籾殻を付け、地上に戻るよう諭した。本来、稲は稲軸が太く稲穂も豊かであったが、地上へ戻る道中、カメレオンの呪いによって稲は細く痩せこけたものになってしまった。

- (1) **jìngphò? ni mam phé? lù lá ?ay lam gòn dá ?ay lam ló?-ló? ɲà**
 Jinghpaw PL rice.plant ACC get take NMLZ way narrate RES NMLZ way many-RED exist
?ay ráy tí? mùŋ gədùn ?ay khu òná nà ?ay lam phé? tsun gà? ɲa yàŋ
 NMLZ COP but also short NMLZ like ABL hear NMLZ way ACC say HORT say when
jìngphò?-?əmyú ni gò mòy-ɕoŋ dè? jan-ɕəta-gá ná mam phé? lù lá
 Jinghpaw-race PL TOP long.ago-before ALL sun-moon-land GEN rice.plant ACC get take
mà? ?ay dà?.

3pl DECL HS

ジンポー一人が稲を手に入れたことを語った話はたくさんあるけれども、短く聞いた話をひとつ言いましょうと言うならば、ジンポー一人は最初、天界の稲を手に入れたそう。

- (2) **ráy tím nday mam ɲa tím ɕoŋ lù lá ?ay gò kòp í-lóm ?ay**
 COP but this rice.plant say but before get take NMLZ TOP rind NEG-accompany DECL
dà?.

HS

しかし、これは稲といっても最初に手に入れたものは籾殻がついていなかったそう。

- (3) **ngu, ngu phé? lù lá ?ay dà?.**

husked.rice husked.rice ACC get take DECL HS

白米、白米を得たそう。

- (4) **lù lá òná ɕìngyim-məɕà ni wa day ngu phé? ɕá ?ay.**

get take SEQ hominoid-human PL TOP that husked.rice ACC eat DECL

手に入れて人間たちはその白米を食べた。

- (5) **kháy yàŋ mùŋ day ngu phé? kháy ?ay.**

plant when also that husked.rice ACC plant DECL

植える時もその白米を植えた。

- (6) **ngu tu ?ay.**

husked.rice grow DECL

白米が生えた。

- (7) **ngu pru ?ay.**

husked.rice come.out DECL

白米が出てきた。

- (8) **ngu tu pru ?ay dà?.**

husked.rice grow come.out DECL HS

(植えたならば) 白米が (そのまま) 生え出てきたそう。

- (9) **ráy tí? mùŋ day ngu wa phyen grày ló? ?ay dà?.**
 COP but also that husked.rice TOP enemy very many DECL HS
 しかし、その白米は敵が大変多かったそうだ。
- (10) **khà? gəbà wà ?ay ɕəlóy ŋá ni mùŋ ɕá ?ay dà?.**
 water big VEN NMLZ when fish PL also eat DECL HS
 川が溢れると魚も食べたそうだ。
- (11) **?ù ni mùŋ ɕá ?ay dà?.**
 bird PL also eat DECL HS
 鳥も食べたそうだ。
- (12) **yú ni mùŋ ɕá ?ay.**
 rat PL also eat DECL
 鼠も食べた。
- (13) **dùsàt-dù.myéŋ ni mùŋ ɕá ?ay.**
 animal-COUP PL also eat DECL
 動物も食べた。
- (14) **ngu day phé? nàw dzìŋrì ?ay məjò lə-ní mi ná ?ətèn thà?**
 husked.rice that ACC too.much trouble NMLZ because one-day one GEN time LOC
ngu day wa jan-ɕəta-gá dè? phroŋ màt ?ay dà?.
 husked.rice that TOP sun-moon-land ACC flee COMPL DECL HS
 その白米をあまりにもいじめたために、ある日その白米は天へ逃げてしまったそうだ。
- (15) **phroŋ màt òná ní-tà-mədù? ni wà yu ?ay ɕəlóy ngu ní-ŋâ**
 flee COMPL SEQ house-master PL return see NMLZ when husked.rice NEG-exist
s-ay dà?.
 CSM-DECL HS
 逃げてしまって主人たちが帰って見たとき白米はもういなくなっていたそうだ。
- (16) **ngu ní-ŋâ ?ay məjò day məɕà ni gəthòŋ-məɕà ni grày maw ŋà**
 husked.rice NEG-exist NMLZ because that person PL village-person PL very wonder CONT
mà? ?ay dà?.
 3pl DECL HS
 白米がいなかったなのでその人たち、村人たちは大変驚いたそうだ。
- (17) **day ɕəlóy ?è gùy-là ləŋây mi gò “ŋay mù s-ay.**
 that when SFP dog-male one one TOP 1sg see CSM-DECL
 その時、一匹の雄犬が「私は見つけました」

- (18) **ngu gə́nánǎ̀ dèʔ yon wà ʔay ɲay mù s-ay” ɲú ʔay dàʔ.**
 husked.rice where ALL face VEN NMLZ 1sg see CSM-DECL say DECL HS
 「白米がどこへ向かったか私は見つけました」と言ったそうだ。
- (19) **ɕəlóy gò “day ráy yàŋ naŋ ɲú ʔay ɕərə̀ dèʔ ʔánthe phéʔ woy sa myìʔ” ɲú**
 then TOP that COP when 2sg say NMLZ place ALL 1pl ACC lead go 1pl.IMP say
ʔay ɕəlóy ʔè gù-y-là day gò thó jan-ɕəta-gá dèʔ woy sa ʔay dàʔ.
 NMLZ when SFP dog-male that TOP up.there sun-moon-land ACC lead go DECL HS
 その時、「それならば、あなたが言う場所へ私たちを連れて行ってください」と言った時、
 その雄犬はあの天の地へ連れて行ったそうだ。
- (20) **woy sa òná day jan-ɕəta-rúŋ dèʔ dù ʔay ɕəlóy day**
 lead go SEQ that sun-moon-office ALL arrive NMLZ when that
jan-ɕəta-ləmù-məday-nát ni kóʔ “ʔè, nánthe jòʔ ʔay ngu wa báy
 sun-moon-sky-celestial.spirit-spirit PL LOC INTJ 2pl give NMLZ husked.rice TOP again
wà s-ay.
 return CSM-DECL
 連れて行ってその天の役所に到着した時、その天の精霊たちのところで(人間たちは)「あ
 なたたちがくれた白米がまた帰ってしまった」
- (21) **nánthe kóʔ báy wà s-ay lô” ɲú òná tsun ʔay dàʔ.**
 2pl LOC again return CSM-DECL SFP say SEQ say DECL HS
 「あなたたちのところへまた帰りましたよ」と言ったそうだ。
- (22) **ɕəlóy ngu day gò “ʔè, ɲay múŋkan-gá dèʔ ń-ŋâ lù s-ay.**
 then husked.rice that TOP INTJ 1sg world-land ALL NEG-exist get CSM-DECL
 その時、その白米は「私は地上ではもう暮らせません。」
- (23) **ɲay phéʔ məkòp-məga ʔay ń-ŋâ ʔay.**
 1sg ACC cover-shield NMLZ NEG-exist DECL
 「私を守ってくれるものはいません。」
- (24) **yòŋ-yòŋ ɲay phéʔ jóm ɕá ʔay məjò ɲay ń-ŋâ gúy ʔay.**
 all-RED 1sg ACC join.force eat NMLZ because 1sg NEG-exist dare DECL
 「みんなよってたかって私を食べるので私は(地上に)暮らす勇気がありません。」
- (25) **khrit ʔay” ɲú tsun ʔay dàʔ.**
 fear DECL QUOT say DECL HS
 「怖いです」と言ったそうだ。

- (26) **day ɕəlóy gò jan-ɕəta-nàt-məgam ni gò “ʔê, day ráy yàŋ gò naŋ phé?**
 that then TOP sun-moon-spirit-authority PL TOP INTJ that COP when TOP 2sg ACC
məkòp-məga na mətə məkòp dàt ya na” ɲú ìná ngu kó? phyí?
 cover-shield IRR.NMLZ for cover away BEN IRR say SEQ husked.rice LOC skin
ɕə-lóm ya ʔay dà?

CAUS-accompany BEN DECL HS

その時、天の精霊たちは「はい、それならばあなたを守るために覆ってあげましょう」と言ってお米に籾殻を付けてやったそう。

- (27) **ráy tí? mùŋ “ʔê, phyí? ɕà ɕə-lóm ʔay ɲay í-gúy ʔay.**
 COP but also INTJ skin only CAUS-accompany NMLZ 1sg NEG-dare DECL
 しかし、「籾殻を付けただけでは私は勇気がありません。」

- (28) **í-wâ gúy s-ay” ɲú ʔay dà?**
 NEG-return dare CSM-DECL say DECL HS
 「もう帰りたいありません」と言ったそう。

- (29) **“ʔê, day ráy yàŋ gò ná? mənò-mənaŋ ni mùŋ grày jò? dàt na”**
 INTJ that COP when TOP 2sg.GEN COUP-friend PL also very give away IRR
ɲú ʔay dà?
 say DECL HS
 「はい、それならば、あなたの友達もたくさんあげましょう」と(天の精霊は)言ったそう。

- (30) **kháynu jò? dàt ʔay dà?**
 maize give away DECL HS
 トウモロコシを与えたそう。

- (31) **ɕəgyi jò? dàt ʔay dà?**
 millet give away DECL HS
 キビを与えたそう。

- (32) **ɕəpre jò? dàt ʔay dà?**
 bean give away DECL HS
 豆を与えたそう。

- (33) **nàm-pàn ni jò? dàt ʔay dà?**
 forest-flower PL give away DECL HS
 花を与えたそう。

- (34) **kumgyin ni kəkhûm ni ?này ni ràw ɛ̀à di ìnà báy jò? dət ?ay dà?.**
 cucumber PL pumpkin PL yam PL together only do SEQ again give away DECL HS
 胡瓜や南瓜、芋を一緒にしてまた与えたそうだ。
- (35) **jò? dət ìnà múŋkan-gá dè? báy wà s-ay dà?.**
 give away SEQ world-land ACC again return CSM-DECL HS
 与えて地上へまた帰ったそうだ。
- (36) **mam nday.**
 rice.plant this
 この稲は。
- (37) **báy wà ?ay ɛ̀lólóy gò jan dù wà ?ay məjò lam læpran kó?**
 again return NMLZ when TOP sun arrive VEN NMLZ because road between LOC
?yúp ?ay dà?.
 sleep DECL HS
 また帰る時、日が暮れたので道の途中で寝たそうだ。
- (38) **lam læpran kó? ?è mam gun wà ?ay ni day gù-y-là thè? ɛ̀ŋgyim-məɛ̀à**
 road between LOC SFP rice.plant carry VEN NMLZ PL that dog-male COM hominoid-human
ni báy wà ?ay ɛ̀lólóy day ɛ̀nà? ɛ̀ŋnyên læŋây mi sa wà ?ay dà?.
 PL again return NMLZ when that night chameleon one one go VEN DECL HS
 道の途中で、稲を担いで来た者たち、その雄犬と人間たちがまた帰る時に、その夜、一匹のカメレオンが来たそうだ。
- (39) **“?è, nánthe ɛ̀ŋgyim-məɛ̀à ni mam lá wà ?ay ŋa ?ay gò gərə khu rê**
 INTJ 2pl hominoid-human PL rice.plant take VEN DECL say NMLZ TOP which like COP
mam wa rê tâ” ɲú ìnà sán ?ay dà?.
 rice.plant TOP COP wh.Q say SEQ ask DECL HS
 「やあ、あなたたち人間たちが稲を持って来たというのはどのような稲ですか」と言って聞いたそうだ。
- (40) **ɛ̀lólóy ɛ̀ŋgyim-məɛ̀à ni tsun ?ay.**
 then hominoid-human PL say DECL
 その時、人間たちは言った。
- (41) **“mam ñ-phún gò ŋa-wəloy-ləkoŋ rá-m-rám gə̀bà, mam**
 rice.plant paddy-stalk TOP cattle-buffalo-upper.part.of.ear about-RED big rice.plant
ñ-sí gò gùmrà-ñmày dərám wum ?ay dà? lô” ɲú ?ay dà?.
 paddy-fruit TOP horse-tail about rich DECL HS SFP say DECL HS
 「稲軸は牛や水牛の耳上部のように太く、稲穂は馬の尻尾くらい豊かだつてよ」と言った

そうだ。

(42) **ɬəlɔy ɕiŋnyɛn pha tsun ʔay ʔi.**

then chameleon what say DECL y/n.Q

その時、カメレオンは何と言ったか。

(43) **“ʔê nánthe mam ú-phún ɲú ʔay gò nday nyé? ʔà? məruŋ dzòn
INTJ 2pl rice.plant paddy-stalk say NMLZ TOP this 1sg.GEN GEN spine like
grèn-grèn ráy ʔùgà?” ɲú ʔay dà?.**

be.raw.boned-RED COP OPT say DECL HS

「あなたたちが稲軸というのはこの私の背骨のように痩せこけますように」と言ったそう
うだ。

(44) **“mam ú-sí ɲú ʔay mùŋ nday nyé? ʔà? ìmày dzòn rê kəci ɕà ráy
rice.plant paddy-fruit say NMLZ also this 1sg.GEN GEN tail like COP few only COP
ʔùgà?” ɲú ìná tsun káw ya ʔay dà?.**

OPT say SEQ say away BEN DECL HS

「稲穂というのもこの私の尻尾のように少なくなりますように」と言ったそう
だ。

(45) **day məjò mam ú-phún mùŋ gəji màt ʔay dà?.**

that because rice.plant paddy-stalk also small COMPL DECL HS

そのために、稲軸も小さくなってしまったそう
だ。

(46) **mam ú-sí mùŋ gəji-gəlù ráy màt ʔay rê dà?.**

rice.plant paddy-fruit also small-long COP COMPL NMLZ COP HS

稲穂も細長くなってしまったのだそう
だ。

(47) **day məjò dáy-ní nát-jò?-prát ná jìŋphò? ni gò day ɕiŋnyɛn phé? mù
that because this-day spirit-give-period GEN Jinghpaw PL TOP that chameleon ACC see
jaŋ mù ʔay ɕərə kó? sàt káw mà? ʔay.**

when see NMLZ place LOC kill away 3pl DECL

そのために、今日、精霊信仰をするジンポー人たちはそのカメレオンを見たら、見た場
所で殺してしまう。

(48) **nday gò mam thè? seŋ ʔay màwmùy gədùn ráy s-ay.**

this TOP rice.plant COM be.related NMLZ folktale short COP CSM-DECL

これが稲に関する短い民話である。

5.2 民話2の文法注釈

本節では、5.1節で提示した民話資料本文に例示される文法項目のうち、特に注意を要するものに対する文法注釈を記す。4.2節同様、以下の注釈番号は5.1節の例文番号と対応する。

1. 名詞 lam は本来的に「道」を意味する語であるが、補文を導入する補文標識としての機能も果たす。

3. ジンポー語では近隣言語同様、「米」と関連する語彙が細分化されている。名詞 ngu は脱穀された米(玄米、白米)を指し、脱穀されていない米(粃米)を指す名詞 mam と対立を成す (Suzuki, Kurabe, Iwasa, Shirai, Ebihara and Matsuse to appear)。これらの語は別語根である点に注目されたい。なお、名詞 mam は「稲」の意味も表す。

14. 名詞 lə-ní (one-day) 「1日」の lə- は数詞 ləŋây 「1」の弱化形に由来する。ジンポー語は、一般的な数詞 ləŋây 「1」に加え、より限られた環境で現れる数詞 mi 「1」を持つ。特に類別詞の後では一般的な数詞 ləŋây 「1」は生起せず、必ず数詞 mi 「1」が現れる。また、数詞 mi 「1」は数詞 ləŋây 「1」に後続し不定の意味を表す際にも用いられる。

23. ジンポー語の関係節は、4.2 節の注 3 に記したとおり、名詞化標識 ?ay により形成され、関係節形成は名詞化の一機能であると考えられる。本例において、名詞化標識 ?ay は無主部関係節 (headless relative clause) を形成する役割を果たしている。

24. 動詞 jóm 「協力する」は動詞連続の V₁ として用いられると「一緒に」という意味を表し、副詞的機能を果たす。ただし、副詞的に用いられる場合であっても、この動詞には否定辞を直接、付加することができる。この事実はこの動詞が未だ動詞性を保っていることを示している。

25. 引用標識 ŋú は動詞 ŋú 「と言う」に由来する。動詞 ŋú は引用標識として用いられる場合、否定辞を付加することができない。(25) に例示される ŋú は否定辞を付加することができないため、動詞ではなく引用標識へと移行しているものと考えられる。なお、動詞「言う」の引用標識への文法化は通言語的に観察される現象である (Matisoff 1991:398–99, Lord 1993:151–213, Heine and Kuteva 2002:261–65)。

29. 二人称代名詞属格形 ná? は通時的に二人称代名詞 naŋ と 属格 ?à? の融合に由来する。

41. 名詞 mam ú-phún 「稲軸」および mam ú-sí 「稲穂」における形態素 ú- は通時的には名詞 mam 「稲」の弱化形に由来する (Dai and Wu 1995:101)。この種の所有物に付加される所有者形態素は一種の主要部標示 (head-marking) の例と見なすことができる。類例として以下の例がある。

(49) naŋ ‘you’ or ná? ‘your’ > ú- ‘your’

ná? ú-nû

2sg.GEN 2GEN-mother

「あなたの母」

42. 4.2 節の注 3 に記したとおり、疑問語は本来、疑問語疑問文を形成する文末詞を誘発するが、引用節中ではこの現象がキャンセルされる。本例では真偽疑問文を形成する文末詞 ?i が用いられている。この事実、本例は表面上は引用節ではないけれども、ŋú 「と言うと」のような形式が本例の後で省略されていることを示唆する。

記号

.	syllable boundary	-	morpheme boundary
---	-------------------	---	-------------------

略号

1	first person	HORT	hortative
2	second person	HS	hearsay
3	third person	IMP	imperative
pl	plural	INTJ	interjection
sg	singular	IRR	irrealis
wh	wh-question	LOC	locative
ABL	ablative	NEG	negative
ACC	accusative	NMLZ	nominalizer
ADV	adverbializer	OPT	optative
ALL	allative	PL	plural
BEN	benefactive	Q	question
CAUS	causative	QUOT	quotative complementizer
COM	comitative	RED	reduplicant
COMPL	completive	RES	resultative
CONT	continuous	SEQ	sequential
COP	copula	SFP	sentence-final particle
COUP	couplet	TOP	topic
CSM	change-of-state marker	VEN	venitive
DECL	declarative	y/n	yes/no
GEN	genitive		

参考文献

- Bradley, David. (1996) Kachin. In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler and Darrell T. Tryon, eds., *Atlas of Languages of Intercultural Communication in the Pacific, Asia, and the Americas* vol. 2.1. 749–51. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 戴慶廈. (2012) 『景頗語參考語法』北京: 中国社会科学出版社.
- Dai, Qingxia and Hede Wu. (1995) Jinghpo prefixes : Their classification, origins, for general morphology. *Senri Ethnological Studies* 41: 93–131.

- Enfield, Nicholas J. (2004) Areal grammaticalization of postverbal ‘acquire’ in mainland Southeast Asia. In Somsonge Burusphat, ed., *Papers from the Eleventh Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society*, 275–96. Tempe: Arizona State University.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva. (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 倉部慶太. (2011) 「ジンポー語における対句表現」『地球研言語記述論集 3』 37–57.
- Kurabe, Keita. (2014) The reflexes of the Proto-Jingpho glides in modern dialects. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2: 181–97.
- Kurabe, Keita. (2015) The phonological adaptation of Shan loanwords in Jingpho. Paper presented at the 48th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, University of California, Santa Barbara, California, USA.
- Kurabe, Keita. (2016) A grammar of Jinghpaw, from northern Burma. Ph.D. dissertation, Kyoto University. pp.668.
- Kurabe, Keita. (to appear) Jinghpaw. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla, eds., *The Sino-Tibetan Languages*. Second edition. London: Routledge.
- Leach, Edmund R. (1954) *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. London: G. Bell and Sons.
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons and Charles D. Fennig eds. (2014) *Ethnologue: Languages of the World*. Seventeenth edition. Dallas, Texas: SIL International.
- Lord, Carol. (1993) *Historical Change in Serial Verb Constructions*. Amsterdam: John Benjamins.
- Matisoff, James A. (1972) Lahu nominalization, relativization, and genitivization. In John Kimball, ed., *Syntax and Semantics* I. 237–57. New York: Seminar Press.
- Matisoff, James A. (1991) Areal and universal dimensions of grammatization in Lahu. In Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine eds., *Approaches to Grammaticalization*, vol. 2. 383–453. Amsterdam: Benjamins.
- Matisoff, James A. (2013) Re-examining the genetic position of Jingpho: Putting flesh on the bones of the Jingpho/Luish relationship. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 36.2: 15–95.
- Morey, Stephen. (2010) *Turung: A Variety of Singpho Language Spoken in Assam*. Canberra: Pacific Linguistics.
- 新谷忠彦 (編). (1998) 『黄金の四角地帯 — シャン文化圏の歴史・言語・民族』 東京: 慶友社.
- Suzuki, Hiroyuki, Keita Kurabe, Kazue Iwasa, Satoko Shirai, Shiho Ebihara and Ikuko Matsuse. (to appear) A geolinguistic analysis of the ‘rice’ category in Tibeto-Burman. *Studies in Asian Geolinguistics* 2.

カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ

鈴木 博之

四郎翁姆

オスロ大学

オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、名詞句、動詞句

1 はじめに

中国四川省甘孜藏族自治州康定市西部を中心に話されるカムチベット語 Minyag Rabgang (木雅熱崗) 方言群¹に属する各種方言は、周辺の方言群²と比べると分かるように、音対応や語彙形式の面で一定の差異が認められる (Suzuki 2014a, Suzuki & Sonam Wangmo 2014)。一方、文法的特徴に関しては、先行研究による記述が少なく、方言群の間の具体的な差異がどれほどなのかを知ることは困難である。同様に、Minyag Rabgang 方言群内の方言間の差異についても、音声特徴 (鈴木 2009, Lha-mo-skyid 2010) 以外については知られていない。



図1 (左) & 図2 (右) 塔公村の位置 (=印の位置)³

本稿では、康定市塔公鎮塔公村で話されるカムチベット語 Lhagang 方言の簡便な文法スケッチを提示する。ただし、塔公村に居住するチベット語母語話者の普段の言語使用状況は単純ではない。Suzuki & Sonam Wangmo (2014) の記述によると、塔公村には少なくとも4種類のチベット系言語が話されており、そのうち2種がカムチベット語、残りの2種がアムドチベット語

¹ 格桑居冕 (1985) が「中路次方言」と呼ぶ諸方言とほぼ同一のものを指すと考えられる。ただし、Zhang (1996) を見ると、中国の先行研究において格桑居冕 (1985) 以外は特に当該地域のカムチベット語について独立の方言区画を設けていない。瞿靄堂・金效静 (1981)、張濟川 (1993) などを参照。

² Suzuki (2009, 2014b) などを参照。

³ Suzuki & Sonam Wangmo (2015d) に用いられている地図と同じである。これらは Googlemaps (<https://www.google.co.jp/maps/>) によって作成した (2015年6月25日にアクセス)。

となっている⁴。2種のカムチベット語は地域変種としては単一で、社会言語学的な差異とみなすことができ、いずれも Lhagang 方言と呼べるが、区別するために Suzuki & Sonam Wangmo (2014) では Lhagang-A、Lhagang-B と分けている。Lhagang-B とは現地に最初期から定住している人々が話す土地のカムチベット語を反映するものである。一方、Lhagang-A は Lhagang-B を基礎に、特にアムドチベット語の影響を受けて発達途上にある、Lhagang-B の社会言語学的変異といえる⁵。本稿で記述するのは Lhagang-B のほうである。以降、本稿で Lhagang 方言と述べている場合は原則 Lhagang-B を指すものとする。なお、Suzuki & Sonam Wangmo (2015d) が Lhagang-A と Lhagang-B の語彙形式を対照する形で資料を提供している。

Lhagang 方言の母語話者の言語使用はほぼ Lhagang 方言を用いて行われているが、村内に複数の言語が分布しかつ用いられている点で、日常的な言語接触を生み出し、場合によっては接触言語（アムドチベット語）も話すなど、必ずしも「単一言語使用」とはみなされない。実際、語りの文脈では Lhagang-B による発話に Lhagang-A の形式が挿入されることがある（鈴木ほか 2015ab, Suzuki & Sonam Wangmo 2017）。また、日常生活の中で漢語（西南官話四川方言）の広範な使用も認められる。このため、Lhagang 方言の置かれている言語環境は、Minyag Rabgang 方言群に属する方言群の中で、アムドチベット語との接触という特別な環境にあるといえる。塔公村の人口は約 1500 人を数えるが、半数は本来塔公村周辺で牧畜民として生活していたが政策によって定住した経緯を持つ移住者であり（Sonam Wangmo 2013）、本稿でいう Lhagang 方言（Lhagang-B）の話者数もまた約半数と見積もられる。また、Lhagang-B は上述の言語環境の中で急激な変化を被っており、塔公村の定住民が代々伝えてきた言語を現在記録しない限り、容易に知ることができなくなる危惧がある（Suzuki & Sonam Wangmo 2015ab）。

本稿で用いる Lhagang 方言の言語資料は、第 1 著者の現地調査で得られたものと、Lhagang 方言（Lhagang-B）を母語とする第 2 著者が提供したものである。前者の主な調査協力者はラモチェ [Lha-mo-skyid] さん（女性）で、塔公村の出身である。語彙調査および文法調査ともに漢語を媒介言語とした翻訳形式を中心に行った。なお、本稿に収録する語彙および例文は、すべて第 2 著者によるチェックを経て、Lhagang 方言（Lhagang-B）であることを確認した。これにより本稿は Lhagang 方言に関連する記述の中で、初めて Lhagang-B に特化したものになる。

本稿の構成は、Lhagang 方言の音体系の記述と具体例の提示（2 節）、名詞句（3 節）、動詞句（4 節）、文のタイプと分類（5 節）の順で記述を行う⁶。内容は Lhagang 方言の記述に的を絞り、近縁方言やチベット文語形式との対比という観点からの分析は行わない。語釈つき例文には通し番号を与える。末尾に索引を兼ねたもくじを配する。なお、本スケッチは、名詞句・動詞句といった分類方法から漏れる周辺的な要素の記述が不十分であるほか、なお詳細な分析を必要とする部分が少なくない。これについては、個別にかつ段階を経て稿をなすこととする。

⁴ Suzuki (2016), Suzuki & Sonam Wangmo (2016, 2017) はさらに複数の言語・方言の存在を報告している。塔公村の詳細な背景については Sonam Wangmo (2013, 2014, 2016, forthcoming) を参照。

⁵ この複雑で整理の難しい状況になっているのは、塔公村の言語状況が十分に理解されないまま鈴木 (2006) による Lhagang-A の記述報告が先行してしまったことによる。

⁶ 本稿の構成は鈴木 (2014) に近い。ただし、Tournadre & Suzuki (forthcoming) を参考に書きかえた。

2 Lhagang 方言の音体系

本節では Lhagang 方言 (Lhagang-B) の音体系と各音素の具体例を提示する。表記には特殊文字のようなものを含まない正書法を設けず、超分節音の記述を除いて直接音標文字を用いる。音標文字には IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も用いる。Lhagang 方言の音体系を提示している先行研究は存在する⁷が、Lhagang-B に限定した記述はないため、ここで改めて具体例を挙げつつ記述する。

2.1 音節構造

2.1.1 最大の音節構造

Lhagang 方言の最大の音節構造 (分節音の配列) は、鈴木 (2005) を参照して以下のように記述できる。

$${}^c C_i GVC$$

このうち C_i (初頭主子音) と V (音節核の母音) が必須であり、 $C_i V$ を音節の最小構成とみなすことができる。 c (先行子音) と G (わたり音) は共起することがほとんどない。しかし絶対ないとは言えない。

Lhagang 方言に認められる末子音は /ʔ, w, j/ がある。このうち、/ʔ/ が大部分の例を占める。/ʔ/ は脱落する場合がある (2.3 参照)。

これに超分節音素として声調が加わって実現される。ただし声調は原則的に最大 2 音節の音韻語を単位としてかかるため、「音節構造」の中には記述されない。また、接辞類が付加される場合には必ずしも語単位ではなく形態素単位になる (2.2 参照)。

2.1.2 具体例

以下、各種分節音の配列について、それぞれ 1 つずつ例を掲げる。

表 1 : Lhagang 方言の音節構造の具体例

c	C_i	G	V	C	具体例	語義
	C_i		V		'na	病気だ
	C_i	G	V		'kwa	食用種子
c	C_i		V		- ^h ŋa	太鼓
c	C_i	G	V		^h gwi ^h gwi	キャビネット
	C_i		V	C	'tʰʔ	崖
c	C_i		V	C	' ^h seʔ	金

各種音節構造はその出現頻度に大きな異なりが認められ、 G を含む例はあまり見かけない。

⁷ 鈴木 (2006)、Suzuki & Sonam Wangmo (2015d) など。鈴木 (2006) の記述は Lhagang-A を扱っている。

2.2 超分節音素

2.2.1 声調とその表記

Lhagang 方言の超分節音素はピッチの高低による声調として実現される。声調パターンとして、以下の4種が認められる。

ˉ : 高平 ˊ : 上昇 ˋ : 下降 ˆ : 上昇下降

声調は原則として最大2音節からなる音韻語を単位としてかかるり、3音節以上からなる語については、3音節目以降低平～中平のピッチとなって、弁別的にならないか、もしくは異なる声調領域を形成する（具体例については3.2や3.7.1を参照）。

ただし、1音節語では高（高平/下降）、低（上昇/上昇下降）の2タイプのみが対立する。接尾辞がついた時の声調の現れにより、4つのいずれかの声調記号を与えることになる。

声調のかかる単位の中には各種接尾辞類（格標識、名詞化標識、動詞接尾辞など）も含まれるが、接頭辞がある場合は接頭辞の声調パターンが語全体の声調に影響し、必ずしも中核的な語の声調が維持されるとは限らず、動詞複合形式では中心となる各形態素（動詞語幹やTAM標識）に接頭辞がつくたびに声調が新たに設定される。特定の接頭辞は独立した声調を担うこともある。

以上の声調記号は語（または音節）の初頭に付される。

2.2.2 具体例

以下に1～2音節語の声調の具体的な現れを示す。[]内には各音節の分節音をSで代表し、その右肩に調値を5段階⁸で表示する。

	高平	上昇	下降	昇降
1音節語	ˉmiʔ	ˊme	ˋmĩ	ˆte:
	[S ^{55/52}]	[S ^{24/243}]	[S ^{55/52}]	[S ^{24/243}]
	「目」	「火」	「名前」	「ラバ」
2音節語	ˉmiʔ ^h pu	ˊmə ^{ts} he	ˋmə ^{ts} ho	ˆme ^{to} ʔ
	[S ⁵⁵ S ⁵⁵]	[S ²⁴ S ⁵⁵]	[S ⁵⁵ S ³²]	[S ²⁴ S ⁵³]
	「眉毛」	「命」	「他の人」	「花」

以上に示した調値は、初頭子音によって若干異なりが現れるが、弁別的ではない。声調は型が弁別的に作用すると考えられる。

1音節語では2通りの型が認められ、語頭の高低だけが重要である。接尾辞がつくときの音声実現によって声調の型が与えられる。

⁸ 正確には朱曉農(2010)の定義に従うため3域6段階表示であるが、Lhagang方言では声域の区別を行わない。また、伝統的な5段階で記述が可能であるため、5段階で記述することには問題はない。いずれにせよ、調値はLhagang方言の音体系にとっては重要ではない。

2.3 母音

2.3.1 母音の舌位置による一覧

舌位置による一覧は次のようになる。

i	u	ɯ u
e	ə	o
ɛ	ɔ	
a	ɑ	

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立しているため、計4種の対立が認められる。ただし、すべ挙ての舌位置について4種の対立が認められるわけではない。特に長鼻母音は出現に制限が見られ、語例もきわめて限定的である。

母音の舌位置の表記は、実際の発音に最も近い補助記号を用いない音標文字で行う。母音の性質上、音環境によって舌位置に変動が認められるが、本稿ではその記述を省略する。

「短母音+声門閉鎖音/?」の組み合わせは、語（形態素）によって語中において長母音と交替することがある。この場合は実際の発音に基づいて記述する。

2.3.2 具体例

以下に短母音、長母音、鼻母音の具体例を掲げる。

	短母音例	長母音例	鼻母音例
i	ˈmiʔ 目	ˈtsʰi: ラード	ˈtʃi̯ 雲
e	ˈme 火	ˈtʰe: できる	ˈtʰɛ̯ fia 数珠
ɛ	ˈmɛ 葉	ˈmɛ: ʰso 休む	ˈzɛ̯ ɕa 袈裟
a	ˈma ʰtsa 資金	ˈru ʰba: 亀	ˈmi̯ lã 夢
ɑ	ˈla ŋa 腕	ˈda: po 主人	ˈgo̯ fi̯a 鷹
ɔ	ˈɕa sʰɔ 鳥小屋	ˈsʰɔ: ɲi̯ 明日	ˈli̯ 牛
o	ˈmo ʰta xɛ 占い師	ˈto: 熊	ˈtɕa kʰɔ̯ 洞窟
ɯ	ˈmu tiʔ 真珠	ˈku: テント	ˈpɯ̯ ɲqi̯ 兄弟姉妹
u	ˈmu ku 鳩	ˈɲu: ma 竹	ˈli̯ ɱba 湿った
ɯ	ˈtɕa tʰe la 祭り	ˈpɯ: 昇る	ˈtʰɯ̯ tsə スカート
ə	ˈmə 人	ˈɲə: ka ひづめ	ˈtʰɔ̯ tsʰo 家族

/ɯ/は借用語を除いて認められない。

鼻母音は語末位置にくる例において、発話によってはその鼻腔共鳴が失われ、非鼻母音として実現されることがよくある。この事例は語を単独で発音する場合には認められない。

2.4 子音

2.4.1 子音音素一覧

音節構造の主子音 (C_i) 位置に現れる要素の一覧は以下のものである。

表3：Lhagang 方言の主子音 (C_i) 位置に現れる音素

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
				前 後			
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無声無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無声無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʒ		
摩擦音	無声有気		s ^h		ɕ ^h		
	無声無気	ɸ	s	ɕ	ɕ	x	h
	有声		z		ʒ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音	有声	w			j		

Lhagang 方言に見られる子音連続の組み合わせ数は比較的多いが、その組み合わせのパターンは単純で、大きく前鼻音、前気音、わたり音を含むものに分けられる。前の2者とわたり音は独立して現れることができるから、最大で3子音連続を形成するが、その出現頻度は低い。

2.4.2 具体例

子音は、初頭子音について単子音および子音連続に分けて具体例を挙げつつ考察する⁹。

A. 単子音

単子音の具体例は、可能な限り2例ずつ挙げる。

閉鎖音・破擦音

Lhagang 方言は基本的に閉鎖/破擦音に無声有気、無声無気、有声の3系列を有する。ただし、声門閉鎖音は/ʔ/の1つである。

そり舌閉鎖音系列/t^h, t, d/は、場合によって微弱な摩擦を伴う破擦音として実現されることが、

⁹ 末子音としては、/ʔ, w, j/のみが認められるため、特にここでは取り上げない。

その摩擦の弱さから破擦音とはみなさない。

有声音の系列はいずれも単子音としてはあまり見られず、語中に現れる例が多い。単子音/d, dz/は未確認である（子音連続の項を参照）。また、単子音/dz/は定着した借用語に限って現れる。

	例語	語義	例語	語義
p^h	ʼp ^h uʔ ^h ge	ふた	ʼta p ^h e: p ^h e:	蝶
p	ʼpa mo	霜	ʼpi: li	小牛
b	ˉ ^h kuʔ ba	糸	ʼtɕ ^h ə bu	大きい
t^h	ˉ ^h ɔʔ ka	かまど	ˉ ^h uʔ	出会う
t	ʼta ^h ta	今	ʼtuʔ	毒
d	ˉ ^h tsɛ de	梅檀	ʼ ^h do: do	1 にぎり
t^h	ʼt ^h a mo	細い	ˉ ^h iʔ	導く
t	ʼta	網	ʼtɕe:	ラバ
d	該当なし			
k^h	ʼk ^h a leʔ	ふた	ˉ ^h o	彼/彼女
k	ʼka fiu	護身符箱	ʼko ^h go	鶏
g	ˉ ^h mu ge ^h tō	飢饉		
ʔ	ˉ ^h a ma	母	ʼʔə ni: to	用途
ts^h	ʼts ^h a	塩	ˉ ^h i:	脂肪油
ts	ʼtsa: ʼpi:	芽が出る	ʼtsi ʔi	ねずみ
dz	ʼji: dzə	石鱈	ˉ ^h ɛ: dzə	箸
tɕ^h	ˉ ^h tɕ ^h a ro	氷	ˉ ^h oʔ	あなた
tɕ	ʼtɕa laʔ	道具	ʼtɕo:	着る
dz	該当なし			

摩擦音

Lhagang 方言は最大で摩擦音に無声有気、無声無気、有声の3系列を有する。ただし両唇摩擦音とそり舌摩擦音には無声有気音のみが認められる。軟口蓋摩擦音、声門摩擦音は有気音を欠く。単子音/s/は未確認である（子音連続の項を参照）。

	例語	語義	例語	語義
ɸ	ˉ ^h ɸu ts ^h a	唐辛子	ˉ ^h ɸu tɕi	飛行機
s^h	ˉ ^h a	地	ˉ ^h i ^h bu	背負いかご
s	該当なし			
z	ˆzã ^m ba	橋	ʼzi: tɕ ^h u	露
ʃ	ˉ ^h ʃa mo	硬い	ʼʃə: tsə	柿
ɕ^h	ˉ ^h ɕ ^h a	肉	ˉ ^h i: ʔe	半分

ɕ	ˈca ^h di	ごみ	ˈci: ts ^h ɔ	鳥の巣
ʒ	ˈza ^h nu	鉛	ˈzi	畑
x	ˈxɛj tsə	靴	ˈxo ts ^h ɛ	マッチ
ɣ	ˈla ^h ɣa	手	ˈji ^h ɣe	文字
h	ˈhɔ	落ちる	ˈha ^h ˈko	理解する
fi	ˈfiə tɕa	ミルクティー	ˈfiu ^h pa	ふくろう

共鳴音

Lhagang 方言は基本的に鼻音/流音に無声、有声の2系列を有し、半母音には有声の系列のみが認められる。ただし、/r/には無声音がない。/r/は音価が多様で、中でも [z, r, ɹ] といった発音がよく認められる。

	例語	語義	例語	語義
m	ˈma ma	祖母	ˈmi?	目
m̥	ˈm̥ɛ	薬	ˈm̥u ^h pa	霧
n	ˈna ^h pa	病人	ˈnə	天
n̥	ˈn̥a	鼻	ˈn̥u	油
ɳ	ˈɳa	魚	ˈɳi ma me to?	ひまわり
ɳ̥	ˈɳ̥i	心臓	ˈɳ̥u: ma	竹
ŋ	ˈŋa	私	ˈŋu	泣く
ŋ̥	ˈŋ̥a: ts ^h e	早い	ˈŋ̥o	炒める
l	ˈlã	道	ˈlu?	綿羊
l̥	ˈl̥a	神	ˈl̥e:	埋める
r	ˈra tɕo?	つの	ˈre:	布
w	ˈwa mo	キツネ	ˈna: wo	森林
j	ˈja ^h kɛ	口蓋	ˈju ^h pu	カラスムギ

B. 子音連続

Lhagang 方言に見られる子音連続の組み合わせは比較的多いが、その組み合わせには大きく分けて主たる子音に先行する前鼻音と前気音、そして主たる子音に後続するわたり音に分けられる。わたり音と前2者は独立しており、最大で3子音連続となるが、借用語以外はほとんど見られない。

また、基本的に前鼻音・前気音と主たる子音の間の有声性は一致する。

以下に子音連続の組み合わせを基準に分類して具体例を掲げる。

前鼻音

前鼻音は有声および無声有気閉鎖・破擦音および一部の摩擦音に先行し、調音位置および有声性において一致するのが基本である。

有声音に先行するもの

- ^mb** : ^mbui 虫
ⁿd : ⁿdã ^mba 泥
ⁿɖ : ⁿɖə めすヤク
^ŋg : ^ŋgo 頭
ⁿdz : ⁿdzɔ ゾ (ヤクと牛の交配種のおす)
ⁿdʒ : ⁿdʒã ^mba あご

無声有気音に先行するもの

- ^ɸp^h** : ^ɸp^ha rə ジャツカル
^ɸt^h : ^ɸt^he mo 親指
^ɸt^h : ^ɸt^hi ^hpa 胆のう
^ɸk^h : ^ɸk^ha ŋa どら
^ɸts^h : ^ɸts^he: t^hu? 双子
^ɸtɕ^h : ^ɸtɕ^hu ^hte 仏塔
^ɸɕ^h : ^ɸp^ha rə ^ɸɕ^hi? 拭き消す

前気音

前気音は各種無声無気音および有声音に先行し、有声性において一致する。

無声有気音に先行するもの

- ^hp** : ^hpa wo 英雄
^ht : ^hta 馬
^ht : ^htə ma 乞食
^hk : ^hku? ba 糸
^hts : ^htsa wa 根
^htɕ : ^htɕõ ma 木
^hs : ^hsɛ: ma 豆
^hʂ : ^hʂo 縫う
^hɕ : ^hɕu はぐ
^hl : ^hlɑ: はやぶさ

有声音に先行するもの

- ${}^{\text{h}}\mathbf{b}$: ${}^{\text{h}}\text{ba} \text{ } {}^{\text{h}}\text{la}?$ 波
 ${}^{\text{h}}\mathbf{d}$: ${}^{\text{h}}\text{do}$ 石
 ${}^{\text{h}}\mathbf{d}$: ${}^{\text{h}}\text{di}$ 蛇
 ${}^{\text{h}}\mathbf{g}$: ${}^{\text{h}}\text{go: pa}$ にんにく
 ${}^{\text{h}}\mathbf{dz}$: ${}^{\text{h}}\text{dzō}$ 町
 ${}^{\text{h}}\mathbf{dz}$: ${}^{\text{h}}\text{dzα: zo}$ 背
 ${}^{\text{h}}\mathbf{z}$: ${}^{\text{h}}\text{zi}?$ 豹
 ${}^{\text{h}}\mathbf{z}$: ${}^{\text{h}}\text{zo}$ 乳牛
 ${}^{\text{h}}\mathbf{m}$: ${}^{\text{h}}\text{ma ca}$ 孔雀
 ${}^{\text{h}}\mathbf{n}$: ${}^{\text{h}}\text{na ma}$ 息子の嫁
 ${}^{\text{h}}\mathbf{n}$: ${}^{\text{h}}\text{ni: ma}$ しわ
 ${}^{\text{h}}\mathbf{ŋ}$: ${}^{\text{h}}\text{ŋa ma}$ 尾
 ${}^{\text{h}}\mathbf{l}$: ${}^{\text{h}}\text{lō}$ 牛
 ${}^{\text{h}}\mathbf{w}$: ${}^{\text{h}}\text{wã tɕ^ha}$ 権力
 ${}^{\text{h}}\mathbf{j}$: ${}^{\text{h}}\text{je: ma}$ 花椒

そのほか

特定の語にのみ見られる子音連続の組み合わせには、両唇接近音 ${}^{\text{w}}$ が語中に現れる例が認められる。これは有声前気音とは交替しない。

${}^{\text{w}}\mathbf{dz}$: ${}^{\text{h}}\text{tɕu} \text{ } {}^{\text{w}}\text{dzɛ}?$ 18

${}^{\text{w}}\mathbf{z}$: ${}^{\text{h}}\text{tɕu} \text{ } {}^{\text{w}}\text{zə}$ 14

わたり音

わたり音には/w/と/j/が認められる。多くが借用語に現れる。

/w/をもつもの

\mathbf{kw} : ${}^{\text{h}}\text{kwa kwa}$ 食用種子 (<漢語「瓜瓜」)

/j/をもつもの

\mathbf{pj} : ${}^{\text{h}}\text{pjē tā}$ かつぎ棒 (<漢語「扁擔」)

\mathbf{tj} : ${}^{\text{h}}\text{tjē}$ 電気 (<漢語「電」)

3子音連続

${}^{\text{h}}\mathbf{gw}$: ${}^{\text{h}}\text{gwi} \text{ } {}^{\text{h}}\text{gwi}$ キャビネット

3 名詞句

3.1 名詞句の基本構造

Lhagang 方言における名詞句は、中心となる語が名詞の場合、おおよそ以下のような構造で現れる。

(指示詞)-(関係節)-名詞-(形容詞)-(数詞)-(指示詞)-格標識-(主題標識)

名詞句は基本的に何らかの格標識（ゼロ形態含む）を伴うと考えることができる。しかし実際の記述の上では、一部の場所・時間などを表す名詞句がゼロ形態による格標識をとるものは絶対格ではなく位格に置かれていると考え、ゼロ形態素 (∅) および語釈をいちいち表示しない。

また、格標識には主題標識が後続しうる。主題標識は名詞句のみに付加される。

指示詞は2か所に現れうるが、同時に現れることはまれである。詳細は 3.3.2 参照。

修飾句は名詞化接辞を伴う名詞句の場合は被修飾語である名詞に前置され、形容詞もしくはそれに準じる形態の場合は被修飾語である名詞に後置される。両者の修飾句は共起可能である。

また、名詞化接辞を伴う名詞句それ自体が名詞と同等に機能するときも以上の名詞句構造をとる。

以上のうち、名詞句の中心となる名詞に先行する指示詞、関係節、形容詞は、音節数にかかわらず独自に声調を担うことができる。

名詞句の中心となる語には、名詞のほかに代名詞も現れる。代名詞の場合、名詞句はおおよそ以下のような構造で現れる。

代名詞-(数詞)-格標識-(主題標識)

代名詞は、形態によっては、格標示を格標識ではなく語幹の形態変化によって表すものがある。なお、代名詞は修飾語（句）を伴わない。

3.2 名詞

単音節語、2音節語が多い。派生語や複合語の場合、3音節や4音節で1語になっているものもある。

1. 単音節語

˦nə「空」、˦me「火」、˦go「頭」、˦luʔ「綿羊」

2. 2音節語

˦i˦da wa「月（天体）」、˦tɕ˦u miʔ「泉」、˦i˦da: po「主人」、˦h˦ta ˦i˦ga「くるみ」

3. 3音節語

˦i˦lɔ ˦mbu˦ tɕ˦e「象」、˦ta ˦p˦he: ˦p˦he:「蝶」、˦t˦h˦aʔ ˦t˦h˦aʔ ˦h˦tɕe「織機」

4. 4音節語

˦i˦do ˦i˦dze ˦p˦h˦a ˦lā「ダイヤモンド」、˦tə ˦ma ˦dze ˦t˦hi「垢」、˦h˦kɔ ˦i˦dza ˦l˦aʔ ˦i˦dza「ムカデ」

3、4音節語と考えられるものの中には、1～2音節ごとに個別の声調を担うものもある。たとえば^hdzɛ: 'ka: ra「蜘蛛」、^hʔa ts^hu 'mbo ro「頬」などがある。

3.1で触れたように、場所・時間などを表す名詞はそれ自体位格に置かれていると解釈できる一方、普通の名詞と同様にふるまい、文法格による標示が行われることも可能である。たとえば、次のような名詞がある。

- 場所：^hjo ɣo ma「左」、^hnō tɕ^ha「内側」、^hʰo?「上」
- 時間：^hta ri「今日」、^hja mo「朝」、^hshō p^he?「来年」

ただし、場所を表す名詞は位格標識を伴うことが多い。

語構成について見ると、次のような接尾辞がよく見られる：/pa, ba, ma, wa, po, mo, wo/。いずれも語彙的に決まっており、基本的に生産的であるとは言えない。特徴的なのは/wa/で、本来語・外来語を問わず各種地名に付加されて「～（出身）の人」の意味を表す、数少ない生産的な接辞である。

動詞の名詞化接辞については、独立した節 3.5 を設けている。

3.3 代名詞

人称代名詞と指示詞に分けて述べる。

3.3.1 人称代名詞

人称代名詞は、人称と数が区別される。

表4：人称代名詞一覧

人称	単数	不特定複数	特定複数（2を例に）
1	'ŋa	'ŋa ts ^h o	'ŋa ^h ŋi: 'ŋa rə ts ^h o [排除]
2	^h tɕ ^h o?	^h tɕ ^h u? ts ^h o	^h tɕ ^h o: ^h ŋi:
3	^h k ^h o	^h k ^h o ts ^h o	^h k ^h o ^h ŋi:

「数」は基本的に単数、不特定複数、特定複数が区別される。特定複数とは数詞を含む複数形式である。以上の例では「2」を用いているが、「3」や「4」に置き換えることができる¹⁰。このうち、1人称の「2数」には聞き手の「包括」と「排除」が区別される。複数を表す/ts^ho/¹¹は [ts^ho, tso, dzo, zo] のいずれでも発音される。

「性」はいずれの人称においても区別されない。

「敬称」はいずれの人称においても認められない。

¹⁰ 理屈の上ではどんな自然数でも入るが、実際の使用では2～5ぐらいが多くを占める。

¹¹ 形態素的には集合標識であり、複数標識ではないが、代名詞に付加されているものは、先行する形態素とともに1語とみなし、語釈においても[複]と記す。

1 人称単数は、属格について格標識を伴う形式とともに、代名詞語幹の音形の異なりだけで表すことができる。次のようにまとめられる。

表5：人称代名詞の語幹交替

格	1 人称単数	2 人称単数	3 人称単数
絶対格	ʼŋa	ˈtɕʰoʔ	ˈkʰo
属格	ʼŋa / ʰŋa-gə	ˈtɕʰoʔ-gə	ˈkʰo-gə

表5の異なりは、たとえば次のように現れる¹²。

- (1) a ʼŋa ʼpo mo-∅ ʼreʔ
 1.[属] 娘-[絶] [判]
 (彼女は) 私の娘です。
- cf. b ʼŋa-∅ ʼpo mo-∅ ʼji:
 1-[絶] 娘-[絶] [判/E]
 私は(彼の) 娘です。

3.3.2 指示代名詞

指示詞は近称、遠称が体系的に区別される。近称は基本的に話し手の手の届く範囲を示す。遠称は話し手の手の届かない範囲ではあるがあまり離れていない範囲を示す。話し手からかなりの距離がある範囲を示す形態が認められ、超遠称と呼んでおく。指示詞にさまざまな形態素を伴い、場所や様態を示すことができるが、近称の場所には形態の異なる例が認められる。超遠称は遠称の重複形で、指示詞単独でのみ用いられる。

表6：指示代名詞一覧

	近称	遠称
指示詞	ˈnɔ / ˈnɔ / ˈʔə nɔ	ˈpʰa ru / ˈpʰa lu
集合	ˈnɔ tsʰo	ˈpʰa ru tsʰo / ˈpʰa lu tsʰo
場所	ˈnɔ nə / ˈʔa na	ˈpʰu na
方向	ˈnɔ ɕʰoʔ	ˈpʰa ru ɕʰoʔ
様態	ˈnɔ ˈɽa / ˈʔə ˈɽa	ˈtə ˈɽa

集合形は主に人について用いられる。場所形は位置または方向を示す。

指示詞は代名詞の機能と形容詞の機能を兼ねる部分がある。指示形容詞として用いる場合、中心語に前置することも後置することも可能である。前置される指示形容詞は、後続する名詞とは異なる声調領域の独立の声調を持つ。これらが単なる指示形容詞として、ただしその指示力がほぼ失われた状態として用いられるとき、名詞に後置され、かつ独立した声調を担わない。

¹² 本稿における動詞にかかわる語釈には若干の注意が必要である。特に存在動詞と TAM を表す接辞群には特別の語釈の方法を適用する。4.2.2, 4.6.1 および本稿末尾の付録を参照されたい。

- (2) a $\text{'}^n\text{d}\text{ə}$ $\text{'}\eta\alpha:\text{ }\eta\delta\text{-}\emptyset$ $\text{'s}^h\text{u}\text{-}\emptyset$ 're?
 この 子供-[絶] 誰-[絶] [判]
 この子供は誰ですか？
- b $\text{'}\eta\alpha:\text{ }\eta\delta\text{-}^n\text{d}\text{ə}\text{-}\emptyset$ $\text{'s}^h\text{u}\text{-}\emptyset$ 're?
 子供-この-[絶] 誰-[絶] [判]
 この子供は誰ですか？
- (3) $\text{'}\gamma\text{a na}$ $\text{'p}\tilde{\text{i}}\text{ ga}\text{-}\emptyset$ $\text{'}^h\text{t}\text{c}\text{e? me?}$ 'jo?
 ここ ビスケット-[絶] 少し [存]
 ここにビスケットが少しあります。
- (4) $\text{'}\gamma\text{ə}^n\text{d}\text{a}$ $\text{'}\gamma\text{ə}\text{-re?}$
 このような [疑]-[判]
 このようですか？

3.4 疑問語

疑問語は名詞句もしくはその一部を占める要素として機能するものに加え、副詞的に機能したり単独で述語になるものもある。ここで一括して記述する。

Lhagang 方言の疑問語には次のようなものがある。

表7：疑問語一覧

形態	語義
$\text{'s}^h\text{u}$	誰
$\text{'t}\text{c}\text{ə t}\text{ə}$	何
'ka na	どこ
$\text{'t}\text{c}^h\text{u ts}^h\text{e? 'ka}$	いつ (何時)
$\text{'t}\text{c}\text{ə t}\text{ə re? te}$	どのように
$\text{'t}\text{c}\text{ə ts}^h\text{e?}$	どれぐらい

疑問語には疑問文に用いられ疑問を表すものと、平叙文に用いられ疑問を表さないもの（不定名詞、不定形容詞など）に分かれる。構造上はほぼ区別されないが、不定用法の場合、肯定文は譲歩を表す接続詞-na を伴う文の中に現れる傾向がある。以下では、疑問と不定の例をともに記述する。

$\text{'s}^h\text{u}$ 「誰」

人について尋ねるときに用いる。複数形に $\text{'s}^h\text{u s}^h\text{u} / \text{'s}^h\text{u ts}^h\text{o}$ ¹³ 「誰々」がある。前者は複数の特定の人物を列挙した答えを要求するときに用いられ、後者は誰かを代表とした集合の答えを要求するときに用いられる。

¹³ 第2の形式は「誰」に人称代名詞の集合標識が付加されたものである (3.3.1 を参照)。

- (5) ʔtʰoʔ-∅ ʔsʰu-∅ ʔji:
2-[絶] 誰-[絶] [判/E]
あなたは誰ですか？
- (6) ʔtʰoʔ tsʰo ʔnō-la ʔsʰu sʰu-∅ ʔjo:re?
2.[複] 家-[位] 誰.[複]-[絶] [存]-[判]
あなたたちの家には誰々がいますか？
- (7) ʔnə-∅ ʔsʰu tsʰo-gə ʔkʰō mba-∅ ʔre?
これ-[絶] 誰.[複]-[属] 家-[絶] [判]
これは誰の家ですか？

不定名詞の例は以下のようなものである。

- (8) ʔsʰu-∅ ʔji: ʔna ʔtʰe:lə re?
誰-[絶] [判] ても 知っている-[未]
誰でも知っているでしょう。
- (9) ʔsʰu-ʰtʰe:ʔ-gə ʔŋa-∅ ʔfi dē la ʔmə-ʰdzə-tu
誰-一-[能] 1-[絶] [否]-信じる-[証]
誰 1 人私を信じてくれませんか。

ʔtʰə tə 「何」

事物についてたずねるときに用いる。

- (10) ʔtʰoʔ-la ʔmī-∅ ʔtʰə tə-∅ ʔhta:re?
2-[与] 名前-[絶] 何-[絶] という名前である-[判]
あなたは名前を何というのですか？

不定名詞の例は以下のようなものである。

- (11) ʔtʰə tə ʔsʰo: tʰa:la ʔta: rəʔ ʔŋi:∅ ʔjoʔ re?
何 動物-[与] ても 心臓-[絶] [存]
どんな動物でも心臓があります。

ʔtʰə という 1 音節でも用いられるが、疑問を表さないことがある。

- (12) ʔŋa-la ʔtʰə ʔna-ʰdzə-∅ ʔmeʔ-tu
1-[与] 何 病気だ-[名]-[絶] [存/否]-[証]
私には何も病気になるものはありません。(=私は何の病気もしていません)

ʔtʰə 「どんな」

疑問形容詞と呼べる。名詞に後続し、格標識がさらに後続する。

- (13) ʔtʰoʔ-la ʔhsā tʰe ʔtʰə-∅ ʔjo:
2-[与] 意見 どんな-[絶] [存]
あなたはどんな意見がありますか？

˘ka na 「どこ」

場所についてたずねるときに用いる。名詞、位置、方向を表すとき、疑問詞単独で出現するほか、各種格標識を付加することで場所にかかわるさまざまな疑問文を形成することができる。

名詞¹⁴

- (14) ˘tɕʰoʔ ˘pʰa ji:-∅ ˘ka na ʼreʔ
 2.[属] 故郷-[絶] どこ [判]
 あなたの故郷はどこですか？

位置

- (15) ˘ka na ˘n duʔ-jo:
 どこ いる-[継]
 (あなたは) どこに住んでいるのですか？

方向

- (16) ˘ka na ˘n dɔ-go
 どこ 行く-[必要]
 (あなたは) どこに行きたいですか？

起点を表す場合は奪格標識を用いる。

- (17) ˘tɕʰoʔ tsʰo-∅ ˘ka na-nə ˘fið-zə ji:
 2.[複]-[絶] どこ-[奪] 来る-[過]
 あなたたちはどこから来ましたか？

人の出身を尋ねる場合は属格標識を用いる。

- (18) ˘tɕʰoʔ-∅ ʼta: n do ˘ka na-gə ʼreʔ
 2-[絶] [地名] どこ-[属] [判]
 あなたはダルツェンドのどこの人ですか？

不定名詞の例は以下のようなものである。

- (19) ˘ka na ʼma-ji:-sʰa ʼtsi ɣi-∅ ˘ji:-tu
 どこ [否]-[判]-[名] ねずみ-[絶] [判]-[証]
 どこであろうと、ねずみ(ばかり)です。

- (20) ʼmə ˘n dɔ ˘n dɔ-∅ ˘ka na ʼji: ˘na ˘jo:-reʔ
 人 このような-[絶] どこ [判] ても [存]
 こんな人はどこにでもいます。

˘tɕʰu tsʰeʔ ˘ka 「いつ」

時間についてたずねるときに用いる。形態的に分析すると「どれくらいの時間」となるが、実際の用法としては単に「いつ」の意味で用いられる。時間について「何時」と尋ねる場合に

¹⁴ この場合は統語上疑問詞「どこ」は名詞として機能しているが、絶対格は付加しない。

は/ṽtɕʰu tsʰoʔ ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka/¹⁵ となる。

- (21) a ṽtɕʰoʔ-∅ ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka ʰtseʔ-zə ji:
2-[絶] いつ 到着する-[過]
あなたはいつ到着したのですか？
- b ṽtɕʰoʔ-∅ ṽtɕʰu tsʰoʔ ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka ʰtseʔ-zə ji:
2-[絶] 何時 到着する-[過]
あなたは何時に到着したのですか？

不定副詞の例は以下のものである。

- (22) ṽtɕʰoʔ-∅ ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka ˀkʰɔ̃ ˀna ʼŋa tsʰo ʼnɔ̃-la ʼfið nə
2-[絶] いつ 暇だ ても 1.[複] 家-[位] 来る て
ʰŋɛ:lə reʔ
できる-[未]
あなたは暇な時いつでも私たちの家に来ていいです。

ṽtɕə ʰda 「どのようだ」

これは疑問副詞のほか、疑問形容詞として機能するため、次のように、動詞句用の接辞、名詞化接辞が付加される。3.9 および 4.4 の形容詞の記述を参照。

- (23) a ˀndə ˀmə-∅ ṽtɕə ʰda-tu
この 人-[絶] どのようだ-[証]
この人はどんなようですか？
- b ˀndə ˀmə-∅ ṽtɕə ʰda-ʰtɕiʔ-∅ ʼreʔ
この 人-[絶] どのようだ-[名]-[絶] [判]
この人はどんな人ですか？

不定副詞の例は以下のものである。

- (24) ṽtɕʰoʔ-∅ ṽtɕə ʰda ʼle: nə ʰŋɛ:lə reʔ
2-[絶] どのように する て できる-[未]
あなたはどのようにしてもいいです。

ṽtɕə ʰda zə nə / ṽtɕə tə reʔ te 「どのように」

方法、様態についてたずねるときに用いる。

- (25) ṽtɕʰoʔ-∅ ˀndə nɔ̃ ṽtɕə ʰda zə nə ʰfið-zə ji:
2-[絶] ここ どのように 来る-[過]-[判]
あなたはここへどのように来たのですか？

ˀtɕə tsʰeʔ 「どれぐらい、いくら」

数量についてたずねるときに用いる。

¹⁵ 形態素分析をすると、/ṽtɕʰu tsʰoʔ/「時間」+/ṽtɕʰu tsʰeʔ ʼka/「いつ」となるが、ここでは語釈としてひとかたまりで「何時」と示す(21b)。

(26) ʼni ma ʼtɕə tsʰe? ʼndu? ʼtɕʰo?
 日にち いくら いる できる
 (あなたは) 何日いることができますか?

(27) ʼtʰa pa-∅ ʼtɕə tsʰe? ʼjoʔ-re?
 僧-[絶] どれくらい [存]-[判]
 僧侶はどれくらいいますか?

不定形容詞の例は以下のようなものである。

(28) ʼŋa-∅ ʼtā: ʼtɕə tsʰe? ʰɕoʔ ʼna ʼŋa-∅ ʼtə-∅ ʰno-li:
 1-[絶] お金-[絶] どれくらい 使う ても 1-[絶] それ-[絶] 買う-[意]
 私はお金をいくら使っても、それを買います。

ʼtɕə tə re: ʰtsə re? 「なぜ」

理由を尋ねる場合、固定された表現はなく、形態的に分析すると「どのような理由で」となる句を「なぜ」の意味で用いることになる(例文 29)ほか、複文の形式を取る場合(例文 30)もある。

(29) ʼtɕʰoʔ-∅ ʼtɕə tə re: ʰtsə re? ʰda ʰda ʼtɕʰə nə ʼfio:-na
 2-[絶] なぜ このように 遅い 来る-[調]
 あなたはなぜこのように遅く来たのですか?

(30) ʼtɕʰoʔ-∅ ʰkɛʔ tɕʰa ʼɕe: ʼmə-ŋɛ: ʼnə ʼtɕə ʼre?
 2-[絶] 話をする [否]-できる なら どんな [判]
 あなたはなぜしゃべらないのですか?

3.5 名詞化標識

頻繁に見出される名詞化標識には/ʰkʰɛ/、/sʰa/、/ʰdzɯ/がある。名詞化標識はほとんどの場合、名詞と同じく直後に格標識がつく。また、別の名詞に先行して、修飾句となったり、主部内在型の構造を取ることでもできる。

/ʰkʰɛ/は/-xe/という異形態をもち、動詞語幹および形容詞語幹に後続して「人、行為者」を表す名詞句を作ることができる。そのほか、その直後に/-mə/を伴い、全体として「～する人」を意味する名詞句の一部となる。別の名詞に先行して、修飾句となるときには、名詞化される動詞の行為を行うものが「人」に限定されない。

/sʰa/は動詞語幹に後続して「場所」を表す名詞句を作ることができる。/sʰa/がついた状態で1つの名詞と分析することも可能である。ほかにも、単なる動詞の名詞化する機能も認められる。

/ʰdzɯ/は事物を表す名詞句を作る。

ほかに、動詞の TAM 接辞に用いられる一部の接辞と形態論的に共通する形式/-zə, -lə/などが統語上のふるまいとして、名詞化標識と分析される例(たとえば(33)など)が認められる。/-zə/は「～したこと」(過去)を意味し、/-lə/は「～すること」(非過去)を意味する。

名詞化標識を伴う名詞句の例は以下のようである。

表 8 : 名詞化標識を伴う名詞句

名詞化前	名詞化後
ʼŋo ʼç ^h e: 「知り合う」	ʼŋo ʼç ^h e:-ŋ ^h k ^h ɛ 「知り合い」
ʼla ʼfi ^h zo 「仏像を作る」	ʼla ʼfi ^h zo-xɛ 「仏像彫刻家」
ʼk ^h ɛ: ma ʼh ^h tsə 「牛を入れる」	ʼk ^h ɛ: ma ʼh ^h tsə-s ^h a 「牛小屋」
ʼza 「食べる」	ʼza-fi ^h dzɯ 「食べもの」
ʼza ma ʼza 「ごはんを食べる」	ʼza ma ʼza-go-ŋ ^h k ^h ɛ 「ごはんをこれから食べる人」
	ʼza ma ʼza-ts ^h a:-ŋ ^h k ^h ɛ 「ごはんを食べ終わった人」

名詞化標識を伴う名詞句が文中に現れる場合の例は以下のようである。

- (31) ʼluʔ ʼfi^hgɛ-∅ ʼhso-ŋ^hk^hɛ-∅ ʼjoʔ-lə reʔ
 羊-[絶] 飼う-[名]-[絶] [存/疑]
 羊を飼う人はいますか？
- (32) ʼʔa n^hdo ʼh^hkɛʔ-∅ ʼfi^hdzɔ-s^ha-∅ ʼh^htsa-lə ʼma reʔ
 アムドチベット語-[絶] 学ぶ-[名]-[絶] 簡単な-[否/判]
 アムドチベット語を学ぶのは簡単ではありません。
- (33) ʼn^hdə-∅ ʼh^h[a ç^hi-gə ʼti-zə ʼʔə-reʔ
 これ-[絶] [人名]-[能] 書く-[名] [疑]-[判]
 これはタシが書いたものですか？

次の文は 2 通りの解釈ができる¹⁶。

- (34) ʼk^ho ts^ho-∅ ʼrə ʼgo-nə ʼma: lə ʼfi^ho:zə ʼreʔ
 3.[複]-[絶] 山-[奪] 下へ 来る-[過] [判]
 a 彼らは山から下りてきた人たちです。(名詞化の読み；語釈は直前の通り)
 b 彼らは山から下りてきました。(動詞接辞群の読み；語釈の最後の [判] は不要¹⁷)

以上のほかに、/fi^hdzɯ/も認められ、主に「行為」を表す名詞句を形成する場合に用いられる。

その際動詞に接尾辞がある場合、その後ろに置かれる。

- (35) ʼtç^hoʔ-∅ ʼma: tç^hā-∅ ʼfi^hdzɔʔ-fi^hdzɯ-la ʼʔə-fi^hga
 2-[絶] 麻雀-[絶] する-[名]-[与] [疑]-好む
 あなたは麻雀をするのが好きですか？

¹⁶ 厳密に言えば、(34) に示した語釈に従うと a の意味で理解される。ところが、実際の発話において、文末の判断動詞が実際に声調を担っているかどうかは分かりにくい。声調を担っていない分析をすると、b の読みになる。

¹⁷ すなわち、/zə reʔ/ で 1 つの単位を形成し、それに対して [過] の語釈が与えられるためである。4.6.1 を参照。

- (36) ˈn̩də-∅ ˈŋa-∅ ˈle:-go-^{fi}dzɯ-∅ ˈji:-re?
 これ-[絶] 1-[絶] する-[必要]-[名]-[絶] [判]-[判]
 これは私がすべきことです。

名詞化した名詞句は修飾句になれるが、例文を見る限り被修飾語（句）に前置されるものと主部内在型をとるものに分かれる。

- (37) ˈpoʔ ko:-∅ ˈtɕõ-^{ŋi}kʰɛ ˈŋa: ɲõ-∅-tə ˈka na ˈtʰe:
 チベット服-[絶] 着る-[名] 子供-[絶]-[主] どこ 去る
 チベット服を着た子はどこへ行ってしまいましたか？

- (38) ˈkʰo-gə ˈza ma-∅ ˈle:-zə-∅-tə ˈmə-zĩ-tu
 3-[能] おかず-[絶] 作る-[名]-[絶]-[主] [否]-おいしい-[証]
 彼が作ったおかずはおいしくありません。

3.6 位置名詞の文法化

特定の位置を表す名詞は、別の名詞に後続し、それと同一の声調領域を形成しつつ、かつ直後に位格標識を伴っても伴わなくてもよい、という環境で現れる。このような語は名詞が格標識と似たふるまいをする形態への変化の途上、すなわち文法化の過程にあるといえる。分析上は位置名詞の後ろにゼロ形態の位格があるものと理解しておく。このような名詞には、^ʰgo/「～の上」、nõ/「～の中」などがある。

たとえば、以下のようなものである。

- (39) ˈtɕʰoʔ-∅ ˈkʰuʔ ma-∅ ˈto dzə-^{ŋi}go ˈ^{fi}zɑʔ-mo
 2-[絶] かばん-[絶] テーブル-[位名] 置く-[調]
 かばんをテーブルの上に置きなさいよ。

- (40) ˈŋa-∅ ˈtɕõ-nõ ˈ^{ŋi}dɔ-li:
 1-[絶] 街-[位名] 行く-[意]
 私は街の中へ行きます。

3.7 数詞・量詞

ここでは基数詞、序数詞、不定標識、集合標識、量詞について記述する。

3.7.1 基数詞

以下に1から29までの形態を示す。

表9：基数詞（1～29）

	+10	+20
0	- ^h tɕu	ʼŋi ɕ ^h u
1	- ^h tɕi?	- ^h tɕo ^h tɕi?
2	- ^{fi} ŋi:	- ^h tɕo: ^{fi} ŋi:
3	ˋ ^h sũ	- ^h tɕu ^h sũ
4	ˋ ^{fi} zə	- ^h tɕu ^w zə
5	- ^{fi} ŋa	ˋ ^h tɕo: ^{fi} ŋa
6	ʼtu?	ˋ ^h tɕu tu?
7	- ^{fi} dõ	- ^h tɕu ^{fi} dõ
8	- ^{fi} dzɛ?	- ^h tɕu ^w dzɛ?
9	- ^{fi} gu	- ^h tɕu ^{fi} gu

「1」は名詞とともに用いられるとき、/^htɕi?/という異形態をもつ。

10台の数は基本的に「10」と「1の位」の形態素を並列する形になるが、各形態素の細部に異なりが認められる。

20台の数は「20 + つなぎの要素/^htsa/¹⁸ + 1の位」で表し、「30」以降のきりの悪い数字も20台と同様の構成を取る。

30から100までのきりのよい数は以下のようになる。

-^hũ tɕu 「30」

ˋ^{fi}zə ^htɕu 「40」

-^{fi}ŋa ^htɕu 「50」

ˋ^htu ^htɕu 「60」

ˋ^{fi}dõ tɕu 「70」

ˋ^{fi}dza ^htɕu 「80」

ˋ^{fi}gu ^htɕu 「90」

ˋ^{fi}dza t^hã mba 「100」

「100」は単独で用いる場合、形態素/^{fi}dza/「100」に/t^hã mba/「ちょうど」を伴う形式が用いられる。「100」から「199」までは「/^{fi}dza/+də/+各種1～2けたの数」を並列して構成する。「200」「300」などは、それぞれ-^{fi}ŋi: ^{fi}dza、-^hsũ ^{fi}dzaのように構成される。

「1000」以上の数詞には以下のようなものがある。

-^htõ / -^htõ t^ha? -^htɕi? 「1000」

-t^hə / -t^hə ts^ha? -^htɕi? 「10000」

「2000」「20000」などの形式は、上の右側の形式の最後の音節の数詞を「2」に替えることによって構成される。

基数詞は算数の表現において名詞と同等の扱いを受ける。

¹⁸ 声調は後続の1の位とともに1つの声調領域を形成する。

- (41) ʰtɕiʔ-ŋgo-la ʰni:-∅ ʰnõ ʰna ʰsũ-∅ ʰreʔ
 一-[位名]-[位] 二-[絶] 足す と 三-[絶] [判]
 1 足す 2 は 3 です¹⁹。

例文 (41) のように、基数詞は位置名詞 (3.6 参照) を伴うことができ、文の構造から絶対格 (ゼロ形態) として扱われることになる (3.8 参照)。

3.7.2 序数詞

序数詞は基本的に基数詞に /-ʔã/ を先行させ、かつ基数詞に /-pa/ を後続させることによって形成される。たとえば /-ʔã ʰni:-pa/ 「第2」などのようである。ただし「第1」は /-ʔã ʰtã mbo/ となる点に注意が必要である。

3.7.3 不定標識

不定標識は名詞句において数詞の位置に現れる数量表現である。形態的には /-ziʔ/ で、語源的には数詞「1」 /-ʰtɕiʔ/ と関連するが、特定数を表すものではない。

- (42) ʰŋa-ʰke fia ʰji ge ʰsa: pa-ziʔ-∅ ʰno-roʔ
 1-[領] 本 新しい-[不定]-[絶] 買う-[調]
 私に新しい本を買ってください。

3.7.4 集合標識

集合標識は 3.3 で触れたように、代名詞とともに現れるが、名詞に後続する場合もある。集合標識とは、複数標識と異なり、先行する名詞の複数性を示すものではない。特に人名に後続する場合、それが意味するのは「～家の人々/一家」となる。

- (43) ʰndə-∅ ʰwɔ ʰdɛ-tsʰo-gə ʰkʰɔ mba-∅ ʰreʔ
 これ-[絶] [人名]-[集]-[属] 家-[絶] [判]
 これはワンデ家の家です。

3.7.5 量詞

量詞は大きく類別詞と計量の単位 (度量衡の単位を含む) に分けられるが、前者は Lhagang 方言には認められず、名詞 (句) に直接数詞を後続させることができる。また、度量衡の単位は漢語をそのまま用いることもある。

量詞を含む語順は「名詞+量詞+数詞」である。何らかの容器による単位を表す場合、「1」に /kʰɔ/ が用いられる。また、「1」の場合は声調を担わず、先行名詞 (もしくは量詞) とともに 1 つの声調領域を形成することがある。

¹⁹ 直訳すれば「1の上に2を足すならば3です」となる。

- (44) a ˈmə {ˈhʰtʰeiʔ / ˈtʰeiʔ}
 人 1
 1 人の人
 b ˈmə ˈfiː
 人 2
 2 人の人

- (45) ˈxɛj tsə ˈtʰa ˈhʰtʰeiʔ
 靴 対 1
 1 そろいの靴

- (46) ˈtʰɔ̃ ˈtā mbi ˈkɔ̃
 酒 瓶 1
 1 瓶の酒

量詞と数詞のみからなる句が名詞を修飾せず独立して用いられることもある。

- (47) ˈta rɔʔ ˈpʰu rə ˈkɔ̃-∅ ˈza
 もう 碗 1 食べる
 もう 1 碗食べなさい。

3.8 格体系

Lhagang 方言は、文法格として複数項を取る動詞（4.3 参照）の行為者をマークする能格型の格体系を持つ²⁰。

3.8.1 格標識一覧表

Lhagang 方言における格標識の一覧は次のとおりである。

表 10：格標識一覧

形式	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示
無標 (∅)	絶対格	(位格)
gə	能格	具格/属格
la / lə	与格	位格
də	共格	
nə		奪格
hʰke fia		受領格
jiː / leː		比較格

Lhagang 方言は、文法格として絶対格、能格、与格、共格が認められ、S/A/P の標示を担う。これらの格は動詞が要求することが通常であるが、厳密な格支配関係を認めるのではなく、特

²⁰ 格体系の記述は澤田編 (2010) を参考にしている。

に能格標示については語用論的な側面が強い²¹。

格標識を形態論的に見た場合、ゼロ形態を含めても7種類が区別されるだけであるが、格の名称はその機能によってある程度下位区分を設ける。非 S/A/P 標示については語用論的な省略が認められない傾向にある、といった面も考慮される。

絶対格は無標であり、例文中に \emptyset で示す。また位格もしばしば音形が省略され、絶対格と区別ができなくなるが、文中での役割が異なっている。本稿の例文において、音形式の認められない位格は一律表示していない。これは 3.2 で述べた場所・時間を表す名詞、および 3.6 で述べた位置名詞などに当てはまる。

格標識は独立して名詞句を形成することはできない。ただし共格は独立の声調を担い、接続詞として機能する事例も認められる。

また、格標識の連続は認められない。

なお、人称代名詞の属格は形態（声調）変化によって標示する。詳細は 3.3.1 を参照。

3.8.2 用法

以下、文法格（S/A/P 標示）、非文法格（非 S/A/P 標示）の順に、簡潔に用法を記述する。

文法格：絶対格（ $-\emptyset$ ）

絶対格の用法としては、判断動詞の S および補語、存在動詞の S および所有者、1 項動詞の S、多項動詞の被動者 P、多項動詞の行為者 A、使役文における被使役者などがある。

判断動詞の S および補語

- (48) $\text{'tə-}\emptyset$ $\text{'tõ } \text{ᵐk}^{\text{h}}\text{u:}\text{-}\emptyset$ 're?
 それ-[絶] マニ車-[絶] [判]
 それはマニ車です。

存在動詞の S

- (49) 'ŋa-la $\text{ᵐk}^{\text{h}}\text{õ ba}$ $\text{ᵐni:}\text{-}\emptyset$ 'jo?
 1-[与] 家 2-[絶] [存]
 私には家が2軒あります。

1 項動詞、形容詞述語の S

- (50) $\text{'ŋa-}\emptyset$ $\text{'k}^{\text{h}}\text{a } \text{ᵐk}^{\text{h}}\text{ũ-tu}$
 1-[絶] のどが渇く-[証]
 私はのどが渇きました。

多項動詞の被動者

- (51) $\text{ᵐt}^{\text{h}}\text{o?}\text{-}\emptyset$ $\text{ᵐk}^{\text{h}}\text{o-}\emptyset$ $\text{'ŋo } \text{'?ə-}\text{ᵐe:}$
 2-[絶] 3-[絶] 知り合いである [疑]-[語幹]
 あなたは彼を知っていますか？

²¹ DeLancy (2011) の記述もあわせて参照。

多項動詞の行為者

- (52) ʔtʰoʔ-∅ ʔtu wa-∅ ʔnʰɔ-lə ʔə-reʔ
 2-[絶] たばこ-[絶] 飲む-[名] [疑]-[判]
 あなたはたばこを吸いますか？

使役文の使役者

- (53) ʔa ma-∅ ʔja-la ʔkʰo rɔ: ʔko ze-∅ ʔtɕu:-hʔtɕuʔ-tʰe:
 母-[絶] 1-[与] 自身の 服-[絶] 着る-させる-[完]
 母は私に彼女自身の服を着させました。

文意が明確であれば、すべての文法格の表示が行われる名詞句は絶対格で現れうる。

- (54) ʔja-∅ ʔtʰoʔ-∅ ʔndə-∅ ʔzi:
 1-[絶] 2-[絶] これ-[絶] 与える
 私はあなたにこれをあげましょう。

文法格：能格 (-gə)

能格は多項動詞の行為者を示すが、中心語が名詞・代名詞にかかわらず、その使用は任意であり、行為者を強調したり対比したい場合に特に用いられる。ただし行為者が被動者より後に来る場合²²は、ほぼ義務的に用いられる。これは文意の曖昧性の回避のために起こる現象であると考えられる²³。

行為者が文頭にある場合

- (55) ʔkʰo-gə ʔpoʔ hʔkɛʔ-∅ ʔtʰe:-lə ʔə-reʔ
 3-[能] チベット語-[絶] 知っている-[疑/未]
 彼はチベット語が分かりますか？

行為者が被動者より後に来る場合

- (56) ʔndə-∅ ʔdo ʔdzɛ-gə ʔlɛ-zə reʔ
 これ-[絶] [人名]-[能] 作る-[完]
 これはドッジェが作りました。

被動者が発話に現れない場合

- (57) ʔja-gə ʔhso-zə ʔma-ji:
 1-[能] 育てる-[過/否]
 私が（それを）飼っているではありません。

原因を表す場合（無生物の行為者としての解釈²⁴）

- (58) ʔliʃ kʰa-gə ʔtʰi pʰɔ-∅ ʔndzoʔ-kʰe:
 風-[能] 木-[絶] 倒れる-[完]
 風で木が倒れました。

²² この語順の場合、日本語では受け身で訳すほうが意味的に近いと考えられる。

²³ LaPolla (1992) を参照。

²⁴ 例 (50) においては、動詞語幹に「倒れる」と「倒す」の区別が存在しないため、「風」に付加される /-gə/ が能格とも具格とも解釈することができる。

名詞句の中に現れる行為者を示すときにも能格標示が維持される。

- (59) ʔtʰoʔ-∅ ʔŋa-gə ʔtʰe:∅ ʔtʰeʔ-zə-∅-tə ʔnō-la ʔkʰu-sʰo:
 2-[絶] 1-[能] 薪-[絶] 割る-[名]-[絶]-[主] 中-[位] 持つ-行く.[命]
 あなたは私が割った薪を持って家の中へ入りなさい。

使役文の使役者も能格で現れうる。能格を用いた場合、使役者が故意に行った行為であることを強調する。

- (60) ʔkʰo-gə ʔluʔ ʰige ʔtʰō tʰō ʔni:-∅ ʔtʰə-hʔtʰeʔ-kʰe:
 3-[能] 羊 小さい 2-[絶] 死ぬ-させる-[完]
 あなたは2匹の子羊を（わざと）死なせました。

能格が期待される場合に絶対格を用いるのも文法的に許容される。

- (61) ʔŋa-∅ ʔn də-∅ ʔza-ŋe:lə ʔma-reʔ
 1-[絶] これ-[絶] 食べる-できる-[否/未]
 私はこれを食べることができません。
- (62) ʔŋa tʰo-∅ ʔkʰo-la ʔn də-∅ ʔza-kʰa ʔma-hʔtʰeʔ
 1.[複/包]-[絶] 3-[与] これ-[絶] 食べる-[使] [否]-させる
 私たちは彼にこれを食べさせてはいけません。

文法格：与格 (-la)

文法格として機能する与格は特定の動詞と結びついて用いられる。動作動詞および感情動詞の場合は対象を、授与動詞の場合は受益者を、存在動詞の場合は所有者もしくは位置を、それぞれ標示する。特に存在動詞とともに現れる与格はたとえば場所を意味する名詞句についても省略されないため、文法格の与格に相当すると解釈する²⁵。

- (63) ʔŋa-∅ ʔtʰoʔ-la ʔga
 1-[絶] 2-[与] 愛する
 私はあなたを愛しています。
- (64) ʔŋa-∅ ʔn dɛ-la ʔtʰeʔ-tu
 1-[絶] お化け-[与] 怖い-[証]
 私はお化けが怖いです。
- (65) ʔŋa-∅ ʔkʰo-la ʔn də-∅ ʔzi:li:
 1-[絶] 3-[与] これ-[絶] 与える-[意]
 私は彼にこれをあげましょう。
- (66) ʔgwi ʰgwi ʔnō tʰa-la ʔde: ma-∅ ʔta: rəʔ ʔə-ji:-tu
 キャビネット 中-[与] 皿-[絶] まだ [疑]-[存]-[証]
 キャビネットの中にお皿はまだありますか？

²⁵ /-la/には表 10 のように、文法格としての「与格」と非文法格としての「位格」の2つの機能がある。存在動詞(4.2.2 参照)は「所有」「存在」「位置」を統語上の格標示によって表すため、ここでは「位格」ではなく「与格」となる。

また、3項動詞における受益者を表す場合にも用いられる²⁶。

- (67) ʔ̂ŋa-la ʔ̂tɕʰə ʔ̂dza-∅ ʔ̂ja:-roʔ
 1-[与] 元 100-[絶] 貸す-[調]
 私に100元貸してください。

- (68) ʔ̂ŋa-la ʔ̂za ma-∅ ʔ̂hɕeʔ meʔ ʔ̂zi:-roʔ
 1-[与] ごはん-[絶] 少し 与える-[調]
 私にごはんを少しください。

加えて、使役文における被使役者も与格で表示される。

- (69) ʔ̂ŋo: ma-la ʔ̂la ji:∅ ʔ̂le:ʰtɕuʔ-ʔ̂go
 [人名]-[与] 民謡-[絶] 歌う-させる-[必要]
 ドマに民謡を歌わせましょう。

文法格：共格 (-də)

文法格として機能する共格の例は多くはなく、特定の動詞と結びついて用いられる。

- (70) ʔ̂kʰo-∅ ʔ̂ŋaʔ ʔ̂d̄ ʔ̂tɕʰd̄ tɕʰd̄-də ʔ̂ŋa ʔ̂ŋa-reʔ
 3-[絶] 子供 小さい-[共] 同じだ-[判]
 彼は小さな子供と同じです。

非文法格：属格 (-gə)

属格は所属、属性を表す際に用いられる。属格標識は/gə/である。

- (71) ʔ̂kʰo-gə ʔ̂pʰa ji:
 3-[属] 故郷
 彼の故郷
- (72) ʔ̂sh̄ pʰeʔ-gə ʔ̂lo ʰse:∅ ʔ̂ŋa wa ʔ̂ŋi: pa-n̄ ʔ̂reʔ-pa
 来年-[属] 新年-[絶] 2月-[位置] [判]-[証]
 来年の新年は2月でしょう。

属格標識で形成される名詞句が直接判断動詞の補語として用いられる場合がある。S/A/Pの表示にからむ点では属格標識の後ろにゼロ形態の絶対格が認められる余地があるが、ここではこの記述を省略する²⁷。

- (73) ʔ̂kʰo tsʰo-∅ ʔ̂pō mbo ʔ̂gō ba-gə ʔ̂reʔ
 3.[複] ボン教寺院-[属] [判]
 彼らはボン教寺院の所属の人です。

非文法格：具格 (-gə)

具格は道具、材質、手段などを示す際に用いられる。

²⁶ ただし、与格で標示される項自体を省略することができる。

²⁷ 属格をめぐる格標示の構造については、さらに考察する必要がある。属格標識は名詞(句)に後続するため、「名詞化標識」ではないが、名詞の派生接辞という見方もある。

材質

- (74) ˈn də-∅ ˈçʰi:-gə ˈle:-zə reʔ
 これ-[絶] 木-[具] 作る-[過]
 これは木でできました。(これは木製です)

道具

- (75) ˈtɕʰə ʰi gɛ ˈpʰa lu tə-∅ ˈla mo-gə ˈpiʔ ʰi ga-gə ˈʰdʒaʔ-zə reʔ
 犬 あの-[絶] [人名]-[能] 棍棒-[具] 打つ-[過]
 あの犬はラモが棍棒で打ちました。

なお、/gə/という音形には多数の意味が存在し、次の例のように1文中に共起することもある。

- (76) ˈtɕʰoʔ-gə ˈʰi gã po-∅ ˈʰi do ʰi dʒe-gə ˈʰtɕaʔ-gə ˈlẽ-zə reʔ
 2-[属] 箱-[絶] [人名]-[能] 鉄-[具] 作る-[完]
 あなたの箱はドツジェが鉄で作りました。

非文法格：受領格 (-^hke fia)

受領格は、動詞が特別に項として要求してはいないが、受益者・受領者を表すときに用いられる。与格と機能が重なっているところがあるが、受領格のほうが発話の中で「～のために」という意図を明確に表す。

- (77) ˈŋa-^hke fia ˈji ge ˈh sa: pa-zɪʔ-∅ ˈŋo-roʔ
 1-[領] 本 新しい-[不定]-[絶] 買う-[調]
 私に新しい本を買ってください。
- (78) ˈŋa-^hke fia ˈji ge-zɪʔ-∅ ˈʰi-roʔ
 1-[領] 手紙-[不定]-[絶] 書く-[調]
 私に手紙を書いてください。
- (79) ˈŋa-^hke fia ˈʰi go-tɕiʔ-∅ ˈçʰi-roʔ
 1-[領] 扉-[不定]-[絶] 開ける-[調]
 私のために扉を開けてください。

非文法格：位格 (-la)

位格は無標の位置・方向を示す。文意が明快な場合は省略可能で、しばしばゼロ形態として現れる。

位置名詞に後続する位格は省略可能である。

- (80) ˈpa tʰaj-ŋgo-la ˈtɕʰɔ ˈtã bi ˈʰi zɑʔ-jɪ:-tu
 カウンター-[位置]-[位] 酒瓶 置く-[継]-[証]
 カウンターの上には酒瓶が置いてあります。

非文法格：奪格 (-nə)

奪格は時間・空間の起点を表す。

- (81) ʼŋa-∅ ʼla s^ha-nə ʼfið-zə ji:
1-[絶] [地名]-[奪] 来る-[過]
私はラサから来ました。
- (82) ʼ^hi de ^hi ge-nə ʼla s^ha ʼpa: ma ʼt^haʔ ʼri:lə ʼʔə-reʔ
[地名]-[奪] [地名] 間 遠い-[未/疑]
デルゲからラサまでの間は遠いですか？

非文法格：比較格 (-ji: / -le:)

比較格は比較対象を表し、2つの形式が認められる。これらは交換不可能であるが、その使い分けの基準は明らかではない。

- (83) ʼme toʔ-ⁿdə-∅ ʼp^ha lu-gə ʼme toʔ-ji: ʼh^htɛ: ʼjaʔ-tu
花-この-[絶] あれ-[属] 花-[比] さらに よい-[証]
この花はあの花よりきれいです。
- (84) ʼŋa-∅ ʼtɕ^hoʔ-le: ʼlo ʼh^htɕu-∅ ʼtɕ^he-tu
1-[絶] 2-[比] 年 10-[絶] 大きい-[証]
私はあなたより 10 歳年上です。

以上のもの以外にも、比較は複文形式で表されることもある。

- (85) ʼmje:-∅ ʼⁿh^hð ʼji: h^htə ʼk^haʔ ʼ^hi dzaʔ-nə ʼp^hẽ-tu
薬-[絶] 飲む 比べる 点滴を打つ²⁸-[名] 有効だ-[証]
薬を飲むよりも点滴を打つほうがよいです。

3.9 形容詞：修飾用法として

Lhagang 方言における形容詞は、名詞に後続させて修飾語として用いられる場合と、動詞と共通する接辞をとって述語になる場合がある。ここでは、名詞を修飾する構造について述べる。修飾用法として用いられる形容詞の形態としては、以下のようなものが代表的である。

1. 重複語幹およびそれに準じるもの
ʼⁿgo ʼgo 「曲がった」、ʼnaʔ naʔ 「黒い」、ʼ^hma ^hma 「低い」、ʼtɕ^hð tɕ^ho 「小さい」
2. 1 音節語幹 + 接尾辞
ʼtɕ^hə bu 「大きい」、ʼ^hi dzaʔ mo 「重たい」、ʼ^hi ɲi mba 「古い」、ʼja: xɛ 「よい」
3. 2 音節語
ʼlo tɕ^hð 「若い」、ʼ^hi lɛ ^hgo 「平凡な」
4. 複合型
ʼ^hi dza tɕ^hə bu 「幅広い」(「幅」+「大きい」)、
ʼ^hi ma ʼs^he s^he 「真っ赤の」(「赤い」+ (強意))、

²⁸ 「点滴を打つ」という語は /k^haʔ/ 「針」と /^hi dzaʔ/ 「打つ」という複合語で表されるが、これは漢語の「打針」(点滴を打つ)の翻訳借用であろう。

ˈtʰa ˈfi dzɔ: pa 「太った」(「肉」+「太った」)、
 ˈkō ˈfi de mo 「安い」(「値段」+「安らかな」)

修飾用法の場合、単音節語幹が単独で現れることはほとんどない。

重複タイプは、必ずしも第1音節と第2音節の音形式が同じになるとは限らない。また、重複それ自体は形態の一特徴であり、形容詞の修飾用法および単純な述語用法²⁹であることを明示する以外に特別な意味機能があるわけではない。

文中で修飾語として用いられる場合、形容詞は被修飾名詞に後置されるのを基本とし、数詞は形容詞に後続する。形容詞が複数ある場合、数量を表す形容詞が最後に来る。

(86) a ɲa-la ˈme to? ˈfi ma: bo ˈtʰõ tʰõ-∅ ˈjo?
 1-[絶] 花 赤い 小さい-[絶] [存]
 私は小さい赤い花を持っています。

b ɲa-la ˈme to? ˈfi ma: bo ˈtʰõ tʰõ ˈmã bo-∅ ˈjo?
 1-[絶] 花 赤い 小さい 多くの-[絶] [存]
 私は多くの小さい赤い花を持っています。

名詞化による修飾句は被修飾語に前置される。

(87) ɲa-la ˈtʰo?-gə ˈtʰe: zə ˈme to? ˈtʰõ tʰõ ˈmã bo-∅ ˈjo?
 1-[絶] 2-[能] 摘む-[名] 花 小さい 多くの-[絶] [存]
 私はあなたの摘んだ多くの小さい花を持っています。

3.10 主題標識

主題標識は/tə/で、語用論的に特定の名詞句を主題化したいときに格標識の後ろに現れ、同時に名詞句の終止を示す。また、息継ぎ、あるいは考えながら発話するときのフィラーとして機能する場合があります、必ずしも付加された名詞句を主題化しているとは限らない。

(88) ˈpʰa? ˈka ˈbo-∅-tə ˈkʰo tsʰo-gə ˈso-zə re?
 白ぶた-[絶]-[主] 3.[複]-[絶] 育てる-[過]
 白ぶたは彼らが飼っていました。

4 動詞句

4.1 動詞の基本構造

Lhagang 方言における動詞は、動詞語幹が単独すなわち動詞連続を形成していない場合、おおそ以下のような構造で現れる。

(方向接辞)-(否定辞/疑間接辞)-動詞語幹-(TAM 標示部分)-(疑間接辞/語気助辞)

このうち、TAM 標示部分は複数の接辞群から成立しており、否定辞がここに現れる場合もある。通常の否定文の場合、否定辞は動詞語幹に先行しないが、2度否定辞が現れることがあり、それは二重否定の意味となる。

²⁹ 特定の述語用法の場合には重複しない例がある。4.3 参照。

接頭辞が1つで、かつ動詞語幹と直接的につながっている場合、接頭辞と動詞語幹は1つの声調単位になり、接尾辞はそれが否定辞もしくは疑問辞を含まない限り、独立の声調をもたない。

以上の基本構造はすべての動詞についてあてはまるが、動詞語幹は述語動詞と本動詞に分けられる。そのうち述語動詞については、特別な記述が必要とされる。このため、以下 4.2 および 4.3 に分けて記述する。

4.2 述語動詞

述語動詞には、判断動詞と存在動詞がある。これらは単独用法のほかに動詞句末接辞として置かれて動詞句を形成する要素にもなる。これらは 4.6.1 で記述する TAM 接辞との共起に制限がある。

4.2.1 判断動詞

判断動詞の主な形態は以下のようなものである。

表 11：判断動詞の形態

	平叙文		疑問文	
	肯定	否定	肯定	否定
egophoric	ʼji:	ʼma-ji:	ʼʔə-ji:	ʼma-ji:-la
non-egophoric	ʼreʔ	ʼma-reʔ	ʼʔə-reʔ	ʼma-reʔ-la

判断動詞の語幹は/ʼji:/と/ʼreʔ/の2種類が認められる。これらの使い分けは、前者が発話内容を発話者自ら（1人称）に関連づける（egophoric）ときに用いられ、そうでない（non-egophoric）場合は後者が用いられる³⁰。発話者自らに関する発話に関して egophoric と non-egophoric の使い分けが可能である。ただし、条件、譲歩を表す従属節の中においては、egophoric の性質は区別されず、/ʼji:/語幹のみが使用される。

疑問文および各種否定は以上の2つの語幹を含む接辞を伴う形で表されるが、その接辞は上表に示したものが一般的である。

- (89) a ʼŋa-∅ ʼtsʰö mba-∅ ʼji:
1-[絶] 商人-[絶] [判/E]

私は商人です。

- b ʼŋa-∅ ʼtsʰö mba-∅ ʼreʔ
1-[絶] 商人-[絶] [判]

私は（誰が見ても分かるように）商人です。

³⁰ 用語の詳細は Tournadre & LaPolla (2014) を参照。

(90) a 'ŋa-∅ ʔlo sə-∅ 'ma-ji:
1-[絶] 先生-[絶] [否]-[判/E]
私は先生ではありません。

b 'ŋa-∅ ʔlo sə-∅ 'ma-re?
1-[絶] 先生-[絶] [否]-[判]
私は（誰が見ても分かるように）先生ではありません。

(91) 'tə-∅ ʔpʰaʔ ʰige-∅ 're?
それ-[絶] ぶた-[絶] [判]
それはぶたです。

次のような例では、たとえ発話が発話者にかかわっているとしても、/ʔji:/語幹の使用は容認されない。

(92) ʔkʰo-∅ 'ŋa ʔme me-∅ 're?
3-[絶] 1.[属] 妹-[絶] [判]
彼女は私の妹です。

2人称が主語であるとき、肯定文では non-egophoric の形式が、疑問文では egophoric の形式が用いられる。これは egophoric の予測的用法 (anticipation usage) と呼ばれる³¹。

(93) ʔtʰoʔ-∅ ʔsʰu-∅ ʔji:
2-[絶] 誰-[絶] [判/E]
あなたは誰ですか？

否定疑問の形式に現れる接尾辞/-la/は、おそらく TAM 接辞/-lə/と語気助辞/-fia/の連続/-lə-fia/の縮約に由来するものと考えられる。これは否定疑問にのみ用いられる。この形式は、確認の語気助辞を含んでいるとはいえ、文字通り疑問の意味しか持たない。

(94) ʔtʰoʔ-∅ ʔloʔ ma-∅ 'ma-ji:-la
2-[絶] 誰-[絶] [否]-[判/E]-[疑]
あなたは学生ではないのですか？

/ʔji:/にはさらに TAM 接辞類のなかの判断動詞が後続する。/ʔji:-re?/は当然であるという含意がある。一方、egophoricity の表出は明確ではなくなる。

(95) ʔʔə ʰda ʔji:-re?
このように [判]-[判]
当然このようです。

/ʔji:-lə ʔʔə-re?/や/ʔji:-lə re?/といった表現も認められる。前者が可能性の低い判断を表明する疑問文であり、それに対して平叙文の形態が呼応する。平叙文単独ではあまり用いられない。

³¹ 用語の詳細は Tournadre & LaPolla (2014) を参照。

- (96) a 'ŋo ma ʔə^hda ʃi:lə ʔə-re?
 本当に このように [判]-[未/疑]
 本当にこのようなのですか？
- b 'ŋo ma ʔə^hda ʃi:lə re?
 本当に このように [判]-[未]
 本当にこのようです。
- c 'ŋo ma ʔə^hda ʃi:lə^hma-re?
 本当に このように [判]-[未/否]
 本当にこのようではありません。

判断動詞の否定疑問の形式に /-lə ʔə-re?/ がつくると反語的用法になり、意味的には強調を伴う肯定となる。

- (97) ʔe^hoʔ-∅ ʔoʔ ma-∅ ʔma-ʃi:lə-lə ʔə-re?
 2-[絶] 誰-[絶] [否]-[判]-[疑]-[未/疑]
 あなたは学生ではないのですか？（学生でしょ！）

次の文は、構造上も意味上も存在を表していると考えられるが、動詞には判断動詞が用いられている。

- (98) ʔshō p^heʔ-gə ʔlo^hsɛi-∅ ʔnda: ʔni: pa-nō ʔreʔ-pa
 来年-[属] 新年-[絶] 2月-[位置] [判]-[証]
 来年のロサル（新年）は2月中（にある）でしょう。

従属節における用法は次のようなものである。語釈には [判] のみが与えられる。

- (99) ʔshu-∅ ʃi: ʔna ʔe^he:lə re?
 誰-[絶] [判] ても 知っている-[未]
 誰でも知っているでしょう。

4.2.2 存在動詞

存在動詞は、発話内容の情報をどのように手に入れたか (access to information)³² の異なりに基づいて、以下のように記述できる。

表 12：存在動詞の一覧

	平叙文		疑問文	
	肯定	否定	肯定	否定
直接情報確認	ʔjoʔ	ʔmeʔ	ʔə-ʔjoʔ	ʔmeʔ-lə ʔə-ʃi:
直接情報非確認	ʔji:tu	ʔmeʔ-tu	ʔə-ʃi:tu	ʔmeʔ-lə ʔə-ʃi:
非直接情報	ʔjoʔ-reʔ	ʔjoʔ-lə ʔma-reʔ	ʔjoʔ-lə reʔ	ʔmeʔ-lə ʔə-reʔ

直接情報確認とは、話者が自らの五感を通して直接得た情報で、これに基づく発話は基本的に egophoric である。直接情報非確認とは、話者が持っている知識や常識で判断した情報

³² 用語の詳細は Tournadre & LaPolla (2014) を参照。

で、それを話者が自らの五感を通して直接得たことを表す。これに基づく発話もまた基本的に egophoric である。非直接情報とは、話者がもっている知識や常識で判断した情報であるが、話者が自らの五感を通して直接得たのではなく、一般的知識や伝聞から間接的に得た情報であることが通常である。客観的事実確認としても用いられる。これは egophoric である場合もあれば non-egophoric である場合もある。

直接情報確認を示す語幹には肯定形式と否定形式の2種がある。直接情報非確認の肯定には独立の語幹形式が認められるが、単独では用いられない。単音節語幹を除き、上表のように形態素分析が可能であるものの、以上の形式はひとかたまりに扱い、語釈においてはすべて [存] ~[存/否]~[存/疑] で統一して扱う³³。

存在動詞は意味的に「所有」、「存在」、「位置」の3点を表す³⁴が、Lhagang 方言ではこれらをすべて表12の形態で表し、これらの意味的差異は統語上の格標示によって示される。

「所有」は所有者が与格、所有物が絶対格で標示される。

- (100) ʔtʰoʔ-la ʔkʰø mba-∅ ʔə-joʔ
 2-[与] 暇-[絶] [疑]-[存]
 あなたは暇がありますか？

「存在」は存在物が絶対格で標示される。

- (101) ʔpʰa ma-də ʔiŋe mo-də ʔpu zi-∅ ʔjoʔ
 両親-[共] 妻-[共] 息子-[絶] [存]
 (私には) 両親と妻と息子がいます。

- (102) ʔshɔ: ni ʔkʰø mba-∅ ʔjoʔ
 明日 暇-[絶] [存]
 明日暇があります。

- (103) ʔtʰə-∅ ʔmeʔ
 何-[絶] [存/否]
 何でもありません。/何でもありません。

「位置」は位置情報が与格または場所を表す名詞で示され、存在物が絶対格で表示される。位置情報はしばしば文頭に来る。

- (104) ʔto dzə-ŋgo ʔkʰuʔ ma-∅ ʔjoʔ
 テーブル-[位置] かばん-[絶] [存]
 テーブルの上にかばんがあります。

直接情報確認 (105a) と直接情報非確認 (105b) の用法は次のように対比できる。

³³ この方法は Tournadre & Suzuki (forthcoming) で採用されている方法である。形態論的には分析的に記述できるように見えるが、意味的にはひとかたまりとして理解するほうが現実的であり、母語話者の直感とも合うためである。また、4.6.4 で扱う epistemic modality の記述においては、分析的な記述はほぼ通用しない。近似の方法は Zeisler (2004) でも採用されている。末尾に付録として、分析的語釈の例と意味的語釈の例の対照を掲げておく。

³⁴ 黄成龍 (2013) を参照。

(105) a ʔa p^ha-∅ ʰnɔ̄-la ʔə-joʔ
 父-[絶] 家-[位] [存/疑]
 父は家の中にいますか？（父と一緒にいるか？）

b ʔa p^ha-∅ ʰnɔ̄-la ʔə-ji:-tu
 父-[絶] 家-[位] [存/疑]
 父は家の中にいますか？（父がいるのをちょっと前に見たか？）

非直接情報による存在動詞の疑問形は、4.6.1 に述べる TAM 接辞群と共通の形式を見せるが、機能が全く異なっている。

(106) ʰnɔ̄ ʰnɔ̄-la ʰnā ʰɕu ʔpa: s^ha-∅ ʔjoʔ-lə ʔə-reʔ
 この 中-[位] 空港-[絶] [存/疑]
 ここに空港はありますか？

ただし、以上の形式に否定辞がついたものは単なる否定の意味しか持たない。

(107) ʰtɕʔ mo ʔjoʔ-lə ʰma-reʔ
 とても [存/否]
 （人が）とても（たくさん）いるのではありません。

存在動詞の否定は次のようになる。

(108) a ʰta ʰge ʰsū-∅ ʔmə ts^hɛʔ ʔmeʔ
 馬 3-[絶] しか [否/存]
 馬は3頭しかいません。（今頭数を数えて知った）

b ʰta ʰge ʰsū-∅ ʔmə ts^hɛʔ ʰmeʔ-tu
 馬 3-[絶] しか [否/存]
 馬は3頭しかいません。（3頭しかいないことを知って答える）

(109) ʔa wo-gə ʰk^hɔ̄ mba ʰŋi mba-∅-tə ʔjoʔ-lə ʰma-reʔ
 祖父-[属] 家 古い-[絶]-[主] [否/存]
 祖父の古い家といえば、ありません。

存在動詞の否定は必ずしも肯定形の否定の意味とならず、話者のよく知っている事柄には /ʔjoʔ ʰma-reʔ/ が、今知った事柄については /ʰmeʔ-tu/ が用いられる。

(110) a ʔlā-∅ ʔjoʔ ʰma-reʔ
 道-[絶] [否/存]
 道は（そもそも）ありません。

b ʔlā-∅ ʰmeʔ-tu
 道-[絶] [否/存]
 道は（以前はありましたが今はなくなって）ありません。

存在動詞が否定の意味を持つときは TAM 接辞群が付き、以下のような表現が認められる。

- (111) a 'lā-∅ ^meʔ-k^he:
道 [否/存]-[完]
道は(今知ったことに)なくなってしまいました。
- b 'lā-∅ 'joʔ-zə 'ma-ji:-k^he:
道 [存]-[過/否]-[完]
道は(そもそも)あったのではありません。

4.3 本動詞

動詞の形態としては、次のようなものが代表的である。

1. 1音節語幹
'mboʔ「呼ぶ」、-t^hiʔ「導く」、^hga「愛する」
2. 2音節語³⁵
-ha 'ko「理解する」、'ŋo ɕ^he:「知り合う」、-^hna h^htɕe「誓う」
3. 名詞(音節数を問わない) + 補助動詞 (/^hdzoʔ/や/'tɕeʔ/)「する」
-ts^ha pa ^hdzoʔ「熱がある」、-^htɕi mba ^hdzoʔ「賠償する」 -po 'tɕeʔ「口づけする」

本動詞の語幹自体は無変化であるが、命令形と非命令形で語幹が異なる動詞があり、表13の2例である。

表 13：動詞語幹の交替

語義	非命令形	命令形
行く	' ^h dɔ	-s ^h ō / -s ^h o:
来る	'fiō / 'fio:	'ɕ ^h oʔ

また、動詞の要求する項の数とその格標示の観点から、次のような分類が可能である。

1. 1項動詞 (S: 絶対格)
'^hdɔ「歩く」、'ŋu「泣く」、'na「病気だ」
2. 2項動詞 (A: 能格か絶対格、P: 絶対格)
-za「食べる」、-^hseʔ「殺す」
3. 2項動詞 (A: 能格か絶対格、P: 与格か絶対格)
'riʔ「会う」
4. 2項動詞 (A: 絶対格、P: 共格)
'^hda ^hda「似ている」
5. 2項動詞 (A: 絶対格、P: 与格)
^hga「愛する」
6. 2項動詞 (R: 与格、S: 絶対格)

³⁵ 2音節で1語を形成するものと、1音節ごとに独立した語からなるが切り離せないものの2タイプがある。

^htaʔ「怖がる」、^htaʔ「～という名前である」

7. 3項動詞 (A: 能格か絶対格、P: 絶対格、R: 与格)

^hte:「手渡す」、^hja:「貸す³⁶」、^hzi:「与える」

以上の分類において、「項」とはいうが、文意が明快であれば統語的に現れる必要はなく、省略するのが通例である。また、動詞の形態で「名詞+動詞」の組み合わせを取るもので、かつ全体で1つの意味を構成する場合は、この名詞は上の分類にいう「項」に数えない。

本動詞のみで完結する文は、動作動詞の場合「命令」「勧誘」などの意味を表す平叙文か命令文の形になる³⁷。

(112) ^hte^hoʔ-∅ 'rō ^hsā^hlo^htō
2-[絶] 自分で 考える
あなたは自分で考えなさい。

(113) 'ŋa: ŋō-∅ 'ma-^hdō
子供-[絶] [否]-叩く
子供を叩くな。

状態を表す動詞については、たいてい現在の状態を意味する。

(114) 'ŋa-∅ ^hte^hoʔ-la ^hga
1-[絶] 2-[与] 愛する
私はあなたが好きです。

また、未来のことを示す場合にも動詞語幹で終止する文がある。

(115) ^hte^hoʔ-∅ ^hsa: ŋī 'ʔa-^hdo
2-[絶] 明日 [疑]-行く
あなたは明日出かけますか？

4.4 形容詞：述語用法として

ここでは、動詞と共通する接辞をとって述語になる場合の形容詞について述べる。また、4.5, 4.6における各接辞の記述では、動詞と並んで形容詞の例も区別せずまとめて掲げる。

形容詞の形態は修飾用法の場合と変わらない。このとき、述部を形成するときは通常判断動詞が必要とされる。形容詞は補語の位置にあるとも分析できる。

(116) ^hda ^hsa^hte^ha-∅ 'ŋo ma ^hteiʔ po 'reʔ
この 地方-[絶] 本当に 快適な [判]
この地方は本当に快適です。

しばしば形容詞に/^hteiʔ/「1」が後続して述部を形成する。以下の例文を見ると分かるように、代名詞は形容詞の修飾を受けないため、形容詞は述部の一部にあると考える。

³⁶ この動詞語幹は同時に「借りる」も意味するが、その場合は2項動詞である。

³⁷ 文のタイプについては5節の記述を参照。

- (117) ʔtʰoʔ-∅ ʔzō mbo ʰtʰaʔ mo ʔtʰiʔ ʔreʔ
 2-[絶] 優しい とても 一 [判]
 あなたはとても優しいです。

ただし、接辞類が付加されるとき、重複するタイプの語幹は非重複形となり、/pa, po, ma, mo/などの接尾辞が脱落するのが通例である。

- (118) ʔmə-ʰtʰeʰaʔ-tu
 [否]-寒い-[証]
 (私は) 寒くありません。

また、本動詞と同様に何も付加されずに名詞句として用いられるが、格標識を付加する場合は名詞化接辞/tə/が必要とされる。

形容詞述語が比較を表す場合、接辞類が付加されてもされなくても、重複するタイプの語幹は非重複形となり、/pwə, mwə/などの接尾辞が脱落するのが通例である。

- (119) ʔkʰo-∅ ʔŋa-tʰoʔ-la ʔlo ʰsū ʔtʰe-reʔ
 3-[絶] 1-[位置]-[位] 年 3 大きい-[判]
 彼は私より3歳年上です。

形容詞述語が「最も～」を表す場合、形容詞語幹に/ʔtʰuʔ-tə/を後続させるか、文脈から分かる場合は形容詞に/-tə/のみを付加する形式を取る。

- (120) ʔndə-∅ ʔtʰe-ʔtʰuʔ-tə ʔreʔ
 これ-[絶] 大きい-最も-それ [判]
 これが最も大きいです。

- (121) ʔkʰo tsʰo ʔnō-la ʰtʰa ʔtʰi-∅ ʔlo ʔtʰə bo-tə ʔreʔ
 3.[複] 中-[位] [人名]-[絶] 年を取っている-それ [判]
 彼らの中でタシが最も年を取っています。

ほかにも、独立の副詞を用いて「最も～」を表すこともできる。

- (122) ʔtʰeʰoʔ-∅ ʔtʰə-∅ ʔno-ʰgo-ʰsā ʔna ʰnō ʰtʰiʔ ʔtʰə bo-tə ʔno
 2-[絶] 何-[絶] 買う-[必要]-思う ならば 最も 大きい-それ 買う
 もしあなたが何か買いたいのであれば、最も大きいものを買いなさい。

4.5 接頭辞類

4.5.1 方向接辞

方向接辞と考えられる要素には、次の4種類がある。

1. 上方：ʔja:-
2. 下方：ʔma:-
3. 向心：ʔtsʰə-
4. 離心：ʔpʰa-

これらは方向接辞と呼んでいるが、文法的機能はほとんどない。特に「向心」「離心」は個別の動詞語幹に添えられ、特別に強い意味を担わない化石化した要素となっている。方向を表す必要がある場合は、方向接辞ではなく、方向を表す2音節形式の語、たとえば /'ja la/ 「上へ」、/ma la/ 「下へ」などを動詞語幹の前に置く。これは動詞語幹とは異なる声調領域に置かれ、接辞ではなく副詞と呼べる。

方向接辞を伴う例としては、次のようなものがある。

- (123) a 'ja:^htʃe
[方]-生まれる
(植物が) 成長する。
- b 'ma:^hɲɑʔ
[方]-押さえる
押さえつける。
- c `ts^hə-ɕ^ho:
[方]-来る.[命]
こちらに来なさい。
- d `p^ha-^hla
[方]-教える
教える。
- (124) ^ja: la ^ma:ⁿduʔ
上へ [方]-座る
上(上座)のほうへ座ってください。
- (125) 'ŋa-∅ 'fio^htʃiʔ ^rə-ⁿgo 'ma:^hlɔ-nə ʔa^hdo `ɕ^hə-t^he:
1-[絶] 1度 山-[位置] [方]-落ちる-[名] もう少しで 死ぬ-[完]
私は1度山で下に落ちて、死にかけました。

4.5.2 否定辞

否定辞には、以下の2種がある。

1. 未完了否定: 'mə-
2. 完了否定: 'ma-

未完了否定と完了否定の異なりは次のようである。

- (126) a 'ŋa-∅ 'mə-ti
1-[絶] [否]-書く
私は書きません。
- b 'ŋa-∅ 'ma-ti
1-[絶] [否]-書く
私は書きませんでした。/私が書いたのではありません。

否定辞は、それが動詞句のどこに配されようとも、必ず声調を担う。

複音節動詞の例は次のようになる³⁸。

- (127) ʼŋa-∅ ʼŋo ʰmə-ɕʰe:
 1-[絶] 知り合いである [否]-[語幹]
 私は（彼を）知ってはいないです。

完了否定は禁止命令³⁹にも用いられる。

- (128) ʰma-sʰo:
 [否]-行く.[命]
 行くな。
- (129) ʰtsʰiʔ kʰa ʰma-za
 怒る [否]-[語幹]
 怒らないで（ください）。/ごめんなさい。

4.5.3 疑間接辞

疑間接辞は疑問文を形成するとき用いられるほか、推量や推測を述べるときにも現れる。

疑問文を形成する接辞は接頭辞と接尾辞がある。ただし両者は共起しない。

ここでは接頭辞について述べる。疑間接頭辞には/ʔə-/が認められる。疑間接頭辞は動詞語幹に否定辞がつかない場合に限って現れる。動詞が TAM 接辞を伴う場合、疑間接頭辞は動詞語幹ではなく TAM 接辞の直前に現れうる。

- (130) ʰtɕʰoʔ-∅ ʰkʰo-la ʰʔə-ʰga
 2-[絶] 3-[与] [疑]-愛する
 あなたは彼が好きですか？
- (131) ʰtɕʰoʔ-∅ ʰkʰɛ: ʰʔə-le:
 2-[絶] [疑]-賛成する
 あなたは賛成しますか？

選択疑問文の場合は最後の選択肢を除くものに疑間接辞がつき、最後の選択肢は平叙文と同様の形式をとる。

- (132) ʰtɕʰoʔ-∅ ʰŋɕɛ:-∅ ʰza-lə ʰʔə-ji: ʰtə ʰtsā mba-∅ ʰza-li:
 2-[絶] 米-[絶] 食べる-[未/疑] または ツアンパ-[絶] 食べる-[未]
 あなたはごはんを食べますか、それともツアンパを食べますか？

疑間接頭辞 ʔə- と同一形態であるが、疑問を表さず自問を表す事例も認められる。

³⁸ 動詞/ʰŋo ɕʰe:/「知り合いである」のような形態素分析のできない複音節からなる動詞は、その接辞類を最終音節に付加する。

³⁹ 特定の動詞を除いて命令形とそれ以外の動詞語幹の形態が同一であるため、完了否定か禁止命令かは文脈によって決まる。

- (133) ʔᵛa-n̄d̄ə-∅ -ᵛta -na ʔzĩ m̄bo-ʔᵛda joʔ sᵛa reʔ ʔə-zĩ-na
 肉-この-[絶] 見る と おいしい-[可] [疑]-おいしい-[調]
 この肉を見るとおいしそうですが、おいしいかな？

4.6 接尾辞類

4.6.1 TAM を表す接辞群

動詞語幹の後部には TAM を表す接辞群がつく。この接辞群はほとんどの場合形態論的に分析することが可能であるが、実際の用法においては、複数の要素の組み合わせで1つの意味を表現する。しかし、まずは形態論的に細かく分析し、各形態素に分解して示す。続いて具体例を掲げる際には、表現する意味カテゴリーに分類してそれぞれ記述する⁴⁰。

構成する形態素の配列

4.1 で示した動詞の基本構造の中における「TAM 標示部分」に含まれる接辞群の配列をモデル化すると、次のようになる。

(TA 接辞-1)-(TA 接辞-2)-(AM 接辞)-(述語動詞由来接辞)-(M 接辞)

M 接辞は語気を表す助辞もしくは諾否疑問用の疑問接辞と同じ位置を占める。また、可能性・推測を表す表現を構成する要素も述語動詞由来接辞に後続しうる⁴¹。

それぞれに入る接辞類の形態の一覧は次のようである。

1. TA 接辞-1
-zə, -ᵻdzu, -lə, -ɕə
2. TA 接辞-2
-ᵻgo, -tᵻe:, -kᵻe:
3. AM 接辞
-li:
4. 述語動詞由来接辞
-ji:, -mĩ, -reʔ, -joʔ, -meʔ
5. M 接辞
-tu, -pa

TAM 接辞を5種類に分けたのは、配列のみが問題になるのではなく、次のような異なりが認められることによる。

⁴⁰ 本節の記述は Suzuki & Sonam Wangmo (2015c) の発表およびそれに対するコメントに基づいて改訂増補した。

⁴¹ これを「述語動詞由来接辞に後続しうる」と分析するか、述語動詞由来接辞を含む一連の音形をひとかたまりととらえるかは考察の余地がある。本稿の記述では、これを分析することなくひとかたまりとして扱う。4.6.4 参照。

- TA 接辞-1 は名詞化標識としても機能することがある (3.5 参照)。通常述語動詞が付加される。また、動詞句の否定、疑問を表す接頭辞をその直前にとることができないものでもある。
- TA 接辞-2 は述語動詞を必ずしも必要とせずかつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができるものである。ただしこれらの形態素が単独で用いられることはほとんどない。ここに含まれる接辞群は、1つの動詞句に並列して用いることができる。ふるまいとしては、動詞連続と共通する点が多い。これらの形態の多くはもともと独立した動詞であったが、のちに文法化し固定化したものであると考えられる。
- AM 接辞は基本的に述語動詞をとらずかつ動詞句の接頭辞をその直前にとることができないものである。語形成としては、「TA 接辞-1 + 述語動詞」の縮約形である。
- 述語動詞由来接辞は、単独で用いられる述語動詞 (4.2.1 参照) と同一の形態であるが、意味するところが異なっている。単独ではその意味機能を記述できないため、他の接辞とまとめて記述する必要がある。
- M 接辞は証拠性を反映する接辞であり、本動詞、述語動詞、その他の TAM 接辞に後続が可能である。一般に動詞句の最も後ろを占める。

ただし動詞句は以上のいずれの接辞を伴わなくても文を終止することができる。

述語動詞・本動詞・形容詞に共通して付加できるものと、どれかに限定されるものに分かれる。

動詞句を否定する場合は否定辞（接頭辞）が本動詞につく場合と、動詞句末接辞に否定形を用いる場合がある。疑問文の場合は疑問接頭辞が TAM を表す接辞につくことがある。TAM 接辞にこれらの接頭辞を付加する場合は本動詞と異なる独立の声調領域を形成する。述語動詞の否定形と同じ形式が単独で用いられる場合も同様である。

TAM の総合的記述

時制とアスペクトの観点から見ると、Lhagang 方言では、未完了未実現、現在/継続、現在進行、アオリスト、現在完了が区別される。まず、この分類に従って記述を行う。そののち、M 接辞について独立に記述する⁴²。

未完了

未完了とは一般的に未来と呼ばれるカテゴリーに非常に近い。行為の実現がなされていない状況のほか、行為は開始しているが達成がなされていない状況を表す。過去のことを言及することはできない。平叙文肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

⁴² ここで採用する分析方法は、Suzuki & Sonam Wangmo (2015a)、鈴木ほか (2015ab) で採用されている分析方法とは異なっている。

表 14：未完了平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語積
-lə ji:	未完了/egophoric	[未/E]
-lə re?	未完了/non-egophoric	[未]
-li:	意思未来/egophoric	[意]
- ^h dzɯ re?	可能未来/non-egophoric	[未]
-go / - ^h go	必要未来/egophoric	[必/E]
-go re? / - ^h go re?	必要未来/non-egophoric	[必]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下のようになる。

表 15：未完了接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-lə ji:	-lə ʼma-ji:	-lə ʼʔə-ji:	-lə ʼma-ji:-la
-lə re?	-lə ʼma-re?	-lə ʼʔə-re?	-lə ʼma-re?-la
-li:			
- ^h dzɯ re?	- ^h dzɯ ʼma-re?	- ^h dzɯ ʼʔə-re?	- ^h dzɯ ʼma-re?-pa
-go / - ^h go	ʼmə-go		
-go re? / - ^h go re?	-go ʼma-re?		

空白になっている個所は日常的に用いられないものである。

(134) a ʼŋa-∅ ʼⁿdo-lə ji:
 1-[絶] 行く-[未/E]
 私は行くでしょう。

b ʼŋa-∅ ʼⁿdo-li:
 1-[絶] 行く-[意]
 私は行きますね。

c ʼŋa-∅ ʼⁿdo-go
 1-[絶] 行く-[必/E]
 私は行かないといけません。(もう行く時間だ)

- (135) a ʔ^ho-∅ ʔ^hdo-lə re?
 3-[絶] 行く-[未]
 彼は行くでしょう。
- b ʔ^ho-∅ ʔ^hdo-^hdzu re?
 3-[絶] 行く-[未]
 彼はたぶん行くでしょう。
- c ʔ^ho-∅ ʔ^hdo-go re?
 3-[絶] 行く-[必]
 彼は行かないといけません。(もう行く時間だ)
- (136) ʔ^hoʔ-∅ ʔ^hta ri ʔ^hdo-li: ʔ^htə ʔ^hs^hɔ̄ ni: ʔ^hdo-li:
 2-[絶] 今日 行く-[意] または 明日 行く-[意]
 あなたは今日行くつもりですか、それとも明日行くつもりですか？
- (137) ʔ^hɔ̄ ni ʔ^hka na ʔ^hdo-^hgo ʔ^hsā-ɕɔ:
 明日 どこへ 行く-[必] 思う-[進]
 (あなたは) 明日どこへ行きたいと思っていますか？
- (138) ʔ^hko ze-∅ ʔ^hð^mbo ʔ^htɕo-^hgo re?
 衣服-[絶] 暖かく 着る-[必]
 衣服は暖かく着る必要があります。
- (139) ʔ^hoʔ-gə ʔ^hɛ:-^hdzu-gə ʔ^hza ma-∅ ʔ^hŋa-∅ ʔ^hza-^hgo-tu
 2.[能] 作る-[未]-[属] ごはん-[絶] 1-[絶] 食べる-[必]-[証]
 あなたが作ってくれるごはんを私が食べましょう。

/-go/-/^hgo/を平叙文で2人称の行為者とともに用いる場合、語用論的には「絶対に～しなさいよ」といった命令の意味を帯びる。丁寧に語釈を与えれば、この/-go/-/^hgo/は義務の意味になるだろう。しかしながら、構造上は命令文になっているわけではない⁴³。

- (140) ʔ^hoʔ-∅ ʔ^hfiɔ:-^hgo
 2-[絶] 来る-[必]
 あなたは絶対来なさいよ。

/-lə ʔ^hə-reʔ/-/^hlə reʔ/⁴⁴ は TA とは関係なく疑問の意味を表す場合がある。

⁴³ 命令文の構造については、5.2.3 を参照。

⁴⁴ 規則的な組み合わせは/-lə ʔ^hə-reʔ/となるだろうが、実際の運用においては/-lə reʔ/のように疑問接辞を含まない形式で現れる。前者は実際の例によって支持されない。

- (141) a 'za-ŋɛ:lə ʔə-re?
 食べる-よい-[未]
 (これは) 食べられますか?
 b 'za-ŋɛ:lə-re?
 食べる-[判]
 (これは) 食べられます。

なお、発話において未来のことに言及しているのが文脈から明らかな場合、以上の接辞が現れなくても文は成立する。

継続

現在の状態が継続している状況を表すのは、述語動詞の存在動詞である。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 16：継続平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語釈
-joʔ	現在/継続/egophoric	[継/E]
-joʔ reʔ	現在/継続/non-egophoric	[継]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下ようになる。

表 17：継続接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-joʔ	-meʔ	-joʔ-lə ʔə-ji:	-meʔ-li:
-joʔ reʔ	-joʔ ʔma-reʔ	-joʔ-lə ʔə-reʔ	

空白になっている個所は日常的に用いられないものである。

- (142) ʔŋa-∅ ʔa na ʔnduʔ-joʔ
 1-[絶] ここ 泊まる-[継/E]
 私はここに泊まっています。
 (143) ʔkʰo-∅ ʔa na ʔnduʔ-joʔ reʔ
 3-[絶] ここ 泊まる-[継]
 彼はここに泊まっています。

習慣/判断

動詞語幹に直接判断動詞が後続する場合がある。この場合の表現する TA 解釈は文脈によるが、基本的に現在および習慣性の行為について言及していることが多い。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 18：習慣/判断平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語積
-ji:	判断/egophoric	[判/E]
-re?	判断/non-egophoric	[判]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下ようになる。

表 19：習慣/判断接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-ji:	ˈma-jɪ:	-lə ʔə-jɪ:	
-re?	ˆma-re?	-lə ʔə-re?	

空白になっている個所は日常的に用いられないものである。

(144) ˈza-nɛ:-re?

食べる-よい-[判]

(これは) 食べられます。

(145) ˈkʰo tsʰo-∅ ˈtʰã hʰtɕe? ˈndzo mo-∅ ˈhso-re?

3.[複]-[絶] みんな 乳牛-[絶] 飼う-[判]

彼らはみんな乳牛を飼います/飼っているものです/飼うつもりです。

習慣について言及する場合、egophoric 形式が用いられることは少ない。

(146) ˈŋa-∅ ˈkʰɛ: ma-∅ ˈhso-re?

1-[絶] 牛-[絶] 飼う-[判]

私は牛を飼います/飼っているものです/飼うつもりです。

(147) ˈfiŋgõ mo ˈŋa tse ˈhʰtɕe? me? ˈni:-lə ʔə-re?

夜 早い 少し 眠る-[判/疑]

(あなたは) 夜早い目に寝る (習慣をもっている) のですか？

判断を伴う形式で疑問文を作る場合、/-lə re?/となることもある。

(148) ˈza ma-∅ ˈlɛ: ˈhka? ˈmbu ˈdʒu-∅ ˈhsa:-lə re?

ごはん-[絶] 作る 時 薪-[絶] 燃やす-[判/疑]

ごはんを作るとき薪を燃やしますか？

判断の接辞がつく場合の疑問文に対する答えにおいて、egophoric 形の否定は次のように分析的なものにもなる。

(149) a ˈndə-∅ ˈza-ˈkʰɛ-∅ ˈtɕʰoʔ-∅ ʔə-jɪ:

これ-[絶] 食べる-[名]-[絶] 2-[絶] [疑]-[判/E]

これを食べたのはあなたですか？

b ˈŋa-∅ ˆma-jɪ: ˈfiŋgõ hʰtɕeʔ-∅ ˆreʔ-pa

1-[絶] [否]-[判/E] [人名]-[絶] [判]-[証]

私 (が食べたの) ではありません。ヨンチェ (が食べたの) でしょう。

判断と継続は次のような対比ができる。

- (150) a ʔkʰo-∅ ʔhʰtsa tʰoʔ ʔnduʔ-reʔ
 3-[絶] 上の階 泊まる-[判]
 彼は上の階に泊まっています。(一般に彼にはそういう傾向がある)
- b ʔkʰo-∅ ʔhʰtsa tʰoʔ ʔnduʔ-joʔ reʔ
 3-[絶] 上の階 泊まる-[継]
 彼は上の階に泊まっています。(彼の存在を間接的に聞いたことを述べる)

以上の (150b) の発話を受けて、次のように 1 人称主語に non-egophoric を用いて客観性を強調する表現が可能となる。

- (151) ʔŋa-∅ ʔhʰtsa zɑʔ ʔnduʔ-joʔ reʔ
 1-[絶] 下の階 泊まる-[継]
 私は (たとえば)、下の階に泊まっています。

進行

動作が進行しているもしくはしていた状況を表す接辞が存在する。これらはこれから進行することを想定した発話には用いられないため、非未来の事柄を表すときに用いられるといえる。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 20：進行平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語釈
-ɕə joʔ / -ɕə:	非未来/進行/egophoric	[進/E]
-ɕə joʔ reʔ / -ɕə: reʔ	非未来/進行/non-egophoric	[進]
-ɕə ji:tu / -ɕi: tu	非未来/進行/non-egophoric	[進]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下ようになる。

表 21：進行接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-ɕə joʔ / -ɕə:		-ɕə joʔ-lə ʔə-ji:	
-ɕə joʔ reʔ / -ɕə: reʔ		-ɕə joʔ-lə ʔə-reʔ	
-ɕə ji:tu / -ɕi: tu			

空白になっている個所は日常的に用いられないものである。否定の表現が認められないのは注目に値する。

現在の進行の例としては、以下のようなものがある。

- (152) a ʔtʰoʔ-∅ ʔtʰə-∅ ʔʰi zo-ʔə joʔ
 2-[絶] 何-[絶] する-[進/E]
 あなたは何をしているのですか？
- b ʔkʰo-∅ ʔtʰə-∅ ʔʰi zo-ʔə: reʔ
 3-[絶] 何-[絶] する-[進]
 彼は何をしているのですか？

- (153) ʔtə tsʰo-gə ʔtʰə tə-∅ ʔʰi zo-ʔi: tu
 あの人たち-[能] 何-[絶] する-[進]
 あの人たちは何をしていますのでしょうか？

過去の進行の例には、通常時間を表す要素が含まれる。たとえば以下のようなものである。

- (154) ʔkʰo tsʰo-gə ʔta tʰiʔ ʔtʰə tə-∅ ʔʰi zo-ʔi: tu
 3.[複]-[能] さっき 何-[絶] する-[進]
 彼らはさっき何をしていたのでしょうか？

アオリスト

アオリストとは、一般的に過去と呼ばれるカテゴリーに非常に近く、実際 Lhagang 方言の TAM 体系の中では「過去」と呼んでも差し支えない⁴⁵。この形式での発話の意味は、過去に起こった事項についての言及であり、現在の状況と何の関連づけも意図されていない。また、動作が発話内容の時間軸の中で終了したことを示している⁴⁶。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 22：アオリスト平叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語釈
-zə ji:	アオリスト/egophoric	[過/E]
-zə reʔ	アオリスト/non-egophoric	[過]
-zə	アオリスト	[過]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下のようなになる。

表 23：アオリスト接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態⁴⁷

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-zə ji:	-zə ʔma-ji:	-zə ʔə-ji:	ʔma-V-zə-ji:
-zə reʔ	-zə ʔma-reʔ	-zə ʔə-reʔ	ʔma-V-zə ʔə-reʔ
-zə	ʔma-V-zə		

⁴⁵ しかし一方で時制 (tense) の体系における「過去」とは異なるため、記述の上ではアオリストと呼んでおく。

⁴⁶ フランス語の単純過去の用法に非常に近い。また、行為の終結が含意されている点は、次に述べる現在完了と共通するところがある。

⁴⁷ 表中の V は動詞語幹を表す。

空白になっている個所は日常的に用いられないものである。

- (155) 'lo 'mā^mbo-la 'ma-ri:-zə^ji:
 年 多い-[位] [否]-会う-[過/E]
 (私はあなたと) 長年会っていませんでした。

- (156) ˀtɕ^hoʔ-∅ ˀtō daʔ-∅ ˀfiqə-ts^ha:-zə ˀʔə^ji:
 2-[絶] 用事-[与] する-完成する-[過/疑/E]
 あなたは用事をし終えましたか？

判断動詞を伴わない形式は、egophoricity について言及されないため、どのような発話にでも用いられる。

- (157) a 'ŋa-∅ ˀʔa^hto: ˀfiqə-ts^ha:-zə
 1-[絶] ほとんど する-完成する-[過]
 私は(用事を)ほとんどし終えました。
 b ˀk^ho-∅ ˀʔa^hto: ˀfiqə-ts^ha:-zə
 3-[絶] ほとんど する-完成する-[過]
 彼は(用事を)ほとんどし終えました。

口承物語で叙述される過去の事柄は基本的に/-zə reʔ/が用いられる。

- (158) ˀtə^hda ˀze:-zə reʔ-sə reʔ
 そのように 言う-[過]-[伝]
 そのように言ったそうです。(『菩薩の愛する地・塔公』)

疑問文における egophoric の予測的使用は、この接辞の場合にも適用される。

- (159) ˀtɕ^hoʔ-∅ ˀka na-nə ˀfið-zə^ji:
 2-[絶] どこ-[奪] 来る-[過/E]
 あなたはどこから来ましたか？

現在完了

現在完了での発話の意味は、過去に起こったことと現在の状況と何らかの関連があることを意識した発話となり、発話に現れる行為が直接体験か否か、すなわち発話内容が五感によって認識したことに基づいているかそれともすでにある知識や常識に基づく判断が働くことによつて間接的に情報を認識したかという異なりにおいて形式を異にする。肯定形式の場合、次のような形式が認められる。

表 24：現在完了叙文肯定形式の接辞一覧

形態	意味	語積
-t ^h e:	現在完了/直接体験	[完]
-k ^h e:	現在完了/非直接体験	[完]

以上の形態について、平叙文否定、疑問文肯定、疑問文否定の形態は以下ようになる。

表 25：現在完了接辞の肯定/否定、平叙/疑問の形態⁴⁸

平叙文		疑問文	
肯定	否定	肯定	否定
-t ^h e:	ʼma-V-t ^h e:	ʼʔə-V-t ^h e:	ʼma-V-t ^h e:-ji:
-k ^h e:	ʼma-V-k ^h e:	ʼʔə-V-k ^h e:	ʼma-V-k ^h e:-la

/-t^he:/、/-k^he:/、およびこれらと対比できる/-tu/（現在の直接体験；M 接辞）の使い分けをあわせて示すと、次のようになる。

- (160) a ʼʔə-^htɕ^hɑʔ-t^he:
[疑]-寒い-[完]
(あなたは) 寒かったですか？
- b ʼʔə-^htɕ^hɑʔ-k^he:
[疑]-寒い-[完]
(水は) 冷たかったですか？
- c ʼʔə-^htɕ^hɑʔ-tu
[疑]-寒い-[証]
(あなたは) 寒いですか？

現在完了とアオリストの異なりは、意図性に現れる場合がある。

- (161) a ʼŋa-∅ ʼze:-no:-k^he:
1-[絶] 言う-間違う-[完]
私は（偶然に）言い間違っていました。
- b ʼŋa-∅ ʼze:-no:-zə
1-[絶] 言う-間違う-[過]
私は（わざと）言い間違いました。

次の対話では/-t^he:/と/-k^he:/が対比的に用いられ、用法の差異を浮き彫りにしている。

- (162) a ʼmə ʼtɕ^hə ts^heʔ-∅ ʼfiə:-t^he:
人 どれくらい-[絶] 来る-[完]
何人の人が来ましたか？
(来た人数を直接的な情報に基づいて把握しているかを意図した質問)
- b ʼmə ʼŋi ɕ^hu^h tse-∅ ʼfiə:-k^he:
人 20 くらい-[絶] 来る-[完]
20 人くらいが来ました。
(間接的な情報に基づいた数しか把握していないという言明)

現在完了とはいうが、実際の状況が完了していないように見えても、発話は成立しうる。これには、動詞語幹にそなわった固有の аспекトが作用していると考えられる。以下の例における /^mbaʔ/ 「降る」は、降り始めた時点でその動詞が表す動作が完了しているものと理解する。

⁴⁸ 表中の V は動詞語幹を表す。

そして、接辞の使い分けは次のように記述できる。

- (163) a ʔtʰa^hba-∅ ʔmbaʔ-t^he:
 雨-[絶] 降る-[完]
 雨が降ってきました。(今降っている状態にあるのを見ている)
- b ʔtʰa^hba-∅ ʔmbaʔ-k^he:
 雨-[絶] 降る-[完]
 (地面が濡れているから)雨が降りました。(今はやんでいる)

類似の例に、次のようなものもある。

- (164) a ʔk^ho-∅ ʔziʔ^hdaʔ^hdzaʔ-t^he:
 3-[絶] 滑って転ぶ-[完]
 彼は滑って転びました。(その現場を目撃した)
- a ʔk^ho-∅ ʔziʔ^hdaʔ^hdzaʔ-k^he:
 3-[絶] 滑って転ぶ-[完]
 彼は滑って転びました。(直接その現場を目撃していないが知っている)

現在完了の否定は、原則的に「まだ～していない」の意味になる。

- (165) ʔŋa-∅ ʔta rɔ: ʔh^htɑ: mo ʔma-ko-t^he:
 1-[絶] まだ とても [否]-分かる-[完]
 私はまだちゃんと分かっていません。

- (166) (ʔŋa-∅) ʔma^hka-t^he:
 (1-[絶]) [否]-疲れる-[完]
 (私はまだ) 疲れていません。

現在完了とアオリストを対比すれば、以下のような説明を与えられるが、実際の会話において用法上区別があまり認められない傾向にある⁴⁹。

- (167) a ʔtʰoʔ-∅ ʔʔə-ko-t^he
 2-[絶] [疑]-分かる-[完]
 分かりましたか？(今きちんと理解しているかの意)
- b ʔtʰoʔ-∅ ʔʔə-ko-zə
 2-[絶] [疑]-分かる-[過]
 分かりましたか？(過去に理解したかの意；今理解しているかは関係ない)

M 接辞の証拠性

もっともよく観察されるのは /-tu/⁵⁰ と /-pa/⁵¹ である。これらは単独の声調を担うことはない。また、この直前に否定辞や疑問接辞はつかない。

/-tu/は発話の内容が直接経験に基づくことであることを述べる。また、自らではコントロー

⁴⁹ 語りの場面では異なりが維持されている可能性があり、調査が必要である。

⁵⁰ 環境によって [-tu, -du, -ⁿdu] などの音形がある。

⁵¹ この形式は環境による異なる音形をもたないようだ。

ルが効かない内的感覚 (endopathic) による発話を表す。

- (168) ʔ^ha ʔə^hkũ-tu
[疑]-のどが渴く-[証]
(あなたは) のどが渴きましたか？

- (169) ʔ^hmə^htoʔ-tu
[否]-空腹である-[証]
(私は) 空腹ではありません。

/-pa/は発話内容に確実性がない場合に用いられる。確実性の度合いにはかかわらない。

- (170) ʔ^hfiɔː-pa
来る-[証]
(彼は) たぶん来るでしょう。

4.6.2 語調を表す助辞

/-fiɔ/「確認、念押し」、/-mo/「確認、促し」、/-roʔ/「依頼」、また、命令文の語調を和らげる/-ta/などがよく認められる。

- (171) ʔ^hdzoʔ pa ʔ^hqo-fio
素早い 行く-[調]
急いで行きましょうよ。

- (172) ʔ^hta-mo
見る-[調]
(ほら) 見て！

- (173) ʔ^htʰɔ-roʔ
飲む-[調]
飲んで下さい。

- (174) ʔ^hta rɔ̃ ʔ^hfiɔ ʔ^htɕiʔ ʔ^hzeː-ta
もう 回 1 言う-[調]
もう一度言ってください。

以上のほか、疑問接尾辞として機能するよう見える/-la/もここに含める。おそらく TAM 接辞/-la/と語調を整える接辞/-fia/の縮約に由来すると考えられる。この形態が現れる文は、形式上は疑問文と認めず、疑義を伴う語調を表す表現と考えるが、否定疑問文では固定的にこの接辞が用いられる⁵²。

- (175) ʔ^hŋo ma ʔ^hqɑ ʔ^hqɑ ʔ^hreʔ-la
本当に こんなよう [判]-[調]
本当にこのようなのですか？

⁵² 否定疑問文は、語用論上通常の疑問文とは異なり、驚きや疑いを表現に含みうる。

4.6.3 伝聞を表す表現

伝聞を表すには、/sə reʔ/⁵³ を M 接辞の位置に置く。M 接辞がついた状態で伝聞を表す場合には/-ze: reʔ/を付加する。伝言する場合には動詞/-ze:/が独立した声調を担って現れ、埋め込み文を形成する。

- (176) ʼtəo wo-gə ʼkʰa [aʔ-zə reʔ-sə reʔ
 ジョウオ-[能] 口を開く-[過]-[伝]
 ジョウオが口を開いたそうです。(『菩薩の愛する地・塔公』)
- (177) ʼkʰo-∅ ʼta: rɔʔ ʰtoʔ-tu-ze: reʔ
 3-[絶] まだ 空腹の-[証]-[伝]
 彼はまだおなかがすいているそうです。

4.6.4 可能性・推測を表す表現

「たぶん～、おそらく～」などの可能性・推測を表す表現は非常に豊富にあり、全体像はまだつかめていない⁵⁴。もっとも単純な表現は 4.6.1 で述べた M 接辞/-pa/を用いた表現であるが、それ以外に分析の困難な形態素の連続によって表す。たとえば、以下のようである。

- (178) ʼkʰo-gə ʼti-zə-∅ ʔa: ʰto ʰji: tʰe:
 3-[能] 書く-[名]-[絶] [可]
 (これは) おそらく彼が書いたものでしょう。
- (179) ʔtʰa ʰba-∅ ʰmbaʔ-go ʰsā ɕɔ: ʰda ʰdzɯ reʔ
 雨-[絶] 降る-[可]
 雨が降りそうだ。
- (180) ʼŋa-∅ ʰdo-ʰdzɯ la sʰa ʰma-reʔ
 1-[絶] 行く-[可/否]
 私はたぶん行けないでしょう。

以上のように、否定辞などの配置を手がかりに形態素の関係を分析的に考えることは可能ではあるが、TAM 接辞群の例と同じく、ここではあえて分析的な語積を与えない⁵⁵。

4.7 動詞連続・動詞形容詞連続

動詞語幹は何の接続要素を伴うことなく並列することができる場合がある。これを動詞連続と呼ぶ。Lhagang 方言では動詞連続はあまり豊富ではなく、限られた要素が形成するにとどまる。特に「可能」「使役」などを表す動詞がその主たるものである。動詞連続を構成する第1の

⁵³ 環境によって [-zə reʔ] とも発音される。

⁵⁴ このカテゴリーは epistemic modality と呼ばれ、Vokurková (2008) に詳しい。おそらく可能性・推測を表す表現の全体像は膨大で、単純な列挙ですら困難である。カムチベット語については、Tshe-ring Lha-mo (2013) により詳しい用例がある。

⁵⁵ 複数の形態素がまとまって新たな意味を持つ場合、分析的な語積を与えることは共時的記述にならず、歴史的な成立背景を提示するにとどまる。このため、本稿ではあえてこのように記述する。

動詞語幹が1音節語で接頭辞・接尾辞ともに取らない場合、第1の動詞語幹と第2の動詞語幹で1つの声調領域を形成する。接辞類は第2の動詞語幹につく。接頭辞類がつく場合、声調領域が分けられる。

- (181) ʔtʰoʔ-∅ ʔpoʔ hkeʔ-∅ ʔdʒaʔ ʔə-çʰe:
 2-[絶] チベット語-[絶] 話す [疑]-知っている
 あなたはチベット語を話せますか？

- (182) ʔkʰa tʃo-∅ ʔze: ʔmə-ʔgo:
 ありがとう-[絶] 言う [否]-必要である
 ありがとうを言う必要はないです。/どういたしまして。

/-ŋō/「経験がある」は単独では用いられないが、TAMを表すものではないため、動詞連続の構造を取る。

- (183) ʔŋa-∅ ʔpoʔ go:-∅ ʔtʃo: ʔma-ŋō
 1-[絶] チベット服-[絶] 着る [否]-経験がある
 私はチベット服を着たことはありません。

- (184) ʔtʰoʔ-∅ ʔtə ʔda ʔze: ʔə-ŋō
 2-[絶] あのように 言う [疑]-経験がある
 あなたはあのように言ったことがありますか？

使役を表す動詞には/ʔhʔtʃuʔ/がある。これも基本的に単独では用いられない。使役文の構成には、/ʔhʔtʃuʔ/を動詞連続の第2要素とするもの(185a)のほか、先行する動詞に/ʔkʰa/をつけて名詞化したうえで/ʔhʔtʃuʔ/を本動詞とするようにみえる構造を取ることができる(185b)。いずれも語釈は同一とするが、語用論的には後者のほうが強制力がある。

- (185) a ʔla mo-la ʔla ji:-∅ ʔle:ʔhʔtʃuʔ-ʔgo
 [人名]-[与] 民謡-[絶] 歌う-させる-[必]
 ラモに民謡を歌わせなければなりません。
- b ʔla mo-la ʔla ji:-∅ ʔle:ʔkʰa ʔhʔtʃuʔ-ʔgo
 [人名]-[与] 民謡-[絶] 歌う-させる-[必]
 ラモに民謡を歌わせなければなりません。

使役の依頼を表す場合は語調を表す助辞の/roʔ/を用いるが、使役者は発話者ではない点に注意が必要である(172a)。上の/ʔgo/との違いを見ると、次のようになる。

- (186) a ʔhʔa çʰi-la ʔlu ʔhʔtʃiʔ-∅ ʔle:ʔhʔtʃuʔ-roʔ
 [人名]-[与] 歌 1-[絶] 歌う-させる-[調]
 タシに1曲歌を歌ってもらうように(司会者に)いしましょう。
- b ʔhʔa çʰi-la ʔlu ʔhʔtʃiʔ-∅ ʔle:ʔhʔtʃuʔ-ʔgo:
 [人名]-[与] 歌 1-[絶] 歌う-させる-[必]
 タシに1曲歌を歌ってもらう必要があります。

使役の強制性/放任性はTAM接辞で表現する。放任の意味では/ʔgo/が用いられない。

- (187) 'ŋa-∅ ʔtɕʰə^hŋɛ-la ʔa na ʰtɕa xa-∅ ʰto:-ʰtɕuʔ-zə
 1-[絶] 犬-[与] ここで 糞-[絶] する-させる-[過]
 私は犬にここで糞をさせました。

第2の動詞にさまざまな接辞や修飾語が付加されうるため、第1と第2の動詞が連続しているように見えない場合もあるが、文の構造としては動詞連続とみなせる。

- (188) 'ŋa-∅ ʰdo ʰtɕaʔ mo ʰmə-ʰsā-tu
 1-[絶] 行く とても [否]-思う-[証]
 私はそんなに行きたくありません。

継起する動作を表したり、移動動詞をともなう場合、Lhagang 方言では動詞連続ではなく、先行する動詞を名詞化する必要がある。

- (189) 'ŋaʔ-∅ ʰŋa: mo ʔtɕʰoʔ-∅ ʰsu-sʰa ʰfið-li:
 1-[絶] 朝 2-[絶] 迎える-[名] 来る-[意]
 私は朝あなたを迎えに来るつもりです。

しかし一方、継起ではなく、移動を伴う同時進行的動作については動詞連続が許容される。

- (190) ʔkʰo-∅ ʔpʰa ru ʔʰiʔ-ʰdo-ʰkʰɛ-∅ ʔtɕʰoʔ-∅ ʔə-ji:
 3-[絶] あそこ 連れる-行く-[名]-[絶] 2-[絶] [疑]-[判/E]
 彼をあそこへ連れていったのはあなたですか？

動詞と形容詞の連続では、先行する動詞には何もつかず、形式上動詞連続として現れる。

- (191) 'ŋa-∅ ʔze:-no:-kʰe:
 1-[絶] 言う-誤る-[完]
 私は言い間違えてしまいました。

4.8 呼応する動詞句表現

Lhagang 方言には2句以上の動詞句を結ぶ固定された表現があり、そこに現れる現象には以上の記述に現れなかったものも含まれる。

(名詞句+) ʔə-動詞/形容詞+ (名詞句+) ʔə-動詞/形容詞 「～も～も」

/ʔə-/という形態は疑問接辞と似ているが、声調が異なる点に注意が必要である。

- (192) ʰmbu^h dzu-∅ ʔə-ʰsa:-reʔ ʔjɛ lu-∅ ʔə-joʔ reʔ
 薪-[絶] も-燃やす-[判] 電気コンロ-[絶] も-[存]
 薪も燃やすし、電気コンロもあります。

形容詞+ -tse + 形容詞+ -tse 「時に～時に～」

/-tse/は動詞接尾辞と同じふるまいをし、先行する述語形容詞と1つの声調領域を形成する。/-tse/がつく複数の述部は同一の主部をもつ。

- (193) ʰnā ŋo-∅ ʔto-tse ʰtɕʰaʔ-tse
 天気-[絶] 暖かい-時に 寒い-時に
 天気は時に暖かく、時に寒いです。

^htɕe? me? + 動詞句 + ^htɕe? me? + 動詞句 「～たり～たりする」

/^htɕe? me?/はこれだけで独立の声調をもち、文中では副詞のようにふるまう。この要素は動詞の直前に置かれるほか、何らかの名詞句が動詞の前に現れても構造上は問題ない。

- (194) ^htɕe? me? ^htɕe? me? ^htɕe? me? ^htɕe? me? ^htɕe? me?
 たり 晴れる たり 雨-[絶] 降る
 晴れたり雨が降ったりします。

ʼjə mə ˉna + 動詞句-za? + ʼjə mə ˉna + 動詞句-za? 「～するか～するかである」

文の構造を子細に観察すると、/ʼjə mə ˉna/の部分には複文の形式をとっていると考えられる(5.4 参照)。しかし慣用的な表現になっているとも考えることができる。

- (195) ʼji ge-ⁿdə-∅ ʼjə mə ˉna ^htsō-za? ʼjə mə ˉna ˉmə ^hde ts^ho-la ʼzi:-za?
 本-この-[絶] するか 売る-[調] するか 他人-[与] 与える-[調]
 この本は、売ってしまうか、ほかの人にあげなさい。

ʼte: + 動詞句 + ʼte: + 動詞句 「～であればあるほどより～」

/ʼte:/が単独でどのような意味を担っているかは不明であるが、動詞または形容詞の直前に置かれる。

- (196) ʼte: ˉŋa: ʼte: ʼja?-re?
 どんどん 早い どんどん よい-[判]
 早ければ早いほどよりよいです。

以上の形式に関連するものとして、次のようなものがある。

- (197) ^ho?-∅ ʼte: ta ʼte: ^ha ˉ^hdza? pa ^hqo-ci: tu
 2-[絶] どんどん 太る 行く-[進]
 あなたはどんどん太っていています。

/ʼte: ta ʼte:/に含まれる/ʼte:/は例文(196)に用いられる形態素と同一であるが、中間の/ta/が単独でどのような意味を持っているのは解釈できないため、これら3音節をひとかたまりにして「どんどん」と語積を与える。

なお、「どんどん」を表す表現としては、以下のように/^htē za?/を用いる例もある。この要素は/ʼte: ta ʼte:/と交替可能である。

- (198) ^ho?-∅ ˉʼa ma-da ^htē za? ^hqo-ci: tu
 2-[絶] 母-[共] どんどん 似ている-[進]
 あなたはどんどん母親に似てきています。

5 文のタイプと分類

本節では Lhagang 方言の文の構造とタイプ別の記述を行う⁵⁶。

5.1 文の成立

Lhagang 方言は、他のチベット系諸言語と同じく、典型的には動詞述部を文末に置く構造を取る。

Lhagang 方言における発話は、間投詞のようなものを除いたとしても、名詞か動詞のどちらか一方で成立する 1 語文がある。あいさつ語も 1 語文で成立するものがある。

(199) ʔp^hɑʔ^h gɛ-∅
ぶた-[絶]
ぶた (だ) !

(200) ʔ^hdo
行く
行こう。

(201) ʔ^hde mo
さようなら
さようなら。

(199) は、たとえば話者の近くにぶたの存在を認めたときの発話として成立する⁵⁷。(200) は頻繁に認められる発話である。語用論的には勧誘を表している。(201) はあいさつ語の例で、1 語で成立し、また、これ以上形態素分析もできない。また、次のように、形態素分析は可能であるが、動詞述部 1 語で成立する発話がある。この種の表現は非常に豊富である。

(202) ʔ^hɛɛ-tu
よろしい-[証]
よろしいです。/OK。

また、名詞からなる 1 語文を除けば、動詞句を伴わない名詞文は原則的に用いられない。加えて、間投詞を除いて名詞とも動詞ともつかない語が認められる。次のような例は副詞と呼ぶことができる：/-fia/⁵⁸「～も (また)」、/rō/「～自身 (で)」、/ʔnā^mbu/「いっしょに」、/ʔ^hā tɕeʔ/「みんな」、/lo:/「当然」、/ʔ^htɑʔ mo/「ととも」など。副詞は基本的に修飾する動詞句の直前に置かれる。ただし/-fia/は名詞句に後続する形で用いられる。

(203) ʔ^hɑ-∅-fia ʔ^hɛ ʔ^htɑʔ mo ʔ^hga-tu
1-[絶]-も 心 ととも うれしい-[証]
私もとてもうれしいです。

⁵⁶ 文のタイプの記述は澤田編 (2013) を参考にしている。

⁵⁷ 塔公寺の周辺には、放生の一環としてぶたが放し飼いにされている。村全体で世話をしているようだ。

⁵⁸ 声調は先行する形態素と同一の範囲内におさまるように見える。接辞である可能性もある。

- (204) ʔkʰo-∅ ʔᵛdo-li: ʔze: ʔna ʔŋa-∅-fia ʔᵛdo-li:
 3-[絶] 行く-[意] 言う ならば 1-[絶]-も 行く-[意]
 彼が行くと言うなら、私も行きましょう。

接続詞については 5.4 を参照。

5.2 文のタイプ

Lhagang 方言においては、平叙文と疑問文が形態統語的に明確に区別される。命令文は命令の対象（通常は2人称）が伴わず発話として成立している場合をいう。しかし、実際にはほとんどの場合で2人称代名詞が文中に現れることが可能で、このとき記述の上では平叙文と変わらず、発話時の語調などによって機能が変わってくるといえる。また、文のタイプとしては勸奨文や祈願文が言及されうるが、Lhagang 方言では命令文もしくは平叙文と構造上変わることがない。

以下、平叙文、疑問文、命令文について記述する。

5.2.1 平叙文

- (205) ʔŋa-∅ ʔkʰɛ le:-li:
 1-[絶] 同意する-[意]
 私は同意しましょう。
- (206) ʔŋa-∅ ʔmə-ʰtoʔ-tu
 1-[絶] [否]-空腹だ-[証]
 私は空腹ではありません。

次の文は意味的には禁止命令を表しているが、行為者が発話に現れるため、文のタイプとしては平叙文に含められる。

- (207) ʔtɕʰoʔ-∅ ʔji ʔye-∅ ʔma-tʃi
 2-[絶] 文字-[絶] [否]-書く
 あなたは字を書いてはいけません。

次の文は意味的に祈願を表しているが、行為者が発話に現れるため、文のタイプとしては平叙文に含められる。

- (208) ʔtɕʰoʔ-∅ ʔᵞde mo ʔtsʰā mbo ʔji:-ᵞgo
 2-[絶] 平安な 願い [判]-[必]
 あなたが平安でありますように。

5.2.2 疑問文

疑問文には諾否疑問文、疑問詞疑問文、付加疑問文、選択疑問文などの種類がある。

諾否疑問文は疑問接辞を動詞句に付加して表す。4.1 で述べたように、疑問接頭辞は動詞/形容詞語幹の直前に付加されるか、TAM 接辞群の中に述語動詞が含まれる場合はその直前に付加される。

- (209) ʔtʰoʔ-∅ ʔə-ᵐdo
 2-[絶] [疑]-行く
 あなたは行きますか？
- (210) (ʔtʰoʔ-∅) ʔə-ŋɛ:-tu
 (2-[絶]) [疑]-よい-[証]
 (あなたは) 元気ですか？
- (211) (ʔtʰoʔ-∅) ʔə-ᵐka-tʰe:
 (2-[絶]) [疑]-疲れる-[完]
 (あなたは) 疲れましたか？
- (212) ʌnõ la-∅ ʔᵐā tʰeʔ ʔᵐde mo ʔə-reʔ
 家族-[絶] みんな 元気だ [疑]-[判]
 家族全員元気ですか？
- (213) ʔᵐdə-∅ ʔtʰə tə-∅ ʔreʔ
 これ-[絶] 何-[絶] [判]
 これは何ですか？

否定文の疑問には/-la/が用いられるが、肯定文に用いられることもある。

- (214) ʔkʰo-∅ ʔɕo: tʰā ʔᵐa: ᵐõ-∅ ʔma-reʔ-la
 3-[絶] 学生-[絶] [否]-[判]-[疑]
 彼は学生でないのですか？
- (215) ʔkʰo-∅ ʔma-ᵐtʰo-kʰe:-la
 3-[絶] [否]-飲む-[完]-[疑]
 彼は飲まなかったのですか？
- (216) ʔə-ᵐda ʔreʔ-la
 このように [判]-[疑]
 このようですよ？

形式は疑問文であるが、あいさつ言葉として機能するものがある。

- (217) ʔə-ᵐde
 [疑]-元気だ
 元気ですか？ (=おはよう⁵⁹)

付加疑問文は形式的には認められないが、それと同義となる構造として、文末に/-la/または/-la ʔə-ji:/を配することで成立する。

⁵⁹ この形式は Lhagang 方言の分布域の周辺で話されるアムドチベット語にも見られ、起源的には Lhagang-B の表現ではないかもしれないが、現在では広く使われている。

- (218) a ʔe^hoʔ-la ʔe^ha ni-∅ ʔmeʔ-lə ʔə-ji:
 2-[与] 兄弟-[絶] [否/存/疑]
 あなたには兄弟がいないのですよね？
- b ʔe^hoʔ-la ʔe^ha ni-∅ ʔmeʔ-la
 2-[与] 兄弟-[絶] [否/存]-[疑]
 あなたには兄弟がいないのですよね？

選択疑問文の場合、選択する要素の間に TAM 接辞/-lə reʔ/を配するか、接続詞-ta 「または」を用いるか、またはその両方を用いるかのなどの方法で構成される⁶⁰。

- (219) ʔe^hoʔ-∅ ʔa p^ha-la ʔda-lə reʔ ʔa ma-la ʔda-reʔ
 2-[絶] 父-[与] 似る-[未] 母-[与] 似る-[判]
 あなたは父親に似ていますか、それとも母親に似ていますか？
- (220) ʔ^hdza-jiʔ-∅ ʔə-reʔ -ta ʔpoʔ jiʔ-∅ ʔreʔ
 漢語-[絶] [疑]-[判] または チベット語-[絶] [判]
 (それは) 漢語ですか、それともチベット語ですか？
- (221) ʔpā li-∅ ʔe^hoʔ ʔa ʔza-ʔ^hgo reʔ ʔ^hlū mba ʔza-ʔ^hgo reʔ -ta
 栗-[絶] どのように 食べる-[必] 生の 食べる-[必] または
 ʔ^htso-nə ʔza-ʔ^hgo reʔ
 蒸す-[名] 食べる-[必]
 栗をどのように食べますか？生で食べますか、それとも蒸して食べますか？

5.2.3 命令文

命令文と勧誘文は、行為者は発話に現れないという点で、構造的には同じである。

- (222) ʔza ma-∅ ʔza
 ごはん-[絶] 食べる
 ごはんを食べなさい。/召し上がれ。
- (223) ʔta ʔ^hta ʔma-s^ho:
 今 [否]-行く.[命]
 今行くな！
- (224) ʔ^hū ʔtceʔ ʔ^hga ʔsui zuu
 みんな 歓迎する
 (私たち) みんなで歓迎しましょう！

⁶⁰ 形態素/-lə reʔ/は本来的には/-lə ʔə-reʔ/であるかもしれない。6.4.1 を参照。例文 (220) を見れば分かるように、選択する要素の第 1 項の動詞は疑問接辞を伴うが、第 2 項の動詞は疑問接辞を伴わない。

ただし、次のように命令形と非命令形が異なる動詞の場合、命令文には命令形が、勧誘文には非命令形が用いられる⁶¹。

- (225) 'ka le ˉsho:
 ゆっくり 行く.[命]
 ゆっくり行きなさい。(=気をつけて)
- (226) ˉŋdo
 行く
 行きましょう。

5.3 文の埋め込み

平叙文の埋め込みでは、通常補文標識を伴わない。

- (227) ˉŋa-∅ ˉta: rɔ? ˉtɕʰoʔ-∅ ˉʔa na ˉfiɔ:-zə re? ˉhsā-zə
 1-[絶] まだ 2-[絶] ここ 来る-[過] 思う-[過]
 私はまだあなたがここに来ると思っていました。

ただし、埋め込み文を主題化する場合は/ˉ^{fi}dʒu/を付加する。すなわち名詞化して埋め込むことになる。

- (228) ˉŋa-∅ ˉla s^ha mə ˉji:-^{fi}dʒu-∅-tə ˉshu ˉhɕiʔ-gə ˉ^{fi}dɛ la ˉmə-ⁿdʒə
 1-[絶] ラサ人 [判]-[名]-[絶]-[主] 誰 1-[能] 信じる [否]-[語幹]
 私がラサ人であるとは誰 1 人信じません。

諾否疑問文もしくは疑問語を含む文の埋め込みでは、埋め込まれた文に補文標識/ˉhɕiʔ/を伴うことが多い。補文標識の代わりに名詞化標識を用いても容認されることもある。補文標識は文中において絶対格を役割を付されているものと理解し、ゼロ形態の存在を記述しない。

- (229) ˉtɕʰoʔ-∅ ˉk^ho-∅ ˉʔa na ˉʔə-^htse: ˉmə-^htse:-k^he-^hɕiʔ ˉhta-ta
 2-[絶] 3-[絶] ここ [疑]-着く [否]-着く-[完]-[補] 見る-[調]
 あなたは彼がここへ到着したかどうか確認してください。

- (230) ˉtɕʰoʔ-∅ ˉk^ho-∅ ˉ^{fi}ge ^{fi}gɛ-la ˉtɕə tə-∅ ˉze:-^{fi}dʒu ˉ^hlaʔ-pa
 2-[絶] 3-[絶] 先生-[与] 何-[絶] 言う-[名] 教える-[証]
 あなたは彼が先生に何を言うか教えなさい。

また、補文標識は主題標識を伴うことができる。

- (231) ˉk^ho-∅ ˉŋa-∅ ˉtɕə tə-∅ ˉji: nə ˉza-^{nɛ}:^hɕiʔ-tə ˉha ˉko-reʔ
 3-[絶] 1-[絶] 何-[絶] [判] ても 食べる-できる-[補]-[主] 分かる-[判]
 彼は私が何であろうと食べることができるということを分かっています。

命令文（勧誘文）の埋め込みでは、補文標識を伴わない。

⁶¹ 実際のところ、「行く」と「来る」のみ命令形と非命令形が異なる。4.3 参照。これら以外の動詞については、発話の調子（口調）によって命令か勧誘かどちらの意味であるのかを判断することになる。

- (232) ʔa p^ha-∅ ʔa-la ʔe: ka ʔe:-s^ho: ʔe:-tu
 父-[絶] 1-[与] 仕事 する-行く.[命] 言う-[証]
 父は私に仕事に行きなさいと言いました。

5.4 複文

等位関係を表す並列文は通常接続詞を必要とせず、第1文には TAM を表す接辞類がつかないことが多い。ただしイントネーションが異なり、発話としてひとかたまりになっていることが分かる⁶²。

- (233) ʔ^haʔ ʔnaʔ naʔ-∅-tə ʔ^ho ts^ho-gə ʔ^hso-zə reʔ ʔa-gə ʔ^hso-zə ʔma ji:
 黒ぶた-[絶]-[主] 3.[複]-[絶] 育てる-[過] 1-[能] 育てる-[過/否]
 黒ぶたは彼らが飼っていたのであり、私が飼っていたではありません。
- (234) ʔta ri ʔ^hna ʔo-∅ ʔmə-jaʔ-tu ʔ^ha ʔba-∅ ʔə-mbaʔ ʔmə-ko-tu
 今日 天気-[絶] [否]-よい-[証] 雨-[絶] [疑]-降る [否]-分かる-[証]
 今日気は良くありません。雨が降るかもしれません。

ʔna

条件や時間的順序に従って継起する事象を時間を表す要素を用いず表す場合、接続詞 ʔna が用いられる。

- (235) ʔtə ʔda ʔ^hzo ʔna ʔə-ʔe:-tu
 あのように すると [疑]-よい-[証]
 あのようにしたらいいですか？
- (236) ʔ^he p^hjo-∅ ʔno-roʔ ʔzə ʔna ʔə-ʔe:
 チケット-[絶] 買う-[依頼] 言う と [疑]-よい
 チケットを買ってくれませんかと言ったら、よろしいですか？
 (=チケットを買ってくれませんか？)

譲歩を表す場合にも接続詞 ʔna が用いられる。

- (237) ʔ^ha ʔba-∅ ʔmbaʔ ʔna ʔ^hoʔ-∅ ʔdo-ʔdzu ʔə-ji:-ta
 雨-[絶] 降る ても 2-[絶] 行く-[未/疑/E]-[調]
 雨が降っても、あなたは行くのですか？

また、次のような例もある。本来埋め込まれる文が複文化したものである。

- (238) ʔa ma-∅ ʔa-la ʔze: ʔna ʔ^hdzoʔ pa ʔs^ho: ʔze:-tu
 母-[絶] 1-[与] 言う と 急いで 行く.[命] 言う-[証]
 母が私に言うことには、「急いで行きなさい」と。

3.4 でも述べたことであるが、接続詞 ʔna は疑問語とともに用いられて疑問語を不定語と解釈する文を形成する。このとき、ʔna を伴う従属文は、主文の中に割り込むことが多い。

⁶² ただし例文 (233, 234) はイントネーションを記述しないため、単に2つの文が羅列されているように見える。

- (239) 'mə 'ṽdṽ ṽdṽ-∅ 'ka na 'ji: 'na 'jo:-re?
 =(20) 人 このような-[絶] どこ [判] ても [存]
 こんな人はどこにでもいます。

例文 (239) では 'na を伴う従属文は /'ka na 'ji:/ の範囲にとどまると考えられる。これが主文 /'mə 'ṽdṽ ṽdṽ-∅ 'jo:-re?/ の中に割り込んで入っていることになる⁶³。

nə⁶⁴ 「～して、～しながら」

- (240) -k^ho-∅ -ṽda-∅ 'ṽdzṽ? nə -'ci tsi-∅ 'ṽse?-t^he:
 3-[絶] 矢-[絶] 放つ て 鳥-[絶] 殺す-[完]
 彼は矢を放って鳥を殺しました。
- (241) -t^ho? ts^ho-∅ -ṽta ṽgṽ-∅ -ṽgō nə 'ka na 'ṽdṽ-li:
 2.[複]-[絶] 馬-[絶] 乗る て どこ 行く-[意]
 あなたたちは馬に乗ってどこに行くのですか？

-ṽka?⁶⁵ 「～のときに」

/-ṽka?/ を伴う従属文の中では、TAM に関する表示が行われないことが通例である。時間関係は主文の TAM および文脈とあわせて理解される。

- (242) 'ṽṽ la 'ṽdṽ -ṽka?-la -'ṽo? ṽdu?-∅ -k^hu-ṽdzṽ-∅ 'ma-ṽdze?
 外 行く とき-[位] 傘-[絶] もっていく-[名]-[絶] [否]-忘れる
 外へ行くとき、傘を持っていくのを忘れるな。
- (243) 'ṽdzṽ ṽza 'kō dzo-∅ 'po-la 'ja la 'ṽde tō -ṽka?-la
 文成公主-[絶] チベット-[位] 上へ 迎える とき-[位]
 -t^hō 'ṽdzṽ po-gṽ 'k^ho-la 'tṽo wo 'tṽi?-∅ 'zī-zṽ re?
 唐の皇帝-[能] 3-[位] ジョウオ 一-[絶] 与える-[過]
 文成公主がチベットへと迎えられるとき、唐の皇帝は彼女に一体のジョウオを
 与えました。(『菩薩の愛する地・塔公』)

'ma ze? 「～しないだけでなく」

- (244) 'tsi γi-∅ 'mō ṽzi?-la 'mṽ-ṽtṽ? 'ma ze? 'ta: rṽ?
 ねずみ-[絶] 猫-[絶] 恐れる しないだけでなく なお
 'mō ṽzi?-∅ 'ṽte-ṽi: tu
 猫-[絶] 追う-[進]
 ねずみが猫を恐れないだけでなくさらに猫を追うのです。

⁶³ もちろん、不定疑問の構文を一種の慣用表現ととらえ、文の主従関係を認めないという分析も可能であろう。

⁶⁴ この形式は声調を担わない。ゆえに、動詞接辞と分析することも可能である。

⁶⁵ これは接続詞ではなく、時間を表す名詞と分析する。位格標識を付加することができる。

付録：融合的語釈と分析的語釈の対照

ここでは、存在動詞および TAM 接辞群に対する語釈について、本稿で採用している融合的語釈の例と、それぞれの形態素に分析的語釈を与えた例を対比し、読者の理解に供する。なお、音表記の部分は分析的に記述してある。なお V は動詞語幹を意味する。

- (A) 音形式 'meʔ
 融合的 [否/存]
 分析的 [否/存]
 参考 4.2.2 存在動詞
- (B) 音形式 'joʔ-lə-ˆma-reʔ
 融合的 [否/存]
 分析的 [存]-[未]-[否]-[判]
 参考 4.2.2 存在動詞
- (C) 音形式 'meʔ-lə-ʔə-ji:
 融合的 [否/存/疑/E]
 分析的 [否/存]-[未]-[疑]-[判/E]
 参考 4.2.2 存在動詞
- (D) 音形式 -çə-ji:-tu
 融合的 -[進]
 分析的 -[進]-[存]-[証]
 参考 4.6.1 TAM を表す接辞群・進行
- (E) 音形式 -lə-ˆma-ji:-la
 融合的 -[否/未/E/疑]
 分析的 -[未]-[否]-[判/E]-[疑]
 参考 4.6.1 TAM を表す接辞群・未完了
- (F) 音形式 'ma-V-zə-ʔə-reʔ
 融合的 [否]-V-[疑/過]
 分析的 [否]-V-[過]-[疑]-[判]
 参考 4.6.1 TAM を表す接辞群・アオリスト
- (G) 音形式 -^hdʒu-ˆma-reʔ-pa
 融合的 -[否/未]-[証]
 分析的 -[未]-[否]-[判]-[証]
 参考 4.6.1 TAM を表す接辞群・未完了

略号表

文法機能語で略号を作らないものは直接 [] の中に機能を書き込んでいる。複数の略号が重なるときは / で区切って示す。語形変化で何らかの文法的機能を表す場合は、語義のあとに . をはさんで機能を書き入れる。

1	1 人称	[重]	重複
2	2 人称	[命]	命令形
3	3 人称	[否]	否定
[絶]	絶対格	[方]	方向
[能]	能格	[疑]	疑問
[与]	与格	[未]	未来
[属]	属格	[進]	進行
[位]	位格	[E]	egophoric
[具]	具格	[意]	意思未来
[奪]	奪格	[過]	アオリスト/過去
[領]	受領格	[完]	現在完了
[比]	比較格	[証]	証拠性
[名]	名詞化標識	[可]	可能性
[位名]	位置名詞	[伝]	伝聞
[複]	複数	[調]	語調助辞
[集]	集合	[補]	補文標識
[量]	量詞	[主]	主題標識
[判]	判断動詞	注 ⁶⁶	
[存]	存在動詞		

なお、例文中に（『菩薩の愛する地・塔公』）と注記しているのものは、当該例文が語り『菩薩の愛する地・塔公』によるもので、物語の全体と記述は鈴木ほか (2015a) に基づいている⁶⁷。

⁶⁶ egophoricity に対する語積 [E] については、形態素に対応するいうよりはむしろ、文全体として egophoricity の意味が特に現れる場合に用いる。そうでない場合は語積を省略する。

⁶⁷ ただし一部の分析については、本稿の提示と当該文献のものとの間に異なりがある場合がある。

参考文献

- 澤田英夫（編）（2010）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- （2013）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 鈴木博之（2005）「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23
- （2006）「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の方言特徴とその背景」『ニダバ』第 35 号 39–47
- （2009）〈川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第 3 期 17–29
- （2014）「カムチベット語小中甸・吹亞頂 [Choswateng] 方言の文法スケッチ」千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』6, 1–40
- 鈴木博之、四郎翁姆、拉姆吉（2015a）「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』訳注—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—」千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』7, 111–140
- （2015b）〈塔公藏語長篇故事《菩薩喜歡的地方・塔公》語法註釋—兼談塔公藏語的多重語言層及故事版本的異同問題—〉《東方藏區諸語言研究》163–195 四川民族出版社
- DeLancy, Scott (2011) “Optional” “ergativity” in Tibeto-Burman languages. *Linguistics of Tibeto-Burman Area* 34.2, 9–20.
- LaPolla, Randy (1992) ‘Anti-ergative’ marking in Tibeto-Burman. *Linguistics of Tibeto-Burman Area* 15.1, 1–9.
- Lha-mo-skyid (2010) *Mi-nyag sa-khul-gyi kha-skad-kyi khyad-chos-la rags-tsam gleng-pa*. 西北民族大學畢業論文
- Sonam Wangmo [bSod-nams dBang-mo] (2013) *Lhagang Monastery in Myth, History and Contemporary Society*. Master Thesis, Universitetet i Oslo.
- （2014）*lHa-sgang dgon dang de'i spyi-tshogs phan-nus-skor gleng-ba*. 中央民族大學碩士論文
- （2016）*Constructing local identity in Lhagang Village in Kham Minyag*. Paper presented at 14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Bergen)
- （forthcoming）The changing relationship between monastic and local community: The example of Lhagang rural Township in Kham Minyag. *Études Mongoles & Sibériennes, Centrasiatiques & Tibétaines* (in press)
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —. In Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol.3, 15-34, National Museum of Ethnology.
- （2014a）Issues in the lexical complexity in Eastern Tibetic languages: from a cat’s eye. *Papers*

- from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*, 116–125.
- (2014b) Brief introduction to the endangerment of Tibetic languages: special reference to the the language situation in Eastern Tibetan cultural area. *The Journal of Linguistic Studies* Vol.19 No.3, 281–301.
- (2016) *When the 'brog-skad, rong-skad, and logs-skad meet: Describing Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang*. Paper presented at 14th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Bergen)
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2014) *Lhagang [Tagong] Tibetan as a member of the Minyag Rabgang group of Khams — a sociolinguistic description* —. Paper presented at 47th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Kunming)
- (2015a) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par le Bodhisattva». *Revue d'études tibétaines* Vol. 32, 153–175.
- (2015b) Challenge to discover endangered Tibetic varieties in the easternmost Tibetosphere: a case study on Dartsendo Tibetan. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 38.2, 256–270 [Original version presented at 4th International Workshop on the Sociolinguistics of Language Endangerment (Chiangmai, 2015)]
- (2015c) *Evidential system in Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams (Dartsendo, Sichuan)*. Paper presented at 68th Meeting of Kijutsuken: Descriptive Linguistics Study Group (Kyoto)
- (2015d) Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: Vocabulary of two sociolinguistic varieties. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 10, 245–286.
- (2016) Lhagang Choyu: First look on its sociolinguistic status. *Studies in Asian Geolinguistics* 2 (in press)
- (2017) Language evolution and vitality of Lhagang Tibetan, a Tibetic language as a minority in Minyag Rabgang. *International Journal of the Sociology of Language* 245 (in press) [Original version presented at the workshop on the linguistic minorities of the Chinese Tibetosphere (Uppsala, 2014)]
- Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240–263.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan* (with collaboration of Konchok Gyatsho and Xavier Becker)
- Tshe-ring Lha-mo (2013) *Khams sDe-dge-skad-kyi brda-sprod*. 民族出版社
- Vokurková, Zuzana (2008) *Epistemic modalities in Spoken Standard Tibetan*. PhD dissertation, Karel University and University of Paris 8.
- Zeisler, Bettina (2004) *Relative Tense and Aspectual Values in Tibetan Languages: A Comparative*

Study. Mouton de Gruyter.

Zhang, Jichuan (1996) A sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115–133.

黄成龍 (2013) 〈藏緬語存在類動詞的概念結構〉《民族語文》第2期 31-48

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med] (1985) 〈藏語巴塘話的語音分析〉《民族語文》第2期 16–27

瞿靄堂、金效静 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第3期 76–84

張濟川 (1993) 〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297-309 中央民族學院出版社

朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による Lhagang 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001)
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)
- 平成 25-27 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167)

	3.8.2 用法	44
	3.9 形容詞：修飾用法として . . .	49
	3.10 主題標識	50
目次		
1	はじめに	21
2	Lhagang 方言の音体系	23
2.1	音節構造	23
2.1.1	最大の音節構造	23
2.1.2	具体例	23
2.2	超分節音素	24
2.2.1	声調とその表記	24
2.2.2	具体例	24
2.3	母音	25
2.3.1	母音の舌位置による一覧 . .	25
2.3.2	具体例	25
2.4	子音	26
2.4.1	子音音素一覧	26
2.4.2	具体例	26
3	名詞句	31
3.1	名詞句の基本構造	31
3.2	名詞	31
3.3	代名詞	32
3.3.1	人称代名詞	32
3.3.2	指示代名詞	33
3.4	疑問語	34
3.5	名詞化標識	38
3.6	位置名詞の文法化	40
3.7	数詞・量詞	40
3.7.1	基数詞	40
3.7.2	序数詞	42
3.7.3	不定標識	42
3.7.4	集合標識	42
3.7.5	量詞	42
3.8	格体系	43
3.8.1	格標識一覧表	43
4	動詞句	50
4.1	動詞の基本構造	50
4.2	述語動詞	51
4.2.1	判断動詞	51
4.2.2	存在動詞	53
4.3	本動詞	56
4.4	形容詞：述語用法として . . .	57
4.5	接頭辞類	58
4.5.1	方向接辞	58
4.5.2	否定辞	59
4.5.3	疑間接辞	60
4.6	接尾辞類	61
4.6.1	TAM を表す接辞群	61
4.6.2	語調を表す助辞	72
4.6.3	伝聞を表す表現	73
4.6.4	可能性・推測を表す表現 . .	73
4.7	動詞連続・動詞形容詞連続 . .	73
4.8	呼応する動詞句表現	75
5	文のタイプと分類	77
5.1	文の成立	77
5.2	文のタイプ	78
5.2.1	平叙文	78
5.2.2	疑問文	78
5.2.3	命令文	80
5.3	文の埋め込み	81
5.4	複文	82
	付録：融合的語釈と分析的語釈の対照	84
	略号表	85
	参考文献	86

A sketch grammar of Lhagang Tibetan, a dialect of Minyag Rabgang Khams

Hiroyuki SUZUKI
Universitetet i Oslo

Sonam Wangmo
Universitetet i Oslo

Abstract

This article presents a sketch grammar of Lhagang Tibetan, a dialect of Minyag Rabgang Khams spoken in Tagong Village, Tagong Town, Kangding Municipality, Ganzi Prefecture, Sichuan Province, China. This sketch grammar deals with a variety of Minyag Rabgang Khams, so-called Lhagang-B, transmitted by the earliest sedentary Tibetans. It contains sound system and description (Section 2), noun phrase (Section 3), verb predicate (Section 4), and sentence construction (Section 5).

Section 3 *noun phrase* is divided into ten subsections: basic structure of the noun phrase (3.1), nouns (3.2), pronouns (3.3), interrogative words (3.4), nominalisers (3.5), grammaticalisation of position nouns (3.6), numbers (3.7), case marking system (3.8), adjectives as a modifier (3.9), and topic marker (3.10). Section 4 *verb predicate* is divided into eight subsections: basic structure of the verb predicate (4.1), copulative and existential verbs (4.2), general verb stems (4.3), adjectives as a predicate (4.4), prefixes (4.5), suffixes (4.6), verb concatenation (4.7), and verbal phrase concordance (4.8). Section 5 *sentence construction* is explained in variation of sentences (5.1), types of sentence (5.2), sentence embedding (5.3), and complex sentences (5.4).

Even though this article merely provides an essence of grammatical aspects of Lhagang Tibetan, it will be worth recording a traditional vernacular of Khams in Lhagang before it changes because of intense language contact.

Keywords: Khams Tibetan; Minyag Rabgang dialectal group; noun phrase; verb predicate

/ʃ/が語る音変化史

—カムチベット語香格里拉方言群における硬口蓋系列音素についての覚え書き—

鈴木 博之

オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Sems-kyi-nyila 方言群、有声硬口蓋閉鎖音、音変化

1 はじめに

チベット系諸言語 (Tibetic languages; Tournadre 2014) の中で、中国雲南省北西部を中心に分布するカムチベット語 Sems-kyi-nyila (香格里拉) 方言群の諸方言の中には、前部硬口蓋系列と硬口蓋系列の間に対立を形成する方言がある。たとえば、/t, d/と/c, ʃ/の間、/ɕ, z/と/ɕ, j/の間、/ɲ/と/p/の間に対立を形成したりするといった具合である (鈴木 (2010a), Suzuki (2016) ; 音表記の方法は鈴木 (2005)、朱曉農 (2010) を参照)。これらの対立は、各方言について、ほぼ明確な形でチベット文語 (以下「藏文」) 形式との対応関係を見出すことができ、音対応の観点から整理ができる特徴であるが、その対応の仕方の方言差が非常に大きいため、調査地点の間隔を狭くして、具体的には自然村単位で調査を行わなければ全体像がつかめないばかりか、音変化の観点から明確な説明を与えることもまた困難である。

1.1 Sems-kyi-nyila 方言群の下位分類

Sems-kyi-nyila 方言群は現段階の分析 (鈴木 2015 ; 名称に若干の変更あり) で、次の5つの下位方言群に分類できる。

1. rGyalthang (建塘) 下位方言群
2. 雲嶺山脈東部下位方言群
3. Melung (維西塔城) 下位方言群
4. dNgo (翁上) 下位方言群
5. Lamdo (浪都) 下位方言群

そのうち本稿で議論するのは rGyalthang 下位方言群と雲嶺山脈東部下位方言群の一部の方言である。その他の下位方言群についても、必要な場合に触れる。各種方言の地理的分布については、末尾の付録を参照。

1.2 議論の対象となる現象

先に示した下位方言分類のうち、rGyalthang 下位方言群における前部硬口蓋系列と硬口蓋系列に関する音体系とその方言間の変遷については、鈴木 (2015) に示したように、一応の整理がついているものと考えて差し支えない。鈴木 (2015) の分析方法は、西田 (1987) などに指摘があるように、口語形式と蔵文形式の対応関係を単一の音素と文字という関係ではなく、一定の音体系の中で体系的にとらえるものである。rGyalthang 下位方言群の当該調音位置における阻害音に限った蔵文との主要な対応関係については、代表的なものとして以下の3つのタイプが認められ、それぞれ第1類、第2類、第3類と呼ぶ。

	蔵文 Kr	蔵文 Ky	蔵文 Pr	蔵文 Py
第1類	/c ^h , c, j/	/tɕ ^h , tɕ, dz/	/ç ^h , ç, j/	/ç ^h , ç, z/
第2類	/c ^h , c, j/	/tɕ ^h , tɕ, dz/	/ç ^h , ç, z/	
第3類	/tɕ ^h , tɕ, dz/		/ç ^h , ç, z/	

表中にある蔵文形式についてはおおむね以下のように説明できるが、鈴木 (2015) も述べているように、例外もあり、1つの傾向として理解される必要がある。

- 蔵文 Kr：蔵文 k, kh, g に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式
- 蔵文 Ky：蔵文 k, kh, g に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式
- 蔵文 Pr：蔵文 p, ph, b に足字 r を伴う形式を含む全ての対応形式
- 蔵文 Py：蔵文 p, ph, b に足字 y を伴う形式を含む全ての対応形式

また、以上の蔵文の配列と表内の音素の配列は関係がない。ここで注目する必要があるのは単に調音位置と閉鎖・破擦・摩擦の別のみである。有声性・有気性についてはそれぞれ複雑な対応関係があるが、本稿では直接的に関連しないため、説明を割愛する。詳細は格桑居冕・格桑央京 (2002:271-280) などを参照。

以上のうち、第1類の共時的記述には鈴木 (2014a) が、第2類の共時的記述には鈴木 (2011) が、第3類の共時的記述には Hongladarom (1996)、Wang (1996)、《雲南省誌》編纂委員会 (1998:421-441) などがある。

1.3 具体的な問題点

上表のように整理してみるとわかるように、rGyalthang 下位方言群では音変化の相対年代の差異が方言間において共時的に認められ、音対応の複雑さから、第1類がもっとも古く、次いで第2類があり、最も変化の進んでいるのが第3類となる。そして第2類について、前部硬口蓋系列と硬口蓋系列の対立を閉鎖を伴うもの（閉鎖音と破擦音）と閉鎖を伴わないもの（摩擦音）の間で、硬口蓋系列が前部硬口蓋系列に合流する時期にずれが認められると理解できる。

ここで生じる1つの問題はこのずれの起こり方で、摩擦音のほうが音声学的に先に合流したことに対して説明をいかに与えられるかということである。論点を言い換えると、閉鎖音と破擦音が摩擦音よりも先に合流する事例は存在しないのか、ということにもなる。鈴木 (2015) は

この点について何の言及もしていない。rGyalthang 下位方言群の中にそのような事例が発見されていないからである。ところが、雲嶺山脈東部下位方言群に所属する方言の中には、確かにこのような音体系を示す方言が存在することが、筆者の最近の調査で分かってきた。

本稿では、先に示した3種類の蔵文の音対応の中で、第2類は合流のタイプによって以下のように2種類 A/B に分かれることを示す。

	蔵文 Kr	蔵文 Ky	蔵文 Pr	蔵文 Py
第2類 A	/c ^h , c, j/	/tɕ ^h , tɕ, dz/	/ɕ ^h , ɕ, z/	
第2類 B	/tɕ ^h , tɕ, dz/		/ç ^h , ç, j/	/ɕ ^h , ɕ, z/

加えて、第2類 B の方言には硬口蓋閉鎖音に/j/だけが認められるものがあり、その音変化も考察する。また、A/B としているように、A と B の音変化は独立して起きたもので、互いの変化の順序を考える必要はなく、ともに第1類と第3類の間に位置づけられることも示す。

2 Sems-kyi-nyila 方言群の各種方言の子音音素一覧

ここでは、本稿で取り上げる問題にかかわる4つの方言の子音音素一覧を提示する。配列としては、硬口蓋系列について、複雑なものから順に掲げる。

なお、以下では簡潔な提示を目的とするため、それぞれの音表記について補注を加えない。筆者の音表記の方法は基本的にすべてのチベット系諸言語に共通である。音表記の提示に先立ち、本節の理解に必要な説明を述べる。

筆者の採用する音表記は Tournadre & Suzuki (forthcoming) に言及される *pandialectal phonetic description* に基づき、国際音声字母 (IPA) で規定されるもののほか、朱曉農 (2010) で明確に定義される主に中国で使用されている音声記号も用いる。

本稿において特に注意すべきは、本来分けるべき調音位置である「前部硬口蓋」と「硬口蓋」を、「硬口蓋」の下位区分として「前」、「後」と表示している点である。これらは *pandialectal phonetic description* において、それぞれ *prepalatal* と *palatal* に当たる。この点をめぐる調音位置と音標文字の定義は朱曉農 (2010) に従っている。「硬口蓋・後」は後部硬口蓋を指しているのではない点に注意が必要である。

また、/r, r̥/ は IPA および朱曉農 (2010) に規定される音標文字の用法とは異なり、/r/ ならば、文字通りふるえ音 [r] のほか、[r, ɹ] といったさまざまな音声実現を含み、すべて自由変異であるため、/r/ によって代表させざるをえない。これは *pandialectal phonetic description* の規定である。本稿で扱う方言は /r/ は /z/ と対立するため、/r/ は [z] を含みえないが、両者が対立を形成しない方言においては /r/ は [z] を含むうる。

なお、本稿で言及する諸方言の超分節音素は語声調によって実現し、表記の際には以下の符号を語頭に置くことで表示する。

ˉ : 高平

ˊ : 上昇

ˋ : 下降

ˊˋ : 上昇下降

加えて、以降の例語には蔵文形式を Wylie 転写で添える。

2.1 Khrezhag (開香) 方言：雲嶺山脈東部下位方言群

Khrezhag 方言は香格里拉市尼西郷幸福行政村開香自然村で話される。この方言は硬口蓋音系列に閉鎖音、摩擦音、鼻音、半母音が認められる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h	c ^h		k ^h	
	無声無気	p	t	t	c		k	ʔ
	有声	b	d	d̥	ɟ		g	
破擦音	無声有気		ts ^h	tʂ ^h	tɕ ^h			
	無声無気		ts	tʂ	tɕ			
	有声		dz	dʒ	dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʂ ^h	ɕ ^h	ç ^h	x ^h	
	無声無気		s	ʂ	ɕ	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʝ	ɣ		f
鼻音	有声	m	n	ɳ	ɳ̥	ɳ̥	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥		ŋ̥	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w			j			

以上に示した子音体系は、Sems-kyi-nyila 方言群の中でもっとも複雑なもの1つに数えられる。

半母音を除く硬口蓋（前・後）音の具体例を以下に掲げる。

前部硬口蓋	硬口蓋
	ˈc ^h aʔ 「血」 <i>khrag</i>
	ˈco 「小麦」 <i>gro</i>
	ˈɳ̥ɛ: 「米」 <i>'bras</i>
ˈtɕ ^h õ 「家」 <i>khyim</i>	
ˈtɕõ 「壁」 <i>gyang</i>	
ˈɲ̥dza 「漢族」 <i>rgya</i>	
ˈɕ ^h eʔ 「半分」 <i>phyed</i>	ˈç ^h e ^h ku 「細い」 <i>phra</i>
ˈhɕõ k ^h u 「狼」 <i>spyang khi</i>	ˈçõ ta 「胸」 <i>brang</i>
ˈɲ̥zõ 「学ぶ」 <i>sbyang</i>	ˈɲ̥jõ 「砂糖」 <i>sbrang</i>
ˈɳ̥a 「魚」 <i>nya</i>	ˈɳ̥ə 「めすヤク」 <i>'bri</i>

2.2 rTswamarteng (祖莫頂) 方言：雲嶺山脈東部下位方言群

rTswamarteng 方言は香格里拉市尼西郷幸福行政村祖莫頂自然村で話される。この方言は硬口蓋音系列に有声閉鎖音、摩擦音、鼻音、半母音が認められる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h			k ^h	
	無声無気	p	t	t			k	ʔ
	有声	b	d	d̥		ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h	tʂ ^h	tɕ ^h			
	無声無気		ts	tʂ	tɕ			
	有声		dz	dʒ	dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʂ ^h	ɕ ^h	ç ^h	x ^h	
	無声無気		s	ʂ	ɕ	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʒ	ʝ	ɣ	f
鼻音	有声	m	n		ɱ	ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɱ̥		ŋ̥	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w				j		

半母音を除く硬口蓋（前・後）音の具体例を以下に掲げる。

前部硬口蓋	硬口蓋
	ʰɟʊʔ 「雷」 <i>'brug</i>
ʰtɕ ^h ɑʔ 「血」 <i>khrag</i>	
ʰtɕõ 「壁」 <i>gyang</i>	
ʰ ^f dza 「漢族」 <i>rgya</i>	
ʰɕ ^h ə 「開ける」 <i>phye</i>	ʰç ^h ə ^h kuu 「細い」 <i>phra</i>
ʰɕa 「鶏」 <i>bya</i>	ʰçɑʔ 「崖」 <i>brag</i>
ʰ ^f zõ 「学ぶ」 <i>sbyang</i>	ʰ ^f jõ ^h tsə 「ミツバチ」 <i>sbrang rtsi</i>
ʰna 「魚」 <i>nya</i>	ʰjə 「めすヤク」 <i>'bri</i>

/j/については、前鼻音を伴って現れる点に注意が必要である。これが続く節で議論する要となる。

2.3 Gyennyemphel (吉念批) 方言：rGyalthang 下位方言群

Gyennyemphel 方言は香格里拉市小中甸郷聯合行政村吉念批自然村で話される。この方言は硬口蓋音系列に閉鎖音、鼻音、半母音が認められる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		c ^h	k ^h	
	無声無気	p	t	t		c	k	ʔ
	有声	b	d	d̥		ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h	tʂ ^h	tɕ ^h			
	無声無気		ts	tʂ	tɕ			
	有声		dz	dʒ	dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʂ ^h	ɕ ^h		x ^h	
	無声無気		s	ʂ	ɕ		x	h
	有声		z	ʒ	ʒ		ɣ	f
鼻音	有声	m	n		ɲ		ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̥		ŋ̥	
流音	有声		l	r				
	無声		l̥	r̥				
半母音	有声	w				j		

半母音を除く硬口蓋（前・後）音の具体例を以下に掲げる。

前部硬口蓋	硬口蓋
	ʰc ^h aʔ 「血」 <i>khrag</i>
	ʰcə dʒɔ̃ 「ナイフ」 <i>gri chung</i>
	ʰɲɔʔ 「雷」 <i>'brug</i>
ʰtɕ ^h ö 「家」 <i>khyim</i>	
ʰtɕwo: 「酸っぱい」 <i>skyur mo</i>	
ʰi dza 「漢族」 <i>rgya</i>	
ʰɕ ^h uʔ 「方向」 <i>phyogs</i>	
ʰɕa 「鶏」 <i>bya</i>	
ʰzə 「暖かい季節」 <i>dbyar</i>	
ʰɲa 「魚」 <i>nya</i>	

2.4 mTshomgolung (錯古龍) 方言：rGyalthang 下位方言群

mTshomgolung 方言は香格里拉市建塘鎮錯古龍自然村で話される。この方言は硬口蓋音系列に半母音しか認められない。Sems-kyi-nyila 方言群の中でもっとも単純な子音体系をもつ。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
						前	後	
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h			k ^h	
	無声無気	p	t	t			k	?
	有声	b	d	ɖ			g	
破擦音	無声有気	ts ^h		tɕ ^h	tɕ ^h			
	無声無気	ts		tɕ	tɕ			
	有声	dz		ɖʑ	ɖʑ			
摩擦音	無声有気	s ^h		ɕ ^h	ɕ ^h	x ^h		
	無声無気	s		ɕ	ɕ	x	h	
	有声	z		ʑ	ʑ	ɣ	ɦ	
鼻音	有声	m	n			ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥			ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声	l		r				
	無声	l̥		r̥				
半母音	有声	w			j			

mTshomgolung 方言は硬口蓋（前・後）の対立が成立しない言語であるため、ここでは例を省略する。

2.5 そのほか

ここまで4つの方言の事例について見たが、前部硬口蓋と硬口蓋の間で閉鎖音どうしまたは破擦音どうしの対立が成立する例が認められない。これは音声学的な理由で存在しえないのではなく、他の下位方言群には対立する例が認められる。Sems-kyi-nyila 方言群の内部もしくはその分布地域の近隣（雲南省内）で話される言語について見てみると、閉鎖音については Lamdo (浪都) 方言 (Lamdo 下位方言群；鈴木 2010b) に、破擦音については Bodgrong (丙中洛) 方言 (雲嶺山脈西部下位方言群；鈴木 2014b) に、それぞれ次の対立が認められる。

Lamdo 方言		Bodgrong 方言	
前部硬口蓋	硬口蓋	前部硬口蓋	硬口蓋
t ^h	c ^h	tɕ ^h	cɕ ^h
t	c	tɕ	cɕ
ɖ	ʑ	ɖʑ	ʑj

以上、雲南省で話されるカムチベット語諸方言は、硬口蓋部での調音がいかに多様であるかが分かる。

3 各種硬口蓋音の蔵文との対応関係

3.1 対応関係の類型について

先に各種方言の子音体系を概観したが、共時的な音体系を見ただけでは、最初に提示した各種類型の全容を理解するというにはならない。ここでは、2節に掲げた方言の形式と、4種の蔵文形式との対比を行う。

蔵文	語義	Khrezhag	rTswamarteng	Gyennyemphel	mTshomgolung
<i>khrag</i>	血	ʰcʰaʔ	ʰtɕʰaʔ	ʰcʰaʔ	ʰtɕʰaʔ
<i>skrag</i>	怖がる	ʰcaʔ	ʰtɕaʔ	ʰcaʔ	ʰtɕaʔ
<i>khyod</i>	あなた	ʰtɕʰuʔ	ʰtɕʰuʔ	ʰtɕʰuʔ	ʰtɕʰuʔ
<i>gyang</i>	壁	ʰtɕɔ̃	ʰtɕɔ̃	ʰtɕɔ̃	ʰtɕɔ̃
<i>phra bo</i>	細い	ʰcʰe ʰkuu	ʰcʰə ʰkuu	ʰcʰə ʰtsi	ʰcʰe ri
<i>brag</i>	がけ	ʰcaʔ	ʰcaʔ	ʰcaʔ	ʰcaʔ
<i>phye</i>	開ける	ʰcʰə	ʰcʰə	ʰcʰə	ʰcʰə
<i>bya</i>	鶏	ʰca	ʰca	ʰca	ʰca

以上の基本的な対応関係は、鈴木 (2015) で示した分類と照らしてみると、Khrezhag 方言は第1類、Gyennyemphel 方言は第2類、mTshomgolung 方言は第3類に属するといえる。rTswamarteng 方言の類型は鈴木 (2015) には言及されていないパターンである。これを第2類 B とし、Gyennyemphel 方言の事例を第2類 A とすると、以下のように整理できる。

	蔵文 Kr	蔵文 Ky	蔵文 Pr	蔵文 Py
第2類 A	/cʰ, c, j/	/tɕʰ, tɕ, dz/	/cʰ, c, z/	
第2類 B	/tɕʰ, tɕ, dz/		/cʰ, c, j/	/cʰ, c, z/

上のように整理できることから、第2類 A と第2類 B の合流は重なるところがなく、独立に発生したものと考えてよい。ただし、rTswamarteng 方言のように、第2類 B に属するものの中に硬口蓋閉鎖音系列に /j/ のみが存在するという事例があること背景を説明しなければならない。

3.2 /j/の存在について

先に述べた状況から、rTswamarteng 方言の音体系に含まれる /j/ の蔵文との対応関係に注目したい。先にふれたとおり、/j/ は前鼻音を伴う ^ʰj/ という形でのみ現れる。rTswamarteng 方言で ^ʰj/ およびそれに関連する音を含む例を、上表と同様の形で以下に整理する。

蔵文	語義	Khrezhag	rTswamarteng	Gyennyemphel	mTshomgolung
'brug	雷/龍	ʰjɔʔ	ʰjɔʔ	ʰjɔʔ	ʰdzɔʔ
'bras	米	ʰje:	ʰje:	ʰgu:	ʰgu:
'bri	めすヤク	jə	jə	jə	ʰdzə

以上のように、rTswamarteng 方言の ^ʰj/ は蔵文 'br と対応関係があるといえる。カムチベット語の他の方言を見ると、たとえば蔵文 by は前部硬口蓋摩擦音に対応するが、蔵文 'by は前鼻音

を伴う前部硬口蓋破擦音に対応するという現象があり、音対応のパターンとしては、この例と rTswamarteng 方言に見られる現象は並行しているといえる。ただし rTswamarteng 方言では硬口蓋が関係している。なお、「めすヤク」が示す例外的音対応については鈴木 (forthcoming) に詳しく述べているが、 $^h j$ の子音連続の順行同化による単鼻音化が起こっている。つまり、表面上/j/が現れていないが、この閉鎖音の調音位置が/j/の成立に必要な不可欠であるということである。第1類に属する Khrezhag 方言ではもちろんのこと、第2類 A に属する Gyennyemphel 方言においても、前鼻音つき有声硬口蓋閉鎖音 $^h j$ という音対応を認めることができるが、この方言の場合は硬口蓋閉鎖音系列が音体系に存在するため、当該形式が現れることに疑問はない。なお、「米」が示す例外的音対応については Suzuki (2012) を参照。また、視点を変えて考えると、子音連続を形成している場合に限って硬口蓋閉鎖音系列を残している方言に dNgo 下位方言群に属する Phuri 方言 (鈴木 2013) がある。この事例は音声学的に子音連続の状態にある場合には、音素の合流前の古い段階を見せることを示唆している。まとめると、第2類 B において起きているこの不均衡な硬口蓋閉鎖音の存在は、音変化の結果同一の音素/j/と認められたとしても、その蔵文との対応関係、すなわち蔵文 Kr か蔵文 Pr かによって音変化の過程に異なりが認められることを示している。蔵文 'br を独立させた音対応表を以下に示す。

	蔵文 Ky	蔵文 Kr	蔵文 'br	蔵文 Pr	蔵文 Py
第2類 A	/tʰ, tɕ, dz/	/cʰ, c, j/	$^h j$	/çʰ, ç, ʒ/	
第2類 B	/tʰ, tɕ, dz/		$^h j$	/çʰ, ç, j/	/çʰ, ç, ʒ/

第2類 A に見られる $^h j$ は、蔵文 Kr 対応形式に硬口蓋閉鎖音系列が存在するため、蔵文 'br 対応形式もまた蔵文 Kr 対応形式の音声実現と並行しているといえる。ところが第2類 B に見られる $^h j$ は、蔵文と体系的な音対応の認められる硬口蓋閉鎖音系列が前部硬口蓋破擦音に合流していると分析されるため、蔵文 'br 対応形式の調音位置は蔵文 Pr 対応形式と一致しているといえる。また、第1類の Khrezhag 方言の場合について見るならば、その音声実現が蔵文 Kr 対応形式に由来する硬口蓋閉鎖音系列と同じ音素に分析されても、それは単に音声実現が一致しているだけで、上表の第2類 A の関係になっているかどうかは断定できない。

総じて、第1類から第3類への推移として理解できる硬口蓋音系列が前部硬口蓋音系列に合流する現象において、それが音体系の推移であることは事実であるが、正確には蔵文 Kr 対応形式が蔵文 Ky 対応形式に合流するか、蔵文 Pr 対応形式が蔵文 Py 対応形式に合流するか、と述べるほうが適切である。これら2種の合流は、先に例示したように、独立して起きると考えてよいため、第2類とする音変化は第1類と第3類の中間に位置する状態を反映し、上述2種の蔵文形式の合流について、どちらか片方が先行して起きた状態を第2類と考えることができる。それゆえ、第2類には2種の下位区分に A/B を設け、互いの相対的順序を不問にすることで、その歴史的な位置を表すのが現状においては妥当であるといえる。このとき、第2類 A は rGyalthang 下位方言群を特徴づけるものであり、第2類 B は雲嶺山脈東部下位方言群を特徴づけるものである。両者の分布は地理的に互いに接しているが、それぞれ連続した一定の言語区域をもつ。A/B の分布は地理的には重なることがないという点もまた指摘しておく (末尾の付録を参照)。

以上の状況を総合して考えると、音体系の体系的変化の一部は蔵文との対応関係に強く条件づけられているといえる。そして個々の音素がどのように存在するかは共時的な体系ではなく、歴史的なある種の分類（ここでは蔵文形式）が音変化の重要な要素として作用するということを、現代の共時的な方言差異が示しているといえる。もちろん、音体系の体系的推移によって説明できる現象も当然ながらある。たとえば、第2類 A に分類される方言において、蔵文 'br だけが /^hj/ として現れる事例が複数認められる（鈴木 (2011, 2012)、Suzuki (2013) など）。第2類 A については、音体系の推移として、蔵文対応形式の不規則性を理解することができるのは確かであるが、そうでない事例すなわち第2類 B のような事例も存在することを本稿が示したことになる。

4 まとめと展望

鈴木 (2015) において、第1類～第2類～第3類の音変化は歴史的に1本の線につながっていることを示し、第1類から第2類への変化は蔵文 Pr 対応形式の蔵文 Py 対応形式への合流が蔵文 Kr 対応形式の蔵文 Ky 対応形式への合流よりも先行して起きた段階であることを示した。しかしこの関係は rTswamarteng 方言の存在によって修正を必要とし、これら2種の合流のどちらか片方が先行して起きた状態を第2類と考えることが妥当であると結論づけた。これを整理すると、以下ようになる。

	蔵文 Ky	蔵文 Kr	蔵文 'br	蔵文 Pr	蔵文 Py
第1類	/tɕ ^h , tɕ, dz/	/c ^h , c, j/	/ ^h j/	/ç ^h , ç, j/	/ɕ ^h , ɕ, z/
第2類 A	/tɕ ^h , tɕ, dz/	/c ^h , c, j/	/ ^h j/	/ç ^h , ç, z/	
第2類 B	/tɕ ^h , tɕ, dz/		/ ^h j/	/ç ^h , ç, j/	/ɕ ^h , ɕ, z/
第3類	/tɕ ^h , tɕ, dz/		/ ^h dz/	/ɕ ^h , ɕ, z/	

本稿の議論により、第2類 A/B は第1類と第3類の間に位置する独立した2つの音変化であると考えられる。また、第2類 A/B を示す方言の属するそれぞれの下位方言群に含まれる方言が共通して第1類の体系をもつことは、rGyalthang 下位方言群では Choswateng (吹亞頂) 方言（鈴木 2014a）の存在によって、雲嶺山脈東部下位方言群においては Khrezhag 方言の存在によって、それぞれ示されている。また、第1類の音対応の特徴はさまざまなチベット系諸言語の中で Sems-kyi-nyila 方言群のみが見せる特徴である（瞿靄堂、金效静 (1981)、張濟川 (1993, 2009)、江荻 (2002) などを参照)。それゆえ、第2類 A/B の分化が Sems-kyi-nyila 方言群の内部分岐であり、異なる下位方言区分を設けられる1つの言語学的根拠になるといえる。

/^hj/の存在は、音体系の推移において蔵文対応形式の観点から考えることが重要であることを示唆している。チベット系諸言語の共時的な研究においても、ほとんどの先行研究がそうであるように、一部の音特徴と音変化に関しては、常に蔵文を意識的に参照して分析する必要がある。この参照をしない限り説明のできない共時的な差異が出てくることになるだろう。またそれが本稿で扱った現象のように、細かな方言調査を通してはじめて明らかになる点もあるということを銘記しておく必要がある。

参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23
- (2010a) 「硬口蓋調音の多様性とその表記—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察—」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』2, 107–113
- (2010b) 「カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』2010-35 巻 1 号 231–264
- (2011) 「カムチベット語小中甸・吉念批 [Yangthang/Gyennyemphel] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 6 号 137–173
- (2012) 「カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴」『国立民族学博物館研究報告』2012-37 巻 1 号 53–90
- (2013) 「カムチベット語格咱/普上 [Phuri] 方言の方言特徴」『ニダバ』第 42 号 60–69
- (2014a) 「カムチベット語香格里拉県小中甸郷吹亞頂 [Choswateng] 方言の音声分析と語彙：rGyalthag 下位方言群における方言差異に関する考察を添えて」『国立民族学博物館研究報告』2014-39 巻 1 号 45–122
- (2014b) 「カムチベット語丙中洛 [Bodgrong] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 9 号 153–193
- (2015) 〈建塘藏語土話研究的幾個意義〉徐建華主編《雲南藏學研究（二）》184–197
- (forthcoming) 〈香格里拉藏語亞浪話的鼻音系統〉《東方語言學》
- 西田龍雄 (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108–169 冬樹社
- Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthag Tibetan of Yunnan: a preliminary report. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 19.2, 69–92.
- Suzuki, Hiroyuki (2012) À propos du terme ‘riz’ et de l’hypothèse du groupe dialectal Sems-kyinyila en tibétain du Kham. *Revue d’études tibétaines* Vol. 23, 107–115.
- (2013) *Overview of the dialects spoken in rGyalthag from the historical perspective*. Paper presented at 13th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Ulaanbaatar)
- (2016) In defense of the prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10 (in press)
- Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105–129, Walter de Gruyter.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan*. (with collaboration of Konchok Gyatsho and Xavier Becker)
- Wang, Xiaosong (1996) Prolegomenon to Rgyalthag Tibetan phonology. *Linguistics of the*

Tibeto-Burman Area 19.2, 55–67.

江荻 (2002) 《藏語語音史研究》 民族出版社

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》
民族出版社

瞿靄堂、金效静 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第3期 76–84

《雲南省誌》編纂委員會 (1998) 《雲南省誌 卷五十九 少數民族語言文字誌》雲南民族出版社

張濟川 (1993) 〈藏語方言分類管見〉戴慶廈等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十壽辰文集》297–309 中央民族學院出版社

—— (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社

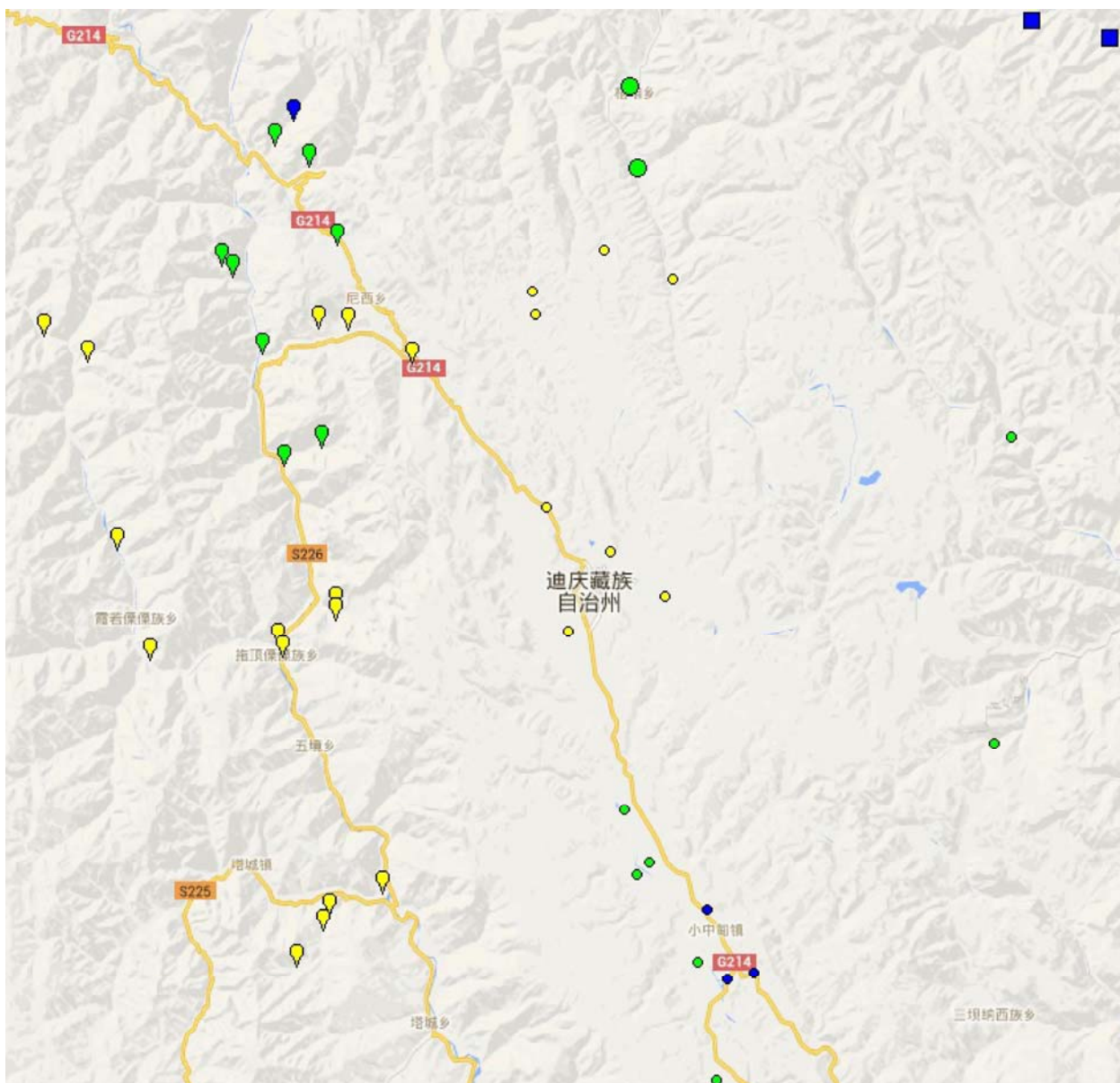
朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による各種言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001、平成 16-20 年度)
- 日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費、平成 19-21 年度) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007、平成 21-23 年度)
- 日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」(研究代表者：鈴木博之、課題番号 25770167、平成 25-27 年度)
- 雲南省民族學會藏族研究委員會《雲南藏語誌》計劃 (2015 年)

付録：rGyalthang 下位方言群および雲嶺山脈東部下位方言群方言の分布図



凡例

	rGyalthang 下位方言群	雲嶺山脈東部下位方言群
第1類	●	●
第2類 A	●	
第2類 B		●
第3類	●	●

dNgo 下位方言群 ●

Lamdo 下位方言群 ■

この地図は <http://ktgis.net/gcode/lonlatmapping.html> の Geocoding によって作成した。中国雲南省迪慶藏族自治州香格里拉市建塘鎮を中心とする一帯を示す。

コプト・エジプト語サイド方言における 拘束形態素上のスーブラリニアー・ストローク*

宮川 創

ゲッティンゲン大学大学院[†] / 京都大学大学院 / 日本学術振興会特別研究員 (DC1)[‡]

so.miyagawa@mail.uni-goettingen.de / runa.uei@gmail.com

コプト・エジプト語 サイド方言 スーブラリニアー・ストローク 成節子音 シュワー

1 はじめに

1.1 スーブラリニアー・ストローク

コプト・エジプト語 (Coptic Egyptian) は、少なくとも 14 世紀には死語になったと考えられている言語であり、その音韻論について述べるのは難しい。しかしながら、コプト教会の伝統、アラビア文字による転写、様々なダイアクリティカルマークの研究などから、科学的に推測することは可能である。コプト語には全般的にスーブラリニアー・ストローク (supralinear stroke/superlinear stroke) というダイアクリティカルマークがよく用いられた。これは、例えば $\bar{\alpha}$ のように文字の上に書かれる水平線で、コイナー・ギリシア語 (Koine Greek) のアンシャル体 (Uncial) の写本¹ や古代教会スラヴ語 (Old Church Slavonic) においても使われたものであるが、これらの言語の場合、それらはノミナ・サクラ (nomina sacra)² (Hurtado 1998:657, Uspenskij 2013:9) と数文字³ を表すために使われた。それに対し、コプト語では、ノミナ・サクラと数文字以外にも用いられた。特に、ボハイラ方言以外のコプト語方言でその傾向が顕著である⁴。ボハイラ方言では、スーブラリニアー・ストロークはノミナ・サクラと数文字を示すためにしか使われず、その他には母音挿入を示すジンキム (djinkim) と呼ばれる⁵ に似た記号が用いられる (Kasser 1991)。今回研究対象とするサイド方言は、特にスーブラリニアー・ストロークの使

* 本研究は JSPS 科研費 JP15J05370 の助成を受けたものである。

[†] 2015 年 10 月 1 日から。

[‡] 2015 年 4 月 1 日から 9 月 30 日までの期間。

¹ 例えば、シナイ写本 (Codex Sinaiticus 聖書学上の略記は \aleph) など多くの古い写本で見られる。

² ラテン語で「聖名」。nomina sacra は複数形であり、単数形は nomen sacrum。特定の語から 2 つないし 3 つの文字を取って、スーブラリニアー・ストロークを冠して表示する表記法である。聖なる人物・称号・場所・事物を表す名詞に対して使われることが多かったためにこの呼び名がある。取られる文字は最初と最後の文字であることが多い。例えば、 IHCOC 「イエス」は $\bar{\text{IHCOC}}$ 、 XPICTOC 「キリスト」は $\bar{\text{XPICTOC}}$ で表される。

³ アルファベットで数字を表す。例えば、文字アルファとスーブラリニアー・ストロークの組み合わせである $\bar{\alpha}$ は 1 を表す。

⁴ 古ヌビア語 (Old Nubian) でもこの用法がある。ただしヌビア語では、コプト語の伝統的発音にみられるような、/e/ や /ə/ の挿入ではなく、母音 /i/ の挿入である (Browne 2002:12)。

用が多い方言の1つであり、ジンキムは用いられない。サイド方言は、3-10世紀の間、コプト語の共通語的な地位を占めた威信方言であり、コプト語のなかで、最も言語資料が多い言語変種である。現に、Trismegistos データベース (Depauw and Gheldof 2014) では、コプト語の資料 21,143 のうちで、サイド方言であることが明確な資料数は 9,161 であり、全体の約 43.3% を占める (<http://www.trismegistos.org/>, accessed on 2015-12-30)。

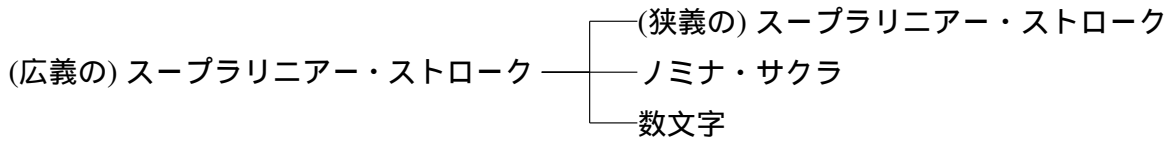
コプト教会の伝統的な発音では、子音文字上のノミナ・サクラや数文字ではないスーパーリニアーストロークは、その子音文字の前に母音/e/を入れて読まれる。しかしながら、この母音を表すための文字は別にある。よって、同じ母音に対して母音字とスーパーリニアーストロークが書き分けられていたことになるが、どうしてそのような書き分けがあるのか謎であった。そこで、Worrell (1934) は、スーパーリニアーストロークは、母音を表すのではなく、成節子音を表すとする節を最初に唱えた。この論文は、1934年に出版されたが、1932年にはすでに学界で出回っていたようである (Worrell 1933:130)。彼以降、この説は、Polotsky (1933) や Depuydt (1993) によって継承され、Layton (2011) の文法書でも採用された。Depuydt (1993:133-134) は次のように述べている。“the superlinear stroke is a syllabic marker: it is placed over consonants that serve in place of a vowel as a sonorous center, and it extends backward or forward so as to include in part a preceding or succeeding letter belonging to the same syllable.” ただし、これらは Peust (1999:64) が言うように、“In sum, we have to state that neither the interpretation of the superlinear stroke as a vowel sign nor as a syllabic marker is proven.” であり、完全に受け入れられているとは言い難い。Till (1932) や Hintze (1980)、また Loprieno (1995) は伝統的なスーパーリニアーストローク=母音 e またはシュワの挿入説を採用している。スーパーリニアーストローク=成節子音説を採用する理由としては、コプト文字によるアラビア語の表記 (Worrell 1934) や、母音字がくると、スーパーリニアーストロークが付されなくなる現象 (Ex. *sōtM*⁵ 「聞く」, *sotm-ou* 「彼らを聞く」) や、比較的新しい写本において成節的な母音にもスーパーリニアーストロークが付されるようになること、などがある。

Beltzung and Patin (2007) は、音韻論的な見地から、伝統的な母音挿入節と成節子音説をジューゼしている。彼らの説明では、スーパーリニアーストロークが付された子音字には音声レベルでは自由変異としてシュワが前に挿入されることもあるが、音韻レベルでは成節子音である。このようなシュワは epenthetic schwa と呼ばれる。これは、英語 *bottle* ['bɒtəl] ≈ ['bɒtɪ] などにも見られる現象である (Akamatsu 2013:161)。

コプト語の写本には、共鳴音のみにスーパーリニアーストロークをつけるものもあれば、それ以外の子音字以外にもつけるもの、さらに、母音にもつけるものもある。ノミナ・サクラや数文字以外のこれらのスーパーリニアーストロークを「(狭義の) スーパーリニアーストローク」とすると、次の図 1 のように分類できる。

⁵ 以降、大文字をスーパーリニアーストローク付きの子音字とする。なお、スーパーリニアーストロークの位置と長さについては、第 2 章を参照。

図 1: スープリニアール・ストローク (SS) の分類



本稿では、この (狭義の) スープリニアール・ストロークのみを扱う。

1.2 前名詞形と前代名詞形

コプト語には様々な品詞で前名詞形と前代名詞形がある。前名詞形は必ず後ろに名詞が来る形で、前代名詞形は必ず後ろに代名詞 (接尾代名詞) が来る形である。以下、前名詞形と前代名詞形をもつ品詞をそれぞれ概観する。

図 2: 動詞体系

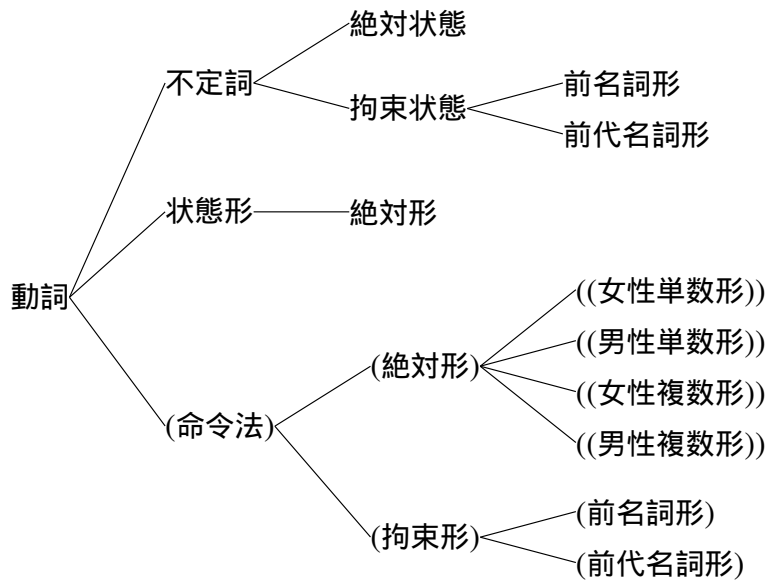


表 1: 動詞形の分布

	不定詞絶対形	不定詞拘束形	状態形
他動詞	✓	✓	✓
自動詞	✓	—	✓
準動詞	—	✓	—

図2は動詞の語形を階層的に分類して示したもの(動詞体系)であり、動詞はまず不定詞形、命令形、状態形に分かれる。図ではごく一部の動詞しか持たない語形を一重括弧で、ごくごく一部の動詞しか持たない語形を二重括弧で括った。命令形は一部の動詞にしかない語形の一つである⁶。不定詞を絶対形と拘束形に分けると、他動詞は理論上、不定詞絶対形、不定詞拘束形、状態形の全てをとる⁷。その一方、自動詞は不定詞絶対形と状態形、準動詞は不定詞拘束形しかもたない。他動詞において、絶対形では目的語にはかならず対格標識 *N-* または *Mmo-* が必要であるが、拘束状態では、目的語は動詞に直接後続する。状態形は状態受動もしくは継続相を表す。準動詞は、なかば形容詞のような意味が多く、「美しい」、「善い」などといった主観的な形容が多い。ただし、準動詞の意味は主観的形容だけでなく、「曰く」という意味の準動詞 *peče-*、*peča-* はよく用いられる。準動詞は、自動詞や他動詞とは異なり、前方に主語をとらず、主語は後続する。コプト語では、通時的に名詞的な機能をもった不定詞形が迂言法を経て動詞として機能するようになったため、通常の動詞述語文の場合、動詞の不定詞が助動詞と組み合わせられて用いられる。不定詞が主動詞として機能する場合は、第1現在以外は TAM 標識である助動詞および転換詞が用いられる。第1現在はもともと *t-* ではじまる助動詞的要素があったと考えられる⁸ が、1人称単数、1人称複数、2人称複数以外ではそれが消失した。不定詞は名詞的に使われることもあり、その場合男女の性の区別がある。

図3: 名詞の体系

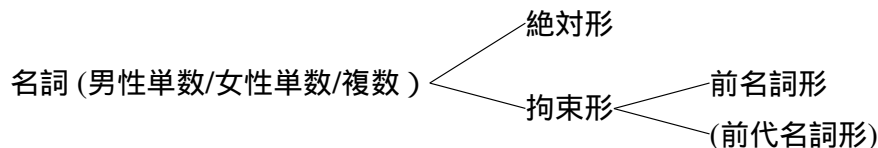


図3は、名詞の体系である。名詞は内在する文法範疇として、男性単数、女性単数、複数の3つに分類されるが、これらの名詞には絶対形と拘束形の2種の形式があり、拘束形には、前名詞形と前代名詞形がある。ただし、名詞で前代名詞形をもつのは身体名詞などに限られる。

⁶ なお、命令形で女性単数形、男性単数形、女性複数形、男性複数形の特別な語形を持つのは *ei* 「来る」のみで確認されている。Allen (2010:189) によれば、*ei* の命令形はそれぞれ、女性単数 *amê*、男性単数 *amou*、女性複数 *amêi*、男性複数 *amôî*。また、そもそも命令形を持つ動詞は動詞のうち、基本的なものを中心にごくわずかである。

⁷ 全ての動詞に全ての語形が確認されている、というわけではない。

⁸ 新エジプト語では *tw=* としてその祖先が見られる (Junge 2001:112)。

図 4: 前置詞の分類

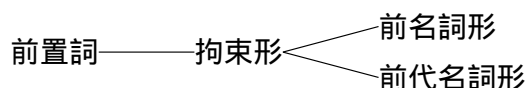


図 4 のように、前置詞は絶対状態をもたず、拘束状態のみである。例えば、方向格前置詞 *e-* は、前名詞形 *e-* と前代名詞形 *ero-* のみを持ち、絶対形を持たない (例、*e-p-aggelos* 「その天使に」、*ero-f* 「彼に」)。

形容詞は、*šēm* 「小さい」など数少ない。属格標識の *N-* を伴った形容詞的名詞 (または属性名詞) が形容詞の機能をはたす。副詞はたいていの場合、前置詞と名詞もしくは不定詞との組み合わせであり、これらを 1 つの語としてとらえるべきかは不透明である。

また、以上のほか「助動詞」と「転換詞」と呼ばれる品詞がある。これらは前置詞と同じように、拘束形のみをもつ絶対形は持たない。転換詞は助動詞と似ているが、助動詞と組み合わせることができる。語順は < 転換詞 – 助動詞 – 主語 – 動詞 > となる。ただし、助動詞は必ず、動詞とともに用いられるが、転換詞は動詞なしの文においても用いられる。

1.3 コプト語の自由形態素と拘束形態素

宮川 (2013) では、自由形態素のみを取り上げたので、それに連なる本稿は拘束形態素のみを取り上げる。自由形態素および拘束形態素という概念は、文法レベルと音韻レベルの 2 側面から考えることができる。

文法的な独立性の最も信頼できるパラメーターとしては、Wackernagel clitic によって、2 つの形態素が分かたれるか否かがある。もともとコプト語は分かち書きがなされなかったが、コプト正教会からカトリックに改宗しヴァチカンにおいてコプト語資料の研究を続けた Rafael Al-Tukhi など筆頭に、17-18 世紀以来、分かち書きが行われてきた Takla (1998-1999:121)。どの分かち書きスタイルにおいても、Wackernagel clitic で分断可能な境界は、空白が置かれる。ただし、Wackernagel clitics 自体は前の語とつながって書かれることもある (Kuhn 1956)。Wackernagel clitic とは文の「第 2 位置」に現れる接語であり、コプト語ではコイナー・ギリシア語の Wackernagel clitic と同様 enclitic である。これらの Wackernagel clitic には *ce* などエジプト語本来語のものもあるが、*de*、*gar* などギリシア語からの借用語も多数存在する。

(1) a. *NtôtN de n-et-R-nobe*

2PL WC DEF.PL-REL-do.PRENOM-sin

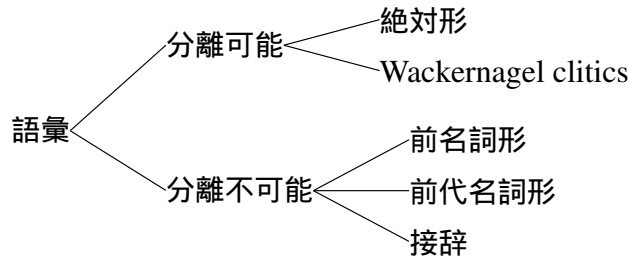
「罪を犯しているのはあなたがただ。」 (Besa, *On Vigilance*, 8.1, Kuhn (1956))

- b. *mNNSa-tre-u-ti-sbô* *de na-n etbe-nai têt-ou*
 after-CAUS-3PL-give-teaching WC DAT-1PL about-DEM:PL all-3PL

彼らが私たちにそれら全てについて教えた後で (Besa, *Reproofs and monastic rules*, 6.5, Kuhn (1956))

上記の例文のように、Wackernagel clitic の前には多数の形態素があるが、この Wackernagel clitic は必ず文の第 2 位置にくることがわかっているから、Wackernagel clitic の前後、つまり、*mNNSa-tre-u-ti-sbô* と *na-n* の間には文法語の境界がある、ということがわかる。これは日本語の文法語の境界を間投助詞「ね」等の挿入で測定することと同じ原理である。Wackernagel clitic でその要素が他と切り離されるかどうかの尺度で測った場合、コプト語の語彙は図 5 のように分類できる。

図 5: 文法レベルでの語の分離



これに対して音韻レベルでの基準では、コプト教会の伝統的な発音および 20 世紀前半におけるいくつかの地域のコプト教会に伝わる発音に関する数種の報告 (Dyneley Prince 1902, Worrell and Vycichl 1942 など) に基づく。これらによると、コプト語のアクセントは、かならず絶対形か前代名詞形の *ultima* もしくは *paenultima* にしか来ない (Lambdin 1983:xv-xvi)。図 6 で、このアクセントによる区分を示した。大部分は、図 5 と同様であるが、前代名詞形と Wackernagel clitics の位置が交替している。

図 6: アクセントによる区分

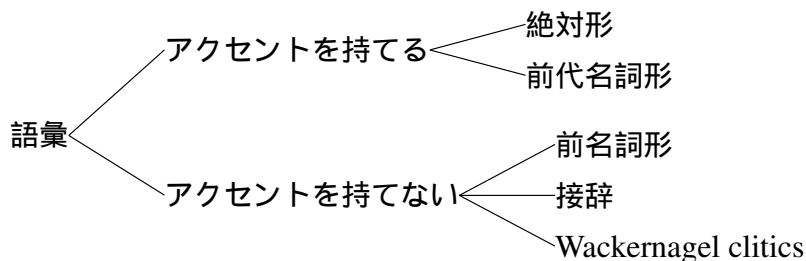


表 2: サイド方言の母音体系

無強勢 (unstressed)	<i> /i/	<e> /ə/	<a> /e/
強勢 (stressed)			
弛緩 (lax)	<e> /ɛ/	<a> /ä/	<o> /ɔ/
緊張 (tense)	<(e)i> /i:/	<ê> /e:/	<ô> /o:/ <ou> /u:/

ただし、前代名詞形には例外があり、助動詞の前代名詞形はアクセントを代名詞の後の動詞にゆずる。(2) では、第一語には、8 つもしくは 9 つの形態素⁹があるが、アクセントは前代名詞形の *touô*-の *ô* におちる¹⁰。

(2) ¹¹ *če-eke-mere-p-et-hi-touô-k*

/tʃə.ʔə.kə.mə.rə.pət.hi.'two:k/

QUOT-2SG.M:OPT-love.PRENOM-DEF.SG.M-REL-on-bosom-2SG.M

nG-meste-pe-k-čače

/ŋ.məs.tə.pək.tʃe.'tʃe/

CONJ:2SG.M-hate.PRENOM-POSS.SG.M-2SG.M-enemy

「汝の隣人 (lit. 胸の上に居る者) を愛せよ、汝の敵を憎め、と (聞いたことがあるだろう)。」
(Mt. 5:43; Horner (1911:40))

アクセントはコプト語の母音体系にとって重要である。Loprieno (1997:452) は長母音 (狭母音説では、狭母音) しか強勢母音に出来ないことを示している。Loprieno (1997) などは長母音説をとるが、現在まで、<ê> と <ô> を長母音とするか狭母音とするかで議論が対立してきた。しかしながら、そもそも死語であることもあり、両説とも確固たる証拠を呈してはいない。Allen (2013c:15) は、これら両説を折衷して、<ê> と <ô> を緊張 (tense) 母音として、弛緩 (lax) 母音である <e> と <o> と対比させた。

サイド方言の子音体系は表 3 である。なお、有声破裂音は主にギリシア語からの借用語で用いられる。

⁹ 本文で 1 形態素として示した *eke*-は接周辞 *e-* *-e*-と 2 人称単数男性代名詞 *k* に分解しうる。

¹⁰ 2 番目の語の接続の助動詞の 2 人称男性単数形の表記は *nG* であるが、Peust (1999:91) が指摘しているように、<ng> は /ŋ-/ と発音されたと考えられる。

¹¹ Horner (1911) は、Layton (2011) よりもより細かい分かち書き方法を行っている。Layton (2011) は前名詞形と名詞を離さずに書くが、Horner (1911) は離している。本稿は近年アメリカで特に比較的一般的な Layton (2011) の分かち書き方式に従う。Layton (2011) 以外の方式で書かれたものは、Layton (2011) の方式に修正する。

¹² 母音字で始まる形態素ではその形態素の前に、形態素中の母音字の連続では母音の後に声門閉鎖音が挿入されたと考えられている。本稿は、母音字連続において声門閉鎖音の後は母音が弱化した

表 3: サイド方言の子音体系

無声破裂音	<p> /p/	<t> /t/	<č> /tʃ/	<c> /kʲ/	<k> /k/	Ø ¹² /ʔ/
有声破裂音		(<d> /d/)			(<g> /g/)	
無声摩擦音	<f> /f/	<s> /s/	<š> /ʃ/			<h> /h/
有声摩擦音	 /v/	(<z> /z/)				
鼻音	<m> /m/	<n> /n/			<ng> /ŋ/	
接近音	<(o)u> /w/	<r> /r/	<ei> / <i> /j/			
側面接近音		<l> /l/				

今回、「拘束形態素」と括っているのは、図 6 の音韻論的拘束形態素ではなく、図 5 の文法的形態素である。つまり、Dixon and Aikhenvald (2007) の音韻語 (phonological word) と文法語 (grammatical word) の区別では、文法語を優先させているといえる。これにはメリットがある。というのは、コプト語サイド方言の文献は主に 3-10 世紀に残されている一方、現代までに伝わっている発音はボハイラ方言¹³のみであり、この発音ばかりに依拠するわけにはいかないからである。音韻語を重視すると現代ボハイラ方言の発音に大きく依拠してサイド方言の分析をすることになってしまう。文法語を優先させることでこの不都合を避けることができる。

2 研究方法

これらの前提を基に、コプト語サイド方言拘束形態素の分析を行った。コプト語の辞典として代表的なものに Crum (1999) や Westendorf (1992) があるが、これにはスープラリニアー・ストロークが記載されていない。そのため、研究対象は、宮川 (2013) と同じく、Smith (1999) の辞書を用いた。ただし、この辞書ではスープラリニアー・ストロークは、コプト語資料においてその表記が安定している <r>、<l>、、<m>、<n> のみに付されている。写本によっては、これら 5 母音以外の子音字や母音字にも付される。特に、無声摩擦音への付記はよく見られる。後期には母音字にスープラリニアー・ストロークが書かれる写本も出現する。これは、ボハイラ方言のジンキム (◌) にみられる、その母音のみで音節を構成することを示す用法であると思われる。しかしながら、このような写本はサイド方言では少ない。よって、Smith (1999) ではそれらは除外されているようである。また、Smith (1999) は、その編集方針に “Not every spelling variant is listed. Most conjectural readings and some *hapax legomena* have been excluded.

シュワーがあったとする説を用いて記述している。なお、母音字連続を声門閉鎖音挿入とする解釈する説 (Layton 2011 など) に対して、母音字連続は長母音を表していると解釈する説 (Greenberg 1990[1986]) も存在する。

¹³ 19 世紀後半に、コプト正教会教皇キリル 4 世 (1854–1861) によって現代コプト語教会発音が導入された。これは、現代ギリシア語の発音を取り入れたものであり、当初から批判があった。以前の伝統的なボハイラ方言の発音は、Old Bohairic pronunciation と呼ばれる。

Nonetheless, the words listed provide a large enough vocabulary for the reading of Nag Hammadi texts along with standard texts such as the Coptic New Testament.”(Smith 1999:x) とある。ここから、Smith (1999) は、任意の語彙において、写本によって書いたり書かれなかったりするスーブラリニアール・ストロークは掲載せず、頻度が多く標準化されたと考えられるスーブラリニアール・ストロークのみを記載していると思われる。

この論文では、Smith (1999) に記載されたスーブラリニアール・ストロークのみを考慮し、実際に資料にある、長さに基づくスーブラリニアール・ストロークの種類については考慮しなかった。スーブラリニアール・ストロークには次の 3 種類の長さに細かく区分されることがある (Hedrick and Pagels 1990:10)。

1. 1 つの文字の上のみつくもの
2. 2 つの文字の上につき、最初の文字の中央から次の文字の中央にかけて書かれるもの
3. 3 つの文字の上につき、最初の文字の中央から最後の文字の中央にかけて書かれるもの

これらは、文献学的研究では Coptic SCRIPTORIUM コーパス (Schroeder and Zeldes 2013-) のように、区別されることもあるが、Kuhn (1956) のように、出版上の理由で全く区別を行っていないものもある。これらの出版物では、1. はそのままだが、2. は後ろの文字に 1. を付し、3. は中央の文字に 1. を付すことで代替としている。Smith (1999) も同様である。ただし、長さによる細かな分類が必ずしも実際のコプト語読者によって弁別されていたかはわからない。というのも、これらの分類の中間に位置するものが多数存在すること、書記によって長さや位置は異なること、ある語彙上のある位置のスーブラリニアール・ストロークの長さが必ずしも一定ではないことなど不明確な要因が多数存在するからである。

序言でナグ・ハマディ写本に 1 節さき、また、見出語の出典に多数のナグ・ハマディ写本関連書を挙げているように、Smith (1999) はナグ・ハマディ写本 (3-4 世紀) のコプト語サイド方言を意識して編まれたと考えられる。ナグ・ハマディ写本のサイド方言はリコポリス方言の要素がかなりみられる。そのため、この辞書では、サイド方言を基礎としながらも、[] にリコポリス方言 (準アクミーム方言) 形を掲載している。本稿では、標準的なサイド方言のみに集中するため、リコポリス方言形は除外した。

コプト学の伝統では前名詞形の名詞に接続する部分をハイフン (-)、前代名詞形の代名詞に接続する部分をまたは右斜め上に傾いたイコール (=) で書きあらわす。例えば、不定詞絶対形 Ⲙⲧⲏⲛⲓⲛⲓ 「聞く」の前名詞形は Ⲙⲧⲏⲛⲓⲛⲓ-、前代名詞形は Ⲙⲧⲏⲛⲓⲛⲓ= である。Smith (1999) はこの伝統的な表記法を用いている。本稿は、Leipzig Glossing Rules など記述言語学の潮流にならい、どちらもハイフンで書くことにした。

本稿では、Smith (1999) において、(狭義の) スーブラリニアール・ストロークが付されている字を大文字で示している。スーブラリニアール・ストロークの位置や長さに関しては第 2 節を見よ。なお、前述したように、Smith (1999) は、結合スーブラリニアール・ストロークは表記していない。

2.1 ソノリティとスープリニアー・ストローク=成節子音説の妥当度

ソノリティには細かい差異に基づけば様々な指標があるが、ここでは、宮川 (2013) と同様に次のように数値化した¹⁴。

表 4: ソノリティスケール

数値	7	6	5	4	3	2	1
自然類	低&中母音	高/半母音	共鳴音	有声摩擦音	無声摩擦音	有声破裂音	無声破裂音

また、スープリニアー・ストローク=成節子音説を検証するため、次の基準を用いた。ピックアップした語において、スープリニアー・ストロークがソノリティ・ピークにあたる場合は、3、宮川 (2013) でも用いた最適性理論的制約群を用いて説明出来るもの (表 8) を 2、音韻論的手段ではどう考えても説明できない場合を 1 として数値化した。これらを「スープリニアー・ストローク=成節子音説」の妥当度とした。以降、これを単純に「レベル」と称する。

3 分析結果

以下が結果である。なお、子音字に対応する音素表記に関しては前述の表??、母音字に対応する音素表記に関しては前述の 2 を見よ。

3.1 レベル 3 の語

これらの語では、明らかにソノリティ・ピークにスープリニアー・ストロークが来ていた。以下、対象となった全形式を、前名詞形、前代名詞形に分け、さらにそれらを品詞に分けて表示する。なお、第 1 章で述べたように前代名詞形はアクセントを持つが、前名詞形はアクセントを持たない。

表 5: レベル 3・前名詞形 (アクセントを持たない)

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前名詞形	動詞	<i>cN-</i>	/k ^h ŋ-/	「行動に関する 名詞」形成	15	3
前名詞形	動詞	<i>R-</i>	/r-/	複合動詞形成	5	3
前名詞形	動詞	<i>cN-</i>	/k ^h ŋ-/	「見つける」	15	3

¹⁴ なお、英語のソノリティスケールでは、共鳴音の中をさらに、/r/ > /l/ > /m/, /n/とすることもあ
る (Giegerich 1992:133)。また、Gordon et al. (2012:222) は、Kenstowicz (1997), de Lacy (2002),
Gordon (2006) らの見解をまとめ、母音内のソノリティスケールを Low Vowel > Mid Vowel > High
Vowel > Mid-central Vowel > High-central Vowel として示している。

表 5: レベル 3・前名詞形 (アクセントを持たない)[続き]

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前名詞形	動詞	<i>cM-</i>	/k ^h m-/	「見つける」	15	3
前名詞形	動詞	<i>cLč-</i>	/k ^h l ^č -/	「からまる、くっつく」	154	3
前名詞形	動詞	<i>cLp-</i>	/k ^h lp-/	「啓示する」	151	3
前名詞形	動詞	<i>cL-</i>	/k ^h l-/	「集める」	15	3
前名詞形	動詞	<i>cL-</i>	/k ^h l-/	「帰還する」	15	3
前名詞形	動詞	<i>čNt-</i>	/t ^h nt-/	「試す、始める」	251	3
前名詞形	動詞	<i>čN-</i>	/t ^h n-/	「尋ねる、言う」	25	3
前名詞形	動詞	<i>čehM-</i>	/t ^h ə.hm-/	「汚れる」	2735	3
前名詞形	動詞	<i>hN-</i>	/hn-/	「近く」	35	3
前名詞形	動詞	<i>hetB-</i>	/hə.tβ-/	「殺す」	3714	3
前名詞形	動詞	<i>hBs-</i>	/hβs-/	「覆う」	343	3
前名詞形	動詞	<i>hatB-</i>	/hə.tβ-/	「覆う」	3714	3
前名詞形	動詞	<i>štRtR-</i>	/ʃtr.tr-/	「かき乱す」	31515	3
前名詞形	動詞	<i>šNt-</i>	/ʃnt-/	「編む」	351	3
前名詞形	動詞	<i>šN-</i>	/ʃn-/	「衰弱する」	35	3
前名詞形	動詞	<i>šMše-</i>	/ʃm.ʃə-/	「奉仕する、礼拝する」	3537	3
前名詞形	動詞	<i>šB-</i>	/ʃβ-/	「剃る」	34	3
前名詞形	動詞	<i>šB-</i>	/ʃβ-/	「変化する」	34	3
前名詞形	動詞	<i>tM-</i>	/tm-/	「閉める」	15	3
前名詞形	動詞	<i>sR-</i>	/sr-/	「広める」	35	3
前名詞形	動詞	<i>sNt-</i>	/snt-/	「創る」	351	3
前名詞形	動詞	<i>sN-</i>	/sn-/	「通る」	35	3
前名詞形	動詞	<i>smN-</i>	/smn-/	「確立する」	355	3
前名詞形	動詞	<i>sLsL-</i>	/sl.sl-/	「慰める」	3535	3
前名詞形	動詞	<i>tMhe-</i>	/tm.hə-/	「点火する」	1537	3
前名詞形	動詞	<i>tMs-</i>	/tms-/	「埋める」	153	3
前名詞形	動詞	<i>kB-</i>	/kβ-/	「二重になる、折る」	14	3
前名詞形	動詞	<i>cMke-</i>	/t ^h m.kə-/	「悩ます」	1517	3
前名詞形	動詞	<i>bL-</i>	/bl-/	「解く、説く」	45	3
前名詞形	動詞	<i>šRp-</i>	/ʃrp-/	「初めである」	351	3

表 5: レベル 3・前名詞形 (アクセントを持たない)[続き]

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前名詞形	動詞	<i>R-</i>	/r-/	ギリシア語由来 の動詞の形成	5	3
前名詞形	動詞	<i>skRkR-</i>	/skɾ.kɾ-/	「回転する」	31515	3
前名詞形	動詞	<i>setM-</i>	/sə.tɪ-/	「聞く」	3715	3
前名詞形	動詞	<i>sBte-</i>	/sβ.tə-/	「準備する」	3417	3
前名詞形	動詞	<i>sBbe-</i>	/sβ.βə-/	「割礼する」	3447	3
前名詞形	動詞	<i>Rč-</i>	/rɕ-/	「締める、確實 にする」	52	3
前名詞形	動詞	<i>R-</i>	/r-/	「する」	5	3
前名詞形	動詞	<i>pRč-</i>	/pɾɕ-/	「分ける」	152	3
前名詞形	動詞	<i>pRš-</i>	/pɾʃ-/	「広げる」	153	3
前名詞形	動詞	<i>pNg-</i>	/pŋg-/	「引く、汲む」	152	3
前名詞形	動詞	<i>N-</i>	/n-/	「持ってくる」	5	3
前名詞形	動詞	<i>kMš-</i>	/kɪʃ-/	「あざける」	1753	3
前名詞形	名詞	<i>šN-</i>	/ʃn-/	「調査、ニュー ス」	35	3
前名詞形	名詞	<i>šbR-</i>	/ʃβɾ-/	「仲間」	345	3
前名詞形	名詞	<i>šRp-</i>	/ʃɾp-/	複合名詞前部要 素「最初の～」	351	3
前名詞形	名詞	<i>cB-</i>	/kʲβ-/	「葉」	14	3
前名詞形	名詞	<i>hM-</i>	/hɪɪ-/	「職人」	35	3
前名詞形	名詞	<i>šN-</i>	/ʃn-/	「息子」/「娘」	35	3
前名詞形	名詞	<i>tN-</i>	/tɪ-/	「手」	15	3
前名詞形	名詞	<i>sR-</i>	/sɾ-/	「とげ、はり」	35	3
前名詞形	名詞	<i>Rp-</i>	/ɾp-/	「ワイン」	51	3
前名詞形	名詞	<i>rMpe-</i>	/ɾɪ.pə-/	「年」	5517	3
前名詞形	名詞	<i>rM-</i>	/ɾɪ-/	「人」	55	3
前名詞形	名詞	<i>rMN-</i>	/ɾɪ.ɪn-/	「～の人」	555	3
前名詞形	前置詞	<i>čN-</i>	/ɕɪn-/	「～から」	25	3
前名詞形	前置詞	<i>hN-</i>	/hɪɪ-/	「～において」	35	3
前名詞形	前置詞	<i>hičN-</i>	/hi.ɕɪn-/	「～の上で」	3625	3
前名詞形	前置詞	<i>hitN-</i>	/hi.tɪ-/	「～を通して」	3615	3
前名詞形	前置詞	<i>hahtN-</i>	/həh.tɪ-/	「～とともに、 ～の側で」	37315	3

表 5: レベル 3・前名詞形 (アクセントを持たない)[続き]

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前名詞形	前置詞	<i>hatN-</i>	/hɛ.tɲ-/	「～とともに、 ～の側で」	3715	3
前名詞形	前置詞	<i>šatN-</i>	/ʃɛ.tɲ-/	「～を除いて」	3715	3
前名詞形	前置詞	<i>tetN-</i>	/tɔ.tɲ-/	「貴方たちが」	1715	3
前名詞形	前置詞	<i>Nci-</i>	/ɲ.kʃi-/	後置主語の標識	516	3
前名詞形	前置詞	<i>NtN-</i>	/ɲ.tɲ-/	「～から、～に よって」	515	3
前名詞形	前置詞	<i>Nte-</i>	/ɲ.tə-/	「～の」	517	3
前名詞形	前置詞	<i>Nsa-</i>	/ɲ.sɛ-/	「～の後ろで」	517	3
前名詞形	前置詞	<i>NbL-</i>	/ɲ.βl-/	「～を除いて」	545	3
前名詞形	前置詞	<i>nahrN-</i>	/neh.ɲ-/	「～の前で」	57355	3
前名詞形	前置詞	<i>N-</i>	/ɲ-/	属格標識	15	3
前名詞形	前置詞	<i>N-</i>	/ɲ-/	属性標識	15	3
前名詞形	前置詞	<i>N-</i>	/ɲ-/	所格標識	15	3
前名詞形	前置詞	<i>N-</i>	/ɲ-/	対格標識	15	3
前名詞形	前置詞	<i>N-</i>	/ɲ-/	同等の N-	15	3
前名詞形	前置詞	<i>N-</i>	/ɲ-/	対格標識	15	3
前名詞形	前置詞	<i>mNnsa-</i>	/mɲn.sɛ-/	「～の後で」	55537	3
前名詞形	前置詞	<i>Mn-</i>	/mɲ-/	共格標識	55	3
前名詞形	前置詞	<i>mN-</i>	/mɲ-/	共格標識	55	3
前名詞形	前置詞	<i>ečN-</i>	/ʔə.tʃɲ-/	「～なしで」	725	3
前名詞形	前置詞	<i>ečN-</i>	/ʔə.tʃɲ-/	「～の上で」	725	3
前名詞形	前置詞	<i>ehrN-</i>	/ʔəh.ɲ-/	「～に、～の間 で」	7355	3
前名詞形	前置詞	<i>etN-</i>	/ʔə.tɲ-/	「～に」	715	3
前名詞形	前置詞	<i>erN-</i>	/ʔə.ɲ-/	「～に、～の上 で、～で」	755	3
前名詞形	前置詞	<i>ačN-</i>	/ʔə.tʃɲ-/	「～なしで」	725	3
前名詞形	代名詞	<i>tN-</i>	/tɲ-/	「私たちが」	15	3
前名詞形	代名詞	<i>Ntk-</i>	/ɲtk-/	「貴方は～であ る」	1511	3
前名詞形	代名詞	<i>NtetN-</i>	/ɲ.tɔ.tɲ-/	「貴方たちは～ である」	151715	3

表 5: レベル 3・前名詞形 (アクセントを持たない)[続き]

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前名詞形	代名詞	<i>Nte-</i>	/n̩.tə-/	「貴女は～である」	1517	3
前名詞形	代名詞	<i>-tN</i>	/tn̩-/	「貴方たちを」	15	3
前名詞形	代名詞	<i>-N</i>	/n̩-/	「私たちを(が)」	5	3
前名詞形	冠詞	<i>petN-</i>	/pə.tn̩-/	「あなた方の」 所有冠詞単数形	1715	3
前名詞形	冠詞	<i>N-</i>	/n̩-/	定冠詞複数形	15	3
前名詞形	転換詞	<i>Nta-</i>	/n̩.te-/	関係第 1 完了	1517	3
前名詞形	存在詞	<i>mNte-</i>	/m̩n̩.tə-/	所有否定	5517	3
前名詞形	存在詞	<i>mN-</i>	/m̩n̩-/	存在否定	55	3
前名詞形	存在詞	<i>MmN-</i>	/m̩m̩n̩-/	存在否定	1555	3
前名詞形	助動詞	<i>Nta-</i>	/n̩.te-/	第 2 完了	517	3
前名詞形	複合前置詞	<i>phN-</i>	/ph̩n̩-/	「～しながら」 (定冠詞 <i>p+</i> 所格の <i>hN-</i>)	135	3
前名詞形	助動詞	<i>Ntere-</i>	/n̩.tə.rə-/	後時の助動詞 「～の後で～する」	151757	3
前名詞形	助動詞	<i>Mpate-</i>	/m̩.pə.tə-/	未然の助動詞 「まだ～していない」	151717	3
前名詞形	助動詞	<i>Mpe-</i>	/m̩.pə-/	否定第 1 完了 「～しなかった」	1517	3
前名詞形	否定辞	<i>tM-</i>	/tm̩-/	不定詞や特定の助動詞の否定	15	3
前名詞形	否定辞	<i>N-</i>	/n̩-/	否定標識	5	3
前名詞形	接頭辞	<i>mNt-</i>	/m̩nt̩-/	抽象名詞形成	551	3
前名詞形	接頭辞	<i>N-</i>	/n̩-/	副詞形成	5	3
前名詞形	数詞	<i>šMt-</i>	/ʃm̩t̩-/	3	351	3
前名詞形	数詞	<i>mNt-</i>	/m̩nt̩-/	10	551	3
前名詞形	助動詞	<i>Nta-</i>	/n̩.te-/	第 2 完了	517	3
前名詞形	動詞接頭辞	<i>MpR-</i>	/m̩.p̩r̩-/	否定命令形形成	1515	3

コプト語の名詞は、語頭に子音字が書かれない場合でも、声門閉鎖音/?-/を有していると考え

られるため、すべての名詞は初頭子音を持っている、といえる。

表 6: レベル 3・前代名詞形・アクセント有り

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前代名詞形	動詞	<i>cNt-</i>	/k ^h nt-/	「見つける」	151	3
前代名詞形	動詞	<i>hNt-</i>	/hnt-/	「動く」	351	3
前代名詞形	動詞	<i>hLhôt-</i>	/hl. ^h ho:l-/	「殺す」	35375	3
前代名詞形	動詞	<i>štRtôt-</i>	/ʃtɾ. ^h to:r-/	「混乱させる」	315175	3
前代名詞形	動詞	<i>šRšôr-</i>	/ʃɾ. ^h ʃo:r-/	「動揺させる」	35375	3
前代名詞形	動詞	<i>šNhtê-</i>	/ʃnh. ^h te:-/	「憐れむ」	35317	3
前代名詞形	動詞	<i>šNt-</i>	/ʃnt-/	「探し求める」	351	3
前代名詞形	動詞	<i>šMšêt-</i>	/ʃm. ^h ʃe:t-/	「奉仕する、礼拝する」	35371	3
前代名詞形	動詞	<i>tsBko-</i>	/tsβ. ^h ko-/	「減らす」	13417	3
前代名詞形	動詞	<i>tNtôn-</i>	/tɱ. ^h to:n-/	「似る、比較する」	15175	3
前代名詞形	動詞	<i>tMho-</i>	/tɱ. ^h ho-/	「点火する」	1537	3
前代名詞形	動詞	<i>tBtôb-</i>	/tβ. ^h to:β-/	「形作る」	14174	3
前代名詞形	動詞	<i>smNt-</i>	/smnt-/	「正確にする、順序付ける」	3551	3
前代名詞形	動詞	<i>sLsôl-</i>	/sl. ^h so:l-/	「宥める」	35375	3
前代名詞形	動詞	<i>sBtôt-</i>	/sβ. ^h to:t-/	「準備する」	34171	3
前代名詞形	動詞	<i>Rhtê-</i>	/rh. ^h te:-/	「反映する、後悔する」	5317	3
前代名詞形	動詞	<i>Rhna-</i>	/ɾ. ^h hnä-/	「欲する」	5357	3
前代名詞形	動詞	<i>Nt-</i>	/nt-/	「持ってくる」	51	3
前代名詞形	動詞	<i>cMso-</i>	/k ^h m. ^h so-/	「座る」	13537	3
前代名詞形	動詞	<i>cMko-</i>	/k ^h m. ^h ko-/	「悩ます」	13517	3
前代名詞形	前置詞	<i>Nhêt-</i>	/n. ^h he:t-/	「～の中で」	5371	3
前代名詞形	前置詞	<i>Ntoot-</i>	/n. ^h to.ʔot-/	「～によって、～から」	51711	3
前代名詞形	前置詞	<i>Nta-</i>	/n. ^h tä-/	「～の」	517	3
前代名詞形	前置詞	<i>Nsô-</i>	/n. ^h so:-/	「～の後で」	537	3
前代名詞形	前置詞	<i>Nsô-</i>	/n. ^h so:-/	「～を除いて」	537	3
前代名詞形	前置詞	<i>Mmo-</i>	/m.mə-/	対格標識	557	3
前代名詞形	前置詞	<i>ečNt-</i>	/ʔɛ.t ^h nt-/	「～なしで」	7251	3

表 6: レベル 3・前代名詞形・アクセント有り [続き]

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前代名詞形	前置詞	<i>ačNt-</i>	/ʔa.tʃnt-/	「～なしで」	7251	3
前代名詞形	存在詞	<i>mNta-</i>	/mɲ.tä-/	否定所有	5517	3
前代名詞形	名詞	<i>rNt-</i>	/ʔrnt-/	「名前」	551	3

前代名詞形は通常アクセントを持つが、助動詞の前代名詞形は、それ自体ではアクセントはもたず、前代名詞形に後続する代名詞の後の動詞にアクセントをゆずる。

表 7: レベル 3・前代名詞形・アクセント無し [続き]

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前代名詞形	複合助動詞	<i>MpRtre-</i>	/m.p.r.trə-/	否定使役態命令法 (否定命令 <i>MpR-</i> 、使役動詞前代名詞形 <i>tre-</i>)	515157	3
前代名詞形	複合助動詞	<i>hMptre-</i>	/hm.p.trə-/	「～が～している時に」(所格 <i>hM-</i> 男性単数定冠詞 <i>p-</i> 使役動詞前代名詞形 <i>tre-</i>)	351157	3
前代名詞形	複合助動詞	<i>Ntere-</i>	/n.tə.rə-/	「～が～する時(後)に」	51757	3
前代名詞形	助動詞	<i>Nta-</i>	/n.te-/	関係第 1 完了相	517	3
前代名詞形	助動詞	<i>Nta-</i>	/n.te-/	第 2 完了	517	3
前代名詞形	助動詞	<i>Mpate-</i>	/m.p.e.tə-/	否定未然相	51717	3
前代名詞形	助動詞	<i>N-</i>	/n-/	接続	5	3

3.2 レベル 2 の語彙

レベル 2 の語は、スーブラリニアー・ストロークの位置にソノリティ・ピークが来ない。しかし、これらは、宮川 (2013:149) のタブローを改良した表 8 のタブローのように音節形成に関する制約と制約のランキングで考えた場合に説明できるものである。

表 8: タブロー

/ʔemnte/	*DOUBLE-HIGH-SON	ONSET	*DOUBLE-SON-PEAK	SON-PEAK
a. /ʔe.'mnte/	*!		*	*
b. /ʔemn.'tɛ/	*!			
c. /ʔem.n.'tɛ/		*!		
d. /ʔem.'nte/			*!	*
☞d. /ʔe.mn.'tɛ/				*

*DOUBLE-HIGH-SON 高いソノリティの音がオンセットもしくはコーダに2つ以上来ることはできない。

ONSET 初頭音節以外の音節は必ずオンセットを持たなければならない。

*DOUBLE-SON-PEAK 音節内で2つ以上ソノリティ・ピークをつくってはならない。

SON-PEAK ソノリティ・ピークの音が音節核を構成する。

amNte /ʔa.mn.'tɛ/は「西」や「地獄(ハデス)」を意味する自由形態素であり、宮川(2013)で取り上げたコプト語サイド方言の語である。ここでも、この語を例として使った。*DOUBLE-HIGH-SONをやめて、*COMPLEXで説明したほうが、一般的かもしれないが、その場合、サイド方言にある単語である *shime* 「女」など複数の初頭子音を持つ単語が説明できない。なお、*shime* の初頭子音にスープリニアー・ストロークがくる例は確認されていない。この制約群と制約ランキングは、レベル1の語彙でも妥当である。ソノリティ・ピーク以外にもオンセットやコーダの長さの制限から音節核が生じる現象は、次のように、タシルハイト¹⁵・ベルベル語などでも確認されている。*tŽ.la* 「迷う」*txZ.nas* 「店」(Dell and Elmedlaoui 1985:106)。この言語の更なる最適性理論的な説明は(Prince and Smolensky 2002:11ff.)でなされている。

表9および表10はレベル2の語彙である。

表 9: レベル2・前名詞形

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前名詞形	助動詞	<i>Nne-</i>	/n.nə-/	第3未来	557	2
前名詞形	前置詞	<i>hirN-</i>	/hi.rn-/	「～で、～の上 で」	3655	2
前名詞形	前置詞	<i>harN-</i>	/ha.rn-/	「～の下で、～ の前で」	3755	2
前名詞形	動詞	<i>tNneu-</i>	/tn.nəw-/	「送る」	15576	2
前名詞形	動詞	<i>tBbe-</i>	/tβ.βə-/	「清める」	1447	2

¹⁵ *ta-* *-t* はこの言語で言語名を表す接周辞であるため、シルハ・ベルベル語としたほうが呼び名として最適であろう。

表 9: レベル 2・前名詞形 [続き]

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前名詞形	動詞	<i>cBbie-</i>	/kʲβ̥.β̥jə-/	「辱める、謙虚である」	134467	2

表 10: レベル 2・前代名詞形

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前代名詞形	名詞	<i>atNrat-</i>	/ʔe.t̚rät-/	「追跡不可能」	715571	2
前代名詞形	前置詞	<i>NbLla-</i>	/n̥.β̥l̥.lä-/	「～を除いて」	54557	3&2
前代名詞形	動詞	<i>cNrat-</i>	/kʲn̥.rät-/	「探す」	15571	2
前代名詞形	動詞	<i>cMcôm-</i>	/kʲm̥.kʲo:m-/	「触る」	15175	2
前代名詞形	動詞	<i>clMlôm-</i>	/kʲl̥m̥.lo:m-/	「捻る、組み合わせる」	155575	2
前代名詞形	動詞	<i>tNnoou-</i>	/t̚n̥.now-/	「送る」	15576	2
前代名詞形	動詞	<i>tNno-</i>	/t̚n̥.no-/	「送る」	1557	2
前代名詞形	動詞	<i>tBbo-</i>	/t̚β̥.β̥o-/	「清める」	1447	2
前代名詞形	動詞	<i>sBbêt-</i>	/sβ̥.β̥e:t-/	「割礼する」	34471	2
前代名詞形	動詞	<i>Nrat-</i>	/n̥.rät-/	「突き止める」	5571	2
前代名詞形	前置詞	<i>nMma-</i>	/n̥m̥.mä-/	「～と」	5557	2
前代名詞形	助動詞	<i>Nne-</i>	/n̥.ne-/	否定第 3 未来時制	557	2
前代名詞形	動詞	<i>tMrô-</i>	/t̚m̥.ro:/	「黙る」	1567	2
前代名詞形	動詞	<i>thBbio-</i>	/th̥β̥.β̥jə-/	「蔑む」	134467	2
前代名詞形	動詞	<i>cBbio-</i>	/kʲβ̥.β̥jə-/	「蔑む」	134467	2

3.3 レベル 1 の語

レベル 1 の語は、単純なソノリティ・ピークでも、表 8 でも説明できない語彙である。表 11 および表 12 はレベル 1 の語彙の分析結果である。

表 11: レベル 1・前名詞形

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前名詞形	前置詞	<i>mNNSa-</i>	*/m̥n̥.n̥.sə-/	「～の後ろで」	55537	1

表 11: レベル 1・前名詞形 [続き]

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前名詞形	動詞	<i>tNtn-</i>	*/tṅ.tn-/	「似る、比較する」	1515	1
前名詞形	動詞	<i>touN-</i>	*/twṅ-/	「起きる、起こす」	165	1
前名詞形	動詞	<i>ouM-</i>	*/wṅ-/	「食べる」	65	1
前名詞形	存在詞	<i>ouNte-</i>	*/wṅ.tə-/	肯定所有	6517	1
前名詞形	存在詞	<i>ouN-</i>	*/wṅ-/	肯定存在	65	1
前名詞形	存在詞	<i>neuN-</i>	*/nə.wṅ-/	過去の肯定存在 (転換詞 <i>ne</i> + 存在詞 <i>ouN-</i>)	5765	1
前名詞形	接頭辞	<i>hNou-</i>	*/hṅw-/	様態の副詞形成 (所格 <i>hN-</i> + 不定冠詞 <i>ou-</i>)	156	1
前名詞形	複合助動詞	<i>mNnsatre-</i>	*/mṅ.ṅ.se.trə-/	「～の後で」	55537157	1

表 12: レベル 1・前代名詞形

語形	品詞	語彙	音素表記	意味・機能	ソノリティ	レベル
前代名詞形	名詞	<i>souNt-</i>	*/'swṅt-/	「値」	1651	1
前代名詞形	動詞	<i>Rana-</i>	*/r.ʔe.'na-/	「喜ばせる」	5757	1
前代名詞形	動詞	<i>thNo-</i>	*/thṅ.'ə-/	「潰す」	1357	1
前代名詞形	存在詞	<i>ouNt-</i>	*/'wṅt-/	肯定所有	651	1
前代名詞形	前置詞	<i>mNnsô-</i>	*/mṅ.ṅ.'so:-/	「～の後ろで」	55537	1
前代名詞形	前置詞	<i>mNnsô-</i>	*/mṅ.ṅ.'so:-/	「～の後で」	55537	1

*hNou-*は所格前置詞 *hN-*と不定冠詞 *ou-*から形成されており、語彙的というよりも、統語的に捉えられるものである。現に、Smith (1999) では *hN-*と *ou-*は別々の語彙として掲載されている。おそらく、コプト語書記は、形態素境界を優先させたとも考えられるため、これらは、問題にはならない。例えば、表 12 の *Rana-*「喜ばせる」は、*Rnobe*「罪を犯す」が *R-*「する (*eire* の前名詞形)」と *nobe*「罪」に分解できるように、おそらく *R-*「する (*eire* の前名詞形)」と化石化した *ana-*「～の喜び(?)」という名詞の複合であろう。*mNnsatre-*などは、レベル 3 の表にある *mNnsa-* (/mṅṅ.se-/ 「～の後で」 55537) とは異なり、なぜ 2 つ目の *n* が音節核を構成する

のかが、表 8 のタブローでは説明できない。しかしながら、表 8 を改良すれば、これらを含めて包括的に説明できる可能性もある。*tNm-* に関しては、最後の *n* が音節核を形成し、スーブラリニアー・ストロークが成節子音を表すならば、*tNtN-* となるはずであるが、そうはなっていない。しかしながら、これは前名詞形であるため、*/w/* や */j/* で始まる名詞が後ろに来た場合、2 目の *n* はソノリティ・ピークを形成せず、スーブラリニアー・ストロークが音節核を表すとする説に合致する。Smith (1999) はそのような場合の例から抜き出してこの *tNm-* を掲載した可能性がある。

問題になるのは、*touN-*、*ouM-*、*ouNte-*、*ouN-*、*neuN-*、*souNt-*、*thNo-*、*ouNt-* である。これらは、ソノリティー・スケール、表 8 をもってしても説明できない。*neuN-* は preterite の転換詞の *ne-* と肯定の存在詞 *ouN-* の融合形であるが、*ouN-*、*ouNte-*、*ouNt-* は古エジプト語の *wnn/wn* 「ある・存在する」(『ピラミッド・テキスト』、Allen 2013a および Allen 2013b、PT 223, 217b など) にさかのぼる古い語彙であり、スーブラリニアー・ストロークが付された子音の前にさらなる形態素境界があるとは考えられず、それらの子音の前で */w.ʔn-/* のように、声門閉鎖音を仮定することはできない。*ouM-* も同じく、古エジプト語の *wnm* 「食べる」(『ピラミッド・テキスト』、Allen 2013a および Allen 2013b、PT 46, 35c など) にさかのぼる語であるため、同様である。*souNt-*、*touN-* に関しては、歴史的にスーブラリニアー・ストロークが付された子音の前でさらなる形態素境界があったかどうかは不明である。

4 考察

Smith (1999) では、*<r>*、*<l>*、**、*<n>*、*<m>* というソノリティーが高い子音にしかスーブラリニアーが付されていない、というこれほどの好条件をつけたのにもかかわらず、ソノリティー・スケールでも、表 8 でもスーブラリニアー・ストロークが成節子音を表すとする説を支持しない例が出たのは問題であり、この説が誤りであるである可能性が高い。このソノリティー・スケールを英語のものと同じ、「母音 $> j, w > r > l > n, m > [...]$ 」(Giegerich 1992:133) にした場合、さらに、当説に反する例が多くなる。これには、レベル 2 の語彙の多く、例えば、*hirN-* などが相当する。いくつかの写本では *sôtp* など、無声破裂音にもスーブラリニアー・ストロークが現れるものもある。このことからみても、“the superlinear stroke is a syllabic marker: it is placed over consonants that serve in place of a vowel as a sonorous center”(Depuydt 1993:133-134) とする、スーブラリニアー・ストローク=成節子音説は全ての例において妥当ではない。ここで、レベル 1 の語を「例外」とみなせば、整合性を保てる。しかしながら、「例外」を設けずに説明する方法もある。

スーブラリニアー・ストロークが *<e>* に相当する音を挿入することを示す記号であるとする、コプト教会の伝統的な解釈は、健全である。実際、スーブラリニアー・ストロークと *<e>* の交替は数多く見られる。また、コプト語の写本には、いくつか省略記号が用いられる。ノミナ・サクラにもちいられるスーブラリニアー・ストロークはこの一種である。また、*n* の省略記号で、母音字の上で末端にフックがついたような線で表される *ny line* という記号もある。スーブラリニアー・ストロークも、これらの省略記号のように、母音字の省略と考えたほうが妥当

ではないだろうか。これらの省略記号の存在も、子音字上のスープリニアー・ストロークが母音の挿入、逆に考えれば、母音字の省略であるとする説を裏付ける。

スープリニアー・ストロークが書かれたり書かれなかったりするの、もともとスープリニアー・ストロークが書かれる位置に、シュワーが音韻論的に存在して、それが、音声実現するとき、日本語の草 [kusa] のように、母音が消失することがあるためと考えたほうが、例外を設けずに済む。

5 結論

今回 Smith (1999) 記載の拘束形態素をソノリティーを中心に分析した結果、スープリニアー・ストロークの位置にソノリティ・ピークが来ない例 (レベル 2、レベル 3) が多数存在することがわかった。音節形成の制限からはレベル 2 の語彙は説明できたものの、レベル 3 の語彙は説明できなかった。一方、スープリニアー・ストロークが母音挿入を表す記号であるとする説では、今回取り上げた音韻論的拘束形態素の例において齟齬はない。このことから、近年多くの文法が支持しているスープリニアー・ストロークが成節子音を表すとする説に疑義を呈し、スープリニアー・ストロークが母音挿入を表す記号である説を見直す必要があると結論付けた。

略号一覧

//	音素表記	< >	字素表記	-	形態素境界
:	形態素境界が不明瞭	CAUS	causative	CONJ	conjunctive
DAT	dative	DEF	definite	DEM	demonstrative
M	masculine	OPT	optative	PL	plural
POSS	possessive	PRENOM	prenominal	QUOT	quotative
REL	relative	SG	singular	WC	Wackernagel clitic

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP15J05370 の助成を受けたものである。また、当論文を改訂するにあたり査読者と編集者には多大なご助力を頂いた。この場を借りて感謝を申し上げる。

参考文献

- Akamatsu, Tsutomu (2013) "Syllabic Consonants in English: phonetic and phonological aspects," *Moenia*, Vol. 19, pp. 149-224.
- Allen, James P (2010) *Middle Egyptian: An Introduction to the Language and Culture of Hieroglyphs*, Cambridge: Cambridge University Press, 2nd edition.
- Allen, James P. (2013a) *A new concordance of the Pyramid Texts*, Vol. 1, Providence: Brown University, available online at https://www.dropbox.com/sh/0xo88uy04urnz0v/o16_ojF8f_, last accessed on 2016-01-31.

- (2013b) *A new concordance of the Pyramid Texts*, Vol. II, Providence: Brown University, available online at https://www.dropbox.com/sh/0xo88uy04urnz0v/o16_ojF8f_, last accessed on 2016-01-31.
- (2013c) *The Ancient Egyptian language: An historical study*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Beltzung, Jean-Marc and Cédric Patin (2007) “A CVCV analysis of syllabic consonants in Coptic,” <http://stl.recherche.univ-lille3.fr/sitespersonnels/patin/Presentations/2007-Beltzung&Patin-Coptic-syllabic-consonants.pdf>, accessed on 2014-4-30.
- Browne, Gerald M. (2002) *Old Nubian Grammar*, Vol. 330 of *Languages of the World/Materials*, München: Lincom Europa.
- Crum, Walter E. (1999) *Coptic dictionary*, Oxford: Oxford University Press.
- Dell, François and Mohamed Elmedlaoui (1985) “Syllabic Consonants and Syllabification in Imdlawn Tashlhiyt Berber,” *Journal of African Languages and Linguistics*, Vol. 7, pp. 105-130.
- Depauw, M. and T. Gheldof (2014) “Trismegistos. An interdisciplinary Platform for Ancient World Texts and Related Information,” in Ł. Bolikowski, V. Casarosa, P. Goodale, N. Houssos, P. Manghi and J. Schirrwagen eds. *Theory and Practice of Digital Libraries - TPDL 2013 Selected Workshops (Communications in Computer and Information Science 416)*, Cham: Springer, pp. 40-52.
- Depuydt, Leo (1993) “On Coptic sounds,” *Orientalia, (new series)*, Vol. 64, pp. 338-375.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (2007) “1. Word: a typological framework,” in Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald eds. *Word: A Cross-linguistic Typology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Dyneley Prince, John (1902) “The modern pronunciation of Coptic in the Mass,” *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 23, pp. 289-306.
- Giegerich, Heinz J. (1992) *English phonology: An introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Gordon, Matthew (2006) *Syllable Weight: Phonetics, Phonology, Typology*, New York: Routledge.
- Gordon, Matthew, Edita Ghushchyan, Brad McDonnell, Daisy Rosenblum, and Patricia Shaw (2012) “Sonority and central vowels: A cross-linguistic phonetic study,” in Parker, Steve ed. *The Sonority Controversy*, Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 219-256.
- Greenberg, Joseph H. (1990[1986]) “Were there Egyptian Koines?” in Denning, Keith and Suzanne Kemmer eds. *On language: Selected writings of Joseph H. Greenberg*, Stanford: Stanford University Press.
- Hedrick, Charles W. and Elaine H. Pagels (1990) *Nag Hammadi codices XI, XII, XIII*, Leiden: Brill.
- Hintze, Fritz (1980) “Zur koptischen Phonologie,” *Enchoria*, Vol. 10, pp. 23-91.
- Horner, George William (1911) *The Coptic Version of the New Testament: In the Southern Dialect*,

- otherwise called Sahidic and Thebaic with Critical Apparatus, Literal English Translation, Register of Fragments and Estimate of the Version Volume I, The Gospels of S. Matthew and S. Mark*, Oxford: Clarendon Press.
- Hurtado, L. W. (1998) “The Origin of the Nomina Sacra: A proposal,” *Journal of Biblical Literature*, Vol. 117, No. 4, pp. 655-673.
- Junge, Friedrich (2001) *Late Egyptian Grammar*, Oxford: Griffith Institute, translated by David Warburton.
- Kasser, Rodolphe (1991) “Djinkim,” in Atiya, Aziz Suryal ed. *The Coptic encyclopedia*, Vol. 8: Macmillan, pp. 110-112.
- Kenstowicz, Michael (1997) “Quality-sensitive stress,” *Rivista di Linguistica*, Vol. 9, p. 1572013188.
- Kuhn, K. H. (1956) *Letters and Sermons of Besa*, Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium, vol. 157. *Scriptores Coptici*, tomus 21, Louvain: Imprimerie Orientaliste L.Durbecq.
- de Lacy, Paul (2002) “The Formal Expression of Markedness,” Ph.D. dissertation, University of Massachusetts Amherst.
- Lambdin, Thomas O. (1983) *Introduction to Sahidic Coptic*, Mason: GA: Mercer University Press.
- Layton, Bentley (2011) *A Coptic grammar: With chrestomathy and glossary: Sahidic dialect*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 3rd edition.
- Loprieno, Antonio (1995) *Ancient Egyptian: A linguistic introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.
- (1997) “Egyptian and Coptic phonology,” in Kaye, Alan S. and Winona Lake eds. *Phonologies of Asia and Africa*, Vol. 2, Indiana: Eisenbrauns, pp. 431-460.
- Peust, Carsten (1999) *Egyptian phonology: an introduction to the phonology of a dead language*, Vol. 2 of *Monographien zur ägyptischen Sprache*, Göttingen: Peust & Gutschmidt.
- Polotsky, Hans Jakob (1933) “Zur koptischen Lautlehre II,” *Zeitschrift für ägyptische Sprache und Altertumskunde*, Vol. 69, pp. 125-129.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (2002) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*, VOA Version, 8/2002.
- Schroeder, Caroline and Amir Zeldes (2013-) “Coptic SCRIPTORIUM (Sahidic Corpus Research: Internet Platform for Interdisciplinary multilayer Methods),” <http://copticscriptorium.org/>, accessed on 2015-12-30.
- Smith, Richard (1999) *A concise Coptic-English lexicon*, Atlanta, GA: Scholars Press, 2nd edition.
- Takla, Hany N (1998-1999) “The Revival and Modernization of the Coptic Language,” *Bulletin of the Saint Shenouda the Archimandrite Coptic Society*, Vol. 5, pp. 117-124.
- Till, Walter C. (1932) “Der Murrelvokal,” *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde*, Vol. 68, p. 121f.
- Uspenskij, Boris (2013) “Glagolitic Script as a Manifestation of Sacred Knowledge,” *Studi Slavis-*

tici, pp. 7-47.

Westendorf, Wolfhart (1992) *Koptisches Handwörterbuch*: Carl Winter.

Worrell, William H (1933) “Syllabic consonants in Sahidic Coptic,” *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde*, Vol. 69, pp. 130-131.

——— (1934) *Coptic sounds*, Vol. 26 of University of Michigan Studies Humanistic Series, Ann Arbor: University of Michigan Press.

Worrell, William H. and Wener Vycichl (1942) “Popular traditions of the Coptic language,” in Worrell, William H ed. *Coptic texts in the University of Michigan collection*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 297-342.

宮川 創 (2013) 「コプト・エジプト語サイド方言のスペリングにおけるスーブララリニアーストロークと音素配列 自由形態素を中心に」, 『地球研言語記述論集』, 第6巻, 141-154頁.

滋賀県湖北北部方言の命令形式について¹

脇坂美和子

京都大学大学院・mauswara57@gmail.com

キーワード：滋賀県湖北方言 命令形式 命令文 終助詞

1 はじめに

湖北方言は滋賀県湖北地方 (地図 1 : 琵琶湖の北東部、現在の長浜市、米原市) で話されている日本語の方言である。この方言は特徴的な待遇表現を持つことや、いくつかのアクセントが混在していることなどから県下でも特異な方言と位置づけられてきた (井之口 1952、笥 1962 ほか)。中でも 2006 年の市町村合併以前の伊香郡、東浅井郡に当たる北部地域 (おおむね姉川を境に南北に分割した北部に当たる) には、比較的古い形式や用法が保存されている場合がある。本稿ではこれを湖北北部方言と称する。この方言では地域に特徴的な形式のほか京阪方言や県内の他の方言と共通の形式も観察され、これらが形態的、統語的に異なったふるまいを示しつつ共存している。しかしその形態音韻論についての分析はほとんど行われてきていない。そこで本稿では、湖北北部方言の共時的な記述の一環として、この方言の命令形式に焦点を当てる。初めに 2 節において形態音韻的に多様な命令形式がどのように現れうるかを記述する。さらに、それらがどのような意味と機能を持って使い分けられているかを分析する。3 節ではこれらの形式に後続する終助詞を観察し、これらが命令文に接続する際に 3 つのグループに分けられることを示す。4 節で結論と今後の課題を述べる。



地図 1 : 滋賀県湖北地方 (脇坂 2015)

¹ 本稿の執筆にあたり鈴木博之氏、山田真寛氏より多くの有益なコメントをいただいた。また植田尚樹氏、千田俊太郎先生より多くの助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

この方言にはアクセントが異なる変種が現在も混在している (脇坂 2015) が、本稿で扱う変種は京阪式アクセントの一種と考えられるものでアクセント単位の初頭に高起式、低起式のアクセント型の区別をもちピッチの下がり目が弁別的な多型アクセント体系である。例文はかたかなで表記し次のとおりアクセントおよびイントネーション情報を付す。本文中の語形にも原則としてアクセント情報を付すが、アクセントに関係がない文脈で煩雑になる場合には省略している。

- ・ [は音声的なピッチの上がり目を示す²。
- ・] は音声的なピッチの下がり目を示す。
- ・ [[は高起式のアクセント型を示す。
- ・ # は低起式のアクセント型を示す。
- ・ 文末イントネーションが指定される場合は文末イントネーション境界を = で示し、上昇調下降調をそれぞれ ↑、↓ で示す。

引用先表示がある例文は、2004 年に湖北北部方言を母方言とする筆者が同方言でインタビューしたデータによる。情報提供者は、湖北北部地方に言語形成期から発話時現在まで居住している 2004 年現在 84 歳の男性 (以下 (A) とする)、と 82 歳の女性 (以下 (B) とする) であるが、(A) は兵役のため 18 歳から 26 歳まで外地で生活している。(A)、(B) は夫婦で同時にインタビューを行っている。引用先の表示がない例文は 18 歳まで湖北北部地方で生活した筆者の内省による。

本文中では煩雑となるのを避けるため、禁止形やテ形複合動詞などにおいて「センデ」「スルナ」「シテクレ」のように動詞未然形を「セ」、連用形を「シ」、終止形を「スル」で代表させることがある。

2 湖北北部方言の命令文の形式

本節では、湖北北部方言の命令表現にはどのような形式が現れうるかを記述しその特徴について概観する。ここで言う命令は基本的には「相手に動作を強制する場合のムード」(益岡・田窪 1992 : 118) であるが、この方言では後述するように命令形命令であっても依頼に近い機能を持つこともあり、必ずしも明示的な命令専用の形式ではない。ここでは明示的、非明示的を問わず、広く命令として認識され機能しうる形式を扱う。

2.1 先行研究

湖北方言について、滋賀県全域の方言記述の中で言及されているものとしては井之口 (1952)、笥 (1962) がある。いずれも滋賀県方言の全体像を簡潔に記述しており現在では既に失われた形式なども記述されているため歴史的な資料価値も高くなっている。これらにおいて湖北方言は県下でも特殊な方言と位置づけられているが、その根拠は主に京阪式とは異なるアクセントの混在と特徴的な待遇表現である。この特徴的な待遇表現については

² 後述の用例に見るように、ピッチの上がり目は複合語の形態素境界などを示すことがある。

宮治 (1987) などの研究があるが、先に述べたとおり湖北方言の命令形式について形態音韻論的に詳しく記述した研究は管見の限りでは存在しない。井之口らの研究においても湖北方言への言及は部分的なものに留まり、また既に半世紀以上が経過していることから、この方言の共時的な分析にあたっては、その前提となる現状に即した記述が求められるところである。本稿では湖北方言の中でも、地理的な事情などによって近年の共通語や京阪方言の影響による画一化が遅れたと見られる北部方言のうち、京阪式アクセントを持つ変種(脇坂 2015)を資料としその命令形式について記述を試みる。

2.2 命令形命令

湖北北部方言の動詞の命令形は男女ともに使用され、直接的な命令を示す。丁寧さの度合いや男女差は主として後続の待遇表現を示す接辞や終助詞およびイントネーションに標示される。この方言に特徴的な点として、命令形が単独で使われる場合に、ぞんざいなニュアンスが希薄である点が挙げられる。近隣の京阪方言と比較すると、たとえば森山 (1999) には京都市方言の命令形について「女性の発話としては、目下の人相手でも、「入れ」などとはかなり言いにくい。」(森山 1999 : 43) といった制限や語末のイントネーションについて「共通語でも京都市方言でも、常体の裸の命令形は上昇できない。」(同書 : 45) といった制約が存在することが記述されている。しかしこれらの記述は湖北北部方言には該当しない。この方言では命令形単独の形態は女性の発話としても許容され、語末に上昇調のイントネーションが可能である。この二点は関連しており、命令形単独の発話がまったく男女差なしに現れるのではなく、女性については文脈によっては上昇調イントネーションを伴った命令形命令のほうが下降調の命令形よりも許容されやすい。この点に関しては、次に見る連用形命令との関連で次節で検討する。表 1 に動詞の活用型とその命令形を示す。

表 1 : 湖北北部方言動詞の命令形

活用	終止形	命令形語幹	命令形接辞	アクセントパターン
五段	読む #yo[m-u]	#yo[m-	-e	アクセント型とモーラ数による(表 2)
一段	起きる #oki-[ru]	#o[ki]yo ³	-2 型
サ変	する [[su-ru	[[se]-	-e	
		[[si-]yo	
カ変	くる #ku-[ru]	[[ko]-	-i	
クレ	くれる [[kure-ru	[[ku]r-	-e	0 型
		#oku[r-	-e	

³ 後述のとおり、終止形が低起式 2 モーラの動詞でも命令形接辞の前では核を取る。そのため命令形の語頭は高起式になる。

以下 0 型は核なし、-2 型、-3 型はそれぞれ語末から 2 モーラ目、3 モーラ目にアクセント核があることを示す。サ行変格活用 (サ変)、カ行変格活用 (カ変) のほかに、動詞[[クレルは、一段活用型の活用をするが已然形と命令形において一段動詞と異なる [[クレ (已然形)、[[ク]レ (命令形) という活用形を取り、命令形にのみ丁寧さを示す接頭辞「オ」が付いた #オク[レがある。接尾辞のヨ (以下 -yo とする) は必ず直前に核を取るので]-yo と表記し、変格活用の下がり目は語彙的な核とみなして語幹に] を付ける形とした。

五段動詞は 子音語幹に命令形接辞の -e を取り、アクセントパターンは下記の表 2 のように語頭のアクセント型 (低起式・高起式) とモーラ数によって決まる。一段動詞と変格動詞は原則として-2 型である。一段動詞は母音語幹に命令形接辞の -yo を取り、アクセント型やモーラ数に関わらず -yo の直前のモーラにアクセントを取る。サ変は [[セ]ーであるが [[シ]ヨという一段動詞型の変異もあり終助詞が付かない命令形単独では[[セ]ーが優勢である。カ変は [[コ]イである。動詞 [[クレルの命令形は上述のとおり[[ク]レとなるが、接頭辞のオが付く命令形の#オク[レは低起式でアクセントは核なしの 0 型になる。五段動詞の語頭の式とモーラ数によるアクセントパターンを表 2 に示す。

表 2：湖北北部方言五段動詞の命令形アクセント

語頭の	モー	アクセントパターン	例
低起式	2	0 型	#to[re 取れ
	3,4	-2 型	#a[so]be 遊べ #haki[da]se 吐き出せ
	5 以上	複合語の後部要素が 2 モーラなら-2 型、それ以外は-3 型	#aruki[to]ose 歩き通せ #aruki[ki]re 歩ききれ
高起式	2	-2 型	[[i]ne 往ね (帰れ)
	3	-3 型	[[ka]ere 帰れ
	4	複合語の後部要素が 3 モーラなら-3 型、ただし形態素境界が認識されない場合は-2 型 ⁴ 。それ以外は-2 型	[[miya]bure 見破れ [[miyabu]re [[hatara]ke 働け
	5 以上	複合語の後部要素が 2 モーラなら-2 型、それ以外は-3 型	[[tatakida]se 叩き出せ [[tatakika]ese 叩き返せ

次にそれぞれの活用型の例を見る。上述のとおり命令形命令はこの方言ではジェンダーなどの観点からは比較的中立的な表現形式であるが、直接的な命令であるため近親者や子供に対して用いることが多い。(1)、(2) は五段動詞の命令形である。

⁴ 同一話者でもゆれがある。

- (1) [[イヤ]ナラ [[オ]ケ⁵
嫌なら捨て措け(嫌だというなら勝手にしなさい)
- (2) #ワタシワ [[シラン]シ #オ[ジ]ーチャンニ #カイテ[モ]ラエ (B)
私は知らないのでおじいちゃんに描いてもらいなさい

(1) は子供が好き嫌いを言って食べ物を嫌がった時などに用いられる。(2) はインタビュー時に話題に出ている祭事の食卓の様子について図示を依頼した筆者に (B) の女性が返事をしている場面である。女性が命令形命令を単独で使用している例であるが、この発話では語末イントネーションは上昇調にはなっていない。その場合でもこの女性から見て筆者が孫のような親しく低い待遇関係にあるために許容される。

一段動詞は (3) のように接尾辞の **-yo** を取る。また (4) のように、終止形が低起式 2 モーラの #ミ[ル、#デ[ル]であっても命令形接辞の **-yo** の前ではアクセント核を取るため、語頭は高起式になる(脇坂 2015)。

- (3) [[ハ]ヨ #オ[キ]ヨ

早くおきろ

- (4) [[ハ]ヨ [[デ]ヨ

早く出ろ

この方言では、一段活用型の命令形の接尾辞と全ての活用型の意向形の接尾辞が同じ分節音の **-yo** になるが、一段動詞の命令形は直前にアクセント核を取るのに対して意向形は原則として語幹に高いピッチで接続するため、アクセントによって弁別できる。

サ変には上述のとおり [[セ]ーのほかに [[シ]ヨがあるが [[シ]ヨは単独では現れにくく (6) のように終助詞を伴って現れることが多い。カ変は (7) のように命令形は [[コ]イになる。ただし 筧 (1962) には「湖北では「コーエ」[koi → koé → ko:é]の形がある。」(筧 1962 : 181) という記述があり、これは現在も観察されることがある。この方言では /oi/ が /e:/ となる例は見られず、「細い」/hosoi/~hosoe/、「樋」/toi/~toe/ など /oi/~oe/ の交替が現れる場合がある。

- (5) [[ハ]ヨ [[セ]ー / ? [[シ]ヨ

早くしろ

- (6) [[ハ]ヨ [[セ]ーイヤ / [[シ]ヨイヤ

早くしろよ

⁵ この表現と同様の意味で決まり文句として「嫌ならオケソクもったいない」という囃しことばもある。オケソクはこの地域に多い浄土真宗用語の華足(けそく)で仏前に供える餅などを指す。捨て措けの意味の「措け」と「オケソク」を掛けたもの。

(7) [[ハ]ヨ [[コ]イ

早く来い

動詞[[クレルの命令形[[ク]レとこれに丁寧さを示す接頭辞のオが付いた#オク[レ、さらにこれらが連用形に後続する接続助詞のテに付いて複合動詞として使われるシテクレ、シトクレ (<シテオクレ) は、2015年現在でおおよそ70代以上の高齢層では男女を問わず極めて生産的である。テ形複合動詞となる場合は、シテクレに関しては形態音韻的な切れ目の位置がシテ・クレ、とシ・テクレ、の二通りに捉えられるため、命令形アクセントにもゆれがあり、-2型のシテク]レと、-3型のシテ]クレ (動詞が低起式であればシテ[ク]レ/シ[テ]クレ) の双方が許容される。シトクレについては、これがシテオクレに由来することは、双方の形式が自由変異に近い形で現れうる⁶ことから明らかであるため形態音韻的な切れ目はシ・トクレのみで、-2型の*シトク]レは存在しない。二重母音が融合した後もオクレの低起式が残った形の[[シ]トクレと、トクレが一つの接辞として認識され、-3型となる[[シト]クレ (動詞が低起式であれば#シ[ト]クレ) の二通りになる。しかし若年層ではオクレ、トクレは著しく衰退し、クレ、テクレに集約している。(8)の子守唄はこの地域に伝承されてきたものであるが若年層に伝えられているかは不明である。(歌なので例文の表記はひらがなにシアクセント表記はつけない。)

(8) (子守唄) うちの○○はよい子でござる、みんなよい子と呼んでおくれ

次の(9)は、昔は叱られて家から閉め出されて泣いている子が多かったという話で、(10)は集落の頼母子講(たのもしこう)⁷の掛け金を払えないので待ってもらうように区長に掛け合いに行ったという話である。

(9) #コラエ[テ]クレ、#コラエ[テ]クレー [[チュ]ーテ [[ヨ]ー [[ナイテル [[コーガ [[ギョ]ーサン #アッ[タ]ガナ (A)

許してくれ、許してくれと言ってよく泣いている子がたくさんいたではないか

(10) [[ク]チャーサン [[ト]コエ [[ス]マン [[ケ]ンド #モー [[チョ]イト #マッ[ト]クレー #ゼニ[ガ] #ナ[イ]ンヤ [[チュ]ーテ [[コトワリニ [[イッタン]⁸ヤテ (A)

区長さんの所へ、すまないけれどもうちちょっと待ってください、お金がないのですと言って、断りに行ったということだ

⁶ 現在ではシテオクレの形式は廃れつつあり若年層では見られなくなっている。しかしその場合でもこれらの形式が同じ意味であることは直観的に認識していると考えられる。

⁷ 集落で行われていた無尽講で、加入者から掛け金が集められて抽選などで順にまとまった金額を手にできるしくみ。

⁸ この方言では撥音も核を担う。

(9) は、20 世紀前半ぐらいまでの親の権威が強かった時代を想定した子供から親への発話であり (10) も当時の社会階層を反映して区長が社会的に地位の高い存在であった時代の発話で、いずれもここでは話者から見て待遇価の高い相手に対して命令形を単独で使用している例である。これは命令形単独の発話が必ずしも丁寧さに欠けるぞんざいな表現ではないことを示している。双方ともに直接引用の形式であり⁹、命令形命令が実質的には依頼として機能する場合があることがわかる。(10) では待遇価が高い区長に対してトクレが使われている。このことは、クレ、テクレに接頭辞オが付いた形のオクレ、トクレは、クレ、テクレよりも丁寧なニュアンスがあることを示している。(10) の「マツクレ」を現代共通語に訳す場合は「待っておくれ」ではなく「待ってください」に近い。しかし上述のとおりオクレ、トクレの形式そのものが衰退しつつあるため、この丁寧さの差異も現在では消滅しつつある。

以上が湖北北部方言の命令形命令の形式である。次に連用形命令について見る。

2.3 連用形命令

連用形命令は動詞の連用形を命令に用いる形式で、京阪方言においては広く観察されている(森山 1999、牧野 2009 ほか)。井之口 (1952) はこれを連用命令法と称し、以下のように述べている。

普通の命令の他に、たとえば「買イー」(「お買い」の意)、見一(「お見」の意)のように、動詞の連用形を、親しい間柄または同輩以下に対する親愛的な命令をあらわすのに用いる。なお上方ではこの連用命令法を近世後期以降用いている。

(井之口 1952 : 42)

この井之口の観察は、現在の湖北北部方言にも適用できる。本稿ではこの連用形の後に何も付かない形式を命令形命令に対して連用形命令と呼ぶ。

湖北北部方言の命令形命令が京阪方言での用法とは話者の分布が異なっていた点に対応して、この形式にも京阪方言とは異なる話者の分布が見られる。連用形命令はたとえば大阪市方言では「日常的な行為指示場面で男女ともに使用される。」(牧野 2009 : 79) とあるのに対して湖北北部においては、小さい子供に話しかける場合などを除いては主に女性が使用する形式である¹⁰。この対照を表 3 に示す。京阪方言では、より直接的な命令形命令をほぼ男性のみが使うことによって標示されるジェンダー差が、湖北北部方言では、より「親愛的」ないし間接的な連用形命令をほぼ女性のみが使うことによって標示されている。

⁹ 明示的に直接引用を示す形式があるのではないが、文末に長母音が現れている(コラエテクレー、マツクレ)ことや、声色を使っていることなどにより判断される。

¹⁰ 筆者の観察では、湖北方言でも南部では連用形命令が北部よりも広く普及しており使用頻度も高く男性にも使う人が多いと見られる。また、北部でも若年層では分布が異なる可能性がある。ただし定量的なデータはないので詳しい調査は今後の課題としたい。

ただし、この方言では命令形命令の語末を長母音化し上昇調のイントネーションにすることにより命令形の直接的なニュアンスを緩和できる。このような上昇調イントネーションを伴う命令形は女性に使用されることが多い。

表 3：命令形命令と連用形命令の使用者の男女別分布

	湖北北部方言	京都市・大阪市方言
命令形命令	男女共に使用	ほぼ男性のみ
連用形命令	ほぼ女性のみ	男女共に使用

連用形が 1 モーラになる一段動詞については、湖北北部方言では内容語には最小性制約が働くため、上に引用した井之口 (1952) にも見られるとおり、連用形命令は長母音で現れる。アクセントは活用型に関わらず語頭の式により、高起式であれば (11) のように平板に、低起式であれば (12) のように連用形接辞の -i または -e を含むモーラの前でピッチが上昇する。

- (11) #コッチ [[キー
こっちへおいで
- (12) #ク[ス]リ #ノ[ミ
薬をのみなさい～薬をのんでね

動詞 [[クレルは連用形と命令形がともにクレという形式を取るが、アクセントを考慮に入れると現れるのは命令形のみで連用形命令の用法は見られない。すなわち、[[クレルの連用形は [[ク]レテ、[[クレナガラのように高起式であるので、もし連用形命令が現れるとするならば、アクセントは (13) のように平板になるはずである。しかし実際には (14) のように-2 型の命令形アクセントの形式しか現れない。

- (13) *#ワタシ[ニ]モ[[クレ
私にもくれ
- (14) #ワタシ[ニ]モ[[ク]レ
私にもくれ

しかしテ形複合動詞においては、(15) - (18) のような例が観察される。

- (15) [[チョ]ット[[ミテク]レ/[ミテ]クレ
ちょっと見てくれ
- (16) [チョ]ット[[ミテ]ク[レ
ちょっと見てくださいな

(17) [[チョ]ツト[[ミ]トクレ/[[[ミト]クレ

ちょっと見てくださいな

(18) [[チョ]ツト[[ミ]トク[レ/[[[ミト]ク[レ

ちょっと見てくださいな

(15) は命令形命令で、これまでに見たように形態音韻的な区切りをとミテ・クレと捉えるかミ・テクレと捉えるかによって二通りのアクセントがありうる。(16) はこれまで見てきたアクセントパターンによれば、クレが低起式であってさらにミテとクレの間に音韻的な区切りがあれば連用形命令と考えられる。しかし [[クレルの連用形 [[クレは上述のとおり高起式であって低起式ではない。可能性として考えられることは、このクレは、接頭辞のオが付いた低起式の #オク[レのオが脱落した形式ではないかということである。2.2 で見たように、オクレ、トクレの形式は、クレ、テクレよりも丁寧なニュアンスがある。そのため、命令形よりも丁寧なニュアンスを持つ連用形命令にはクレ、テクレは使用されず、オクレ、トクレ (<テオクレ) が使用されたと考えるとアクセントパターンに合致する。テ形複合動詞のテオクレ (teokure) には eo の母音連続のうち、e が落ちる場合と o が落ちる場合があり、後者の場合に母音の o は落ちてもアクセント単位境界での低起式が残り、連用形命令のシテ#オク[レ → シテ]ク[レの形式になったと考えることができる。e が落ちる場合は命令形命令は (17) に、連用形命令は (18) になる。(16) は (18) の変異と考えることができる。なお (18) の例のうち (16) に対応するのは [[ミト]クレの形式のみで、(18) の [[ミ]トク[レに対応する*[[ミ]テク[レという形式は存在しない。ここでは形態的には融合している複合語においてアクセント単位の境界が残っているものと仮定している。しかしもしアクセント単位が新しく形成されたとするならば、1 つのアクセント単位にピッチの山が 2 か所存在することになる。この点については、今後この方言のアクセント体系の中で統一的な説明を与えなければならない。

(19) はアクセントパターンは (18) と同じで、昔、生活が苦しい上出 (かみで、山間部) の人々が山で柴を拾って平野部の方へ売りに行った時の話題である。連用形命令が依頼として機能している。

(19) #シバ[オ #オ[一]テ #ドー[カ [[コー]トク[レ [[チュ]ーテ #モツテカ[[ハル #ワ
[ケ]ヤ (A)

柴を背負って どうか買ってくださいなと言って 持っていかれる訳だ

森山 (1999) は京都市方言において「何もつかない連用形をゼロ連用形命令、「テ」による連用形の命令をテ形命令と呼び、両者を連用形命令として一括したい」(森山 1999 : 42) とし、この双方について「直接的な依頼を表す」(同上) としている。湖北北部方言においては、テの後に何も付かないテ形命令は高齢層ではあまり見られず、これまでに見た

テクレ・トクレの形式を取るほうが一般的である。しかし 2015 年現在で 60 代以下ぐらいの世代になるとテ形命令もさかんに見られ、ニュアンスは (20) - (21) のように依頼になる。

- (20) #ホッ[チ #カイ[テ
そちら側を持ってください(重いものを持ち上げる時)
- (21) [[ア]レマー、#コラエ[テ/[[コラエテ¹¹、 [[コンナニ [[セントイテ
あれまあ、許してね、こんなにしないでね
(高齢女性が高額の頂き物をした時のお礼など)

ジェンダー差はこの形式がよく使用される世代層ではあまり見られないが高齢層で使用される場合は女性に多い傾向が観察される。アクセントは動詞の活用型やモーラ数に関わらず、テが前部要素に高く後続する。

2.4 命令形命令と連用形命令の差異が示す文法化の過程

湖北北部方言における命令形命令と連用形命令の差異は、次のような例でも観察される。

- (22) [[ミテ]ミ / [[ミテミ]ヨ
見てみろ
- (23) [[ミテミ] / [[ミテミー
見てごらん

テ形複合動詞ミテミルの命令形命令は (22) [[ミテミ]ヨ、連用形命令は (23) [[ミテミーとなり、いずれも会話では語末モーラが脱落してそれぞれ[[ミテ]ミ、[[ミテミとなる形式がある。湖北北部方言では双方の形式に語末モーラの脱落前と脱落后が並存しているため、脱落后の形態の意味の差異が命令形命令と連用形命令の差異に基づくことが観察できる。しかし命令形接辞のヨが失われつつある湖北南部方言などでは、意味の差が明示されていた語末モーラが失われた結果、脱落后の形態のみを手がかりに語末のミを終助詞と捉え、これらの形式の意味の差異はイントネーションの差異であるとみなされることがある。脱落后の形態はそれぞれシテ+助詞として共時的には (24) - (25) のように分析することも可能である。

- (24) [[ミテ=ミ↓
見てみろ
- (25) [[ミテ=ミ↑
見てごらん

¹¹ 動詞コラエル「許す」は、低起・高起のアクセント型にゆれがある。

このことは、方言接辞のアクセントを含む形式を記述することによって、共時的には方言終助詞のイントネーションの差異として分析されうる形式に、助詞が文法化する前の複合動詞などの形式を提示し、意味の差異について根拠を与えられる可能性を示している。また湖北南部方言や京阪方言のように、当該方言では根拠となる形式が失われていても、湖北北部方言のように近隣方言に元になる形式が残存している場合があることも例証している。もとより古い形式が推定できることで全てを説明できる訳ではなく、当該の形式がどのような過程を経ていつごろ文法化したのか、音韻的な変化との関連はどうなっているのかなど個々の事例については個別に検証されなければならないが、方言終助詞の意味を分析する際には考慮すべきことのひとつといえるだろう。

2.5 待遇表現を含む命令

湖北方言は北部に限らず非常に待遇表現が豊かな方言であるが、命令形に限っては、基本的に待遇価が高い相手には使用されにくいこともあってそれほど多くの形式はない。また、共通語の影響を受けて最も大きく変化している部分でもあり、特に待遇価の高い相手に対して使用する形式は「テクダサイ」に取って代わられつつある。

(26) は 2.2 で見たトクレの命令形の形式に丁寧さを示す接辞のヤスが付いた形でほぼ最上級の待遇価を示し命令形であっても依頼を表す。(27) は動作主への敬意を示し連用形に後続する接辞のナール/ナハルの命令形であるが、連用形ではレが落ちてクナーレ/クナハレ、さらには接尾辞も短縮されたクナイの形式が使われる。これも丁寧な命令の形式で実質的には依頼を表す。なお京都市方言などで見られる「お入りやす」(森山 1999: 44) のような「お+連用形+やす」の形式は、湖北北部方言では定型化した挨拶表現を除きほぼ見られなくなっている。

(26) [[モー [[シモト]クレ [ヤ]ス

もう仕舞ってください(まだ仕事をしている人に終わることを促す)

(27) [[モー [[シモ]トク[ナ]ーレ/ [[シモ]トクナ[イ

もう仕舞ってください

(28) はシマウの未然形に待遇価が話者と同等か低く親しみのある相手に対する接尾辞の[ンス・[ヤンス (-j)ans-) ¹²の命令形 [[ヤ]ンセが後続した形式である。本稿で扱っている変種では語末音節にs/hの交替がある ¹³。(26) - (27) に見られる聞き手に対する敬意の標示はな

¹² この接辞は待遇表現だけでなくアスペクト、有生性、人称等を示し多機能であるが詳細については稿を改めたい。子音語幹動詞に接続する時には初頭子音の[j]が脱落する。

¹³ s/h の交替は湖北方言では一般的によくあるがこの変種では特に多く、全ての変種でこの接辞に交替が見られるわけではない。また一般的にはsが優勢であるがこの変種ではhが優勢である。

く、待遇価は低いが親しみを示し、家族など親疎の関係が親しい間柄であれば年長者などにも使える。

- (28) [[モー [[シマワ]ンセ/ [[シマワ]ンへ
もう仕舞いなさいな

2.6 アスペクト表現を含む命令

共通語のシテイロに当たる表現は湖北北部方言ではシテイ]ヨになるが、イは脱落した形がこの方言では標準であるため、命令形はシテ]ヨになる。

- (29) #シ[ズ]カニ [[シテ]ヨ
静かにしている
- (30) #シ[ズ]カニ [[シテテ
静かにしていて
- (31) #シ[ズ]カニ [[シト]レ
静かにしている

(29) は共通語では「静かにしている」であって「静かにしてよ」ではない。(30) は「静かにしていて」に当たる。また待遇表現とアスペクト等を標示する接尾辞トルを用いても(31) のように同様の命令になるが、この場合は(29) よりも聞き手の待遇価が下がり乱暴なニュアンスになり、この表現を用いるのはほぼ男性のみである。また大阪市方言に見られるような「じっとシトッテ」という形式は湖北北部方言には見られない。湖北方言ではトルは非常に待遇価が低く、近親者の待遇価を下げる聞き手尊敬表現か、動作主が子供や目下の間、ペットなどの場合にしか使えない。大阪市方言などのように聞き手に親しみをこめて気軽に使用する言葉ではないので、この接辞を使用してテ形命令に当たる柔らかい表現ができないためと考えられる。

このほか共通語のシテシマエに当たる形式は、命令形命令のシテマエと連用形命令のシテマイがあり、動詞のアクセント型に応じて以下のように現れる。

- (32) #ハヨ [[イッテ]マエ
早く行ってしまえ
- (33) #ハヨ [[イッテマイ
早く行ってしまってね
- (34) #ハヨ #クテ[マ]エ
早く食べてしまえ
- (35) #ハヨ #クテマ[イ
早く食べてしまってね

すなわち、動詞が高起式であれば命令形命令は (32) のように[[シテ]マエ、連用形命令は (33) のように[[シテマイに、低起式であれば命令形命令は (34) のように#シテ[マエ]、連用形命令は (35) のように#シテマ[イになる。

2.7 禁止の命令

湖北北部方言の最も基本的な禁止の命令は終止形+ナのスルナである。(36) のように終止形接辞のル -ru- はナ -na の直前で ru ~ n ~ φ の交替を示す。

- (36) [[アケ]ルナ / [[アケ]ンナ / [[アケ]ナ
開けるな

子音語根動詞では、-n- や (-φ-) - na が後続することは音節構造上できないため、五段活用では (37) の例に見られるように、原則としてそのような交替はない。ただし、語根末が r で終わる子音語根動詞については、(38)のように-n-na の形式をとることができる。語根末の r が接尾辞の -ru- と接続する際に接辞の初頭子音が脱落し、語根末の r が接辞の一部と再解釈されて交替が起きたと考えられる。

- (37) [[サガ]スナ / * [[サガ]ンナ / * [[サガ]ナ
探すな
- (38) [[サガ]ルナ / [[サガ]ンナ / * [[サガ]ナ
下がるな

2.5、2.6 で見た待遇表現やアスペクト表現を用いる場合も(39) - (41) のように接辞の終止形+ナの形式になる。

- (39) [[アケヤ]ンスナ
開けないで
- (40) [[ミテ]ルナ / [[ミテ]ンナ / [[ミテ]ナ
見ているな
- (41) [[アケテマ]ウナ
開けてしまうな

(42) のような動作の結果が継続する動詞の場合、シテルナの形式は動作そのものではなくその結果の継続を禁じる表現になる。「戸を [[アケテ]ルナ / [[アケテ]ンナ / [[アケテ]ナ」といえば戸を開けた結果戸が開いているという状態を禁じ、語用論的には寒いので戸を閉めろ、というような意味合いを持つ。共通語の「シテルンジャナイ」のように開けてしまったことを咎めるような意味を持たせることもできる。

- (42) [[アケテ]ルナ/[[アケテ]ンナ/[[アケテ]ナ
開けているな

強い禁止の命令には終止形に形式名詞のコト+ナランが後続するスルコトナランが用いられる。ただしこの形式は若年層では使われなくなっている。

- (43) #ミル[[コ]ト [[ナ]ランホン
決して見てはいけないぞ

コトナランが強い禁止であるのに対してコトイランは必要ないという意味を含む弱い禁止であり文脈によっては提案になる。こちらは比較的若年層でも使用されている。

- (44) #ミル[[コ]ト [[イ]ランホン
見るなよ～見なくてもいいよ

依頼に近い弱い禁止は「しないでいてくれ」という意味のセントイテクレ、セントイトクレになり、この用法ではイテのアスペクトマーカとしての意味は消失している。*センドクレのようにトイテを介さずにクレルに直接接続できる否定のテ形は観察されない。クレルをつけないテ形命令の形式も使用され、若年層ではクレルをつけない形式のほうが一般的になりつつある。

- (45) #ミントイ[テ]クレ/#ミントイ[テ]
見ないで

禁止命令に現れる接辞のシンタグマティックな関係を見ると (46) のような禁止命令文では否定辞は動詞とボイスなどを表す接辞の後に付く。禁止を表すナは文末に付き文全体にかかる。ただしムードを表す終助詞は後続することができる。

- (46) #ヨマ サ ン ト イ トクレ
読む 使役 否定 助詞 アスペクト 待遇・命令
読ませないでください

- (47) #ヨマ サ ンス ナ イヤ
読む 使役 待遇 禁止 終助詞
読ませるなよ

2.8 その他の命令の形式

この他、連用形+ヤレのシヤレはやや強い命令を示すが現在ではほぼ消滅したと見られる。先行研究に言及があるものとしては、井之口 (1952) に「連用禁止法」として連用形+ナで禁止を表す用法の記録があるが、これも現在では全く見られない。ただし、一段動詞については終止形のルが落ちた形と連用形は同形であるために形式だけでは見分けは付かない。井之口 (1952)、笥 (1962) のほか、現代の用例を集めた中山 (2012) などにも言及があるクダイはクレの意とされるが、少なくとも本稿で扱う変種では全く使われていない。これは地域的な偏りとも考えられ、湖北北部において使用している地域があるかどうかは今後の課題としたい。

3 湖北北部方言の命令文に付く終助詞

これまで述べてきたように、湖北北部方言の命令文では終助詞によってムードやジェンダーなどが標示されることがある。また実際の会話においては命令文の形態は終助詞を伴って現れることが非常に多い。本節では、湖北北部方言の命令文に付く終助詞とその性質を概観する。

3.1 湖北北部方言の命令文に付く終助詞

湖北方言の命令文に付く終助詞には以下の(48) – (52)に見られるものがある。

- (48) #ヨ[メ]イヤ
読め (ほぼ男性専用)
- (49) #ヨ[メ]ノ
読みなさい (ほぼ女性専用)
- (50) #ヨ[メ]ヨ
読めよ (命令を確認している)
- (51) #ヨ[メ]イネ/#ヨ[メ]イナ
読みなよ (強い奨励でまだ読んでいないのかというニュアンスもある)
- (52) #ヨミ[ヤ/#ヨミ[ナ
読んでね (提案を念押ししているニュアンス)

命令文の形態と命令文のほかにこれらの終助詞が付ける主な文のタイプを表4に示す。

表 4 : 命令文に後続する終助詞と先行できる文のタイプ

先行形式	例	イヤ	(イ)ノ	ヨ	イネ	イナ	ヤ↑ ¹⁴	ナ↑
命令形命令	読め	○	○	○	○	○	×	×
連用形命令	読み	×	×	×	×	○	○	○
テ形命令	読んで	×	×	×	×	○	○	○
シテクレ形	読んでくれ	○	○	○	○	○	×	×
シ ¹⁵ ヤンセ形	読まんせ	×	○	×	○	○	×	×
シトレ形	読んどれ	○	×	○	×	×	×	×
シテヨ形	読んでよ	○	○	○	○	○	×	×
スルナ形	読むな	○	○	○	○	○	×	×
セントイテ形	読まんとして	×	×	×	○	○	○	○
先行する文	例	イヤ	(イ)ノ	ヨ	イネ	イナ	ヤ↑	ナ↑
疑問文	読むか	○	○	×	○	○	×	○
反語文	読もか	○	○	×	○	○	×	×
意向形	読も ¹⁶	×	×	×	×	×	×	○
終止形宣言文	読む	×	×	×	×	×	×	○

表 4 に見るとおり、湖北北部方言の命令文に後続する終助詞には (1) 命令形命令に後続するタイプ (イヤ、(イ)ノ、ヨ)、(2) 連用形命令に後続するタイプ (ナ、ヤ)、(3) どちらにも後続するタイプ (イナ) の 3 種類がある。イネは判断が難しいところがあるがふるまいを見ると (イ)ノに近いタイプのものである。このうち、ジェンダー差を標示するのはイヤと (イ)ノで前者がほぼ男性のみ、後者がほぼ女性のみ分布になっている。この両者はシヤンセ形、シトレ形を除いては完全にふるまいが一致している。シヤンセ形、シトレ形については 2.5、2.6 でそれぞれ見たとおり、シヤンセ形は親しみを標示するため、やや高圧的なニュアンスがあるイヤと共起せず、シトレ形は非常に待遇価が低く乱暴なニュアンスを与えることから一般に女性の発話には見られることがない。従ってこの空白は社会的な理由によると考えられる。これ以外の終助詞ははっきりしたジェンダー差は示さない

¹⁴ イヤ、イナと紛らわしい形態を区別するため、上昇調のイントネーションを付す。

¹⁵ ただし、(-j)ans-)は五段活用では未然形に接続する。

¹⁶ この方言では意向形は基本的に短母音で現れる。

が、筆者の観察の限りではイネ、イナは女性に多くヨは男性に多い傾向がある。ただし、これらには共通語や京阪方言の影響もあると見られる。

次にこれらの終助詞の性質を概観する。

3.2 湖北北部方言の命令文に付く終助詞の性質

井上 (2002) は方言終助詞の文法的性質を記述する際のポイントとして使用可能な文タイプと他の終助詞との共起関係を指摘している。平叙文や疑問文などさまざまなタイプの文で使える終助詞は汎用性が高く命令文など使える文のタイプが特化されているものは汎用性が低い。この観点から湖北北部方言の終助詞を観察すると、まず表4の中ではヨ、ヤ↑だけが命令文にのみに接続し、汎用性の低い形式であるように見える。しかし、ヤ↑についてはそういえるが、ヨについては、上記の表には入っていない種々のムードを標示する平叙文の中にはヨが接続できる形式もあるため、必ずしも汎用性が低いとはいえない。ヨはイヤ、(イ)ノとともに命令形命令に後続するグループに属し、テ形、セントイテ形を含む連用形命令には後続できない。この点において、命令形命令に後続するイヤ、(イ)ノ、ヨと、連用形命令に接続するヤ、ナของกลุ่มははっきりとした対照をなし、相補分布している(社会言語学的な理由が考えられるシヤンセ形、シトレ形を除く)。このことから、たとえば連用形命令に後続するタイプの終助詞は連用形命令の形式とともにこの方言に後から導入されたのではないかということなどが推測される。明らかなことは、この方言には命令文に付く終助詞の中に命令形命令に後続するグループ、連用形命令に後続するグループ、両方に後続し中間的な性質を示すグループが存在するという点である。命令形命令に後続するグループは疑問文にも反語文にも接続できるという点では汎用性が高いが意向形や、終止形のみ宣言文には後続できない。ナは汎用性が高いが反語文には後続できない。ヤは、テ形を含む連用形命令の形式に後続するのみで、汎用性は低い。イヤ、イ(ノ)、ヨのグループにイネ、イナを加えた命令形に接続する終助詞は、ヨを除いて疑問文反語文にも接続し汎用性の高さを示すが、いずれも意向形や終止形の宣言文には接続できない。しかしこれらについても終止形に他の終助詞が付いた形式の宣言文には接続できる場合がある。

終助詞の汎用性の高さとその意味との関係について井上 (2006) は、たとえば共通語の「よ」のような極めて汎用性の高い終助詞の意味記述は比較的抽象的なものになり、これに対して方言終助詞には汎用性が低く具体的な心的態度を直接とらえる分析が中心となることを指摘している。井上 (2006) で示されたような命令文のみに後続できる方言終助詞などと比較すると、湖北北部方言に現れる終助詞はヤを除いて他の文タイプにも接続できることから汎用性が高いといえるが、2節で見たように、命令文であってもその形式に応じたさまざまな制約があり、文のタイプ以外に待遇価やジェンダーなど社会言語学的な状況もその分布に関連している。このような個々の終助詞の性質を詳しく記述するには、命令文以外の文を検討する必要があり、これについては稿を改めたい。また、湖北北部方言の命令文に後続する終助詞は、先に述べたとおりヤを除き他の終助詞と共起が可能で命令文

に後続する形式が文末に位置する。どの終助詞と共起するかは終助詞によって異なり、これについても今後の課題としたい。

4 結論と今後の課題

本稿では、滋賀県湖北方言の命令形式について形態音韻的な記述を行った。2 節では命令形命令と連用形命令の差異をはじめこの方言で生産的な形式について詳しく記述し、待遇表現やアスペクト形式を含む命令、禁止命令など命令文に現れる形式を概観した。3 節では命令形に後続する終助詞を観察し、終助詞の中には命令形に後続するグループと連用形命令に後続するグループ、いずれにも接続するグループがあることを明らかにした。今後の課題はそれぞれの形式の意味的な記述をさらに詳細に記述し分析することである。3 節で扱った終助詞については命令文以外の文に付く場合と比較対照することによってそれぞれの性質を明らかにしなければならない。また、湖北北部方言のうち本稿で扱った変種は一部地域に限られているため、引き続き方言/変種の調査を行う必要がある。さらにこの方言の体系的な記述に向けて研究を進めたい。

参考文献

- 井上優 (2002) 「方言終助詞の記述研究のために」 『日本語学』 21 (2): 48-57.
- (2006) 「第4章モダリティ」 小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂 『シリーズ方言学2 方言の文法』 137-179. 東京: 岩波書店
- 井之口有一 (1952) 『滋賀県言語の調査と対策: 方言調査編』 彦根: 井之口有一 (私家版)
- 寛大城 (1962) 「滋賀県方言」 榎垣実 (編) (1962) 『近畿方言の総合的研究』 159-217. 東京: 三省堂
- 中山敬一 (2012) 『ええほん 滋賀の方言手控え帖』 彦根: サンライズ出版
- 牧野由紀子 (2009) 「大阪方言の命令形に後接する終助詞「ヤ・ナ」」 『阪大日本語研究』 21: 79-108.
- 宮治弘明 (1987) 「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」 『国語学』 151: 38-57.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』 東京: くろしお出版
- 森山卓郎 (1999) 「命令表現とそのイントネーション—京都市方言を中心に—」 音声文法研究会 (編) 『文法と音声II』 39-55. 東京: くろしお出版
- 脇坂美和子 (2015) 「滋賀県湖北方言の動詞に付く助詞と接辞のアクセントについて」 『京都大学言語学研究』 34: 69-88.

スワヒリ語カエ方言の「関係節」

—準体言としての記述—

古本 真

京都大学大学院 / 日本学術振興会¹

キーワード：スワヒリ語、関係節、準体言

0 はじめに

柴谷²は体言化 (nominalization) には、レキシコンに登録される名詞を作り出す語彙的体言化 (lexical nominalization) と、一時的に名詞に準ずる機能を担う準体言を生み出す文法的体言化 (grammatical nominalization) があると述べている (Shibatani 2009: 187, 柴谷 2014: 5)。

(1) 日本語の体言化の例 (柴谷 2014: 5 より一部抜粋)

語彙的体言化： 遊び、相撲取り、召し使い

文法的体言化： [太郎と花子が結婚している] のは誰もが知っている。(事態準体言)

[花子が \emptyset 作ってくれた] のをみんなで食べた。(項準体言)

([] 内が準体言。 \emptyset は空所を表す。)

そして、類型論的立場から、「関係節」と呼ばれるものの実体は、準体言であり、その準体言が名詞同様に主名詞を修飾していると説いている。この主名詞は、一般に関係節の「先行詞」と呼ばれるものにあたる。

スワヒリ語カエ方言³には、(2) - (4) に挙げるような「関係節」として記述される⁴四つの形式が存在する。形式的特徴の詳細については 3 節に譲るが、ここで簡単に違いを述べると、動詞が接頭辞 *m* でマークされるもの ((2a) (3a))、動詞が接頭辞 *o*⁵ でマークされるもの ((2b) (4a))、*m* でマークされたコピュラ動詞に定形節が後続するもの ((2c) (3b))、接頭辞 *o* でマー

¹ 本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費 (DC1) (課題番号: 25・3150) の研究成果の一部である。この研究のためにデータを提供してくれた Sigombe Haji Choko 氏、草稿の段階から有益な助言を与えてくれた大西正幸氏、宮川創氏には、ここに記して謝意を表します。

² 柴谷の議論については、2014年7月5日の大阪大学での講演 ‘Rethinking relative clause’ のスライド (http://www.let.osaka-u.ac.jp/eigogaku/Matt_Shibatani_koenkai.pdf 2016年3月31日閲覧) や、2014年11月7日の東京外国語大学での講演「関係節再考」の要旨 (http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/images/20141107koenkai_abs.pdf 2016年3月31日閲覧) も参照されたい。

³ カエ方言は、主にタンザニア連合共和国・ザンジバル、ウングジャ島南部のマクンドウチ郡で話されるスワヒリ語の地域変種の一つである。一般に「スワヒリ語」として知られる標準スワヒリ語とは、語彙、音調、名詞や動詞の屈折形式など、多くの点で違いがみられる。本稿で提示する例文は、特に述べない限り、マクンドウチ郡北部カジェングワ出身で、今もそこに住む50代男性から得られたものである。

⁴ Racine-Issa (2002: 153 - 170) 参照。

⁵ 接頭辞 *o* は名詞クラスによって形式が異なる。Co という形式で現れることが多いため、本稿では便宜上、*o* という表記で代表させる。詳しくは、2.1 節を参照されたい。

クされたコピュラ動詞に定形節が後続するもの ((2d) (4b)) に分けることができる。これらの形式は「関係節」と呼ばれるが、以下に示す通り「先行詞」無しで項となり得る。

- (2) a. [**m**⁶-na-tenda kazi] ka-cha-vata pesa⁷
 G1.SM.NMLZ-IPFV-do work 3SG/G1.SM-IRR-get money
 b. [a-na-e-tenda kazi] ka-cha-vata pesa
 3SG/G1.SM-IPFV-G1.NMLZ-do work 3SG/G1.SM-IRR-get money
 c. [**mw**-a-wa ka-na-tenda kazi sasa] ka-cha-vata pesa
 G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-do work now 3SG/G1.SM-IRR-get money
 d. [a-**ø**-e-wa ka-na-tenda kazi sasa] ka-cha-vata pesa
 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-IPFV-do work now 3SG/G1.SM-IRR-get money
 「仕事をする人はお金を得るだろう」(主語の例)

- (3) a. nyi-**m**-kut'u [**m**-na-kwea **m**nazi]
 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF G1.SM.NMLZ-IPFV-climb coconut tree
 b. nyi-**m**-kut'u [**mw**-a-wa ka-na-kwea **m**nazi]
 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-climb coconut tree
 「私はヤシの木に登っている人を見た」(目的語の例)

- (4) a. [**N**-ne-vyo-funga] vi-chukue
 1SG.SM-INCH-G8.NMLZ-tie G8.OM-take.SUBJ
 「わたしが縛ったもの(袋)はもっていきなさい」
 b. [vi-**ø**-vyo-wa ha-ja-vi-funga] vy-ache
 G8.SM-PRF-G8.NMLZ-COP 3SG/G1.SM.NEG-INCH.NEG-G8.OM-tie G8.OM-leave.SUBJ
 「彼が縛っていないもの(袋)は置いておきなさい」(目的語の例)

上記の例を「関係節」として記述するのであれば、「先行詞」のない例は、「先行詞」が省略されていると分析されるかもしれない。カエ方言には名詞クラスと呼ばれる名詞分類が存在する。接頭辞 *m* や *o* は名詞クラスと一致する接頭辞として分析できる。このことから (2) (3) では *mt'u* 「人」、(4) では *vipolo* 「袋」が省略されていると考えられるかもしれない⁸。しかし、「先行詞」が省略されているとは仮定できない例が存在する。

⁶ カエ方言の音素目録は以下のように提示できる。母音 /i, e [ɛ], a, o [ɔ], u/, 無声無気閉鎖音 /p, t, k/, 無声無気破擦音 /ch [tʃ]/、有気閉鎖音 /p' [pʰ], t' [tʰ], k' [kʰ]/、有気破擦音 /ch' [tʃʰ]/、前鼻音化阻害音 /mb, nd, nj [ndʒ], ng [ŋg]/、入破音 /b [β], d [d̪], j [j̪], g [g̪]/、摩擦音 /f [ɸ], v [β], th [θ], dh [ð], s, z, sh [ʃ], gh [ɣ], h/, 鼻音 /m, n, ŋ, ny [ɲ], ng' [ŋʰ], N/, 流音 /l, r/, 接近音 /y [j], w/. /m, N/ は成節的鼻音である。/N/ の調音点は未指定で後続する子音に同化する。[] 内の表記は IPA によるより近似的な音価である。本稿では [] 外の表記を用いる。この表記は概ね標準スワヒリ語の正書法に対応する。

⁷ 本稿では準体言化標識である接頭辞を太字で、準体言を [] で括り提示する。

⁸ 実際、(4) の例を確認する際は、*vipolo* 「袋」があるという文脈を設定している。

- (5) a. *ku-v-ijua*⁹ [a- \emptyset -vyo-tenda Juma leo]
 2SG.SM-G8.OM-KNOW.PRF 3SG/G1.SM-PRF-G8.NMLZ-do Juma.PN today
 b. *ku-v-ijua mambo* [a- \emptyset -yo-tenda Juma leo]
 2SG.SM-G8.OM-know.PRF matter 3SG/G1.SM-PRF-G6.NMLZ-do Juma.PN today
 「ジュマが今日やったこと知ってる？」
- (6) *ku-v-ijua* [i-na-vyo-ligwa]
 2SG.SM-G8.OM-know.PRF G9.SM-IPFV-G8.NMLZ-eat.PASS
 「(マンゴーの) 食べ方 (食べられ方) 知ってる？」
- (7) [a-na-vyo-tenda kazi] ka-na-lawa jasho
 3SG/G1.SM-IPFV-G8.NMLZ-do work 3SG/G1.SM-IPFV-get out sweat
 「仕事をするとき、彼は (いつも) 汗をかく」
- (8) [a- \emptyset -vyo-ja¹⁰-wa ka-na-tembea] ka-m-ono mwalimu
 3SG/G1.SM-PRF-G8.NMLZ-come-COP 3SG/G1.SM-IPFV-walk 3SG/G1.SM-3SG/G1.OM-see.PRF teacher
 「彼は歩いていたとき、先生に会った」

(5a) と (5b) は同じ意味となる。(5b) では、*mambo* 「事」という 6 クラス名詞の「先行詞」があり、接頭辞 *o* はこの「先行詞」と一致している。しかし、(5a) は 8 クラスの接頭辞 *o* が現れているが、「先行詞」がなく、省略されていると考えられる適当な名詞もない。(6) は 8 クラス接頭辞 *o* でマークされ、方法を表している。方法を表す名詞として、*namna* 「方法」があるが、9/10 クラス名詞で、8 クラスの形式である *o* と一致しないことから、(6) の「先行詞」としては考えられない。(7) (8) は 8 クラスの接頭辞 *o* でマークされ、時を示す副詞節を形成する例である。*wakati* 「時」という名詞がこうした節に前接することもあるが、*wakati* は 3 クラス¹¹名詞でこれも「先行詞」とは考えられない。

本稿では、(2) - (8) の例を踏まえ、これまで「関係節」とみなされてきた形式を柴谷のいう準体言として記述を行う。

1 節では、本稿での議論に関わる名詞クラスと呼ばれる名詞分類と定動詞の構造、コピュラ動詞、非動詞述語について説明する。続く 2 節で準体言の形式的特徴を記述する。3 節では、項として機能する準体言の特徴をより詳細に記述する。4 節では、主名詞 (先行詞) を

⁹ *ijua* 「知る」という動詞は目的語接辞なしで目的語が現れることも可能だが、実際の使用を見ると目的語接辞でマークされるのが一般的である。目的語が後続する場合、(5b) のように目的語の主名詞の名詞クラスが 8 クラスでなくとも、*ijua* 「知る」という動詞は 8 クラスの目的語接辞 *vi* でマークされることがある。

¹⁰ *ja* 「来る」という動詞は、AM 接辞 *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」と共起する際は、発話時より後の事態を、*li* 「完結否定」、*a/∅* 「完了 (準体言)」と共起する際は発話時より前の事態を表す標識として機能する。

¹¹ スワヒリ語規範文法では、*wakati* 「時」は 11 クラスの名詞に分類されるが、本稿では後述する通り、11 クラスを 3 クラスと別のクラスとして設定しない。

修飾する際の名詞句内の語順を記述する。5 節では、準体言内の語順を準体言標識との相対的位置に着目して記述する。

1 カエ方言文法概要

本節では、カエ方言の文法の中でも、準体言と関連する部分について説明する。具体的には名詞クラスと呼ばれる名詞分類、定動詞の構造、コピュラ動詞 *wa*、非動詞述語 *na* について述べる。

1.1 名詞クラスについて

他の多くのバントゥ系言語と同様に、カエ方言にも名詞クラスと呼ばれる名詞分類が存在する。バントゥ諸語研究やスワヒリ語研究では、一般に、名詞接頭辞の形式、一致要素の形式、複数形の形式などに基づき、名詞は分類されるが (Katamba 2003: 103, 112, Contini-Morava 1994)、本稿では、名詞クラスを文法的性と同様の分類と捉え¹²、名詞と一致する要素の形式にのみ基づき分類する。このように分類すると、1~10、15、16、18 と番号が付される 13 のクラスに分けることができる。この番号はバントゥ諸語研究で共通して用いられるものに従っている。Racine-Issa (2002: 30 - 49) は、標準スワヒリ語と同様に 11 クラス、17 クラスも認めているが、本稿では、この二つを独立したクラスとしてたてていないことに留意されたい。これは一致形式にのみ基づき分類した場合、この二つはそれぞれ、3 クラス、15 クラスとは別のクラスとみなすことができないためである。

1~10 クラスについては、基本的に奇数番号に属する名詞が単数、続く偶数番号に属する名詞がそれに対応する複数となる。15、16、18 はそれぞれ、動詞不定形 (15 クラス)、場所名詞 (15, 16, 18 クラス) のクラスとなる。

多くの名詞は、[接頭辞-語根] と分析することができ、接頭辞の形式はそれぞれのクラスで、概ね一貫している。多くの形容詞も同様に分析することができる。名詞を修飾する要素 (指示詞、所有詞、属辞、形容詞)、名詞と一致する動詞の接頭辞 (主語接辞、目的語接辞、準体言化接辞) は名詞クラスによって形式が異なる。以下にそれぞれのクラスの代表的な名詞と名詞修飾要素の形式を提示する。動詞に付加される接頭辞は後述する。

表 1：名詞とその一致要素の形式

	名詞	指示詞近称	所有詞「私の」	形容詞「よい」
1	<i>mt'u</i> 「人」	<i>yuno</i>	<i>yangu</i>	<i>ɱzuri</i>
2	<i>wat'u</i> 「人」 (複数)	<i>wano</i>	<i>wangu</i>	<i>wazuri</i>
3	<i>ɱkono</i> 「腕」	<i>uno</i>	<i>wangu</i>	<i>ɱzuri</i>
4	<i>mikono</i> 「腕」 (複数)	<i>ino</i>	<i>yangu</i>	<i>mizuri</i>

¹² これに伴い、名詞クラスを表すグロスとして G 'gender' を用いることとする。

	名詞	指示詞近称	所有詞「私の」	形容詞「よい」
5	<i>tunda</i> 「果物」	<i>lino</i>	<i>lyangu</i>	<i>zuri</i>
6	<i>matunda</i> 「果物」(複数)	<i>yano</i>	<i>yangu</i>	<i>mazuri</i>
7	<i>kit'u</i> 「物」	<i>kino</i>	<i>changu</i>	<i>kizuri</i>
8	<i>vit'u</i> 「物」(複数)	<i>vino</i>	<i>vyangu</i>	<i>vizuri</i>
9	<i>nguo</i> 「服」	<i>ino</i>	<i>yangu</i>	<i>zuri</i>
10	<i>nguo</i> 「服」(複数)	<i>zino</i>	<i>zangu</i>	<i>zuri</i>
15	<i>mahaa</i> 「場所」	<i>kuno</i>	<i>kwangu</i>	<i>kuzuri</i>
16	<i>mahaa</i> 「場所」	<i>vano</i>	<i>vangu</i>	<i>vazuri</i>
18	<i>mahaa</i> 「場所」	<i>mno</i>	<i>mwangu</i>	<i>muzuri~mzuri</i> ¹³

それぞれの名詞クラスの意味的特徴を把握することは容易ではない。ここでは本稿との議論と関わる部分について説明する。1/2 クラスの名詞はすべて有生物を指示対象とする。ただし、有生物を指示対象とする名詞の中には、他のクラスに属するものもある。親族名称の一致要素の形式は概ね 1/2 クラスのものであるが、所有詞のみ 9/10 クラスとなる。所有詞の形式まで考慮にいれ名詞を分類するのであれば、親族名称は 1/2 クラス、9/10 クラスとは別のクラスに属するものとみなされるが、本稿では便宜上、その一致形式に 1/2 クラス、または 9/10 クラスのグロスを付すこととする。8 クラスの一致要素は、(6)~(8) でも示した通り、8 クラスの主名詞と一致する以外に、様態や方法、時間を表す際に現れることがある。15、16、18 クラスの名詞は場所を指示対象とする。それぞれのクラスの詳細な違いは別稿に譲るが、例えば、それぞれのクラスの名詞は、概ね以下のような場所を表す際に用いられると考えられる。

15 クラス：所与の文脈から把握できない不定の場所。

16 クラス：所与の文脈から把握できる定の場所。

18 クラス：ある場所、モノの内部。

なお、15、16、18 クラスに属する一般名詞は、表 1 に挙げた *mahaa* 以外は、他のクラスに属する名詞に *ni* という接尾辞を付したものとして分析可能である。

1.2 定動詞の構造

定動詞の構造は以下のように一般化できる。

(9) (否定接辞) — 主語接辞 — (AM 接辞) — (目的語接辞) — 語幹

1.2.1 語幹

非借用語の動詞は、語幹を「語基—末尾辞」と分析すると、末尾辞の形式に応じて、基本

¹³ 18 クラスの *muzuri* の *mu* と主語接辞の *mu* は成節鼻音 *m̩* と自由交替する。

語幹、完了語幹、接続語幹という三つのタイプに分けることができる。このうち基本語幹と完了語幹が定動詞中に現れる。なお、本稿では基本語幹を動詞の引用形式として提示する。

基本語幹は、動詞にかかわらず、[語基-a]となる。完了語幹は動詞によって形式が異なる。接続語幹は、動詞にかかわらず、語幹の形式は[語基-e]となる。以下に完了語幹の一般化した形式と対応する動詞の基本語幹、接続語幹の形式を提示する。

表 2：非借用語動詞の語幹の形式

	完了語幹	基本語幹	接続語幹
完了語幹 1	...CV ₁ (C)-V ₁	...CV ₁ (C)-a	...CV ₁ (C)-e
完了語幹 2	...C(V)w-a	...C(V)w-a	...C(V)w-e
完了語幹 3	...V _m C-u	...V _m C-a	...V _m C-e
完了語幹 4	C-a	C-a	C-e
完了語幹 5	C-i	C(w)y-a	C(w)y-e
完了語幹 6	C-u	Cw-a	Cw-e

完了語幹 1 は最も一般的な形式である。語基の最終母音と同じ母音が末尾辞として現れる。

完了語幹 2 は語基が *w* で終わるタイプで、末尾辞は基本語幹同様に、*a* となる。完了語幹 2 の *w* は多くの場合、受動を表す派生接尾辞と分析できる。しかし、*chewa*「遅れる」、*fanikiwa*「成功する」のように、受動を表さず、また、対応する派生前の語基のない語幹も完了語幹 2 に含まれる。また *lewa*「酔う」のように、語基が *w* で終わっていても、完了語幹 1 に分類される動詞も存在する。

完了語幹 3 は、語基の最後の子音の直前に成節鼻音 *m*¹⁴ が現れるタイプで、末母音は *u* となる。

完了語幹 4、5、6 の語幹は概ね一音節である。

完了語幹 4 は、基本語幹と同様に *Ca* という形式となる。このタイプの動詞としてはコピー動詞 *wa*、*ja*「来る」、*k'a*「与える」が挙げられる。

完了語幹 5 は基本語幹が [C(w)y-a] となるタイプで、完了語幹の末尾辞は *i* となる。このタイプの動詞としては *lya*「食べる」、*nya*「雨が降る、糞をする」、*nywa*「飲む」が挙げられる。

完了語幹 6 は基本語幹が [Cw-a] となるタイプで、末尾辞は *u* となる。このタイプの動詞としては、*fwa*「死ぬ」、*gwa*「落ちる」、*pwa*「潮が引く」、*ivwa*「熟す」(非一音節語幹)が挙げられる。

なお、*cha*「夜が明ける」、*chwa*「日が沈む」、*ijua*「知る」、*ta*「卵を産む」、*langaNza*「修理する」¹⁵の完了語幹はどのタイプにも当てはまらない不規則な形式となる。以下にこれらの完了語幹と基本語幹を提示する。

¹⁴ 成節鼻音は通時的には、**mu* という形式が再建されている (Nurse & Hinnebusch 1993: 183 - 185)。

¹⁵ 話者によっては、*langaNza* ではなく、*langamza* という形式を用いる。*langamza* という基本語幹に対応する完了語幹は、*langamzu* となり、完了語幹 3 の形式となる。

表 3：不規則な形式の完了語幹

完了語幹	基本語幹	接続語幹
<i>che</i>	<i>cha</i>	<i>che</i>
<i>chwe</i>	<i>chwa</i>	未調査
<i>ijua/iji</i>	<i>ijua</i>	<i>ijue</i>
<i>ti</i>	<i>ta</i>	未調査
<i>langaNzi</i>	<i>langaNza</i>	<i>langaNze</i>

なお、*ijua*「知る」の肯定形での完了語幹の形式は、基本語幹と同様である。否定形では、*iji* という形式が現れるが、この形式から推測される、**-ija* という形式の基本語幹は存在しない。

借用語動詞は語根そのものが語幹となるものと、[語根—派生接尾辞—末尾辞]と分析できるものに分けられるが、前者については、基本語幹、完了語幹の別はない¹⁶。後者については、基本語幹の末尾辞は常に *a* となる。完了語幹は、基本的に完了語幹 1 の通り、語基の最終母音と同じ母音が末尾辞として現れる。ただし、受動を示す派生接尾辞が現れる場合は、完了語幹 2 の通り、完了語幹の形式は基本語幹と同じとなる。

1.2.2 主語接辞と目的語接辞

主語接辞は、主語の主名詞の人称もしくは名詞クラスに一致する接頭辞で、義務的に現れる¹⁷。

目的語接辞は、目的語の主名詞の人称もしくは名詞クラスに一致する接頭辞で、目的語があっても現れない場合がある。

以下に、定動詞中に現れる、主語接辞と目的語接辞を提示する。語幹が母音で始まる動詞の中には、直前に現れる接頭辞と融合するものがある。こうした動詞と融合した場合の主語接辞や目的語接辞の形式は以下には提示しない。詳しくは、Racine-Issa (2002: 79-91) を参照されたい。

表 4：定動詞中の主語接辞と目的語接辞の形式

	主語接辞	目的語接辞
1 人称単数	<i>nyi/N</i> ¹⁸	<i>nyi/N</i>
1 人称複数	<i>tu</i>	<i>tu</i>
2 人称単数	<i>ku</i>	<i>ku</i>
2 人称複数	<i>ṁ/mu</i> ¹⁹	<i>ku~ṁ/mu</i> ²⁰

¹⁶ *tafuta*「探す」、*hara*「腹を下す」は語根そのものが語幹となる借用語動詞だが、完了形はそれぞれ *tafutu*、*hara*、接続形が *tafute*、*hare* となり語末の *a* が末尾辞として再分析されていると考えられる。

¹⁷ ただし、主語が 1 人称単数で、AM 接辞が *na* の場合、主語接辞は現れない。

¹⁸ 子音で始まる接頭辞、語幹が後続する場合、1 人称単数の主語接辞は *N* という形式と自由交替が容認される。筆者の観察の限り、実際に使用される際は、後続する形態素の初頭音が母音性をもたない場合、弱化した形式で現れることが多い。

	主語接辞	目的語接辞
3 人称単数・1 クラス	<i>ka</i>	<i>ḡ/mu</i> ²¹
3 人称複数・2 クラス	<i>wa</i>	<i>wa</i>
3 クラス	<i>u</i>	<i>u</i>
4 クラス	<i>i</i>	<i>i</i>
5 クラス	<i>li</i>	<i>li</i>
6 クラス	<i>ya</i>	<i>ya</i>
7 クラス	<i>ki</i>	<i>ki</i>
8 クラス	<i>vi</i>	<i>vi</i>
9 クラス	<i>i</i>	<i>i</i>
10 クラス	<i>zi</i>	<i>zi</i>
15 クラス	<i>ku</i>	<i>ku</i>
16 クラス	<i>va</i>	<i>va</i>
18 クラス	<i>ḡ~mu</i> ²²	<i>ḡ~mu</i>

1.2.3 AM 接辞

定動詞中には、以下に挙げるアスペクト・ムードを表す接頭辞が現れる。*na*「未完結 (imperfective)」、*cha*「未実現 (irrealis)」、*me*「起動 (inchoative)」、*mena*「起動進行 (inchoative-progressive)」、*li*「完了否定 (negative perfect)」、*ja*「起動否定 (negative inchoative)」。なお、これらの AM 接辞が現れる際の語幹はすべて基本語幹となる。完了語幹は AM 接辞と共起しない。

1.2.4 極性

否定極性は *ha* という接頭辞で表される²³。*na*「未完結」、*cha*「未実現」、完了語幹は否定接辞と共起することができる。*me*「起動」、*mena*「起動進行」は否定接辞と共起できない。*li*「完了否定」、*ja*「起動否定」は義務的に否定接辞と共起する。

なお、完了語幹が否定接辞と共起する場合、「～しなかった」「まだ～していない」という

¹⁹ 直前の接頭辞と融合しない母音ではじまる語幹が後続する場合、*mu* となる。子音で始まる接頭辞、語幹に後続する場合、*ḡ* と *mu* が自由交替する。

²⁰ 目的語が 2 人称複数となる場合、目的語接辞だけでなく、動詞語幹の直後に *ni* という接語が現れる。この接語は複数の聞き手に呼びかける際に現れる。目的語接辞は *ku* と *ḡ/mu* が自由交替する。*ḡ* は、後続する語幹の初頭音が母音性を持たない場合現れる。*mu* は後続する語幹が母音性をもち、なおかつ、語幹が直前の接頭辞と融合しない場合に現れる。

²¹ *ḡ* は、後続する語幹の初頭音が母音性を持たない場合現れる。*mu* は後続する語幹が母音性をもち、なおかつ、語幹が直前の接頭辞と融合しない場合に現れる。

²² 後続する形態素が母音で始まる場合、*mu* となる。後続する形態素が子音で始まる場合、*mu* と *ḡ* が自由交替する。

²³ ただし、主語が 1 人称単数、2 人称単数、3 人称単数の場合は、主語接辞とのかばん形態素となる。それぞれの形式は *si*, *hu*, *ha* となる。

意味にはならず、「(これから) ~しない」という意味になる²⁴。完了の肯定は完了語幹が現れる動詞によって表されるが、完了の否定は、*li*「完了否定」で基本語幹がマークされることにより表される。

表 5：定動詞の AM 接辞の形式、語幹の形式、否定接辞との共起関係

	AM 接辞の形式	語幹の形式	否定接辞との共起
未完結	<i>na</i>	基本語幹	可
未実現	<i>cha</i>	基本語幹	可
起動	<i>me</i>	基本語幹	不可
起動進行	<i>mena</i>	基本語幹	不可
完了否定	<i>li</i>	基本語幹	義務
起動否定	<i>ja</i>	基本語幹	義務
完了	\emptyset	完了語幹	可

1.3 コピュラ動詞 *wa* について

詳しくは 2.2 節で後述するが、準体言はコピュラ動詞 *wa* を介して形成されることもある。ここでは、コピュラ動詞 *wa* の基本的な特徴を説明する。

コピュラ動詞 *wa* の基本的用法として、主語の状態変化を示す用法と主語の場所を示す用法がある。

wa が AM 接辞でマークされる場合は、基本的にその AM 接辞に応じたアスペクトやモードに関する情報が表される。しかし、完了に活用した場合（以下コピュラ完了形）、他の多くの動詞とは異なり基準時以前の事象の終了は表さず、単にコピュラ節を形成する機能のみを担う。コピュラ完了形に後続するのは、①主語の性質や状態を示す要素、②主語の所有者を表す要素、③主語の存在する場所を示す要素である。コピュラ完了形では状態変化は表さない。このコピュラ完了形に対応する否定形は「否定接辞—主語接辞—*li*」という形式である。この *li* という形態素は非動詞述語として分析できる²⁵。

コピュラ動詞 *wa* にはこれ以外に、定形節にアスペクトやモードに関する情報を付加する用法もある。この場合、*wa* は具体的意味をもたず、AM 接辞を表示する支えとして用いられる。コピュラをマークする AM 接辞としては、*cha* がよく観察されるが、*na*、*me*、*mena* も現れる。(10) の四角で囲った部分が付加的に用いられるコピュラ動詞である。

- (10)

<i>ka-cha-wa</i>	<i>ka-na-tenda</i>	<i>kazi</i>
3SG/G1.SM-IRR-COP	3SG/G1.SM-IPFV-do	work

 「彼は仕事をしているだろう」

²⁴ ただし *ijua*「知る」と *goma*「できる」の完了語幹が否定接辞と共起する場合は、単に「知らない」、「できない」という意味になる。

²⁵ *li* はサバキ祖語の **li-* ‘be’ (Nurse & Hinnebusch 1993: 649) に遡ると考えられる。

1.4 非動詞述語 *na* について

所有を表す際は〔(否定接辞)－主語接辞－*na*〕という要素が述語として機能する。この *na* という形態素は、*na* 「未完結」、*mena* 「起動進行」以外の AM 接辞と共起でき、動詞に似たふるまいをみせるが、不定形を形成する接頭辞 *ku* を付加することはできない²⁶。この非動詞述語 *na* を用いて、準体言が形成されることもあるが、その際の形式は 2.4 節で説明する通り、ほかの動詞の場合とは異なる。なお、15、16、18 クラスの主語接辞で *na* がマークされた場合、*na* に後続する名詞が指示する対象が存在することを表す。

2 準体言の形式的特徴

本節では、0 節で示した四つの準体言形成法の形式的特徴について説明する。

2.1 接頭辞タイプ

ここでは動詞語幹に接頭辞を付加する準体言形成法について述べる。接頭辞タイプの準体言形成法としては、準体言化接辞 *m* を付加するタイプ ((2a) を参照、以下タイプ 1) と、準体言化接辞 *o* を付加するタイプ ((2b) を参照、以下タイプ 2) がある。以下に一般化した形式を示す。

(11) *m*－(否定接辞)－AM 接辞－(目的語接辞)－語幹 (タイプ 1)

(12) 主語接辞－(否定接辞)－(AM 接辞)－(目的語接辞)－*o*－語幹 (タイプ 2)

タイプ 1 の修飾する主名詞は 1 クラスに属している。またタイプ 1 によって準体言化される項(準体言内の欠けている項)は主語だけである。このタイプ 1 の準体言化接辞 *m* は、多くの 1 クラスの名詞、形容詞の語頭に現れる接頭辞 *m* と同形である。そして、1 クラスに属する名詞は単数の有生物を指示対象とする。この事実を踏まえると、タイプ 1 の *m* という接頭辞は、1 クラスの名詞接頭辞と歴史的には同源である可能性が指摘できる²⁷。

タイプ 2 の準体言化接辞 *o* は、先行詞の名詞クラスによって形式が異なる。表 6 にクラスごとの関係節接辞の形式を挙げる。表 6 に挙げるものは、概ね Racine-Issa (2002: 156) でも提示されている。ただし、1 クラスの *e* という形式は記述されていない。また、*ye~yo* は AM 接辞が現れない際に現れうる異形態であるが、これも記述されていない。AM 接辞がない場合 1 クラスの三つの形式は自由交替する。AM 接辞が現れる場合は *e* となる。

²⁶ 不定形を形成する接頭辞 *ku* が付加できるかどうか、動詞かどうかを分ける基準となる。*na* や *li* には接頭辞 *ku* は付加できない。

²⁷ ちなみに筆者の知る限り、いずれの先行研究でも「関係節」としては説明されていないが、標準スワヒリ語でも接頭辞 *m* でマークされた動詞が項を取り準体言を形成しているように見える例が存在する。例：*m-piga konde ukutani hu-umiza mkonowe* (M-hit fist wall.LOC HAB-hurt his hand) 「拳を壁に打ち付けるものは自身の手を痛める」(Ashton 1947: 292)

表 6：準体言化接辞の形式

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	15	16	18
<i>e/ye ~yo</i>	<i>o</i>	<i>o</i>	<i>yo</i>	<i>lyo</i>	<i>yo</i>	<i>cho</i>	<i>vyo</i>	<i>yo</i>	<i>zo</i>	<i>ko</i>	<i>vo</i>	<i>mo</i>

同様の準体言化接辞は標準スワヒリ語のような他変種にも存在する。Nurse & Hinnebusch (1993: 406) は、「関係節」接辞を名詞クラス標識と *o* に分け、*o* はサバキ祖語/北東沿岸バントゥ祖語²⁸の直示的接尾辞に遡ると述べている。カエ方言では、この準体言化接辞と同じ形式の接尾辞²⁹が代名詞として機能する。非動詞述語で所有を表す [主語接辞-*na*]、随伴を表す前置詞 *na*³⁰、提題を表す *ndi* に後続して現れる³¹。これらの要素と共起する接尾辞は、準体言を形成することはなく、先行文脈に現れたものを示す代名詞として働く。また、指示詞から「関係節」標識への文法化は、他のバントゥ諸語でも指摘されている (Poulos 1986: 291-3)。これらを考慮すると、「関係節」接辞が直示的接尾辞に由来するという Nurse の分析は、それほどおかしなものではないだろう。なお、Nurse & Hinnebusch は (y)e という 1 クラスの「関係節」接辞の歴史的由来については言及を避けているが、*yeye* という 3 人称単数の独立代名詞との関連が疑われる。「関係節」中では (y)e しか現れないが、前置詞 *na* のあとには (y)e だけでなく、*mi* (1 人称単数)、*we* (2 人称単数) という接辞も現れることが確認されている。カエ方言では、1 人称単数の独立代名詞は *mie*、2 人称単数は *weye* という形式である。

タイプ 2 で準体言化される項の統語的制限はタイプ 1 と比較するとだいぶゆるい。主語、目的語、斜格目的語、所有格が準体言化される。ただし、有標の斜格目的語³²で先行詞となるのは、随伴を表す *na* でマークされる項のみで、道具や場所などを表す *kwa*³³、受動文の動作主を表す *nyi/N*³⁴でマークされる項は先行詞とならない。また、所有関係は、所有物が準体言内で目的語の場合、タイプ 2 の形式で準体言化されるが、主語の場合はならない。有標の斜格目的語、所有格が準体言化される場合は、準体言化接辞以外に、準体言化される項と一

²⁸ Nurse & Hinnebusch (1993) はスワヒリ祖語の前段階として、サバキ祖語、北東沿岸バントゥ祖語を再構している。

²⁹ 指示詞中称の弱化形 (Racine-Issa 2002: 69) も準体言化接辞と同形で、これも着目すべき点だが、準体言化接辞、代名詞接尾辞とは別の語彙素と考えられる。弱化形は、指示対象に応じて、近称や、遠称と交替するが、準体言化接辞や代名詞接辞は、指示対象が、例えば、近称で指示されるものであっても形式は変わらない。

³⁰ 日本語の「～とともに」、「～も」に対応するような意味を表す。

³¹ [主語接辞-*na*] や、前置詞 *na* には他の名詞も後続する。*ndi* にはこの接尾辞しか後続しない。ほかの名詞を提題化するときは、*njo* という要素が提題化される名詞の直前に現れる。

³² 斜格目的語の中には、*ny-uzu gari yangu pesa zino* (1SG.SM-sell.PRF car my.G9 money this.G10) 「私はこの金で私の車を売った」の *pesa zino* 「この金」のように、前置詞でマークされることのない、無標のものも存在する。こうした無標の斜格目的語が準体言化される場合は、準体言化される項と一致する標識は準体言化接辞のみである。

³³ 標準スワヒリ語において *kwa* という前置詞は、形式的には 15 クラスの属辞だが、道具や場所を表す標識として機能することが知られる (Ashton 1947: 171 - 173)。カエ方言でも同様の用法がある。場所を表す際は、*kwa Juma* (of.G15 Juma.PN) 「ジュマのところ」という例にみられる通り、後続する名詞が指すものが存在する場所を表す。

³⁴ 子音で始まる語が後続する場合、*nyi* は *N* に弱化することがある。この前置詞の形式は 1 人称単数の主語接辞と同じであり、同じように弱化しているといえる。

致する別の標識が現れる。(13) は随伴の *na* でマークされた項が準体言化される例である。準体言中の *na* の後にも準体言化接辞と同形の代名詞が現れる。(14) は所有格が準体言化される例である。準体言中に、所有詞が現れる。それぞれの例で、準体言接辞以外で、準体言化される項と一致する要素には下線を引く。

- (13) *mwanakele* [*N-cha-e-kwenda*³⁵ *mjini* *na=e*]
 child 1SG.SM-IRR-G1.NMLZ-go town.LOC with=G1.PRO
 「私が一緒に街に行く子供」(斜格目的語)

- (14) *mwanafuzi* [*nyi-ø-e-m-kut'a* *baba* *ake* *jana*]
 student 1SG.SM-PRF-G1.NMLZ-3SG/G1.OM-see father his.G9 yesterday
 「昨日私が、その父親にあった生徒」(所有格)

タイプ1とタイプ2の準体言のAM接辞の形式、語幹の形式、否定接辞との共起関係は、定動詞とは必ずしも一致しない。表7はそれをまとめたものである。

表7: 準体言(タイプ1、タイプ2)のAM接辞の形式、語幹の形式、否定接辞との共起関係

	AM接辞の形式		語幹の形式		否定接辞との共起	
	タイプ1	タイプ2	タイプ1	タイプ2	タイプ1	タイプ2
未完結	<i>na</i>	<i>na</i>	基本語幹	基本語幹	不可	不可
未実現	<i>cha</i>	<i>cha</i>	基本語幹	基本語幹	可	可
起動	<i>ne</i>	<i>me</i>	基本語幹	基本語幹	不可	不可
起動進行	<i>nenā</i>	—	基本語幹	—	不可	—
完了否定	—	—	—	—	—	—
起動否定	—	—	—	—	—	—
完了	<i>a</i>	<i>ø</i>	基本語幹	基本語幹	不可	不可

タイプ1に現れるAM接辞は*na*「未完結」、*cha*「未実現」、*ne*「起動」、*nenā*「起動進行」、*a*「完了」である。*ne*は*me*との交替が容認されるが、話者が自発的に用いる形式は*ne*である。起動進行は*nenā*のみが容認され、*mena*は容認されない³⁶。完了否定や起動否定を示すAM接辞は現れない。なお、AM接辞*a*「完了」は、*mwa*という形で接頭辞*m*と融合した形で現れる。Racine-Issa (2002: 154) は*mwa*という形式を積極的には分節せず、接頭辞*m*とコ

³⁵ 一音節、及び一部の母音で始まる動詞語幹がAM接辞*na*「未完結」、*cha*「未実現」、*me*「完成」、*mena*「起動」、*li*「完結否定」、*nge*「反実仮想」、準体言化接辞に後続する際、*ku*という無意味接頭辞を伴う。(13)では*enda*「行く」に、(27)では*nywa*「飲む」に、(45)では*lya*「食べる」に、この*ku*が前接している。母音で始まる動詞語幹は直前の接辞と融合するという別の特徴もあるため、(13)の*ku*は*kw*となる。一音節語幹に付随する*ku*は、動詞の後に、別の要素(主語、目的語、副詞句)が後続する場合は現れないこともあるが、別の要素が後続しない場合は義務的に現れる。母音で始まる語幹については、*enda*「行く」以外は義務的に*ku*が付随する。

³⁶ 定動詞をマークする、*me*「起動」、*mena*「起動進行」も*ne*、*nenā*との交替が容認される。ただし、定動詞中に*ne*、*nenā*が現れる例は自然発話の中では観察されていない。

ピュラ動詞 *wa* に分けられる可能性を指摘しているが、①他の AM 接辞と交替すること、②成節鼻音 *m* に母音 *a* が後続する場合、他の環境でも融合した *mwa* という形で現れること³⁷、③他変種で「過去」の接辞として機能している *a* という接辞があること (Nurse & Hinnebusch 1993: 389) を踏まえると、AM 接辞と分析する方が妥当であろう。なお、*a* 「完了」でマークされた準体言の語幹は、定動詞とは異なり、基本語幹となる。

タイプ 2 に現れる AM 接辞は *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」、*me* 「起動」、 \emptyset 「完了」である。起動進行、完了否定、起動否定を示す AM 接辞は現れない。タイプ 2 の \emptyset 「完了」は他の AM 接辞との交替と統一的に説明するために便宜上提示する。「完了」の AM 接辞が現れないというのは定動詞の完了と共通する特徴だが、タイプ 2 では定動詞とは異なり、語幹は基本語幹となる。

タイプ 1、タイプ 2 で否定は、定動詞と異なり、*si* という接頭辞によって表されるが、この *si* が共起できる AM 接辞は *cha* 「未実現」のみである。準体言は AM 接辞なしで、準体言化接辞、主語接辞 (タイプ 2 のみ)、目的語接辞 (任意)、基本語幹、そして *si* で構成されることがあるが、その場合、AM に関する情報はマークされていないものと考えられる。

タイプ 2 の主語接辞は、定動詞中に現れる主語接辞と基本的に同形だが、2 人称単数、3 人称単数のみ異なる。定動詞ではそれぞれ、*ku*、*ka* となるが、タイプ 2 では *u*、*a* となる。タイプ 2 に現れるこれらの主語接辞の形式は、他の非定動詞に現れるものと同形である。

目的語接辞は定動詞と同様に、任意である。

2.2 コピュラを介して形成されるタイプ³⁸

コピュラを介して形成される関係節にも二つのタイプが存在する。それぞれ、コピュラ動詞 *wa* が、準体言化接辞 *m*、もしくは準体言化接辞 *o* でマークされることから、タイプ 1 とタイプ 2 から派生的に形成されていると考えられる。こうした接頭辞でマークされたコピュラ動詞に、定動詞を主要部とする定形節が後続することで、準体言は形成される。以下に一般化した形式を示す。

(15) *m*-AM 接辞-*wa* 定形節 (タイプ 3)

(16) 主語接辞-AM 接辞-*o*-*wa* 定形節 (タイプ 4)

タイプ 3 で準体言化されるのは 1 クラス名詞だけである。タイプ 4 では名詞クラスに関する制限はない。

³⁷ 3 人称単数/1 クラスの目的語接辞は、子音で始まる語幹が後続する場合、成節鼻音 *m* だが、例えば *ambia* 「告げる」という動詞語幹が後続する場合、鼻音の成節性は失われ、直後の動詞 *ambia* の *a* と融合して一つの音節を形成する。例: *ch'a-mw-ambia* (1SG.SM.IRR-3SG/G1.OM-tell) 「私は彼に言うだろう」

³⁸ コピュラを介した「関係節」形成法は、筆者の知る限り他のバントゥ諸語の記述にはみられない。ただし、現段階では、他言語、他変種の記述を十分に精査したわけではないため、この指摘は注釈に留める。

コンピュータ動詞をマークする AM 接辞としては、タイプ 3 では *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」、*ne* 「完成」、*a* 「完了」、タイプ 4 では *na* 「未完結」、*cha* 「未実現」、 \emptyset 「完了」がある。タイプ 3、4 の準体言のコンピュータ動詞に定形節が後続するという構造は、コンピュータを用いて定形節にアスペクトやムードに関する情報を付加する構造 (1.3 節参照) と並行的に捉えることができる。コンピュータ動詞が AM 接辞 *na*、*cha*、*ne* でマークされる場合は、(10) と同様にこれらの AM 接辞が担うアスペクトやムードに関する情報が準体言に付加されている一方で、完了の *a*、 \emptyset でマークされる場合は、アスペクトに関する情報が付加されることなく、コンピュータは準体言を形成する標識としてのみ機能していると考えられる。

その理由としてまず、*a*、 \emptyset でマークされたコンピュータに、*na*、*cha*、*me*、*mena* でマークされた定動詞、あるいは完了に活用した定動詞が後続するタイプ 3、4 の準体言と、*na*、*cha*、*ne/me*、*nena*、*a/\emptyset* でマークされたタイプ 1、2 の準体言の間に意味的な対立が生じないことが挙げられる³⁹。

また、コンピュータ動詞に後続する定動詞のアスペクト・ムード、極性の制限もこの傍証となると考えられる。*cha*、*na*、*ne* でマークされたコンピュータ動詞に後続できる定形動詞には、アスペクト・ムード、極性に関して制限があるが⁴⁰、これはコンピュータをマークする AM 接辞と、後続する定動詞の AM 接辞が表す情報の齟齬から生じる制限だろう。これに対して、コンピュータ動詞が *a* や \emptyset でマークされる場合、後続する定動詞のアスペクト・ムード、極性に制限はない。*a* や \emptyset でマークされるコンピュータ動詞には、タイプ 1、2 では準体言化できないような AM 接辞でマークされた定動詞も後続して準体言化される⁴¹。つまりタイプ 3、4 では、タイプ 1、2 とは異なり、定動詞で表されうるものと同様のアスペクトやムード、極性が準体言中で表されるようになっているといえる⁴²。

なお、他の多くの動詞は、完了に活用した場合、基準時以前の事象の終了を含意するが、完了に活用したコンピュータ動詞は、単に「いる」「である」といった存在や状態の意味を表し、基準時以前の事象の終了を含意しない。これは、定形でも準体言でも変わらない。以下にそのことを示す準体言の例を挙げる。

³⁹ タイプ 3、4 の準体言でコンピュータ動詞が他の AM 接辞でマークされた場合に、タイプ 1、2 の準体言との間に意味的対立が生じているという事実が確認されれば、本稿の主張を支持することになるが、現段階でこれは残念ながら未確認である。

⁴⁰ *na*、*me* でマークされたコンピュータ動詞と、*na*、*ne* と準体言化接辞コンピュータ動詞には、ともに後続する動詞をマークすることのできる AM 接辞に制限があるが、この制限は現在確認している限りでは合致していない。また、容認される組み合わせでも、「分かるけど、使わない」とコメントされたり、日によって容認度が変わったりすることがたびたびある。

⁴¹ ただし、タイプ 3、4 の準体言化接辞でマークされたコンピュータの AM 接辞 *cha* 「未実現」となる場合も、後続する定動詞をマークできる AM 接辞や極性に制限はない。1.3 節でも述べたが、コンピュータ動詞の定形が *cha* でマークされる場合も同様に後続する定形動詞をマークできる AM 接辞や極性に制限はない。

⁴² 標準スワヒリ語にもタイプ 2 と同様の関係節形成法があり、AM 接辞に関して類似した制限がある。標準スワヒリ語では、コンピュータ動詞ではなく [amba-関係節接辞] という形式の標識を用いることで、制限が回避される (Ashton 1947: 110 - 114)。

(17) a. *mwanangu [mw-a-kwenda mjini jana]*
 my child G1.SM.NMLZ-PRF-go town.LOC yesterday
ha-ja-rudi /ke-me-rudi
 3SG/G1.SM.NEG-INCH.NEG-return 3SG/G1.SM-INCH-return

b. *mwanangu [a- \emptyset -e-kwenda mjini jana]*
 my child 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go town.LOC yesterday
ha-ja-rudi /ke-me-rudi
 3SG/G1.SM.NEG-INCH.NEG-return 3SG/G1.SM-INCH-return

「昨日街に行った私の子供はまだ戻ってきていない／もう戻って来た」

(18) a. *[mw-a-choka bado]*
 G1.SM.NMLZ-PRF-be tired still

b. *[a- \emptyset -e-choka bado]*
 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-be tired still

「まだ疲れている人」

(17) は基準時以前の事象の終了を、(18) は基準時以前の事象の終了の結果生じた状態を表す⁴³。AM 接辞の *a* や \emptyset でマークされた際にどちらを表すかは概ね動詞によって異なるが、ともに、基準時以前の事象の終了が含意されていると考えられる。これとは対照的に、コピュラ動詞は、*a* や \emptyset でマークされた場合、基準時以前の事象の終了を含意しない。(19) (20) は、それを示す例である。

(19) a. *uyoko mt'u mrefu njo=[mw-a-wa kaka angu]*
 that.G1 person tall.G1 GVN=G1.SM.NMLZ-PRF-COP brother my.G9

b. *uyoko mt'u mrefu njo=[a- \emptyset -e-wa kaka angu]*
 that.G1 person tall.G1 GVN=3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP brother my.G9

「私の兄であるのはあそこの背の高い人だ」

(20) *embe [i- \emptyset -yo-wa mbichi]*
 mango G9.SM-PRF-G9.NMLZ-COP unripe

「未熟であるマンゴー」

コピュラ動詞 *wa* には変化を表す意味がある。しかし、(19) は少し離れたところにいる複数の人の中でどれが兄であるかを尋ねる問いに対する答えであり、「兄になる」という変化は想定しにくい。また (20) では、「マンゴーが未熟になる」という変化が想定しにくい。この二つの例から、*a*、 \emptyset でマークされたコピュラ動詞 *wa* は、基準時以前のイベントの終了を含

⁴³ 定動詞の完了形は、これに加えて、「参照時以前の終了とその影響」を含意する。例えば、(17) の *enda* 「行く」という動詞の定動詞完了形は、「行った」ということを表すと同時に「まだ戻ってきていない」ということを含意する。

意しない状態を表すと考えられる。同じように *a*、 \emptyset でマークされ基準時以前の事象の終了を含意しない動詞としては *ijua* 「知る」が挙げられる⁴⁴。

定形であるコピュラ完了形と *m*コピュラ、*o* コピュラは表すアスペクトは等価である。しかし、前者には別の定形節が後続できず、後者には後続できる。コピュラを用いて定形節にアスペクトやムードに関する情報を付加する構造とタイプ 3、4 の準体言のコピュラ動詞に定形節が後続するという構造の最も大きな違いは、単にアスペクトやムードに関する情報を付加するだけか、これに加えて準体言を形成する機能も担っているかという点であろう。これらの事実を踏まえると、*a*、 \emptyset でマークされたコピュラ動詞というのは、別の定形節に付加可能なアスペクトやムードを担わない形式が、準体言を形成することに特化した標識になっているとみなすことができるだろう。

以下の議論では、*a*、 \emptyset でマークされたコピュラ動詞を準体言化標識とみなし、これらをそれぞれ、*m*コピュラ、*o* コピュラと呼ぶこととする。以下で、タイプ 3、タイプ 4 の関係節として提示する例も、この *m*コピュラ、*o* コピュラを介して形成されるものである。

統語的には、タイプ 3、4 とともに、主語、目的語、斜格目的語、所有格を準体言化することができる⁴⁵。ただし、準体言化できる有標の斜格目的語は、タイプ 2 と同様に、随伴の *na* でマークされた項のみである。また、有標の斜格目的語、所有格が準体言化される場合は、準体言中に、準体言化標識以外にも、準体言化される項と一致する標識が現れる。この標識はタイプ 2 と同様に *na* でマークされる項の場合は準体言化接辞と同形の代名詞、所有格の場合は所有詞が現れる。以下の例では、準体言化される項と一致する標識に下線を付す。

- (21) a. *mwanakele* [*mw-a-wa* *N-cha-kwenda* *mjini* *na=e*]
 child G1.SM.NMLZ-PRF-COP 1SG.SM-IRR-go town.LOC with=G1.PRO
 b. *mwanakele* [*a- \emptyset -e-wa* *N-cha-kwenda* *mjini* *na=e*]
 child 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 1SG.SM-IRR-go town.LOC with=G1.PRO
 「私が一緒に街に行く子供」(斜格目的語)

- (22) a. *mwanafuzi* [*mw-a-wa* *nyi-m-kut'u* *baba* *ake* *jana*]
 student G1.SM.NMLZ-PRF-COP 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF father his.G9 yesterday
 b. *mwanafuzi* [*a- \emptyset -e-wa* *nyi-m-kut'u* *baba* *ake* *jana*]
 student 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 1SG.SM-3SG/G1.OM-see PRF father his.G9 yesterday
 「昨日私がその父親にあった生徒」(所有格)

o コピュラは主語接辞でマークされるが、AM 接辞 \emptyset 「完了」でマークされる場合、この主語接辞は、(23) に示す通り、後続する定形節の主語と一致することも、主名詞と一致することも可能である。

⁴⁴ これ以外に *kaza* 「好ませる」、*chukia* 「嫌わせる」という動詞も形式的には「完了」であっても、機能的には「完了」を表さない動詞と考えられるが、現段階でこれを検証することはできていない。

⁴⁵ 比較の対象については、いったんは容認されたが、日を変えて再度確認したところ容認されなかった。実際の使用において、比較の対象は準体言化されない可能性が高い。

- (23) a. *mwanafuzi [u- ϕ -ye-wa* *ku-m-kut'u* *jana]*
 student 2SG.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 2SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF yesterday (主語と一致)
- b. *mwanafuzi [a- ϕ -ye-wa* *ku-m-kut'u* *jana]*
 student 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 2SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF yesterday (先行詞と一致)
 「あなたが昨日会った学生」

*m*コピュラや、*o*コピュラからコピュラ動詞 *wa* が省略されたような形式も、準体言化標識として機能する。ただし、*m*コピュラの省略形には定動詞が後続できる一方、*o*コピュラには定動詞は後続できない。なお、これらの形式については、話者自身もコピュラ動詞が省略されているという直観をもつ。

- (24) a. [*mw-a* *mwalimu] nani*
 G1.SM.NMLZ-PRF teacher who
- b. [*a- ϕ -e* *mwalimu] nani*
 3SG/G1.SM-PRF- G1.NMLZ teacher who
 「先生であるのは誰」(叙述名詞が後続する例)

- (25) a. [*mw-a* *nyumbani] nani*
 G1.SM.NMLZ-PRF house.LOC who
- b. [*a- ϕ -e* *nyumbani] nani*
 3SG/G1.SM-PRF- G1.NMLZ house.LOC who
 「家にいるのは誰」(場所名詞が後続する例)

- (26) a. *ng'ombe [mw-a* *ka-na-kunywa* *maji]*
 cow G1.SM.NMLZ-PRF 3SG/G1.SM-IPFV-drink water
- b. **ng'ombe [a- ϕ -e* *ka-na-kunywa* *maji]*
 cow 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ 3SG/G1.SM-IPFV-drink water
 「水を飲んでいる牛」(定形節が後続する例)

2.3 タイプ1-4の使い分けについて

ここまでの小括として、タイプ1からタイプ4までの準体言形成法において、準体言化できる項は以下のようにまとめることができる。

表8：統語的制限

	主語	目的語	斜格（無標）	斜格（有標）	所有格	比較の対象
タイプ1	✓	—	—	—	—	—
タイプ2	✓	✓	✓	✓	✓	—
タイプ3	✓	✓	✓	✓	✓	(✓)
タイプ4	✓	✓	✓	✓	✓	(✓)

表9：アスペクトとムード、極性に関する制限

	未完結	未完結否定	未実現	未実現否定	起動	起動否定	完了	完了否定	起動進行
タイプ1	✓	—	✓	✓	✓	—	✓	—	✓
タイプ2	✓	—	✓	✓	✓	—	✓	—	—
タイプ3	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
タイプ4	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓

表10：名詞クラスに関する制限

	1クラス	2-18クラス
タイプ1	✓	—
タイプ2	✓	✓
タイプ3	✓	—
タイプ4	✓	✓

ある項を準体言化する際にいくつかの方法がある場合、準体言化形成法の違いによって、意味的な違いは生じない。また、どのような条件で、どの準体言形成法が選択されるのかも現段階で明確には分からない。ただ、話者が自発的に発する例を観察する限りでは、複数の選択肢がある場合、制限のゆるいものよりも、制限のきついものが好まれるようである。例えば、準体言化される項が主語で、その名詞クラスが1クラス、アスペクトが未完結の場合、タイプ2-4ではなく、タイプ1が選ばれる。

2.4 非動詞述語

非動詞述語を形成する要素として所有を表す *na* とコピュラ *li* が挙げられる。この二つは他の動詞とは異なる形で準体言を形成する。

まず *na* には準体言化接辞 *m* と *o* を付与することができる。

- (27) a. *u-m-saidie* [*m-na*⁴⁶ *shida*]
 2SG.SM-3SG/G1.OM-help.SUBJ G1.SM.NMLZ-POSS difficulty
 b. *u-m-saidie* [*a-na-e* *shida*]
 2SG.SM-3SG/G1.OM-help.SUBJ 3SG/G1.SM-POSS-G1.NMLZ difficulty
 「困っている人を助けなさい」

上記に示す通り、*na* は AM 接辞無しで準体言を形成しうる。ただし準体言化接辞が *m* の場合、AM 接辞 *cha*, *ne* を、準体言化接辞が *o* の場合、*cha* を付加することも可能である。AM 接辞がない場合と、付加された場合の一般化した形式を以下に示す。

- (28) a. [*m-na*]
 b. [*m-AM 接辞-na*]
 c. [主語接辞-*na-o*]
 d. [主語接辞-*o-na*]
 e. [主語接辞-AM 接辞-*o-na*]

c d は主語接辞と準体言化接辞 *o* が現れるという点でタイプ 2 と似ている。ただし、c は準体言か接辞の現れる位置がタイプ 2 とは異なる。d は接辞の順序がタイプ 2 と同じである。d は準体言化される項が主語（所有者）の場合に容認される。なお、所有は *m* コピュラ、*o* コピュラに所有の *na* の定形が後続することによっても準体言化される。

li は様態⁴⁷や場所を示す節を形成する際に現れる。

- (29) *na-chaka nyi-we mt'u mkubwa ja [a-li-vyo Juma]*
 1SG.SM.IPFV-want 1SG.SM-COP.SUBJ person big.G1 like 3SG/G1.SM-COP-G8.NMLZ Juma.PN
 「私はジュマのような偉大な人になりたい」

- (30) *N-ku-veleke [a-li-ko Gwegwe]*
 1SG.SM-2SG.OM-bring.SUBJ 3SG/G1.SM-COP-G15.NMLZ Gwegwe.PN
 「グウェグウェがいるところにあなたを連れて行こうか？」

li は、様態を示す際は 8 クラスの準体言化接辞 *o* で、場所を示す際は 15、16、18 クラスの準体言化接辞 *o* でマークされる。他の準体言化接辞でマークされることはない。また、*m* でマ

⁴⁶ 本稿では *na* と後続する要素は分かち書きするが、この二つは、間に別の要素を挿入することはできず、接語とホストのような関係になっていると考えられる。

⁴⁷ Racine-Issa (2002: 173) に場所を示す用法は記述されているが、様態を示す用法はみられない。

ークされることもない。以下に一般化した形式を示す。

(31) [主語接辞-*li-o*]

なお、*li* は AM 接辞でマークされない。AM 接辞が現れる際は、コピュラ動詞 *wa* によって関係節は形成される。

3 項のタイプ

(2) - (4) で示した通り、カエ方言の準体言はその形成法にかかわらず、主名詞（先行詞）なしで節中の項となることができる。(2) - (4) は、主語や目的語となる例だが、以下にそれ以外の項となる例を挙げる。

- (32) a. *ny-ende* *na=[m-na-kwendesha* *baskeli]*
 1SG.SM-go.PRF with=G1.SM.NMLZ-IPFV-go.CAUS bicycle
 b. *ny-ende* *na=[a-na-e-kwendesha* *baskeli]*
 1SG.SM-go.PRF with=3SG/G1.SM-IPFV-G1.NMLZ-go.CAUS bicycle
 c. *ny-ende* *na=[mw-a-wa* *ka-na-kwendesha* *baskeli]*
 1SG.SM-go.PRF with=G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-go.CAUS bicycle
 d. *ny-ende* *na=[a-φ-e-wa* *ka-na-kwendesha* *baskeli]*
 1SG.SM-GO.PRF with=3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-IPFV-go.CAUS bicycle
 「私は自転車を運転する人と行った」

- (33) a. *na-chaka* *u-cheze* *ja [mw-a-cheza* *vino sasa]*
 1SG.SM-IPFV-want 2SG.SM-play.SUBJ like G1.SM.NMLZ-PRF-play this.G8 now
 b. *na-chaka* *u-cheze* *ja [mw-a-wa* *ka-cheze* *vino sasa]*
 1SG.SM-IPFV-want 2SG.SM-play.SUBJ like G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-play.PRF this.G8 now
 「私はあなたに、たった今踊った人のように踊ってほしい」

- (34) a. *na-chaka* *kisu ja [N-φ-cho-ki-tumia* *juzi]*
 1SG.SM-IPFV-want knife like 1SG.SM-PRF-G7.NMLZ-G7.OM-use the other day
 b. *na-chaka* *kisu ja [N-φ-cho-wa* *N-ki-tumii* *juzi]*
 1SG.SM-IPFV-want knife like 1SG.SM-PRF-G7.NMLZ-COP 1SG.SM-G7.OM-use.PRF the other day
 「先日私が使ったようなナイフが欲しい」

- (35) a. *N-ku-veleke* [a-na-ko-kaa⁴⁸ Juma]
 1SG.SM-2SG.OM-send.SUBJ 3SG/G1.SM-IPFV- G15.NMLZ-live Juma.PN
- b. *N-ku-veleke* [a-ko-wa ka-na-kaa Juma]
 1SG.SM-2SG.OM-send.SUBJ 3SG/G1.SM- G15 .NMLZ 3SG/G1.SM-IPFV-live Juma.PN
 「あなたをジュマが住んでいるところに連れて行こうか」
- (36) a. *ha-ku-na* [m-na-kwimba nyimbo]
 NEG-G15.SM-POSS G1.SM.NMLZ-IPFV-sing song
- b. *ha-ku-na* [mw-a-wa ka-na-kwimba nyimbo]
 NEG-G15.SM-POSS G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing song
 「歌っている人はいない」
- c. *ha-ku-na* [wa-na-o-kwimba nyimbo]
 NEG-G15.SM-POSS G2.SM-IPFV-G2.NMLZ-sing song
- d. *ha-ku-na* [wa-ø-o-wa wa-na-kwimba nyimbo]
 NEG-G15.SM-POSS G2.SM-PRF-G2.NMLZ-COP 3PL/G2.SM-IPFV-sing song
 「歌っている人々はいない」
- (37) a. [mw-a-m-piga Juma] Pandu
 G1.SM.NMLZ-PRF-hit Juma.PN Pandu.PN
- b. Pandu njo=[mw-a-m-piga Juma]
 Pandu.PN GVN=G1.SM.NMLZ-PRF-hit Juma.PN
 「ジュマを殴ったのはパンドウだ」
- (38) a. [nyi-ø-yo-okota] embe
 1SG.SM-ø-G9.NMLZ-pick up mango
- b. embe njo=[nyi-ø-yo-okota]
 mango GVN=1SG.SM-ø-G9.NMLZ-pick up
 「私が拾ったのはマンゴーだ」

(32) - (34) は斜格目的語の例である。(32) では準体言が随伴の *na* に後続している。(33) (34) では、*ja* 「ように」に後続している。(36) は所有表現に後続する例で、不在を表している。(37) (38) は準体言が分裂文中に現れる例である。それぞれ、「誰がジュマを殴ったか」、「あなたは何を拾ったか」という WH 疑問文の答えとなる。WH 疑問文の答えとなる場合、準体言中では既知の情報が表されているが、この準体言は、(37a) (38a) のように、節頭に現れることもあれば、(37b) (38b) のように、提題標識 *njo* のあとに現れることもある。

しかし、準体言単独で現れることのできない場合もある。名詞が *nyi/N* や属辞には後続で

⁴⁸ *kaa* という動詞は「暮らす」という意味と「座る」という意味を持つ。なお、「今暮らしている」という意味では *na* 「未完結」でマークされ、「今座っている」という意味では完了形になる。

きる一方で、準体言はこれらの前置詞に直接後続することはできず、主名詞を介在させる必要がある。(39) は 15 クラスの属辞 *kwa* に準体言が後続する例である。

- (39) a. **ny-ende kwa [tu-ø-ye-m-kuta jana]*
 1SG.SM-go.PRF of.G15 1PL.SM-PRF-NMLZ.G1-3SG/G1.OM-see yesterday
 b. *ny-ende kwa mt'u [tu-ø-ye-m-kuta jana]*
 1SG.SM-go.PRF of.G15 person 1PL.SM-PRF-NMLZ.G1-3SG/G1.OM-see yesterday
 「私は、我々が昨日会ったあの人のところに行った」

また、他の名詞とは異なり、準体言は修飾要素（形容詞、指示詞、所有詞、属辞）で修飾することはできない。

4 主名詞と準体言の語順

準体言は、主名詞を修飾する際、他の修飾要素と同様に⁴⁹、主名詞に後続する（(40) (41) 参照）。また、他の修飾要素と共に起する場合、名詞から最も遠い位置に現れる（(42) (43) 参照）。

- (40) a. *mt'u [mw-a-kuja jana]*
 person G1.SM.NMLZ-PRF-come yesterday
 b. **[mw-a-kuja jana] mt'u*
 G1.SM.NMLZ-PRF-come yesterday person
 c. *mt'u [mw-a-wa ka-ja jana]*
 person G1.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-come.PRF yesterday
 d. **[mw-a-wa ka-ja jana] mt'u*
 G1.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-come.PRF yesterday person
 「昨日来た人」
- (41) a. *embe [a-ø-zo-leta Makoto]*
 mango 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring Makoto.PN
 b. **[a-ø-zo-leta Makoto] embe*
 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring Makoto.PN mango
 c. *embe [a-ø-zo-wa ka-lete Makoto]*
 mango 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF Makoto.PN
 d. **[a-ø-zo-wa ka-lete Makoto] embe*
 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF Makoto.PN mango
 「マコトがもってきたマンゴー」

⁴⁹ ただし、指示詞は主名詞に先行することもある。他の修飾要素もある場合、指示詞は先行する方が自然なようである。

- (42) a. *mgeni yangu mkubwa [m-na-lawa mjini]*
 guest my.G1 big.G1 G1.SM.NMLZ-IPFV-come from town.LOC
 b. *mgeni yangu mkubwa [mw-a-wa ka-na-lawa mjini]*
 guest my.G1 big.G1 G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-come from town.LOC
 「街から来た大柄な私の客」

- (43) a. *kisu changu kikali [N-ϕ-cho-katia kamba]*
 knife my.G7 sharp.G7 1SG.SM-PRF-G7.NMLZ cut.APPL rope
 b. *kisu changu kikali [N-ϕ-cho-wa N-katii kamba]*
 knife my.G7 sharp.G7 1SG.SM-PRF-COP 1SG.SM-cut.APPL.PRF rope
 「私がロープを切るのに用いた鋭い私のナイフ」

5 準体言内の項の位置について

標準スワヒリ語では、「関係節」内の項は「関係節」接頭辞でマークされた要素の前に現れることはできず、後続しなければならないことが知られる (Ashton 1947: 113, Mohammed 2001: 185-186)。カエ方言でも、準体言で修飾する主名詞がある場合、準体言内の項は、準体言接辞でマークされた要素に先行することはできない。

- (44) a. *tu-na-kulya embe [a-ϕ-zo-leta Pandu]*
 1SG.SM-IPFV-eat mango 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring Pandu.PN
 b. **tu-na-kulya embe [Pandu a-ϕ-zo-leta]*
 1SG.SM-IPFV-eat mango Pandu.PN 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring
 c. *tu-na-kulya embe [a-ϕ-zo-wa ka-lete Pandu]*
 1SG.SM-IPFV-eat mango 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF Pandu.PN
 d. **tu-na-kulya embe [Pandu a-ϕ-zo-wa ka-lete]*
 1SG.SM-IPFV-eat mango Pandu.PN 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF
 「私たちはパンドウがもってきたマンゴーを食べている」

しかし、準体言が修飾する主名詞がない場合、準体言内の項は準体言接辞でマークされた要素に先行することが可能となる。

- (45) a. *tu-na-kulya* [a- ϕ -zo-leta *Pandu*]
 1SG.SM-IPFV-eat 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring *Pandu*.PN
- b. *tu-na-kulya* [*Pandu* a- ϕ -zo-leta]
 1SG.SM-IPFV-eat *Pandu*.PN 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-bring
- c. *tu-na-kulya* [a- ϕ -zo-wa *ka-lete Pandu*]
 1SG.SM-IPFV-eat 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF *Pandu*.PN
- d. *tu-na-kulya* [*Pandu* a- ϕ -zo-wa *ka-lete*]
 1SG.SM-IPFV-eat *Pandu*.PN 3SG/G1.SM-PRF-G10.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-bring.PRF
 「私たちはパンドウがもってきたのを食べている」

(44) (45) は準体言化接辞でマークされた要素に先行するのが主語となる例だが、目的語や場所名詞の場合も同様である。以下の (46) (47) は目的語の、(48) (49) は場所名詞の例である。なお、目的語や場所名詞が準体言化接辞でマークされた要素に先行する場合、主名詞がなくとも、準体言は定形節の述語に後続することはできない。

- (46) a. *ṁt'u* [*ṁ-na-kwimba nyimbo*] *nyi-ṁ-kut'u*
 person G1.SM.NMLZ-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- b. **ṁt'u* [*nyimbo ṁ-na-kwimba*] *nyi-ṁ-kut'u*
 person song G1.SM.NMLZ-IPFV-sing 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- c. *ṁt'u* [*mw-a-wa ka-na-kwimba nyimbo*] *nyi-ṁ-kut'u*
 person G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- d. **ṁt'u* [*nyimbo mw-a-wa ka-na-kwimba nyimbo*] *nyi-ṁ-kut'u*
 person song G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 「歌をうたっている人に私は会った」
- (47) a. [*ṁ-na-kwimba nyimbo*] *nyi-ṁ-kut'u*
 G1.SM.NMLZ-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- b. [*nyimbo ṁ-na-kwimba*] *nyi-ṁ-kut'u*
 song G1.SM.NMLZ-IPFV-sing 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- c. [*mw-a-wa ka-na-kwimba nyimbo*] *nyi-ṁ-kut'u*
 G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing song 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
- d. [*nyimbo mw-a-wa ka-na-kwimba*] *nyi-ṁ-kut'u*
 song G1.SM.NMLZ-PRF-COP 3SG/G1.SM-IPFV-sing 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 「歌をうたっている人に私は会った」

- (48) a. *mt'u [a-ø-e-kwenda mjini] nyi-m-kut'u*
 person 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go town.LOC 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 b. **mt'u [mjini a-ø-e-kwenda] nyi-m-kut'u*
 person town.LOC 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 c. *mt'u [a-ø-e-wa k-ende mjini] nyi-m-kut'u*
 person 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-go.PRF town.LOC 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 d. **mt'u [mjini a-ø-e-wa k-ende] nyi-m-kut'u*
 person town.LOC 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-go.PRF 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 「街に行った人に私は会った」

- (49) a. *[a-ø-e-kwenda mjini] nyi-m-kut'u*
 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go town.LOC 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 b. *[mjini a-ø-e-kwenda] nyi-m-kut'u*
 town.LOC 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-go 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 c. *[a-ø-e-wa k-ende mjini] nyi-m-kut'u*
 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-go.PRF town.LOC 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 d. *[mjini a-ø-e-wa k-ende] nyi-m-kut'u*
 town.LOC 3SG/G1.SM-PRF-G1.NMLZ-COP 3SG/G1.SM-go.PRF 1SG.SM-3SG/G1.OM-see.PRF
 「街に行った人に私は会った」

6 結論

本稿では、スワヒリ語カエ方言で「関係節」とされてきたものを、柴谷の説く準体言として再記述することを試みた。この記述の動機は、カエ方言で散見される「先行詞」のない関係節も網羅した説明を行うことにある。

なお、標準スワヒリ語にもカエ方言のタイプ 2 と同じように、「関係節」接辞で動詞をマークすることで形成される「関係節」形成法が存在するが、自由関係節⁵⁰ (free relative clause) として現れうるのがかろうじて指摘されているのみで (Krifka 1995: 1404)、包括的な分析はまだまだなされていない。カエ方言では、「関係節」を準体言と捉えることで、5 節で述べた通り、準体言内の項が準体言標識に先行しうることを記述できたが、スワヒリ語他変種でも「関係節」を準体言として把握し直すことで新たな知見が得られるかもしれない。

⁵⁰ 自由関係節の例としては以下のような英語の例文の下線を引いた部分の節が挙げられる。例：
Whatever she wants she gets. (下線は筆者による)

略号一覧

1	first person (1 人称)	LOC	locative (所格)
2	second person (2 人称)	NEG	negative (否定)
3	third person (3 人称)	OM	object marker (目的語標識)
APPL	applicative (適用)	PASS	passive (受動)
CAUS	causative (使役)	PL	plural (複数)
COP	copula (コピュラ)	PN	proper noun (固有名詞)
G	gender (文法的性)	POSS	possessive (所有)
GVN	given (所与)	PRF	perfect (完了)
HAB	habitual (習慣)	PRO	pronoun (代名詞)
INCH	inchoative (起動)	NMLZ	nominalizer (準体言化)
INF	infinitive (不定)	SG	singular (単数)
IPFV	imperfective (未完結)	SM	subject marker (主語標識)
IRR	irrealis (未実現)	SUBJ	subjunctive (接続)

参考文献

- Ashton, E. O. (1947). *Swahili grammar (2nd. ed.)*. London: Longman.
- Contini-Morava, E. (1994). *Noun classification in Swahili*. Research reports from the Inst. for Advanced Technology in the Humanities, Univ. of Virginia. Retrieved September 4, 2015, from <http://www2.iath.virginia.edu/swahili/swahili.html>
- Katamba, F. (2003). Bantu nominal morphology. In D. Nurse, & G. Philippson (Eds.), *The Bantu Languages* (pp. 103 - 120). London: Routledge.
- Krifka, M. A. (1995). Swahili. In J. Jacobs, A. von Stechow, W. Sternefeld, & T. Vennemann (Eds.) *Syntax: An international handbook of contemporary research* (pp. 1397 - 1418). Berlin: Walter de Gruyter.
- Mohammed, M. A. (2001). *Modern Swahili grammar*. Nairobi: East African Educational Publishers.
- Nurse, D., & Hinnebusch, T. J. (1993). *Swahili and Sabaki: A linguistic history*. Berkeley: University of California Press.
- Poulos, G. (1986). Instances of semantic bleaching in South-Eastern Bantu. In G. J. Dimmendaal (Ed.), *Current approaches to African linguistics, vol. 3* (pp. 281 - 96). Dordrecht: Foris.
- Racine-Issa, O. (2002). *Description du Kikae: Parler Swahili du sud de Zanzibar: Suivie de cinq contes*. Leuven: Peeters Publishers.
- Shibatani, M. (2009). Elements of complex structures, where recursion isn't: The case of relativization. In T. Givón, & M. Shibatani (Eds), *Syntactic complexity: Diachrony, acquisition, neuro-cognition, evolution* (pp. 163-198). Amsterdam: John Benjamins.
- 柴谷方良 (2014).『準体助詞をめぐる諸問題 -共時論ならびに通時論的観点から-』「日本語学会第 149 回予稿集」4 - 9.

モンゴル語の第2音節以降における Cx と CVx の対立について

植田尚樹

京都大学

1 はじめに

モンゴル語ハルハ方言（以下モンゴル語）の第2音節以降の母音体系は、「母音の長短の対立はなく、音素的母音 (phonemic vowel) と挿入母音 (epenthetic vowel) の区別である」とされている。phonemic vowel は第2音節以降で唯一の音韻的な母音である。epenthetic vowel は位置も音価も予測可能であることから、音韻的には存在せず、規則によって挿入される音声的なものであるとされる。

しかし、この解釈では問題となり得る例がある。動詞の未来・形動詞形 -x は、正書法において必ず直前に母音を伴って書かれ、母音が書かれない名詞・形容詞と正書法上のミニマルペアをなす。(本稿では、正書法による綴りの転写を < > で表す。)

- (1) <alx> ‘hammer’ vs. <alax> ‘kill-FUTP’
<šarx> ‘injury’ vs. <šarax> ‘broil-FUTP’

モンゴル語の正書法は現代語の音韻体系に基づいて制定されたものであり、正書法と音声事実との乖離は小さい。これらの語に関しても、正書法が音声事実を反映している、つまり音声的にも弱化母音の有無によるミニマルペアをなす可能性がある。その場合、動詞の未来・形動詞形に現れる第2音節以降の弱化母音は、phonemic vowel と epenthetic vowel と異なる振る舞いを見せる。したがって、仮に (1) のような語が音声的にもミニマルペアをなしているとしたら、第2音節以降の母音体系について再考する必要がある。

このように、(1) のような語は母音体系にも関わる重要な語であるにもかかわらず、音声学的な調査が不十分であり、音声的事実が必ずしも明らかではない。本稿では、(1) のような正書法上のミニマルペアをなす語の音声的事実を調査し、これらの語が音声的にも母音の有無によるミニマルペアをなすことを示す。そして、その事実をもとに、第2音節以降にも母音の長短の対立を認める音韻解釈を提案する。

2 研究の背景

本節では研究の背景として、モンゴル語の音韻体系および挿入母音の振る舞いについて述べる。

2.1 音韻体系

2.1.1 子音体系

子音体系は以下のとおりである¹。

表 1 : 子音体系

	labial	palatalized labial	dental	alveo- palatal	palatal	velar	uvular
stops	(p), b	(p ^j), b ^j	t, d	t ^j , d ^j	(k ^j), g ^j	(k), g	g
affricates			ts, dz	č, ĵ			
fricatives			s	š	x ^j	x [x~χ]	
lateral fricatives			l [ɬ, ɮ]	ɮ ^j [ɬ ^j , ɮ ^j]			
nasals	m	m ^j	n	n ^j		ŋ	
rhotics, glides	w	w ^j	r	r ^j	j		

2.1.2 母音体系

母音体系は、位置（第 1 音節か第 2 音節以降か）によって異なるとされている。

第 1 音節では、長母音と短母音の対立がある。一方、第 2 音節以降には長母音と短母音の対立はなく、「音素的母音 (phonemic vowel)」と「(音素的でない)挿入母音 (epenthetic vowel)」の区別であるとされている (Svantesson 2004、Svantesson et al. 2005、Karlsson 2005 など)。以下に音素的母音の体系を示す。

表 2 : 母音体系 (第 1 音節)

<i>short</i>		<i>long</i>		<i>diphthongs</i>	
i	u	ii	uu	ui	
e ²	o		oo	oi	
				³	
a	ɔ	aa	ɔɔ	ai	ɔi

(Svantesson et al. 2005: 22 (2) 一部改変)

表 3 : 母音体系 (第 2 音節以降)

<i>monophthongs</i>		<i>diphthongs</i>	
i	u		ui
o			oi
e	o		
a	ɔ	ai	ɔi

(Svantesson et al. 2005: 24 (4))

第 2 音節以降の *monophthongs* は、歴史的には長母音に由来しているものの、音声的に第 1 音節の長母音よりも短母音に近い長さを持つことから、Svantesson et al. (2005) では「短い」母音であるとされている。しかし、「短い」と解釈することの妥当性は疑わしい (Janhunen 2012、植田 2015a、Ueta 2015 など)。さらに、第 2 音節以降の母音体系 (短母音と長母音の対立が本

¹ Svantesson et al. (2005) などでは、閉鎖音・破擦音を有声/無声の対立ではなく無気/有気の対立と捉えるなど、いくつかの点で本稿とは異なる解釈を取っているが、その点には立ち入らない。

² Svantesson et al. (2005) では、第 1 音節の短母音に e が不在 (i と e が合流した) とされているが、筆者は e を認める立場をとる。詳しくは植田 (2014) を参照。

³ oi という二重母音はない。

当にないのか) については議論の余地がある。現段階では上に示した解釈に従うが、詳しくは7節で考察する。

2.2 挿入母音

第2音節以降に現れる弱化した母音は、音価も位置も予測可能であり、音素的ではない。この母音は、音韻構造に現れる子音連続 (consonant cluster) を避けるための、音声的な「挿入母音」である。

- (2) ...not only the quality, but also the places, where reduced vowels occur are predictable. Thus they can be inserted (epenthesized) by a rule, and need not be present in phonological representations. (Svantesson et al. 2005: 23)

2.2.1 挿入母音の音価

挿入母音の音価は、直前の子音の種類と母音調和によって決定される。

直前の子音が歯茎硬口蓋音 (š, č, j) および口蓋化子音 (Cʰ) の場合、挿入母音の音価は [i] となる。その他の環境では、母音の音価は母音調和によって決定され、基本的には先行母音の音色を引き継ぐ。ただし、[i], [i] (二重母音の後半部分も含む) は母音調和に関わらない母音であるため、無視される。当該挿入母音の前に [i], [i] しか現れない場合、挿入母音の音価は [e̞] となる。

母音調和による挿入母音の音価の原則を示すと、以下のようになる。

表 4：先行母音と挿入母音の音価

先行母音	挿入母音の音価
(i), e, u	[e̞]
o	[õ]~[ø]
u	[ũ]~[ū]
a	[ã]
ɔ	[ɔ̃]

挿入母音は、音声的には弱化母音 (中舌化し、持続時間も非常に短い母音) である。本稿では、この音声事実を [̃] を用いて表す⁴。(o は中舌化が著しいため、[ø] で表す。)

2.2.2 挿入母音の位置

単一の形態素からなる語の挿入母音の位置は、コーダ制約と音節化規則によって決定され

⁴ 全て [ə̃] で表記する先行研究もある。

る⁵。

(3) *Coda constraint*

A string of two consonants is a possible coda if, and only if, it has decreasing sonority, that is, if it consists of a voiced consonant followed by a voiceless consonant.

(Svantesson et al. 2005: 67 (2))

(4) *Monomorphemic syllabification*

- (i) The phonological representation of the word is scanned from right to left and a maximal coda (possibly empty) is found.
- (ii) The coda is combined with the preceding vowel to make a rhyme. If the segment preceding the coda is a consonant, a schwa vowel is epenthesized as the nucleus of the rhyme.
- (iii) The preceding consonant becomes an onset, and the syllable is complete.
- (iv) If there are segments left, the procedure is repeated.

(Svantesson et al. 2005: 69 (6))

単一形態素からなる語に対する母音挿入の例を (5) に示す。

- (5) a. /nert/ [nert] 'famous'
b. /baatr/ [ba:.t̥ɑr] 'hero'
c. /bɔlwsrl/ [bɔ.ɭɔ̃ws.rɔ̃ɭ] 'education'

(5a) において、rt という子音連続はソノリティーが下降しており、コーダをなすことができるため、間に挿入母音は入らない。一方、(5b) の tr はソノリティーが上昇しており、コーダをなすことができないため、間に母音が挿入される。(5c) では、rl はコーダをなすことができないため⁶、間に母音が挿入され、r がオンセットとなる。オンセットは1つしか許されないため、左隣の s は前の音節のコーダに入ることになる。そして、ws はコーダをなすことができるが lws はコーダをなすことができないため、l と w の間に母音が挿入され、l がオンセットに入る。

複数の形態素からなる語は、語幹が音節化された後、以下の再音節化制約に抵触しない範囲で再音節化される。つまり、音節化規則が cyclic に適用される。

⁵ より詳細な規則については、Svantesson (1995)、Svantesson et al. (2005) を参照。

⁶ /l/ は音声的には側面摩擦音 [ɭ] (または [ɮ]) で現れるにもかかわらず、/r/ に後続した時にコーダを形成できないことから、音韻的には流音として機能していることになる。/l/ の音韻的・音声的ステータスについては、今後検討すべき問題である。

(6) *Resyllabification constraint*

On each morphological cycle, an epenthetic vowel cannot be inserted into the already syllabified part of a word. (Svantesson et al. 2005: 74 (14))

(5) の各例に接尾辞を付与した形を挙げる。なお、以下では母音調和によって交替する母音を E (e~o~a~ɔ) および U (u~ɔ) で表す。また、本稿では、実際には現れない音形を * で表す。

- (7) a. nert-/Es/ [ner.tes] ‘famous-ABL’
 b. ba:tār-/Es/ [ba:t.ras] ‘hero-ABL’
 c. bəḷḷḳḳḳw̄srḳḳ-/Es/ [bḳ.ḷḳḳw̄s.rḳḳ] ‘education-ABL’
 (*[bḳ.ḷḳḳw̄.sḳr.ḳḳs])

(7a) では、t がオンセット、r がコーダになるように再音節化される。(7b) では、r が後続音節のオンセットに、t が先行音節のコーダになった結果、挿入母音が不要となり、削除されている。他方 (7c) では、ḷḳḳ がオンセットになるが、挿入母音を削除して r をコーダにするとその直前に挿入母音が必要となり、(6) の再音節化制約に抵触してしまうため、r をコーダにすることができない。したがって、挿入母音は削除されず、r はオンセットのまま残ることになる。

3 正書法

モンゴル語ハルハ方言では、キリル文字による正書法が確立されている。

第1音節において、長母音は「母音字2つ」、短母音は「母音字1つ」で表記される。また、第2音節以降において、音素的母音は「母音字2つ」、挿入母音を「母音字1つ」で表記する。換言すれば、正書法ではどの位置でも長母音と短母音の対立であるように表記される⁷。

表 5：音韻的解釈と正書法

位置	音韻的解釈	正書法
第1音節	長母音 vs. 短母音	<VV> vs. <V>
第2音節以降	音素的母音 vs. 挿入母音	<VV> vs. <V>

第2音節以降における挿入母音字（短母音字）の種類は、基本的には挿入母音の音価に準じる。すなわち、歯茎硬口蓋音 (š, č, j) の直後には必ず <i> が書かれる。ただし、口蓋化子音は対応する字を持たないので、「口蓋化子音 + 挿入母音」を <子音字 + i> で表す。

⁷ 歴史的にも、どの位置でも長母音と短母音の対立であった。

その他の環境では、母音調和の原理に従う。ここでも挿入母音の音価と同様、<i>（二重母音の後半部分も含む⁸）は母音調和に関わらない母音であるため、無視される。当該挿入母音の前に <i> しか現れない場合、挿入母音字は <e> となる。

表 6：正書法における母音調和の原理

先行母音字	後続母音字
<(i, e, u)>	<e>
<o>	<o>
<a, u>	<a>
<ɔ>	<ɔ>

正書法における第2音節以降の短母音字の位置は、基本的には挿入母音の位置と一致する（詳しくは角道 1974, Karlsson 2005, Ariunǰargal 2012などを参照されたい）。

(5) および (7) に挙げた音節化の例に正書法による表記を加えると、以下のようになる。

- (8) a. /nert/ [nert] <nert> ‘famous’
 b. /baatr/ [ba:tär] <baatar> ‘hero’
 c. /baatr-Es/ [ba:t.ras] <baatraas> ‘hero-ABL’
 d. /bölwsrl/ [bɔ.ɮöws.rɔɮ] <bölwsrɔl> ‘education’

4 問題の所在

4.1 問題となる例

2.2節で見てきた挿入母音に関して問題となるのが、動詞の未来・形動詞形 -x である。この接尾辞は正書法上、音節化規則とは関係なく、直前に必ず母音を伴って書かれる。その結果、音節化に従う名詞・形容詞との間で、正書法上のミニマルペアが存在する。

- (9) <alx> ‘hammer’ vs. <alax> ‘kill-FUTP’
 <šarx> ‘injury’ vs. <šarax> ‘broil-FUTP’

4.2 先行研究における記述

(9) のような例は、正書法上は短母音字の有無によるミニマルペアをなしているが、音声事実はどのようになっているのだろうか。

Janhunen (2012) は、未来・形動詞形 -x は直前に必ず母音を必要とし、子音クラスターで終わる語（=名詞・形容詞）とミニマルペアが存在すると明記している。

⁸ 二重母音の後半部分、および長母音 <ii> の2つ目の母音は、キリル文字では <йй> で表記され、その他の環境で <i> を表す <и> とは別の文字が用いられるが、本稿ではどちらも <i> で転写する。

- (10) The most common example of a morphologically conditioned schwa is offered by the futuritive participle marker *-x*, which, at least in normative Khalkha, always requires a preceding schwa when following a stem-final consonant. Minimal and subminimal pairs with and without the schwa can arise between these forms and words ending in a final consonant cluster, as in the example Cyrillic Khalkha *erx* ‘right’ vs. *erex* ‘to search’.

(Janhunen 2012: 70、一部改変)

Svantesson et al. (2005) によると、未来・形動詞形 *-x* は音声的にも直前に母音を必要とする。しかし、他の弱化母音と同様に、発話スタイルによっては脱落することもあるという。また、未来・形動詞形 *-x* にさらに接尾辞が後続した場合には、音節化規則によって *x* の直前の母音が削除されるのがふつうである。その結果、ミニマルペアをなす名詞と同音となる（綴り字は異なる）。

- (11) <alxaas> [aɮɣas] ‘hammer-ABL’ vs. <alaxaas> [aɮɣas] ‘kill- FUTP-ABL’
<šarxaas> [ʃarɣas] ‘injury-ABL’ vs. <šaraxaas> [ʃarɣas] ‘broil-FUTP-ABL’

一方、Karlsson (2005) によると、未来・形動詞形 *-x* もカジュアルなスタイルでは直前に母音を伴わずに発音されるという。しかも、ソノリティーが下降していて母音挿入が必要ない場合のみならず、ソノリティーが上昇していて母音挿入が必要であるはずの子音連続においても、母音の挿入が行われない。

- (12) In the present material, however, epenthesis often does not take place in final Cx clusters (for instance, in [tx] and [sx] schwa is never inserted). This indicates that, in casual speech, epenthesis in final clusters ending with the future-participle suffix *-x* is governed by the same principle as applies to the other final clusters; that type of cluster is therefore analysed together with other final combinations. (Karlsson 2005: 60)

名詞・形容詞については、モンゴル語の発音辞典である Sambuudorj (2012) に記載がある。<alx> ‘hammer’, <šarx> ‘injury’ の発音は以下のように記されている。

- (13) <alx> [aläxʌ]
<šarx> [ʃarɣǎ]

<alx> ‘hammer’ では子音間に弱化母音が現れるとされているが、<talx> ‘bread’ や <xalx> ‘Khalkha (people)’ ではそれぞれ [talxǎ], [xalxǎ] となっており、その位置に弱化母音はない。このように、語によって表記が異なっているうえ、語末に母音が書かれているなど、実際の発音を忠実に表しているかどうかは疑問が残る。

以上のように、名詞・形容詞と動詞の未来・形動詞形の問題については先行研究で数多く扱われているが、定量的な調査に基づいた音声事実が示されているとは言い難く、実際に音声的な差異があるのか、あるとすればどの程度の差なのかを明らかにした研究は見いだされない。

正書法上のミニマルペアが、音声的にも弱化母音の有無の違いのみで対立しているとすれば、2.2 節に示した挿入母音の規則では説明できず、音韻解釈を再考する必要がある。したがって、これらの語の音声事実を正確に記述し、それをもとに音韻体系について考察することが必要である。

5 調査

未来・形動詞形 $-x$ と名詞・形容詞に音声的差異が観察されるかを明らかにするため、以下のような調査を行った。

5.1 調査語彙

調査語彙は、(9) のように、正書法において母音の有無のみによってミニマルペアをなす 9 組 18 語である。

(14) 名詞・形容詞	-	動詞未来・形動詞形
<(C)VCx>		<(C)VCVx>
<alx> ‘hammer’	-	<alax> ‘kill-FUTP’
<n ^l alx> ‘infant’	-	<n ^l alax> ‘paste-FUTP’
<talx> ‘bread’	-	<talax> ‘confiscate-FUTP’
<xalx> ‘Khalkha’	-	<xalax> ‘get hot-FUTP’
<erx> ‘right’	-	<erex> ‘search-FUTP’
<šarx> ‘injury’	-	<šarax> ‘broil-FUTP’
<xamx> ‘sudden’	-	<xamax> ‘gather up-FUTP’
<sawx> ‘chopsticks’	-	<sawax> ‘beat-FUTP’
<xawx> ‘trap’	-	<xawax> ‘sew up-FUTP’

語末の x の 1 つ前の子音に注目すると、 l, r, m, w のいずれかである。 x の 1 つ前の子音が x と同等か、 x よりも低いソノリティーを持つ子音である場合、名詞・形容詞であれ動詞の未来・形動詞形であれ x との間に必ず母音が挿入されるので、ミニマルペアは存在し得ない。また、口蓋化子音 C^j は後ろに必ず母音字 $\langle i \rangle$ が書かれることから、正書法によるミニマルペアは存在し得ず、調査語彙として適切ではない。さらに、 $/n/$ と $/ŋ/$ はどちらも $\langle n \rangle$ (キリル文字 $\langle H \rangle$) で書かれ、両者の区別は直後の母音字の有無によってなされるほか、両者が交替する現象もあるため、やはりミニマルペアをなす調査語彙としては適切でない。

したがって、ミニマルペアを用いて調査ができるのは、 x の 1 つ前の子音が l, r, m, w のい

ずれかである場合に限られる。

5.2 調査方法

それぞれの語は、単独およびキャリア文中の計2回発音された。

名詞・形容詞に関しては、原形(=主格)を示し、対格接尾辞 *-ig* (*-g*)、造格接尾辞 *-Er*、共同格接尾辞 *-tEi*、再帰接尾辞 *-E⁹* を付与したもの、および原形をキャリア文(15)に入れたものを読むように指示した¹⁰。

(15) bat _____ geḡ xelsḡḡ ‘Bat (proper name) said _____’

ターゲットとなる語は、ダミーとなる語とともにランダムに並べられている。

<alx> ‘hammer’ を例にとると、以下のように読み上げられた。

(16) alx, alx-ig, alx-ar, alx-tai, alx-a, bat alx geḡ xelsḡḡ

一方、動詞の未来・形動詞形に関しては、動詞語幹(=命令形)のみを示し、命令形 *-φ*、継続・副動詞接尾辞 *-j* (*-č*)、完了・副動詞接尾辞 *-Ed*、過去・形動詞接尾辞 *-sn¹¹*、未来・形動詞接尾辞 *-x* を付与したもの、および未来・形動詞接尾辞 *-x* を付与したものをキャリア文(15)に入れた文を読むように指示した。動詞語幹のみを示すことで、綴り字の影響をできる限り排除している。こちらも、ターゲットとなる語はダミーとなる語とともにランダムに並べられた。

<alax> ‘kill-FUTP’ を例にとると、以下のように読み上げられた。

(17) al, al-ḡ, al-ad, al-sn, al-x, bat al-x geḡ xelsḡḡ

5.3 分析方法

praat (Boersma and Weenink 2012) を用い、語末の *x* の直前に母音が存在するか否かを確認した。母音の有無の判定は恣意的にならざるを得ないが、本調査では準周期的な音声波形が見られ、スペクトログラム上で第1、第2フォルマントが明瞭である場合に「母音がある」と判定するほか、聴覚的印象および語のピッチも母音の有無の手掛かりとする。

語のピッチは基本的に、1音節語では最初から高く(H)、2音節語では第1音節が低く第2音節が高い(LH)¹²。この事実から、語のピッチをもとに母音の有無を判定することができる。

⁹ 以上4つの形はすべてダミーの語形である。

¹⁰ 格接尾辞を付けた形を読み上げる調査を行わなかったインフォーマントも2名いる(後述するインフォーマントのうちES、MC)。

¹¹ こちらも、4つの形はすべてダミーの語形である。

¹² 詳しくは角道(1982)、Karlsson(2005)などを参照のこと。

表 7：語のピッチと母音の有無

ピッチ	語の音節数	x の前の母音の有無
H	1 音節	母音なし
LH	2 音節	母音あり

ただし、1 音節語であってもコーダが重子音である場合、母音が L ピッチ、重子音部分が H ピッチを担い、LH ピッチを実現する可能性があることが Ueta (2014) によって指摘されている。このことから、「H ピッチならば 1 音節語である」とはいえるが、「LH ピッチならば 2 音節語である」とは言えない可能性がある。したがって本稿では、語のピッチを母音の有無を判定する絶対的な基準とはせず、参考として用いた。

5.4 インフォーマント

インフォーマントは以下の 9 名である。

表 8：インフォーマント

話者	年齢	性別	出身
GM	16	女	ウランバートル (UB)
BB	17	男	ウランバートル (UB)
AR	23	男	ウランバートル (UB)
BS	25	男	ウランバートル (UB)
SC	27	女	ウランバートル (UB)
DS	20	女	ダルハン (UB から北へ約 200 キロ)
BC	23	女	アルハンガイ (UB から東へ約 450 キロ)
ES	24	女	ゴビアルタイ (UB から南西へ約 800 キロ)
MC	40	女	ヘンティー (UB から西へ約 300 キロ)

出身地はかなり広範囲に広がっており、方言差がある可能性も残されているが、いずれの地域も大まかにはハルハ方言が話されている地域であるとされている (栗林 1992)。本稿では、方言差については扱わないこととする。

6 結果

本節では、x の直前の母音の有無について、「話者による差異」「語彙 (音韻構造) による差異」「キャリア文による差異」の 3 つの点から考察する。

6.1 話者による差異

本節では、母音の有無の話者による差異について考察する。

表9に、話者別の母音の有無を示す。数字は、語末のxの直前に明らかに母音が存在する語の数を表しており、最大値は調査語彙数、すなわち9となる。ただしwの直後では、w自体が音声上「母音」となり、その直後の母音の有無が判定できないことがある。その場合は、聴覚的印象およびピッチのみから母音の有無を判定することになる。そのような場合を含め、音声波形、スペクトログラムからは母音の存在が明らかであるとは言い切れないものの、ピッチなどから母音があると判断される語の数をカッコ内に示した。

表9：母音の有無（話者別）

話者	名詞・形容詞 <(C)VCx>		動詞未来・形動詞形 <(C)VCVx>	
	単独	キャリア文	単独	キャリア文
GM	0	0	8 (1)	3 (2)
BB	0	0	9	4
AR	8	1 (2)	8 (1)	5 (1)
BS	4	1 (1)	9	6
SC	6 (3)	6 (2)	8 (1)	7 (2)
DS	3 (1)	4	9	7 (2)
BC	8 (1)	7 (1)	9	9
ES	1 (1)	0	9	9
MC	5 (1)	5	9	7 (1)

表9から、話者によって母音の有無に大きな違いがあることがわかる。特に名詞・形容詞では、母音がない話者（GM、BB）もいれば、ほとんどの語で母音がある話者（SC、BC）もいる。その違いを年齢や出身地から説明することは難しい。

しかし、全体的には名詞・形容詞には母音が存在しない傾向にあり、動詞の未来・形動詞形には母音が存在する傾向にあると言え、話者ごとに見れば、どの話者でもその傾向が当てはまる。このことから、話者によって程度の差はあれ、「名詞・形容詞 <(C)VCx> と動詞の未来・形動詞形 <(C)VCVx> では、発音上も母音の有無によるミニマルペアをなしている」と言える。

以下に、母音の有無の違いが顕著なミニマルペアの音声波形、スペクトログラム、ピッチカーブを示す。

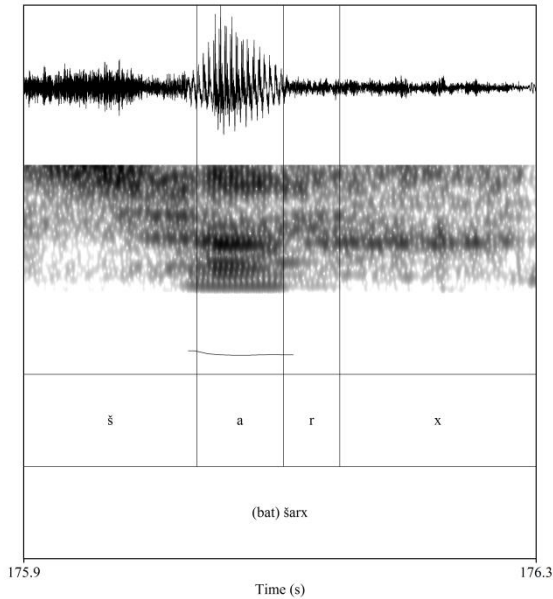


図 1 : šarx (ES、キャリア文中)

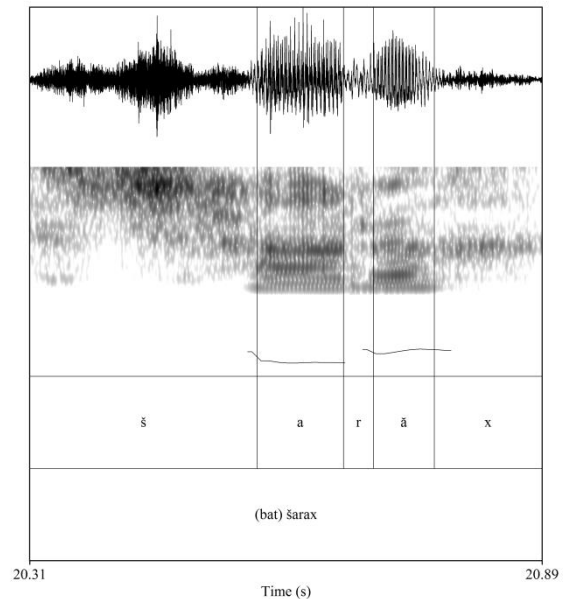


図 2 : šarax (ES、キャリア文中)

図 1、図 2 はともに、話者 ES がキャリア文中で発音した語の音声波形、スペクトログラム、ピッチカーブを示しており、図 1 は名詞 <šarx>、図 2 は動詞の未来・形動詞形 <šarax> の図である。両者を見比べるとわかるように、名詞 <šarx> では r と x の間に母音がなく、動詞の未来・形動詞形 <šarax> では母音があることが、音声波形、スペクトログラム、ピッチカーブ全てから判断できる。このような例では、完全に母音の有無によるミニマルペアをなしている。

6.2 語彙（音韻構造）による差異

5.1 節で述べたように、調査語彙において語末の x の 1 つ前の子音は、l, r, m, w のいずれかである。これらの子音の種類の違いが、母音の有無に影響するのであろうか。本節では、子音の種類と母音の有無との関係について考察する。

6.2.1 名詞・形容詞

名詞・形容詞における母音の有無を表 10 に示す。表中の○は母音が存在すること、×は母音が存在しないこと、計は母音が存在する語の数を表す。音声波形、スペクトログラムからは母音の存在が明らかであるとは言い切れないものの、ピッチなどから母音があると判断された語（表 9 でカッコの中に入れたもの）も、ここでは「母音あり」とみなしている。

表 10：名詞・形容詞 <(C)VCx> における母音の有無

話者		GM	BB	AR	BS	SC	DS	BC	ES	MC	計
単独	<alx>	×	×	○	×	○	×	○	×	○	4
	<n ^l alx>	×	×	○	○	○	×	○	×	○	5
	<talx>	×	×	○	○	○	○	○	×	○	6
	<xalx>	×	×	○	×	○	×	○	×	○	4
	<erx>	×	×	○	○	○	○	○	×	×	5
	<šarx>	×	×	○	×	○	○	○	○	○	6
	<xamx>	×	×	○	○	○	○	○	○	○	7
	<sawx>	×	×	○	×	○	×	○	×	×	3
	<xawx>	×	×	×	×	○	×	○	×	×	2
キャリア文	<alx>	×	×	○	×	○	×	○	×	○	4
	<n ^l alx>	×	×	×	×	○	○	○	×	○	4
	<talx>	×	×	×	×	○	○	○	×	○	4
	<xalx>	×	×	○	×	○	×	○	×	○	4
	<erx>	×	×	×	○	○	○	○	×	×	4
	<šarx>	×	×	×	×	○	○	○	×	×	3
	<xamx>	×	×	○	○	○	×	○	×	○	5
	<sawx>	×	×	×	×	○	×	○	×	×	2
	<xawx>	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0

名詞・形容詞は正書法上 <(C)VCx> の構造を持ち、動詞・未来形動詞形に比べて x の前に母音が現れにくいことから、「母音が現れる形がイレギュラー」であるとみなすことができる。

名詞・形容詞の中で最も多く母音が現れている語は xamx で、18回（2回×9名）のうち12回で母音が現れている。続いて talx（10回）、n^lalx, erx, šarx（9回）となる。

xamx で母音が現れやすいのは、m が閉鎖性のある子音であるためだと考えられる。閉鎖性のある m から摩擦音の x に移行する際に、m の出わり (off glide) が母音として発音される（あるいは、母音として聞こえる）と考えられる。

一方、x の前の子音が m 以外の場合、一定の傾向は見られない。talx では母音が現れやすいが、同じく l が先行する alx ではそれほど母音が現れやすくはない。また、多くの語に母音を挿入する傾向にある話者でも、xawx には母音を挿入しないことが多い。これが x の前の子音 w に起因するとすれば、sawx でも同様の結果が見られることが予想されるが、実際にはそのような結果にはなっていない。これらのことから、「x の前の子音によって母音の有無が決まる」とは言い切れない。

6.2.2 動詞未来・形動詞形

動詞未来・形動詞形における母音の有無を表 11 に示す。表 10 と同様に、表中の○は母音が存在すること、×は母音が存在しないこと、計は母音が存在する語の数を表す。名詞・形容詞の場合と同様に、表 9 でカッコの中に入れたものも「母音あり」とみなしている。

表 11：動詞・未来形動詞形詞 <(C)VCVx> における母音の有無

話者		GM	BB	AR	BS	SC	DS	BC	ES	MC	計
単 独	<alax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<n ^h alax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<talax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<xalax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<erex>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<šarax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<xamax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<sawax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<xawax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
キ ャ リ ア 文	<alax>	×	×	○	○	○	○	○	○	○	7
	<n ^h alax>	×	○	○	○	○	○	○	○	○	8
	<talax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<xalax>	×	×	×	○	○	○	○	○	×	5
	<erex>	○	×	○	○	○	○	○	○	○	8
	<šarax>	×	○	○	×	○	○	○	○	○	7
	<xamax>	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
	<sawax>	○	×	×	×	○	○	○	○	○	6
	<xawax>	○	×	×	×	○	○	○	○	○	6

名詞・形容詞とは逆に、動詞の未来・形動詞形は正書法上 <(C)VCVx> の構造を持ち、x の前に母音が現れやすい傾向にあることから、「母音が現れない形がイレギュラー」であるとみなすことができる。

動詞の未来・形動詞形のうち最も母音が現れにくい語は xalax で、18 回（2 回×9 名）のうち 4 回で母音が現れていない。以下、xawax, sawax（3 回）、alax, šarax（2 回）と続く。

x の前の子音が w の時に比較的母音が現れにくいのが、これは w 自体が母音 [u]¹³ として発音されることと関係する。

動詞の未来・形動詞形 -x は、動詞語幹が子音で終わる場合には母音が挿入される（18a）

¹³ [u] という音声表記は、筆者の聴覚印象と音韻論的解釈に基づいたものである。

が、動詞語幹が母音で終わる場合には、新たに母音が挿入されることはない (18b), (18c)。このことから、「未来・形動詞形 -x は直前に母音を伴う」と言える。

- (18) a. bɔd-x [bɔdɔχ] ‘think-FUTP’
 b. saa-x [sa:χ] ‘(to) milk-FUTP’
 c. xai-x [χaiχ] ‘search-FUTP’

一部の話者では、未来・形動詞形 -x の直前の子音 w が母音 [ɔ] で発音されることによって、「未来・形動詞形 -x は直前に母音を伴う」という条件が満たされ、母音が挿入されないと考えられる¹⁴。

- (19) saw-x [sawǎχ] ~ [sauχ] ‘beat-FUTP’
 xaw-x [χawǎχ] ~ [χauχ] ‘sew up-FUTP’

一方、x の前の子音が w 以外の場合には、一定の傾向は見られない。特に子音が 1 の時は、語によって母音の有無に大きな差がある。このことから、「x の前の子音によって母音の有無が決まる」とは言い切れない。

6.2.3 語彙と母音の有無

6.2.1 節および 6.2.2 節で、名詞・形容詞においても動詞の未来・形動詞形においても、x の前の子音が母音の有無に影響しているとは言えず、「語彙によって母音の有無に差がある」ということだけが明らかになった。この要因としては語の使用頻度が考えられるが、現段階では明らかでない。

なお、4.2 節で述べたように、発音辞典である Sambuudorj (2012) でも語によって母音の有無に違いがあるが、Sambuudorj (2012) の表記と本調査の結果は異なっている。

(20)	語彙	Sambuudorj (2012)	本調査 (母音が現れた回数)
a.	<alx>	[alǎxΛ]	8 回 / 18 回
b.	<talx>	[talxǎ]	10 回 / 18 回
c.	<xalx>	[xalxǎ]	8 回 / 18 回

これらの結果から、語による差異は単なるデータのばらつきである可能性が高いが、結論を下すためにはさらなる定量的な調査が必要である。

¹⁴ ただし、/au/ という二重母音は認められないため、あくまでも音声的な現象である。

6.3 キャリア文による差異

語が単独で発音された場合と、キャリア文中で発音された場合を比較すると、名詞・形容詞、動詞の未来・形動詞形いずれにおいても、どの話者でも単独の発音において母音が現れやすく、キャリア文中において母音が現れにくい（表 9 参照）。

4.2 節では、Svantesson et al. (2005) および Karlsson (2005) の指摘、すなわち「動詞の未来・形動詞形 -x は、formal なスタイルでは直前に必ず母音を伴って発音されるが、casual なスタイルでは母音を伴わずに発音される」という指摘を見た。単独発話を formal、キャリア文中での発話を casual なスタイルと読み替えるならば、動詞の未来・形動詞形に関しては、本調査でも同様の結果が得られた。

一方、名詞・形容詞に関しても、単独発話（≒ formal なスタイル）では母音が挿入されるが、この点は先行研究において指摘がない。

7 母音の有無と母音体系

6 節では、話者や語彙、キャリア文の有無によって母音の出現の頻度が異なることを見たが、同条件（1 人の話者内の単独発話どうし、キャリア文どうし）で比較すれば、「名詞・形容詞 <(C)VCx> と動詞の未来・形動詞形 <(C)VCVx> は、発音上も母音の有無によるミニマルペアをなしている」ということが明らかになった。

2 節で述べた音韻解釈に従うと、これらの 2 つは音韻表示が（形態素境界が存在するか否かという違いを除いて）同じであるにもかかわらず、名詞・形容詞では母音挿入が起こらず、動詞の未来・形動詞形では母音挿入が起こるということになる。

- (21) a. <alx> (N) /alx/ [aɭχ]
 b. <alax> (V) /al-x/ [aɭäχ]

この事実は、2.2 節に示した母音挿入の規則では説明できない。では、両者の音声的な差異をどのように説明すればよいだろうか。

1 つ目の案として、形態素境界の後ろには必ず母音が挿入される、という説明が考えられるが、この案は他の接尾辞の振る舞いによって否定される。例えば動詞の継続・副動詞形 -j (-č) は、ソノリティーの要請で母音が必要とされない限り、母音挿入は行われない（この点については、Svantesson et al. (2005) も認めている）。

- (22) /al-j/ [aɭdʒ] (*[aɭädʒ])

2 つ目の案として、未来・形動詞形は音素的母音を持った -Ex の形であると解釈する、という説明が考えられるが、この案も他の接尾辞の振る舞いによって否定される。例えば、動詞の完了・副動詞形 -Ed は、語幹が母音で終わる動詞に接続する際、母音連続を防ぐために子音 g が挿入されるが、未来・形動詞形ではそのようなことは起こらない (23)。また、-Ed

では母音の弱化は起こらないが、未来・形動詞形では母音の弱化が起こる (24)。

- (23) a. [sa:ɡad] < /saa-Ed/ ‘(to) milk-PFG’
 b. [sa:χ] (*[sa:ɡaχ]) < */saa-Ex/ ‘(to) milk-FUTP’

- (24) a. [alad] < /al-Ed/ ‘kill-PFG’
 b. [aɮǎχ] (*[aɮaχ]) < */al-Ex/ ‘kill-FUTP’

3つ目の案として、未来・形動詞形は「音素的母音」とは異なる母音を持っている、という説明が考えられる。「音素的母音」この解釈では、第2音節以降に「音素的母音」と「それとは異なる音素的な母音」の2種類を認めることになるが、これは母音の「長」「短」にあたる。

2.1.2節で述べたように、Svantesson et al. (2005) は第2音節以降の音素的母音を「短い」母音だとみなしており、その根拠として音声的な長さが第1音節の長母音よりも短母音に近いことを挙げている。しかし、Ueta (2015) によって、第2音節以降の音素的母音が必ずしも第1音節の短母音に近い長さを持つとは言えないことが、音声産出と知覚の両面から示されている。また、第2音節以降の音素的母音は、歴史的には長母音に由来している。このような点から、第2音節以降の音素的母音を「長母音」と解釈することは、全く不自然なものではない。

また、借用語の振る舞いを考慮に入れると、第2音節以降に母音の長短を認める必要があるということが、植田 (2015b) によって明らかにされている。

以上のような点から、第2音節以降にも音素として母音の長短の対立を認め、名詞・形容詞と動詞の未来・形動詞形の母音の有無によるミニマルペアを、短母音の有無によって説明することが妥当であると考えられる。つまり、名詞・形容詞は短母音なし、動詞の未来・形動詞形は短母音を持つ -Ex という形となる。短母音は音声的には弱化母音として現れ (25b)、語幹が母音で終わる動詞に付くときは削除される (26a)。一方、Svantesson et al. (2005) で「音素的母音」とされていたものは、長母音であると解釈される。したがって、完了・副動詞形は長母音を持つ -EEd という形となり、音声的に弱化せず (25c)、語幹が母音で終わる動詞に付いたときは子音 g が挿入される (26b)。

- (25) a. 名詞・形容詞 /(C)VCx/ e.g./alx/ [aɮχ]
 b. 動詞未来・形動詞形 /(C)VC-Ex/ e.g./al-Ex/ [aɮǎχ]
 c. 動詞完了・副動詞形 /(C)VC-EEd/ e.g./al-EEd/ [aɮa:d]

- (26) a. /saa-Ex/ [sa:χ]
 b. /saa-EEd/ [sa:ɡa:d]

8 まとめと今後の課題

本稿では音声実験を通して、名詞・形容詞 <(C)VCx> と動詞の未来・形動詞形 <(C)VCVx> が音声的にも第2音節以降の母音の有無のみによるミニマルペアをなすことを示した。また、この事実から第2音節以降の母音体系にも母音の長短の対立を認める解釈が妥当であることを述べた。

しかし、現在のところ、第2音節以降の母音体系に母音の長短を認める必然性がある例は、本稿で扱ったミニマルペアと、植田 (2015b) で扱われた借用語のみであり、大部分の本来語は「音素的母音」と「挿入母音」の区別で説明できる。第2音節以降の母音体系に母音の長短の対立を認める、という解釈が本来語にも自然に適用できるかどうか、さらなる考察が必要である。

略号一覧

ABL：奪格

FUTP：未来・形動詞形

PFG：完了・副動詞形

謝辞

本稿の執筆に当たり、千田俊太郎先生、大竹昌巳氏より大変有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝申し上げます。なお、本研究は京都大学教育研究振興財団・平成27年度助成事業（在外研究短期助成・研究課題名：「モンゴル語の音韻現象の記述とその理論的考察」）による助成を受けたものである。

参考文献

- Ariunjargal, G. (2012) *Mongol xelnii zöv bičix züin dürem ba dasgal* [Rules and Exercises for Writing Correct Mongolian]. Udam soyol.
- Boersma, Paul and David Weenink (2012) Praat: Doing phonetics by computer (Version 5.3.23). Online: <http://www.praat.org/>.
- Janhunen, Juha A. (2012) *Mongolian*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 角道正佳 (1974) 「ハルハ方言の正書法」『日本モンゴル学会会報』5: 29-35
- 角道正佳 (1982) 「ハルハモンゴル語のピッチアクセント」『大阪外国語大学学報』56: 31-49.
- Karlsson, Anastasia Muhanova (2005) *Rhythm and Intonation in Halh Mongolian*. Lund University.
- 栗林均 (1992) 「モンゴル語」『言語学大辞典 第4巻 世界言語編 (下-2)』501-517.
- Sambuudorj, O. (2012) *Mongol xelnii ügiin duudlagiin toli* [Pronouncing dictionary of Mongolian]. Monsudar xewleliin gazar.

- Svantesson, Jan-Olof (1995) Cyclic syllabification in Mongolian. *Natural Language and Linguistic Theory* 13: 755-766.
- Svantesson, Jan-Olof (2004) What happens to Mongolian vowel harmony? in: Aniko Csirmaz, Youngjoo Lee and Mary Ann Walter (eds.), *Proceedings of WAFL 1: Workshop in Altaic Formal Linguistics*: 94-106.
- Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia Karlsson and Vivan Franzén (2005) *The Phonology of Mongolian*. Oxford: Oxford University Press.
- Ueta, Naoki (2014) Pitch patterns of Mongolian compound place names. *Acta Mongolica* 15: 139-144.
- Ueta, Naoki (2015) The duration of full non-initial vowels in Khalkha Mongolian. International Conference on Mongolian Textual Research Studies. August 21st. Mongol-Japan Center (Ulan Bator, Mongolia).
- 植田尚樹 (2014) 「UB モンゴル語の i と e の合流」『京都大学言語学研究』33: 89-104.
- 植田尚樹 (2015a) 「モンゴル語ハルハ方言の母音長の位置による差異—音声分析と知覚実験」近畿音声言語研究会. 6月6日. 関西学院大学大阪梅田キャンパス
- 植田尚樹 (2015b) 「モンゴル語の第2音節以降の母音体系について—借用語のデータをもとに一」『日本言語学会第151回大会予稿集』288-293.

ベンガル語の expressives をめぐって¹

大西正幸 (同志社大学文化遺産情報科学研究センター) /
ドゥルガ・ポド・ドット

1. 序

本稿は、ベンガル語の expressives を扱う。Expressives とは、一言で言うと、「音象徴を体系的に利用する語類」のことである。この語類を指す用語として、他にも、日本語の「擬音・擬態語」または「オノマトペ」(田守・スコウラップ 1999、浜野 2014)、アフリカの言語の 'ideophones' (Voeltz & Kilian-Hatz 2001) などが用いられているが、その類型論的な研究が世界中の言語に及んでいるとは言えず、その点では、いまだにこの言語現象を指す定着した用語はないと言えよう。本稿では、東南アジアのさまざまな言語に見られるこの現象を扱った先駆的な研究、Diffloth (1972, 1979 など) に従って、expressives という用語を用いることにする²。

現在、筆者たちはベンガル語の expressives の網羅的なデータベースを作成中であり、それに基づく包括的な研究を目指しているが、現段階では、データ面でも方法論の面でもまだ十分整理されていない。本論文は、そのような包括的な研究に向けての、最初のステップという性格のものである。

本論文の焦点は、ベンガル語の expressives の基本的な音韻形態的構造、そこに現れる音素が表す意味の(必ずしも組織的ではない)分析、そしてベンガル語の文法や語彙の他の面に現れた expressives と類似の現象をめぐる考察である。Expressives の統語的・談話論的側面は将来の課題とする。ただし、expressives がどのような統語的な枠組みの中で用いられるかについては、文例をもとに、本節の後半で簡単に触れることとする。

ここで、Diffloth (1979) を参考にしながら、筆者たちが expressives の一般的特徴と考えている点を、暫定的に要約しておく。

(1-1) Expressives の一般的特徴：

- (a) 言語音の物理的(調音的ないし音響的)要素と、その音が喚起する象徴的な意味との**直接的な対応**に基づく、生産的な語彙体系である。

¹ 本稿は、言語記述研究会第 66 回研究会(京都大学, 2015 年 10 月 10 日)における口頭発表、Onishi, M. and D. P. Datta 'Bangla Expressives'に基づいている。この研究会の参加者、特に、ネイサン・バデノック、千田俊太郎、秋田喜美、林範彦、藤原敬介、古本真の諸氏から、有益なコメントをいただいた。また、長田俊樹氏と伊藤雄馬氏には、本稿の初稿全体に目を通していただき、貴重なコメントをいただいた。これらの方々に感謝する。なお、本稿の元となったデータの収集、および上記の口頭発表に関し、文科省科研費(基盤 B)「南アジア諸言語の文法記述研究—言語類型論的視点から」(代表:長田俊樹)(課題番号:26284063)の助成を受けたことを記し、ここに謝意を表す。

² 長田(2009)は、ムンダ語の expressives を「感情語」と呼んでいる。この用語は「喜怒哀楽などの感情を表す語」という意味で頻繁に使われているようなので、誤解をおそれて本稿では用いず、ややぎこちなくはあるが英語の用語をそのまま用いる。

- (b) その体系は、言語音とそれが表す意味の**恣意的な関係**に基づくとされる文法体系の中に、はめ込まれている。
- (c) (a)に見出される**直接的な対応**は、しかし、(b)の**恣意的な関係**に基づくとされ文法体系や語彙の一部の中にも、見出される。
- (d) Expressives は、対象言語の (b)の原理に基づく音体系の中に既に存在する要素を、(a)の目的のために自由に再編・再体系化して利用する³。

ベンガル語では、この語類のことを、伝統的に ‘dhvanyātmak shabda [dhonnattok śobdo]’、すなわち「音によって特徴づけられる語」、と呼び習わしている。ベンガル近代の代表的詩人ラビンドラナート・タゴール⁴ (1861-1941) は、ベンガル語の形態音韻論の先駆的研究のひとつである *śabda-tattva* 「音の理論」 (thākur 1935) の中で、1つの章をこの ‘dhvanyātmak śabda’ に割き、600を超える例をベンガル語のアルファベット順に挙げ、それらの語において音が象徴的に表す意味について詳細に論じている。そこに掲載されている例を冒頭から挙げると⁵：

- (1-2) ai=ḍai āku=bāku ān=cān amta=amta
 ili=bili
 uḥ=kuḥ
 kṛc kṛc-at kṛc=kṛc kṛc-a=kṛc kṛc-or=kṛc-or kṛc=mṛc kṛc-or=mṛc-or
 kṛṭ kṛṭ-at kṛṭ-aḥ kṛṭ=kṛṭ kṛṭ-a=kṛṭ kṛṭ-mṛṭ kṛṭ-or=mṛṭ-or ...

上の例からわかるように、kṛc, kṛṭ のような単独の語根の他、amta=amta, kṛc=kṛc のような語根の重複、ai=ḍai, kṛc=mṛc のような初頭子音の交替による語根の「^{こだま} 重複 (echo reduplication)」、kṛc-at, kṛṭ-aḥ のような語根への派生接尾辞の付加、さらには kṛc-a=kṛc, kṛc-or=kṛc-or のような語根の重複形に派生接尾辞を付加してのさらなる派生など、さまざまな形態論的手段を用いて、もとの語根が表す意味に多様なニュアンスを付与している。こうした例をざっと見渡しただけでも、この語類がかなり複雑な形態音韻的体系をもつことが、推し量れよう。

ベンガル語の expressives の特徴について、読者にある程度の予備知識を持ってもらうために、以下、いくつかの例を挙げておきたい。下の例は、タラションコル・ボンダパッタエ⁶著・大西訳『船頭タリニ』(2016)に収められた、1930年代に書かれた3編の短編小説の中から取られている。最初の(1-3)~(1-7)は聴覚の印象に基づく雨音の描

³ ‘Expressives have a greater freedom to combine the sound units already available in the Prosaic part of the language ... Expressives are not a sort of “pre-linguistic” form of speech, somehow half-way between mimicry and fully developed linguistic form. They are ... a sort of “post-linguistic” stage where the structural elements necessary for prosaic language are deliberately re-arranged and exploited for their iconic properties, and used for aesthetic communication.’ (Diffloth 1979: 57-58)

⁴ Rabindranath Tagore は英語名で、ベンガル語名は rabīndranāth thākur /robīndronath thakur/。

⁵ 以下 ‘-’ は接辞境界、‘=’ は音韻語 (重複も含む) 境界を示す (この境界設定は、筆者の言語学的分析に基づく)。なお、ベンガル語のアルファベットは、ṛ, a, i, u, e/æ, oi, o, ou, kṛ, ka, ki, ... と続く。

⁶ Tarashankar Bandyopadhyay /tarāṣṅkor bāndopaddhāe/ (1894-1979) インド西ベンガル州ビルブム県出身の作家。

写、続く(1-8)~(1-12)は視覚の印象に基づく輝きの描写に用いられている expressives の例である。

[雨音の模倣]

(1-3) jalatøn re bapu, šara=din šara=rat **tip=tip jhip=jhip,**
 迷惑 全く お前 一日中 一晩中 EXP EXP

hō-be to tai bhalo-kore
 起きる-FUT:3ORD なら そうして よく

hok re bapu, ta na šara=dinmeghla.
 起きる+IMP:3ORD 全く お前 それ NEG 一日中 曇った

「たまったもんじゃないぜ、まったく。昼も夜も**ぽつぽつじとじと**。降るならざあっと降ってくれや。さもなきや、雲だけでたくさんだ！」
 (「花環と白檀」)

(1-4) paš-er gach-guli-r pata-e pata-e jøl
 側-GEN 木-DEF.pl:DIM-GEN 葉-LOC 葉-LOC 水

jhor-itech-e **ṭup=ṭap ṭup=ṭap.**
 落ちる-IMPF-PRES:3ORD EXP EXP

「道の側に並ぶ樹々の葉からは、**ぽたぽた**、**ぽたぽた**と水滴が落ちていた。」
 (「郵便配達夫」)

(1-5) akaf tōkhon durōnto durjog-e acchōnno, jhōr-er
 空 その時 手に負えない 悪天候-LOC 覆われた 嵐-GEN

mōto bataš, šōṅge=šōṅge **jhōm=jhōm** kor-ia brišṭi.
 ような 風 それとともに EXP する-PF 雨

「空はその時凄まじい形相を呈していた。風は嵐のように吹き荒れ、それと共に雨が**ざあざあ**降り注いでいた。」 (「船頭タリニ」)

(1-6) le, mathali tu matha-e de.
 取る+IMP:2INT 笠 2INT 頭-LOC 与える+IMP:2INT

ṭipi=ṭipi jøl bhari kharap.
 EXP 水 とても 悪い

「さあ、この笠をかぶって、濡れないようにするんだ。小雨 (**ぽつぽつ**雨) が、一番身体にこたえるからな。」 (「船頭タリニ」)

(1-7) utōla bataš-er šōṅge ołpo kichu=kkhōn **rimi=jhimi** brišṭi
 荒れた 風-GEN 一緒に 僅か 少しの間 EXP 雨

ho-ia ja-e, tar=pōr tham-e.
 起きる-PF しまう-PRES:3ORD その後 止む-PRES:3ORD

「^{つよどかぜ}旋風に乗って、少しの間小雨（しとしと雨）が降り続いたかと思うと、パタリと止む。」（「船頭タリニ」）

上の5例のうち、最初の3例((1-3)~(1-5))は動詞を修飾する副詞的用法、あとの2例((1-6)~(1-7))は名詞の修飾的用法に用いられている。副詞的用法の場合、(1-5)のように、動詞/kor-/「する」の完了分詞 kor-ia（文語形）または kor-e（口語形）「~して」を取るものがふつうだが、(1-4)、(1-5)のようにそれを省略することもできる。

ここに挙げられた expressives の音韻形態的な特徴については、次のような一般化が可能だろう。

- (i) C₁VC₂を語根とした重複形の expressives は、終結点のある(telic)出来事が繰り返して起きる様子を表す((1-3)~(1-5))。いっぽう、C₁iC₂iを語根とした重複形の expressives は、性質形容詞と見なすことができる((1-6)~(1-7))。
- (ii) ここにあがっている expressives の語頭の t/jh は「雨音の一般的特質」を象徴している。t はひとつひとつの雨滴が地面に落ちる時の単純な音、jh はいくつもの雨滴が強く地面に跳ね返る時に出す騒がしい雨音を表す ((1-4) vs (1-5))。
- (iii) 音節末の p/m は「音の響き方ないし余韻」を象徴している。p は軽く跳ね返るような終わり方、m は重たい余韻・残響を伴った終わり方を表す ((1-4) vs (1-5))。
- (iv) 音節母音は、音の量、鋭さ、広がり、音が聞き手に喚起する印象などを表す。

音の量 ɔ > i (1-5) vs (1-3)

音の鋭さ ɔ < i (1-5) vs (1-3)

音の広がり u < a (1-4)

音が喚起する美的・好意的印象 i (1-7)

- (v) (1-7)の/r/による前接符重複は、修辭的な表現で、口語では用いられない。

[光の反射（輝き）]

(1-8) akaʃ to phoʔ=phoʔ-e, ɕək=ɕək kor-ch-e.
 空 EMPH EXP EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「空は青く晴れ渡り、一点の翳りもない（ちらちら輝いている）。」
 （「船頭タリニ」）

(1-9) ʃe-din-kar ʃe alpəna aj jhək=jhək
 その-日-GEN その 床絵 今日 EXP
 kor-itech-e.

する-IMPF-PRES:3ORD

「先日描いた^{アルボナ}床絵の（祭壇などに白い米粉で描かれた）聖なる模様が、まだぎらぎら輝いている。」（「花環と白檀」）

- (1-10) *raja kōrotol-er upor ſona-r nōth-khani*
 白い 掌-GEN 上に 金-GEN 耳飾り-DEF.SOLID:DIM
roudrabha-e jhōk=mōk kor-itech-e.
 陽光の照り-LOC EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「白い掌の上には黄金の鼻飾りが、陽の光を浴びてぎらぎら輝いている。」
 (「船頭タリニ」)

- (1-11) *jol-hin mœurakkhi-r baluka-mœ gōrbho*
 水-なしの 川の名-GEN 砂-いっぱい の 河床
griff-er prōkhor roudr-e jhik=mik kor-itech-e.
 夏-GEN 強烈な 陽光-LOC EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「水が涸れたモユラッキの砂だらけの河床は、夏の烈しい陽射しにきらきら輝いている。」 (「船頭タリニ」)

- (1-12) *godhuli-r alo jhiki=miki kor-itech-e.*
 黄昏時-GEN 光 EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「黄昏時の光がちらちら光っている。」 (「花環と白檀」)

上の5例のすべてで、expressives は、補助動詞/*kor-*「する」と組み合わせさせて、動詞述語文の述語として用いられている。ただし、最後の(1-12)に挙げた/*jhiki=miki*/は、(1-6)~(1-7)の例と同じく、性質形容詞として機能することもできる。これらの例から、音節構造については、上で述べた(i)が確認できる。それに加え、次のような一般化が可能だろう。

- (vi) 音節初頭の *c/jh* は光の反射が与える視覚的な印象の一般的な特質を象徴している。*c* に比べ、*jh* のほうが輝きの印象が強い ((1-8) vs (1-9) ~ (1-12))。
- (vii) 音節末の *k* はある程度の余韻を残す終わり方 (ここでは輝きの残像) を表す ((1-8) ~ (1-12))。
- (viii) 併重復の *m* は、内的な深さ (ここでは輝きがもつ深み) を表す ((1-10) ~ (1-12))。
- (ix) 音節母音は、反射する光の量、鋭さ、見る人に喚起する印象などを表す。

光の量 $o > i$ (1-8) ~ (1-10) vs (1-11) ~ (1-12)

光の鋭さ $o < i$ (1-8) ~ (1-10) vs (1-11) ~ (1-12)

音が喚起する美的・好意的印象 *i* (1-12)

以上の2セットの例から、音節構造や音節の中の特定の位置に置かれた子音や母音のタイプによって、個々の expressive の意味がかなりの程度一般化できることがわかりただけだと思う。以下の第3~5節で、この一般化をもう少し推し進めてみることにしよう。

2. ベンガル語の音韻体系—背景として

第3～5節の議論の前提として、この節では、ベンガル語の音韻体系や音節構造について、簡単にまとめておくことにする。

2.1. 母音

ベンガル語は7つの母音音素を持つ。

表1 ベンガル語の母音音素

i		u
e		o
æ	a	ɔ

音韻的に、母音の長短の区別はない。また、すべての母音に対応する鼻母音音素が存在する。

第1節の例で見たように、低母音の/a/と高母音の/i/, /u/の間には、その発生の音量の多寡と、それが表す聴覚的・視覚的現象のエネルギー量との間に、対応関係があるように思われる。また、狭母音/i/は、鋭さの印象を表すことがある。これに対し、もっとも広い母音/a/は、狭母音/i/, /u/との対照で、現象の広がり表現する。/i/（および/u/）はまた、指小辞（diminutive）の一部として、美的・好意的印象を表すためにも用いられる。

/æ/は歴史的に新しく発達した母音で、ベンガル語の土俗語彙（2.3参照）の中では比較的頻度が少ない。（英語からの借用語彙によく使われるが、サンスクリット語起源の語彙にはまったく用いられない。）しかし、expressivesでは、不快感や不自然な印象を与える現象を象徴する音として、よく用いられる。

二重母音は、次の25種類である。

(2-1) ベンガル語の二重母音：

/ɔa/, /œ/, /ɔo/, /æe/, /æo/, /ae/, /ao/, /ai/, /au/
 /ea/, /eo/, /ei/, /eu/, /oa/, /oe/, /oi/, /ou/
 /ia/, /ie/, /io/, /iu/, /ua/, /ue/, /uo/, /ui/

2.2. 子音

他のインド＝アリア系言語と同様、下の5つの調音点（両唇、歯、後部歯茎反舌、硬口蓋、軟口蓋）の閉鎖音（stops）に関し、それぞれ有声・無声、有気・無気の対立

がある。鼻音に関しては、文字//ŋ/, //ɲ//は存在するが、それらは音韻的には/n/に同化していると思倣することができる。

表2 ベンガル語の子音音素

	両唇	歯	後部歯茎 (反舌)	硬口蓋	軟口蓋	声門
無声無気	p	t	ʈ	c	k	
無声有気	ph	th	ʈh	ch	kh	
有声無気	b	d	ɖ	j	g	
有声有気	bh	dh	ɖh	jh	gh	
鼻音	m	n			ŋ	
摩擦音		s		ʃ		h
接近無気		r	ɽ			
接近有気			ɽh			
側面		l				

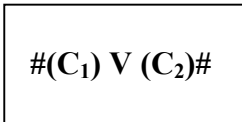
2.3. 音節構造

語彙タイプにより、異なった構造をとる。

- (i) deshi (土俗語彙)
- (ii) tatbhava (サンスクリット語源・変容)
- (iii) tatsama (サンスクリット語源・そのまま)
- (iv) 英語からの借用
- (v) ペルシャ語・アラビア語からの借用
- (vi) 他の言語からの借用

Expressives は、基本的に、deshi (土俗語彙) の音韻構造を持つ。

(A) 土俗語彙 (単音節)



ただし：

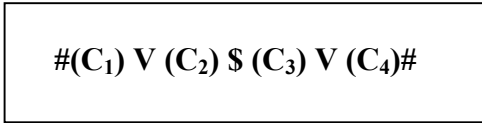
- C₁ = /ŋ/, /s/, /r/, /ɽh/ 以外の C
- C₂ = /ɖ/, /ɖh/, /s/, /h/, /ɽh/ 以外の C

Expressives 語彙の場合、この上、さらに下のような制限が加わる：

C₁ には /d/, /j/, /l/ が用いられた例がない。

C₂ の位置には、基本的に有気または有聲の阻害音は立たず⁷、/t/ も用いられない。
 即ち、C₂ は、次の子音に限られる：/p/, /t/, /c/, /k/, /m/, /n/, /ŋ/, /ʃ/, /r/, /r̄/, /l/

(B) 土俗語彙 (2 音節)



- C₁ = /ŋ/, /s/, /r̄/, /r̄h/ 以外の C
- C₃ = /s/ 以外の C
- C₂ = /d̄h/, /th/, /dh/, /ph/, /bh/, /r̄/, /r̄h/ 以外の C
- C₄ = /d/, /d̄h/, /s/, /r̄h/ 以外の C

(1-2)に見るように、expressives の語根はほとんどが単音節である。2 音節構造のものも少数見られるが、それらは単音節の語根からの派生として分析できるように思われるので、その代表例は、派生を扱う第 4 節で扱うこととする。その詳細な分析は将来の課題としたい。

2.4. アクセント

アクセントは、語の最初の音節にある。この音節は、一般に、低いピッチで強く発音される。

第 1 音節の卓立を示す他の重要な現象として、下のようなものがある。

- (A) 低母音/æ/ は必ず第 1 音節にあり、また/o/ も第 1 音節に現れる確率がたかい。
- (B) /o/ は 2 音節以上の語の、最後の音節には、決して現れない。最終音節では、/o/ と /o/ の対立は中立化され、常に/o/で現れる ((2-2a), (2-2b))。詩では、脚数を揃えるため、子音で終わる最終音節に/o/ を補って読むことがある((2-2c))。

(2-2a) /koto/	[koto]	いくつ/いくら
(2-2b) /patro/	[patro]	容器
(2-2c) /gɔgon/ [gɔgon] ~ /gɔgono/	[gɔgono]	空 (文語)

- (C) 第 2 音節にある鼻音化は、口語では第 1 音節に移動する傾向がある。

(2-3a) //ātmā//	/at\$ā/ [attā]	魂
	/āt\$ā/ [ātta]	
(2-3b) //ātmīya//	/at\$ti\$o/ [attīō]	親戚
	/āt\$ti\$o/ [ättio]	

⁷ ただし、C₁ が有聲阻害音の場合に、ときに C₂ が順行同化を起こして有聲の変異音として現れることがある。cf. giʃ=giʃ ~ gij=gij (3-42)。

3. Expressives の語根の音節構造による分類

ベンガル語の expressives の語根は、ほとんどが単音節である (2.3 参照)。このうち、語根の音節構造が C_1VC_2 のものは終結点のある(telic)出来事を表し、それに対して音節構造が CV のものは、明示的な終結点のない(atelic)出来事ないし状態を表すのに用いられる (第1節(i)参照)。また、これらの語根を重複することにより、出来事の継起、ないし状態の継続を表すことができる。

語根によっては重複形のないものもあるし、逆に重複形のみしかない (語根が単独で現れることがない) ものもある。 C_1VC_2 タイプの語根 (V が鼻母音であるものを含む) と、CV タイプの語根のうち中核母音が鼻母音であるものに関しては、単独形、重複形、あるいはどちらの形式も可能なもの、の3種類がある。いっぽう、中核母音が鼻母音でない CV タイプの語根に関しては、単独形のみで起きるものは存在しない。

表3 語根の音節構造による分類

	一時的	継起的・継続的
明示的な終結点のない(atelic) 出来事ないし状態	CV	CV=CV
	∅	CV=CV
	$C\tilde{V}$	∅
	$C\tilde{V}$	$C\tilde{V}=C\tilde{V}$
	∅	$C\tilde{V}=C\tilde{V}$
終結点のある (telic)出来事	C_1VC_2	∅
	C_1VC_2	$C_1VC_2=C_1VC_2$
	∅	$C_1VC_2=C_1VC_2$

以下、語根を(A) CV タイプ、(B) $C\tilde{V}$ タイプ、(C) C_1VC_2 タイプの三つにわけ、それぞれについて例を示すことにする。

3.1. CV タイプ

CV タイプの語根のうち、単独形と重複形を持つ例をまず挙げる。

- (3-1) kukur-ṭa gheu(=gheu) kor-e ḍak-lo.
 犬-DEF EXP する-PF 鳴く -PAST:3ORD
 「その犬はワン（ワン）と吠えた。」

犬の吠え声が、1 回限りの場合は単独形、2 回以上継続する場合は重複形を用いている。

しかし、CV タイプの語根の多くは、内在的に継起的な出来事か継続的な状態を表すのに用いられるため、重複形しか存在しない。たとえば、人間の笑い声・泣き声、風の音などの聴覚的な印象を表す、下のような例がある。

[人間の笑い声]

- (3-2) **ha=ha/hi=hi/he=he/hæ=hæ/ho=ho** kor-e hãʃ-ch-e.
EXP する-PF 笑う-IMPF-PRES:3ORD
「彼（女）は、・・・と笑っている。」

これらの笑い声には、次のような特徴がある。

- ha=ha/ho=ho** (大人、開放的、大きな声)
hi=hi (子どもたち、可愛らしい)
he=he (皮肉をこめた、乱暴な)
hæ=hæ (不自然な、乱暴な)

いずれも、呼気を象徴する/h/で始まり、母音のタイプによってその笑い声の量、鋭さ、広がり、音が聞き手に喚起する印象を表している（第1節(iv)参照）。/a/, /o/が大きな音量の大人の笑い声で、前者のほうがより開放的。それに対し、/i/は音量が小さく鋭い、子どもの笑い声で、好意的な印象を喚起する。これに対し、/e/や/æ/、特に後者は、不自然で乱暴な印象を与える。

笑い声がこのように単母音で表されるのに対し、泣き声は下のように二重母音で表される。

[人間の泣き声]

- (3-3) **hau=hau/hau=mau** kor-e kãd-ch-e.
EXP する-PF 泣く-IMPF-PRES:3ORD
「彼（女）はわんわん泣いている。」

第1節で見たように、/m/による併重複は、より深い音ないし印象を表現するのに用いられる。4.2 参照。

(3-1)で挙げたように、犬の鳴き声も二重母音で表される。(3-1)の/gheu/がのどの奥から出る濁った吠え声を表すのに対し、下の/bheu/は、振動を伴う低い吠え声を模倣する。

- (3-4) **kukur-ʔa** **bheu=bheu** kor-e ɖak-lo.
犬-DEF EXP する-PF 鳴く-PAST:3ORD
「その犬はワンワンと吠えた。」

吹く風の鋭い音は/h/で始まり、狭母音の/u/によって表されるが、同時にこの expressive は(3-5b)のように寒さが身体の中を走る体感を象徴的に表すのにも用いられる。

[風の音・寒さの体感]

(3-5a) **hu=hu** haoa di-cch-e.
EXP 風 与える- IMPF-PRES:3ORD

「風がひゅうひゅう吹いている。」

(3-5b) **thanda-r** jonno **hu=hu** kor-e kâp-ch-i.
寒さ-GEN ために EXP する-PF 震える- IMPF-PRES:1

「寒さのために私はぶるぶる震えている。」

以下、実際の音の模倣ではなく、体感や視覚的印象を表す CV 構造の expressives の例をあげる。

まず、体感を表す expressives の例として、押さえがたい嫌悪感を表す下のような表現がある。

(3-6) amar ga ghrina-e **ri=ri** kor-ch-e.
1sg-GENbody 嫌悪-LOC EXP する-IMPF-PRES:3ORD

「私の身体中が、嫌悪のあまり震えるようだ。」

子音の/r/はその嫌悪感が身体中に響き渡る余韻のような感覚を表し、母音の/i/はその感覚の鋭さを表現する。

一方、下の例は、他人の呆然とした表情が見る人にもたらす印象を表現している。

(3-7) **pæ=pæ** kor-e taki-e ach-e.
EXP する-PF 見つめる-PF いる-PRES:3ORD

「彼は**呆然と**見つめている。」

子音の/p/は、光景がもたらす瞬間的な印象を、また母音の/æ/は、相手の表情が見る人に与える不自然感・違和感を表現する。

続けて、下の例は、茫々と広がる野原の様子を与える印象の客観的表現であるとともに、その印象が引き起こす主観的な空虚感をも併せて表現している。

(3-8) **maṭh** **dhu=dhu** kor-ch-e.
野 EXP する-IMPF-PRES:3ORD

「野原が**茫々と**広がっている（それを見ると**茫と**した感じがする）。」

下の2例は、いずれも情景が視覚的に与える印象を表現している。最初の例は火が燃え上がる様子、2番目の例は水が溢れんばかりに湛えられている様子で、いずれも動的な印象を伝えるために、二重母音が用いられている。

(3-9) **agun** **dau=dau** kor-ch-e.
火 EXP する-IMPF-PRES:3ORD

「火がぼうぼうと燃え上がっている。」

- (3-10) nodi-te jol **thoi=thoi** kor-ch-e.
 川-LOC 水 EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「川には水が溢れんばかりにいっぱいである。」

3.2. C□タイプ

C□タイプの語根は、C₁VC₂タイプの語根（特に最後のCが鼻音のタイプ）と同じく、1回きりの出来事を表すために単独形で用いられるものもある。ただしこの場合、C₁VC₂タイプの expressives とは異なり、その出来事の終結点は明示されていない。

- (3-11) **chō** mer-e tul-e ni-lo.
 EXP 叩く-PF 持ち上げる-PF 取る-PAST:3ORD
 「(鳶が) さっと (獲物を) さらった。」

- (3-12) **dhā** kor-e kōtha-ṭa bol-e phel-lo.
 EXP する-PF 言葉-DEF 言う-PF 捨てる-PAST:3ORD
 「彼はうっかり口をすべらせてそのことを言ってしまった。」

以下は、単独形と重複形の両方を持つ expressives の例である。

まず、蜜蜂が羽音とともに部屋に入る瞬間を捉えた表現と、継続して飛び回るさまを描写した表現。

- (3-13a) bhrōmor-ṭa **bō** kor-e ghōr-e ḍhuk-lo.
 蜜蜂-DEF EXP する-PF 部屋-LOC 入る-PAST:3ORD
 「蜜蜂が (ぶんという音とともに) 部屋に飛び込んだ。」

- (3-13b) bhrōmor-ṭa **bō=bō** kor-e ghur-ch-e.
 蜜蜂-DEF EXP する-PF 回る-IMPF-PRES:3ORD
 「蜜蜂がぶんぶん飛び回っている。」

続けて、サイレンの音が、単独で聞かれる場合と続けて何度も聞かれる場合の対照を表した例。

- (3-14) karkana-e **bhō(=bhō)** kor-e ṣiṭi baj-lo.
 工場-LOC EXP する-PF サイレン 鳴る-PAST:3ORD
 「工場でサイレンがぼー (ぼー) っと鳴った。」

音節初頭の /b/, /bh/ は、このような振動の伴った低い音を表現する ((3-4)を参照)。/bh/ のほうが、より深く響き渡る音を表す。これに対し、無声の唇音 /p/ は、瞬間的な視覚的印象を表す ((3-7)、(3-26)参照) が、実際の音を表すことはない。(/ph/ は、唇などから出る軽い摩擦音を表すことがある。(3-38)参照。)

1本の矢が音を立てて飛ぶ場合と、風が音を立てて吹きすさぶ状況の表現:

(3-15a) **fã** kor-e tir-ta chuṭ-e gæ-lo.
 EXP する-PF 矢-DEF 走る-PF 行く-PAST:3ORD
 「矢がひゅっと(目の前を)走り過ぎた。」

(3-15b) **fã=fã** kor-e haoa di-cch-e.
 EXP する-PF 風 与える-IMPF-PRES:3ORD
 「風がひゅうひゅう鳴っている。」

音節初頭の摩擦音 /ʃ/ は、/h/ ((3-2), (3-3), (3-5)参照) と同じく摩擦を伴う音を表現するが、/ʃ/ のほうがより抵抗感のある音を表すようである。

以下の例は、実際の音というよりは、水が吸い取られる・なくなる情景が視覚的に与える印象を表現している。1度に吸い取る状況は単独形、継続的に乾いていく状況には重複形を用いる。

(3-16a) **cõ** kor-e jol fuṣ-e ni-lo.
 EXP する-PF 水 吸う-PF 取る-PAST:3ORD
 「彼は水をしゅっと吸い込んだ。」

(3-16b) **cõ=cõ** kor-e jol fuki-e gæ-lo.
 EXP する-PF 水 乾く-PF 行く-PAST:3ORD
 「水がみるみるうちに(しゅるしゅると)乾き切った。」

以下は、重複形のみ *expressives* の例である。

[動物の鳴き声]

(3-17) **cī=cī** kor-e ghoṛa ḍak-ch-e.
 EXP する-PF 馬 鳴く-IMPF-PRES:3ORD
 「馬がひひんと鳴いている。」

(3-18) **jhī=jhī** poka
 EXP 虫
 「コオロギ(じーじー虫)」

[人やものが継続的に立てる音]

(3-19) **briddho** lok-ṭi **gõ=gõ** kor-e aoaj kor-ch-e.
 年寄りの 人-DEF:DIM EXP する-PF 音 する-IMPF-PRES:3ORD
 「年寄りのがのどの奥からうめくような音を立てている。」

- (3-20) **fāi=fāi** tir chur-ch-e.
 EXP 矢 射る-IMPF-PRES:3ORD
 「矢を次々に（しゅうしゅう）射っている。」

[継続的に立てる音と、その結果が与える視覚的印象を表現した例]

- (3-21a) **fō=fō** kor-e haoa di-cch-e.
 EXP する-PF 風 与える-IMPF-PRES:3ORD
 「風がひゅうひゅう鳴っている。」 ((3-15b)参照)

- (3-21b) **fō=fō** kor-e bōnna bar-ch-e.
 EXP する-PF 洪水 増える-IMPF-PRES:3ORD
 「洪水がずんずん水嵩を増している。」

[視覚的印象の例]

- (3-22) dupur rod-e **jhā=jhā** kor-ch-e.
 正午 陽光-LOC EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「正午は、陽光でじりじり灼けつくようだ。」

(1-9)~(1-12)にあるように、/jh/は強い光の反射を表すのに用いられる。

最後に、視覚的印象とそれが喚起する体感、さらには内的な感覚のみ、の両方に使われる例を挙げる。

- (3-23a) math **khā=khā** kor-ch-e.
 野 EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「野原は人気がなく虚ろに広がっている。」

- (3-23b) ma-er buk chele-r jonno **khā=khā** kor-e.
 母-GEN 胸 子供-GEN ため EXP する-PRES:3ORD
 「母の胸は、（死んだ）子供のために、虚ろである。」

3.3. C₁VC₂タイプ

ベンガル語の *expressives* には、C₁VC₂ 構造を持った語根が最も多い。

以下、基本的に語末の子音 C₂ に着目しながら、この類の *expressives* の例を論じる。

2.3 で述べたように、C₂ の位置には、有気または有声の阻害音は立たず、/h/ も用いられない。C₂ は、次の子音に限られる。

閉鎖音 : /p/, /t/, /c/, /k/

摩擦音 : /ʃ/

流音 : /r/, /ɾ/, /l/

鼻音 : /m/, /n/, /ŋ/

3.3.1. C₂が閉鎖音の場合

先に述べたように、/t/で終わる expressive はない。何の余韻もない、出来事の終結だけを示す最も中立的な語末音は、/ɔ/であると思われる。

単独形と重複形を持つ例 ((3-24))、ふつう重複形のみを用いる例 ((3-25))、ふつう単独形のみを用いる例 ((3-26), (3-27)) を挙げる。

(3-24) **kɔṭ(=kɔṭ)** kor-e kaṭ-lam.
 EXP する-PF 切る-PAST:1
 「(硬いものを) こと (こと) っと切った。」

(3-25) **khɔṭ=khɔṭ** kor-e hāṭ-ch-e.
 EXP する-PF 歩く-IMPF-PRES:3ORD
 「(硬い靴などで) こつこつと歩いた。」

(3-26) **ḍal theke pɔṭ** kor-e phul chīṭ-e phel-lo.
 枝 から EXP する-PF 花 千切る-PF 捨てる-PAST:3ORD
 「枝から花をぱっと千切り取った。」

(3-27) **mɔṭ** kor-e ḍal bheṅ-e phel-lo.
 EXP する-PF 枝 折る-PF 捨てる-PAST:3ORD
 「ぽきっと枝を折った。」

これら/t/で終わる例を、/c/で終わる次のような例と比較すると、この2つの子音の持つニュアンスの違いがはっきりする。

(3-28a) **kɔc(=kɔc)** kor-e kaṭ-lam.
 EXP する-PF 切る-PAST:1
 「(柔らかいものを) 一度 (何度も) 切った。」

(3-28b) **kɔc=kɔc** kor-e cibo-cch-i.
 EXP する-PF しゃぶる-IMPF-PRES:1
 「(柔らかいものを) しゃぶっている。」

(3-29) **mɔc=mɔc** kor-e hāṭ-ch-e.
 EXP する-PF 歩く-IMPF-PRES:3ORD
 「(底の柔らかい靴で) きゅっきゅっと歩いた。」

上の例に見るように、/c/は、柔らかいものを切ったりしゃぶったり、あるいは地面に押しつけてから離したりする時に残る、粘着性の余韻を表している。

また、(3-24)~(3-27)、(3-28)~(3-29)の音節初頭子音に着目すると、ものをナイフなどの鋭いもので切るときの音は/k/、硬いもの同士が当たって立てる音には/kh/が使われている。またものを折る時やものに当たる時の軽い音や抵抗感には/p/、重たい音や抵抗感を表すのには/m/を用いる。

以下、/k/ と /p/で終わる expressives を取り上げる。

第1節の(vii)で述べたように、/k/は(上の/c/と違って硬質の)余韻を残す終わり方を示す。

(3-30) fukuno kath die tɔk(=tɔk) kor-e aghat kor-lo.
 乾いた 木片 で EXP する-PF 打撃 する-PAST:3
 「乾いた木片で、ぴた(ぴた)と叩いた。」

(3-31a) deɔal-e matha thɔk kor-e lag-lo.
 壁-LOC 頭 EXP する-PF 当たる-PAST:3
 「壁に頭をこつんとぶつけた。」

(3-31b) thɔk(=thɔk) kor-e dɔroja-e dhakka mar-lo.
 EXP する-PF 扉-LOC 打撃 殴る-PAST:3ORD
 「こつ(こつ)と扉を叩いた。」

いっぽう、第1節の(iii)で述べたように、/p/は軽く跳ね返るような終わり方を表す((1-3), (1-4)も参照)。

(3-32) tɔp=tɔp/ɕip=ɕip kor-e briɕti por-ch-e.
 EXP する-PF 雨 落ちる-IMPF-PRES:3ORD
 「雨がぽつぽつ降っている。」

上の例で見ると、音節初頭子音の/t/は軽い打撃、/th/はやや強い打撃を表している。これよりも強い打撃や重たい音を表すには/dh/が用いられる。

(3-33) dhɔk(=dhɔk) kor-e tel khe-e phel-lo.
 EXP する-PF 油 飲む-PF 捨てる-PAST:3ORD
 「ごくり(ごくり)と油を飲み干した。」

このように、ふつうの水ではなく、密度の濃い液体を飲むときの音やその印象を表現する。

歯音の/th/、/dh/は、上にあげた一連の反舌音とはまったく異なり、下の例に見るように、視覚的・触覚的に、柔らかく密度の濃い印象を表出する。

(3-34) kada thɔk=thɔk kor-ch-e.
 泥 EXP する-IMPF-PRES:3ORD

「泥が**ぼたぼた**している。」

- (3-35a) **thɔp** kor-e æk tal kada phel-lo.
 EXP する-PF 一 塊 泥 捨てる-PAST:3ORD
 「一塊の泥を**ぼとんと**投げ捨てた。」

- (3-35b) briddho lok-ti **thɔp=thɔp** kor-e hāt-ch-e.
 年老いた 人-DEF:DIM EXP する-PF 歩く-IMPF-PRES:3ORD
 「その老人は**よたよた**歩いている。」

- (3-36) **dhɔp** kor-e mejhe-te boʃ-e poɾ-lo.
 EXP する-PF 床-LOC すわる-PF 落ちる-PAST:3ORD
 「彼（女）は床に**どさっと**座り込んだ。」

3.3.2. C₂が摩擦音の場合

摩擦音/j/で終わる expressives は、下のように、擦れるような音を表現する。

- (3-37) dāt **kij=kij** kor-e bol-lo.
 歯 EXP する-PF 言う-PAST:3ORD
 「**きりきり**と歯軋りしながら言った。」

- (3-38) ʃap-ʈa **phōʃ=phōʃ** kor-ch-e.
 蛇-DEF EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「その蛇は**しゅっしゅっ**と音を立てている。」

下の例は、打った時の具体的な音というよりは、その効果が単なる打撃ではなく皮膚を擦るような効果をもつことを示唆する。

- (3-39) **ʈhaʃ(=ʈhaʃ)** kor-e cɔɾ mar-lo.
 EXP する-PF 平手 打つ-PAST:3ORD
 「彼（女）は、**ぴしゃり（ぴしゃり）**と平手で打った。」

下の表現は、視覚的・触覚的に、表面と擦れ合うような感覚を示していよう。

- (3-40) phol-ʈa paka ho-e **ʈɔʃ=ʈɔʃ** kor-ch-e.
 実-DEF 熟した なる-PF EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「その実は熟して**今にも蜜が溢れ出**そうだ。」

- (3-41) **thɔʃ=thɔʃ** maʈi die kaj ho-e na.
 EXP 土 で 仕事 なる-PRES:3ORD NEG
 「じゅくじゅくの土では役に立たない。」

下の例は、狭い空間に犇めく人々が互いに擦れ合うような感覚を表している。この例では、音節初頭子音が/g/であるため、音節末の/j/も有声化して/j/と発音されることがある。

- (3-42) **lokjɔn-e** ghɔr-ʈa **giʃ=giʃ/gij=gij** kor-ch-e.
 人々-LOC 部屋-DEF EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「人々でその部屋はぎしぎしになっている。」

3.3.3. C₂が流音の場合

/l/で終わる expressives は、滑らかな音や流れるような様子・動き、またそれによって喚起される印象を表現する。

- (3-43a) **nodi-r** jɔl **kɔl=kɔl chɔl=chɔl** kor-e boi-ch-e.
 川-GEN 水 EXP EXP する-PF 流れる-IMPF-PRES:3ORD
 「川の水は心地よく、さらさらと流れている。」
- (3-43b) **pakhi-ra** **kɔl=kɔl** kor-e ɖak-ch-e.
 鳥-pl EXP する-PF 鳴く-IMPF-PRES:3ORD
 「鳥たちは心地よい声で鳴いている。」
- (3-43c) **ta-r** cokh **chɔl=chɔl** kor-e uʈh-lo.
 3ORD.INVIS-GEN 目 EXP する-PF 上がる-PAST:3ORD
 「彼の目は涙でいっぱいになった。」
- (3-44) **mee-ra** **khil=khil** hãʃ-ch-ilo.
 女の子-pl EXP 笑う-IMPF-PAST:3ORD
 「女の子たちは、けらけらと笑っていた。」

(3-44)の/khil=khil/は、子供や女性の、自然で屈託のない笑い声の形容に用いられる。次のような、重複派生による形容的表現 (4.1 参照) も、よく用いられる。

- (3-45) **jhɔl=jhol-e** jama
 EXP 服
 「だらっとした/垂れ下がった服」

- (3-46) **dɔl=dol-e** bhat
 EXP 飯
 「柔らかすぎる飯」

これに対し、/ɾ/で終わる expressives は、流れや動きに対する抵抗感、違和感を表現する。

- (3-47) bali dhuk-ech-e bole cokh **kɔr=kɔr**
 砂 入る-PF-PRES:3ORD ので 目 EXP
 kor-ch-e.
 する-IMPF-PRES:3ORD
 「砂が入ったので、目の中が **ごろごろ** している。」

下の2つの例は、(3-43c)と違って、とどめようとする力を押し切って涙が溢れ出るさまを表している。(3-43a), (3-43b)とも対照的である。

- (3-48) **jhɔr=jhɔr** kor-e kēde phel-lo.
 EXP する-PF 泣く-PF 捨てる-PAST:3ORD
 「(じゃあじゃあ) とめどなく涙を流して泣き崩れた。」

- (3-49) cokh theke jɔl **dɔr=dɔr** dhara-e poɾ-ch-ilo.
 目 から 水 EXP 流れ-LOC 落ちる-IMPF-PAST:3ORD
 「目から涙が (どばどば) 奔流となって流れ落ちた。」

これに対し、反舌音の/ɽ/で終わる expressives は、濁った強い残響を表現する。

- (3-50) biral-ɽa o-r kol-e bos-e **ghɔɽ=ghɔɽ**
 猫-DEF 3ORD.FAR-GEN 膝-LOC すわる-PF EXP
 kor-ch-e.
 する-IMPF-PRES:3ORD
 「その猫は、彼女の膝にすわって、喉を **ごろごろ** 言わせていた。」

- (3-51) nodi-r ban-er **huɽ=huɽ** **duɽ=duɽ** ʃɔbdo
 川-GEN 洪水-GEN EXP EXP 音
 「川の洪水の (兩岸を削る) **びしゃびしゃ**、**どしゃどしゃ**いう音」

3.3.4. C₂が鼻音の場合

鼻音で終わる expressives は、調音点の違いによって、異なったタイプの残響を表現する。

まず、/m/は重くうちにこもるような残響である。

- (3-52) **jhəm=jhəm** kor-e briʃti poɾ-ch-e.
 EXP する-PF 雨 落ちる-IMPF-PRES:3ORD
 「**ざんざん**と雨が降っている。」

- (3-53) **gəmbhir** aoaj-e ghər-ʈa **gəm=gəm** kor-ch-e.
 深い 音-LOC 部屋-DEF EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「**深い音**で部屋は**どよむ**ように響いている。」

実際の音でなく、身体の中に重く響くような体感も表現する。

- (3-54) **bhə-e** ga **chəm=chəm** kor-ch-e.
 恐怖-LOC 身体 EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「**恐怖**に**身体の中**が**震えた**つようだ。」

いっぽう、/n/は尾を曳くような残響を表す。

- (3-55) **ʃən=ʃən** kor-e haoa boi-ch-e.
 EXP する-PF 風 吹く-IMPF-PRES:3ORD
 「**風**が**しゅうしゅう**吹いている。」

- (3-56) **ghuŋur-er** **ʈhun=ʈhun** aoaj ʃon-a gæ-lo.
 足鈴-GEN EXP 音 聞く-VN 行く-PAST:3ORD
 「**足鈴**の**しゃんしゃん**いう音が聞こえた。」

/ŋ/も尾を曳くような残響を表すが、下の例に見るように、こちらのほうが/n/より長く強い響きを表す。

- (3-57) **ʈhəŋ** kor-e ʈaka-ʈa chūr-e phel-e
 EXP する-PF お金-DEF 投げる-PF 捨てる-PF
 di-lo.
 与える-PAST:3ORD
 「**彼（女）**は、**ちゃりん**とお金を投げ出してやった。」

(3-58) *nɔjor-er* *ʔaka-e* *ʔhuŋ=ʔhuŋ* *ʃɔbdo* *uʔh-ch-ilo*.
 拝謁-GEN お金-LOC EXP 音 立つ-IMPF-PAST:3ORD
 「拝謁の銀貨のちやりんちやりんいう音が響いていた。」

(3-59) *ɖhɔŋ=ɖhɔŋ* *kor-e* *ghɔnta* *baj-lo*.
 EXP する-PF 鐘 鳴る-PAST:3ORD
 「ごんごと鐘が鳴った。」

4. 派生によって生じる expressives

この節では、expressives の3つのタイプの派生を扱う。

- (1) 接尾辞の付加
- (2) 母音交替による重複
- (3) 併重複

4.1. 接尾辞の付加による派生

3.3 で論じた通り、ベンガル語では C_1VC_2 タイプの expressives が最も多い。これらの expressives の多くは、下にあげるような、接尾辞の付加（プラス重複）という形態的な手段によって、さらなる expressives を派生することができる。

表4 Expressives の派生

	一時的	継続・継起的
乱暴で突然の	C_1VC_2-at	
突然の（摩擦を伴う）	$C_1VC_2-aʃ$	
突然の（重い余韻を伴う）	C_1VC_2-am/um	
速い		$C_1V_1C_2-a=C_1V_1C_2$
長時間にわたる		$C_1V_1C_2-V_2r=C_1V_1C_2-V_2r$
性質形容詞		$C_1V_1C_2=C_1V_1C_2-e^*$
指小表現		$C_1iC_2i=C_1iC_2i$ $C_1uC_2u=C_1uC_2u$

*語幹の V_1 が低母音の場合、重複された V_1 は、接尾辞 **-e** によって引き起される母音同化により中母音になる。4.1.4 参照。

4.1.1. C₁VC₂-at

この接尾辞は、一般に、ある種の余韻を表現する *expressives* の語根に付いて、その余韻が突然断ち切れることを表現する。興味深いのは、この派生形が、非派生形では許されない/t/で終わっていることである。

- (4-1a) **kɔc(=kɔc)** kor-e kaɬ-lam.
 EXP する-PF 切る-PAST:1
 「(柔らかいものを) 一度(何度も) 切った。」

- (4-1b) **kɔc-at** kor-e kaɬ-lam.
 EXP する-PF 切る-PAST:1
 「(柔らかいものを) いきなり切った。」

(4-1a)は(3-28a)の繰り返しである。語根の/kɔc/に、派生語尾/-at/が付いて、「突然、乱暴に」の意を表す。

さらに2つ、例を挙げる。

- (4-2a) **ʃɔɾ=ʃɔɾ** kor-e jhol kha-cch-e.
 EXP する-PF 汁 飲む-IMPF-PRES:3ORD
 「彼(女)はしゅるしゅると汁を飲んでいる。」

- (4-2b) **ʃɔɾ-at** kor-e mukh-e jhol ɬan-ch-e.
 EXP する-PF 口-LOC 汁 引く-IMPF-PRES:3ORD
 「彼(女)は、いきなりしゅるっと汁を飲み込んだ。」

- (4-3a) **kãʃa-r** tala-ɬa **jhɔn=jhɔn** kor-e bheŋ-e gæ-lo.
 真鍮-GEN 皿-DEF EXP する-PF 割れる-PF 行く-PAST:3ORD
 「その真鍮の皿は、じゃりんじゃりんと音を立てて割れてしまった。」

- (4-3b) **torobar-ɬa** **jhɔn-at** kor-e maɬi-te poɾ-lo.
 sword-DEF EXP する-PF 地面-LOC 落ちる-PAST:3ORD
 「その剣は、じゃりんと音を立てて突然地面に落ちた。」

4.1.2. C₁VC₂-aɬ と C₁VC₂-am/um

この2つの接尾辞は、「突然性」を表す点では4.1.1と似ているが、同時に、そのあとに伴う余韻を表現している。

- (4-4a) **dhɔp** kor-e mejhe-te boɬ-e poɾ-lo.
 EXP する-PF 床-LOC すわる-PF 落ちる-PAST:3ORD
 「彼(女)は床にどさっと座り込んだ。」

- (4-4b) **dhɔp-aɬ** kor-e mejhe-te boɬ-e poɾ-lo.
 EXP する-PF 床-LOC すわる-PF 落ちる-PAST:3ORD
 「彼(女)は床にいきなりどしゃっと座り込んだ。」

(4-4a)は(3-36)の繰り返しである。(4-4b)は、その動作の突然性と、急いで座るときに生じる摩擦が表現されている。

これに対し、/m/で終わる接尾辞は、「突然性」と、そのあとに伴う重たい余韻を表現している。

- (4-5) **dɔɾ-am/dur-um** kor-e dɔroja-ṭa bɔndho ho-lo.
 EXP する-PF 扉-DEF 閉まった なる-PAST:3ORD
 「ばたんと扉が閉まった。」

/ɔ/, /a/と/u/の意味の違いから予測されるように(第1節(iv)参照)、/dɔɾ-am/に比べ/dur-um/はより広がり限られた、小さな音を表す。

/dɔɾ/, /dur/は独立して使われることがないが、/dur/には下のような重複の例がある。

- (4-6) **dur=dur/dur=dar**⁸ kor-e dɔroja-ṭa bɔndho kor-lo.
 EXP する-PF 扉-DEF 閉まった する-PAST:3ORD
 「あわててばたばたと扉を閉めた。」

4. 1. 3. $C_1V_1C_2-a=C_1V_1C_2$ と $C_1V_1C_2-V_2r=C_1V_1C_2-V_2r$

$C_1V_1C_2-a=C_1V_1C_2$ のパターンは、出来事が速く継続して起きることを表し、 $C_1V_1C_2-V_2r=C_1V_1C_2-V_2r$ は、出来事の繰り返しが長時間続くことを表す。

- (4-7a) **ṭɔp=ṭɔp**kor-e brifti por-ch-e.
 EXP する-PF 雨 落ちる-IMPF-PRES:3ORD
 「雨がぼつぼつ降っている。」 ((3-32)の繰り返し)

- (4-7b) **ṭɔp-a=ṭɔp** kor-e jɔl-er phōṭa por-ch-e.
 EXP する-PF 水-GEN 滴 落ちる-IMPF-PRES:3ORD
 「水滴が(ぼつつつと)素早く落ち続けている。」

- (4-8a) **kɔc(=kɔc)** kor-e kaṭ-lam.
 EXP する-PF 切る-PAST:1
 「(柔らかいものを)一度(何度も)切った。」 ((3-28a)の繰り返し)

- (4-8b) **kɔc-a=kɔc** kaṭ-lam.
 EXP 切る-PAST:1
 「(柔らかいものを)素早く切った。」

- (4-8c) **kɔc-or=kɔc-or** kaṭ-lam.
 EXP 切る-PAST:1
 「(柔らかいものを)長い時間をかけて切り刻んだ。」

⁸ 4.2を参照。

- (4-9a) buk **dhuk=dhuk** kor-ch-e.
 胸 EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「胸がどきどきしている。」
- (4-9b) **dhuk-ur=dhuk-ur** kor-e hāt-ch-e.
 EXP する-PF 歩く-IMPF-PRES:3ORD
 「彼（女）は、とぼとぼと歩き続けている。」

4. 1. 4. C₁V₁C₂=C₁V₁C₂-e

C₁V₁C₂=C₁V₁C₂-e は、性質を描写する表現であり、文法的には形容詞として機能する。きわめて生産的な派生である。語幹の母音は、低母音の/o/と/æ/、高母音の/i/と/u/に限られる。

/o/の例:

- (4-10) akaf to **phoṭ=phoṭ-e**, cək=cək kor-ch-e.
 空 EMPH EXP EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「空は青く晴れ渡り、一点の翳りもない（ちらちら輝いている）。」
 （「船頭タリニ」）（(1-8)の繰り返し）

この expressive の語幹/phoṭ/は、tatbhava（サンスクリット変容語彙）の/phoṭik/「透明な」からの借用である。この例に見るように、語幹の母音が/o/のときは、接辞/-e/に逆行同化して、重複した音節の母音は中母音/o/となる。

同様の母音パターン：

- (4-11a) **jhol=jhol-e** jama 「だらっとした/垂れ下がった服」(3-45)
 EXP 服
- (4-11b) **dol=dol-e** bhat 「柔らかすぎる飯」(3-46)
 EXP 飯
- (4-11c) **dhob=dhob-e** ṣada 「ぴかぴかの白」
 EXP 白
- (4-11d) **kən=kən-e** haoa 「凍てつく風」
 EXP 風

いっぽう、語幹母音が/æ/のときは、重複した音節の母音は/e/となる。

- (4-12a) **kæn=ken-e** mee 「口やかましい女」
 EXP 女
- (4-12b) **ghæn=ghen-e** chele 「ぎゃあぎゃあうるさく泣く子供」
 EXP 子供

語幹母音が高母音/i/と/u/のときは、同じ母音が繰り返される。

- (4-13a) **ṭip=ṭip-e** briṣṭi 「ぴちやぴちや降る雨」 (cf. (1-3), (1-6))
 EXP 雨
- (4-13b) **phin=phin-e** kapoṛ 「肌理の細かい布」
 EXP 布
- (4-14a) **jhur=jhur-e** bali 「さらさらこぼれる砂」
 EXP 砂
- (4-14b) **tul=tul-e** gal 「(子供の) 柔らかい頬」
 EXP 頬

4.1.5. $C_1iC_2i=C_1iC_2i$ と $C_1uC_2u=C_1uC_2u$

$C_1iC_2i=C_1iC_2i$ と $C_1uC_2u=C_1uC_2u$ は、/i/または/u/の繰り返しによる指小辞 (diminutive) の機能をもった、修辭的な表現である。一般的には 4.1.4 と同じく性質形容詞として用いられるが、述部として機能することもある。

$C_1iC_2i=C_1iC_2i$ の例 :

- (4-15) le, mathali tu matha-e de.
 取る+IMP:2INT 笠 2INT 頭-LOC 与える+IMP:2INT
- ṭipi=ṭipi** jol bhari kharap.
 EXP 水 とても 悪い

「さあ、この笠をかぶって、濡れないようにするんだ。小雨 (ぼつぼつ雨) が、一番身体にこたえるからな。」 (「船頭タリニ」) ((1-6)の繰り返し)

$C_1uC_2u=C_1uC_2u$ の例 :

- (4-16a) **bho-e** buk **dur=dur** kor-ch-e.
 恐怖-LOC 胸 EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「恐怖に胸がどきどきしている。」
- (4-16b) **duru=duru** hia
 EXP 心臓
 「どきどきしている心臓」

輝きを表す語根/jhok/の指小辞形/jhik/ ((1-12)参照)、雨音を表す語根/jhom/の指小辞形/jhim/、鈴の音などの金属製の音を表す/jhon/の指小辞形/jhun/から作られた、次のような形がある。後者の2つの形は、響きを表す/r/による前方重複によって形成されている。これはいずれも頻度の高い美的・修辭的な表現であり、上の派生パターンから語彙化されたものと見るべきであろう。

- (4-17) godhuli-r alo **jhiki=miki** kor-itech-e.
 黄昏時-GEN 光 EXP する-IMPF-PRES:3ORD

「黄昏時の光がちらちら光っている。」（「花環と白檀」）（(1-12)の繰り返し）

(4-18) **rimi=jhimi** briʃti 「しとしと雨」
 EXP 雨

(4-19) **runu=jhunu** nupur=ddhoni 「しゃんしゃん鳴る足鈴の音」
 EXP 足鈴=音

4.2. 母音交替による重複

第1節の(iv)と(ix)、また第3節の例(3-2)で明らかのように、音節母音は音や印象の強さ、広がり、好意的印象などの程度を表現する。

語幹が重複される時、母音交替によって、表出される音や印象の動的なニュアンスを表現することがある。最も多いのは/u/と/a/の交替である。/a/のほうが、/u/に比べ、より大きな音や広がりや印象を与えるため、(1-4)に見るように、/u/->/a/の順序で重複される場合が多い。この例を下に再掲する。

(4-20) paʃ-er gach-guli-r pata-e pata-e jɔl
 側-GEN 木-DEF.pl:DIM-GEN 葉-LOC 葉-LOC 水
 jhor-itech-e ʈup=ʈapʈup=ʈap.
 落ちる-IMPF-PRES:3ORDEXP EXP
 「道の側に並ぶ樹々の葉からは、ぽたぽた、ぽたぽたと水滴が落ちていた。」
 （「郵便配達夫」）

更に、下のような例がある。

(4-21a) ʈuŋ=ʈaŋ aoaj 「ちんちん響き続ける音」
 EXP 音

(4-21b) ʈhuŋ=ʈhaŋ aoaj 「しゃんしゃん響き続ける音」 (cf. (3-58))
 EXP 音

どちらも金属が鳴り響く音であるが、/t/よりも/ʈh/のほうがより大きなよく響く音を表す。

(4-22a) **dum(=dum)** kor-e kil mar-lo.
 EXP する-PF 拳 叩く-PAST:3ORD
 「ぼか（ぼか）っと拳で殴った。」

- (4-22b) **dum=dam** kor-e col-e gæ-lo.
 EXP する-PF 進む-PF 行く-PAST:3ORD
 「ばたばたと (大急ぎで) 立ち去った。」

本節 4.1 の派生によって生じた重複形にも、同様な母音交替が起こりうる。この例では、/u/->/a/と/a/->/u/の2つのパターンが用いられる。

- (4-23) **ṭupur=ṭapur/ṭapur=ṭupur** briṣṭi por-ch-e.
 EXP 雨 降る-IMPF-PRES:3ORD
 「ぽつりぽつりと雨が降り続けている。」

4.3. 𑖞重複

「^{こだま}𑖞重複 (echo reduplication)」とは、音節初頭子音が入れ替わる重複形のこと、後接要素の初頭子音のタイプによってさまざまなニュアンスが加わる。

このうち、最も頻度が高く、その意味がはっきりしているのは、/m/による𑖞重複である。(1-10)~(1-12)、(3-3)などで見たように、/m/は、音や視覚的印象の深さを表現する。(3-3)を再掲する。

- (4-24) **hau=hau/hau=mau** kor-e kād-ch-e.
 EXP する-PF 泣く-IMPF-PRES:3ORD
 「彼 (女) はわんわん泣いている。」

hau=hau に比べ、**hau=mau** はより深く、激しい泣き方を表現する。

語幹/kɔc/ (cf. (3-28)) に基づく𑖞重複の例：

- (4-25a) **kɔc=mɔc** kor-e cibo-cch-e.
 EXP する-PF しゃぶる-IMPF-PRES:3ORD
 「彼 (女) は (柔らかいものを) むしゃむしゃしゃぶっている。」

- (4-25b) **kɔcor=mɔcor** kor-e cibo-cch-e.
 EXP する-PF しゃぶる-IMPF-PRES:3ORD
 「彼 (女) は (柔らかいものを) むしゃむしゃしゃぶり続けている。」

(4-17) ((1-12)の繰り返し) のように、語彙化されている例もある。再掲すると：

- (4-26) godhuli-r alo **jhiki=miki** kor-itech-e.
 黄昏時-GEN 光 EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「黄昏時の光がちらちら光っている。」 (「花環と白檀」)

/m/の他に、併重複によく使われる子音は、調音点が同じく両唇である閉鎖音/p/, /ph/, /bh/と、硬口蓋閉鎖音の/c/である。

(4-27a) **cɔʈ** kor-e khe-e na-o.
 EXP する-PF 食べる-PF 取る-IMP:2ORD
 「さっさと食べちゃいなさい。」

(4-27b) **cɔʈ=poʈ** kor-e khe-e ni-lo.
 EXP する-PF 食べる-PF 取る-PAST:3ORD
 「大あわてで食べ終わった。」

(4-28a) **bacca-ʈa** **bhã=bhã** kor-e kãd-ch-e.
 赤ん坊-DEF EXP する-PF 泣く-IMP:3ORD
 「その赤ん坊はぎゃあぎゃあ泣いている。」

(4-28b) **bacca-ra** **cã=bhã** kor-e kãd-ch-e.
 赤ん坊-pl EXP する-PF 泣く-IMP:3ORD
 「赤ん坊たちがぎゃあぎゃあ泣きわめいている。」

(4-27b)は、(4-27a)にある語幹/cɔʈ/からの、子音/p/による順行併重複によって生じたものと思われる。いっぽう、(4-28b)は、(4-28a)にある語幹/bhã/の逆行併重複によって生じたものである。

(4-29a) **chele-ra hoi=hoi** kor-ch-e.
 子供-pl EXP する-IMP:3ORD
 「子供たちが歓喜の声をあげている。」

(4-29b) **chele-ra hoi=coi** kor-ch-e.
 子供-pl EXP する-IMP:3ORD
 「子供たちが大騒ぎしている。」

(4-29b)は、(4-29a)にある語幹/hoi/の/c/による順行併重複によって生じたものであろう。これに対し、下に挙げる(4-30)では、/choʈ/も/phoʈ/も単独の語幹として用いられないため、どちらの方向に重複されているとも言えない。

(4-30) **jontrona-e** **choʈ=phoʈ** kor-ch-e.
 苦痛-LOC EXP する-IMP:3ORD
 「苦痛にのたうち回っている。」

この他、他の子音による併重複ないし初頭子音の脱落と思われる、下のような例がある。もとの語幹を特定できるもの、できないものがある。それぞれの語彙について、今後の検討が必要であらう。

- (4-31a) ama-r pet **ḍai=ḍai** kor-ch-e.
 1sg-GENおなか EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「私のおなかは**いっぱい**だ。」
- (4-31b) am-ar pet **ai=ḍai** kor-ch-e.
 1sg-GENおなか EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「私のおなかは**のどまで**いっぱいだ。」 ((1-2)参照)
- (4-32a) amar gola **kuḥ=kuḥ** kor-ch-e.
 1sg-GENのど EXP する-IMPF-PRES:3ORD
 「私ののどは**ひりひり**している。」
- (4-32b) koṭha-ṭa bol-bar jonno **uḥ=kuḥ** kor-ch-i.
 こと-DEF 言う-VN:GEN ため EXP する-IMPF-PRES:1
 「私はそのことを言いたくて**うずうず**している。」 ((1-2)参照)
- (4-33) o-ra **ele=bele** koṭha bol-ch-e.
 3ORD.FAR-pl EXP 言葉 言う-IMPF-PRES:3ORD
 「彼らは**意味もない**たわ言を (べらべら) しゃべっている。」

5. Expressives に類似の文法・語彙現象

ベンガル語の文法・語彙には、expressives と似た、形態音韻と意味の直接的な対応が見られる現象が、かなり広汎に見られる。それらのうち、顕著な現象を、下に述べることにする。こうした現象は、これまでの記述文法では周縁的な現象として取り扱われるのが常であったが、本論で記述した expressives の、ベンガル語文法に占める重要性を考えると、そのような扱いでいいのかという疑問を生じさせる。expressives の包括的な分析と相俟って、今度本格的な検討が必要であろう。

- (1) 完全重複
- (2) 研重複
- (3) 母音交替
- (4) 初頭音節交替
- (5) 相互名詞 CVCa=CVCi
- (6) 定辞/類別詞/数詞
- (7) 呼び名
- (8) 動詞語彙

5.1. 完全重複

完全重複は、語彙的な内容を表す品詞すべてについて、生産的である。

(A) 名詞

おもに場所格に用いられ、複数性を表す。

(5-1a) gram-e gram-e 村々に／で
村-LOC 村-LOC

(5-1b) majh-e majh-e 時々（間々に）
間-LOC 間-LOC

(B) 代名詞

主格（無標）、場所格に用いられ、複数性を表す。

(5-2a) ke ke 誰々
誰 誰

(5-2b) ki ki 何々
何 何

(5-2c) kotha-e kotha-e 何処何処で
何処-LOC 何処-LOC

(C) 程度形容詞／副詞

(i) 程度が強いことを表す。名詞修飾の場合は修飾する名詞の複数性を表すこともある。

(5-3a) boro boro cokh とても大きな目／大きな両目
大きい 大きい 目

(5-3b) aste aste とてもゆっくり
ゆっくり ゆっくり

(ii) 「ほとんど～」という意味を表す。

(5-4a) ca gorom gorom khe-te ho-be.
茶 熱い 熱い 飲む-IMPF なる-FUT:3ORD
「お茶は冷めないうちに飲まなければならない。」

(5-4b) cupi cupi col-o.
黙って 黙って 進む-IMP:2ORD
「そおっと（ほとんど音を立てず）に進め。」

(D) 動詞

(i) 動作の繰り返し（完了形）。

(5-5a) chele-ta phir-e phir-e taka-cch-e.
子供-DEF 振り返る-PF 振り返る-PF 見つめる-IMP-F-PRES:3ORD
「その子は、何度も振り返っては見つめている。」

(5-5b) toma-ke dekh-e dekh-e bujh-te ho-be.
2ORD-OBJ 見る-PF 見る-PF 理解する-IMPF なる-FUT:3ORD
「君は何度も見ながら理解しなければならない。」

(ii) 「ほとんど～」という意味を表す（未完了形、習慣形）。

(5-6a) ami mor-te mor-te bē-ce gech-i.
 1 死ぬ-IMPF 死ぬ-IMPF 生き延びる-PF 行く+PF-PRES:1

「私はすんでのところで死なず生き残った。」

(5-6b) ja-e ja-e obostha
 行く-PRES:3ORD 行く-PRES:3ORD 状態

「今にも死にそうな状態」

5.2. 𑖇重複

ベンガル語では、𑖇重複は文法化されており、/t/, /ph/, /ʃ/, /m/の4種類の子音による交替が起きる。「～やなにか」という曖昧な複数性の他に、その交替子音の選択に応じて、特定のニュアンスが付与される。この中で、最初の/t/は中立的な表現で、どの品詞とも特に生産的に𑖇重複を形成する。

(A) /t/による𑖇重複

(5-7a) ca=ta 「お茶やなんか」
 茶=EDUP

(5-7b) bhalo=ṭalo 「いいかどうか」
 いい=EDUP

(5-7c) o-ra=ṭora 「彼らなんか」
 3ORD.FAR-pl=EDUP

(5-7d) jodi=ṭodi 「もしもなんて」
 もし=EDUP

(5-7e) ja-ben=ṭaben na. 「行ったりしないでください」
 行く-FUT:2HON=EDUP NEG

(B) /ph/による𑖇重複は、軽蔑や価値を貶める表現に用いられる。

(5-8a) ca=pha 「お茶やなんかのつまらないもの」
 茶=EDUP

(5-8b) bhalo=phalo 「いいかどうかなんてばかげたこと」
 いい=EDUP

(C) /ʃ/による𑖇重複は、程度表現をやわらげるのに用いられる。

(5-9a) moṭa=ʃoṭa 「太り気味の」
 太った=EDUP

(5-9b) boka=ʃoka 「バカっぽい」
 バカ=EDUP

(5-9c) majh-e=fajh-e 「ときたま」
間-LOC=EDUP

(D) /m/による併重複は、怒りや攻撃的な表現に用いられる。

(5-10a) reg-e=meg-e 「腹を立てまくって」
怒る-PF=EDUP

(5-10b) khõc-a=moc-a 「(人のあらを捜して) 突っつき回すこと」
突っつく-VN=EDUP

この他、下のように、/b/による併重複もたまに見られるが、特にはっきりしたニュアンスが付加されておらず、上の/t/による併重複との意味的な違いがはっきりしない。

(5-11a) cakri=bakri 「仕事やなんか」
仕事=EDUP

(5-11b) cakor=bakor 「召使いやなんか」
召使い=EDUP

5.3. 母音交替による重複

ほとんどが名詞である。4.2 であげたような、/u/と/a/の交替による重複が多いが、(5-12e)のように、/i/と/a/が交替する例も、稀に見られる。

(5-12a) bhul=bhal 「誤りやなんか」
誤り=VDUP

(5-12b) khucro=khacra 「小銭やなんか」
小銭=VDUP
(語末の/o/も、交替母音の/a/に同化して/a/に変化)

(5-12c) ṭhakur=ṭhukur 「神様やなんか」
神様=VDUP

(5-12d) phāki=phūki 「ごまかしやなんか」
ごまかし=VDUP

(5-12e) bhiṛ=bhaṛ 「混雑やなんか」
混雑=VDUP

5.4. 第1音節の交替による重複

これもほとんどが名詞である。後半要素は、元の語彙の第1音節が交替して形成される。それ自体としては意味がない。

- (5-13a) chele=pile 「子どもやなんか」⁹
 子供=SDUP
- (5-13b) kapoṛ=cəpoṛ 「衣類やなんか」
 衣類=SDUP
- (5-13c) baṣon=kəṣon 「食器類やなんか」
 食器類=SDUP

5.5. 相互名詞 (CVCa=CVCi)

動名詞(VN)語幹の/a/を/i/で交替させて形成される重複語幹で、相互性、ないし(自動詞の場合は)出来事の複数性を表す名詞を派生する。動詞語幹が低母音(/a/を除く)ないし中母音である場合は、(5-14b), (5-14c)のように、逆行同化により一段高い母音に変化する。

- (5-14a) mar-a=mar-i 「殴り合い」
 なぐる-VN=RECIP
- (5-14b) dəkh-a=dekh-i 「お互いを観察すること」
 見る-VN=RECIP
- (5-14c) ghor-a=ghur-i 「あちらこちら回ること」
 回る-VN=RECIP

多音節動詞の場合は、/a/で終わる語幹から、同様の名詞を派生する。

- (5-15a) baṛa=baṛi 「大きさにすること」
 増やす=RECIP
- (5-15b) doṛa=douṛi 「走り回ること」
 走る=RECIP

名詞、形容詞語幹の/a/で終わるからも、同様の過程を経て、副詞を形成することがある((5-16a))。子音で終わる名詞語幹は、(5-16b)に見るように、接尾辞/-a/をとる。この接尾辞はその前に高母音が来るとき、順行母音同化を起こして/-o/に変化する((5-16c~d))。

- (5-16a) ſoja=ſuji 「率直に」
 真っ直ぐの=RECIP
- (5-16b) cokh-a=cokhi 「目と目を合わせて」
 目=RECIP

⁹ 'pile' は「子供」の意味のタミール語語彙からの借用である。

- (5-16c) mukh-o=mukhi 「向かい合わせに」
顔=RECIP
- (5-16d) piṭh-o=piṭhi 「背中合わせに」
背中=RECIP

5. 6. 定辞/類別詞/数詞

定辞、類別詞、数詞には、普通形と指小形がある。普通形と指小形は、典型的に、/a~/o/と/i/の対立で表される。/i/は、歴史的には、中世ベンガル語 (MB, Middle Bengali) の女性形の名残りである。

- (5-17a) boi-ṭa 「その本」
本-DEF
- (5-17b) boi-ṭi 「その (小さい・美しい) 本」
本-DEF:DIM
- (5-18a) boi-gulo 「それらの本」
本-DEF.pl
- (5-18a) boi-guli 「それらの (小さい/美しい) 本」
本-DEF.pl:DIM
- (5-19a) boi-khana 「その (固形物としての) 本」
本-DEF.SOLID
- (5-19b) boi-khani 「その (固形物としての・小さい/美しい) 本」
本-DEF.SOLID:DIM
- (5-20a) chele-ṭa 「その子供」
子供-DEF
- (5-20b) chele-ṭi 「その (可愛い) 子供」
子供-DEF:DIM
- (5-21a) chele-gulo 「その子供たち」
子供-DEF.pl
- (5-21a) chele-guli 「その (可愛い) 子供たち」
子供-DEF.pl:DIM
- (5-22a) æk-ṭa boi 「一冊の本」
one-NONH 本

(5-22a)	ek-ti ¹⁰ one-DIM	boi 本	「一冊の（小さい/美しい）本」
(5-23a)	æk-jɔn one-HUMAN	chele 子供	「一人の子供」
(5-23b)	ek-ti ¹⁰ one-DIM	chele 子供	「一人の（可愛い）子供」

5.7. 呼び名

個人名の短縮形は呼び名として用いられる。一般に、/-u/, /-i/で終わる形は指小形の機能を果たす。

(5-24)	pɔncanon pɔcai pocu	「正式名（男性）」 「親しみをこめた呼び名」 「愛称」
(5-25)	dinobondhu dina dinu	「正式名（男性）」 「バカにした呼び名」 「愛称」
(5-26)	ʃona ʃonai ʃonu	「正式名（女性）」 「親しみをこめた呼び名」 「愛称」

5.8. 動詞語彙

ベンガル語の語彙、特に動詞語彙に、expressives との関連が推測されるものが多い。これらの歴史的起源は複雑である。

そのうちのあるものは、expressives から派生したと考えられる。

(5-27)	mɔtka-	「ぼきっと折る」 < mɔt 「ぼきっと」 ((3-27) 参照)
--------	--------	-----------------------------------

また、(5-27)とは逆に、動詞から expressives が派生したと考えられる場合もある。

(5-28)	ghur=ghur kɔr-	「ぐるぐる回る」 < ghor- 「回る」 ((5-14c) 参照)
--------	----------------	------------------------------------

¹⁰ 数詞/æk/の/æ/は、指小形の接尾辞/-ti/の母音/-i/に逆行同化して、/e/に変化する。

いっぽう、似た語幹をもつベンガル語の動詞と *expressives* の両方が、サンスクリット語の語幹から派生したとされる例もある。下の(5-29)は、2つとも同じ語幹から派生したとされる例であり、また(5-30) ((3-24)参照) は、それぞれが異なる語幹から別々に派生したとされる例である。

(5-29) **jol=jol kor-** 「ぎらぎらする」
jol- 「燃え輝く」
 < */jval-/ 「燃え輝く」 (サンスクリット)

(5-30) **kaṭ=kaṭ** 「ことごと (切る)」
 < */kaṭṭa/ 「ことごと」 (サンスクリット)

kaṭ- 「切る」
 < */kṛt-/ 「切る」 (サンスクリット)

こうした歴史的説明が、ほんとうにこれらの語彙の生成過程を反映したものなのか、生成の過程で類推が果たした役割がないのかどうか、という疑問が生じる。

今後、こうした動詞語彙と *expressives* のペアをより広汎に取り上げ、その生成過程を検討する余地があるように思う。

6. Expressives の音韻形態と、意味との関連について — 暫定的なまとめ

本論の第1, 3, 4節で、ベンガル語の *expressives* の音韻形態と意味との関連を、さまざまな角度から取り上げてきた。また第5節では、このような関連との共通性が見られる他の文法・語彙現象を概観してみた。

まず、ベンガル語の *expressives* の音韻形態と意味との関連について、これまでの議論から一般化できそうな点を下に列挙する。

- (1) ベンガル語の *expressives* では、語幹の音節構造の違い (C_1VC_2/CV) が、表出される出来事全体の大まかな時間的な構造の違い (明示的な終結点がある (telic) かない (atelic) か) を示す。
- (2) 語幹の重複によって、出来事が継起したり状態が継続することを表す。
- (3) 語幹初頭子音 (CV における C, C_1VC_2 タイプの語幹における C_1) のタイプが、表出する出来事がもたらす聴覚的・視覚的・触覚的特徴を象徴的に表現する。
- (4) 中核母音は、その出来事がもたらす音の量や印象の強さ・鋭さ・広がり、聞き手にもたらす好悪感を表す。
- (5) C_1VC_2 タイプの語幹において、語幹末の C_2 は、出来事の終結の様態を表す。
- (6) その他、接尾辞の付加や弔重複等の派生により、さまざまなニュアンスを加えることができる。

ここで述べた音韻形態と意味との直接の連関は、expressives という品詞において体系的に構造化されたものであるが、その連関を構成する要素のひとつひとつについては、ベンガル語の他の文法現象や語彙形成との間に共通性が見られる。たとえば、重複や併重複が表す出来事の複数性、高母音/i/や/u/が表す指小表現、動词语彙の多くに見られる expressives に類似の音と意味の連関、など。

今後、ベンガル語の expressives のより組織的な分析を行いながら、これらの文法・語彙現象と expressives の関係、こうした現象がベンガル語の文法の中に占める位置について、考察を深めたい。

参考文献

- Diffloth, Gérard. (1972) 'Notes on expressive meaning', Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, 440-448.
- Diffloth, Gérard. (1979) 'Expressive phonology and prosaic phonology in Mon-Khmer', Theraphan L-T. et al. (eds.) *Studies in Tai and Mon-Khmer phonetics and phonology in honor of Eugenie J. A. Henderson*, Bangkok: Chulalongkorn University Press, 49-59.
- Diffloth, Gérard. (1994) 'i:big, a:small', L. Hinton, J. N. and J. Ohala (eds.) *Sound Symbolism*, New York: Cambridge University Press, 107-114.
- ṭhākura, rabīndranāth (1935) *śabda-tattva*, Santiniketan: Visva-Bharati.
- Voeltz, F. K. E. & Kilian-Hatz, C. eds. (2001) *Ideophones*, Amsterdam: John Benjamins.
- 長田俊樹 (2009) 「ムンダ語の感情語」、稲垣和也・大西正幸編『地球研言語記述論集 1』、京都：総合地球環境学研究所、35-66.
- 田守育啓・ローレンス＝スコウラップ (1999) 『オノマトペ—形態と意味』、東京:くろしお出版。
- タラションコル・ボンドパッタエ(著)、大西正幸(訳・解説) (2016) 『船頭タリニ』、東京:めこん社。
- 浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』、東京:くろしお出版。

文法用語略号表

略号 (グロス)	英語	日本語
1	1st person	1 人称
2	2nd person	2 人称
3	3rd person	3 人称
DEF	definite	定
DIM	diminutive	指小
EDUP	echo reduplication	<small>こだま</small> 重複 (子音交替重複)
EMPH	emphatic	強調
EXP	expressive	expressive (エクスペッシブ)
FUT	future	未来形
GEN	genitive case	属格
HAB	habitual	習慣形
HON	honorific	尊敬
HUMAN	human	人間
IMP	imperative	命令形
IMPF	imperfective	未完了分詞/形
INT	intimate	親密
INV	invisible	不可視
LOC	locative case	所格
NEG	negative	否定辞
NONH	nonhuman	人間以外
OBJ	objective case	目的格
ORD	ordinary	同等
PAST	past	過去形
PF	perfective	完了分詞/完了形
pl	plural	複数
PRES	present	現在形
RECIP	reciprocal noun	相互名詞
FAR	far	遠称
SDUP	syllable alternating reduplication	音節交替重複
sg	singular	単数
SOLID	solid object	固形物
VDUP	vowel alternating reduplication	母音交替重複
VN	verbal noun	動名詞

琉球沖永良部語上平川方言の言語資料

山田真寛⁺・横山（徳永）晶子⁺⁺

⁺京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット

masahiro.yamada@gmail.com

⁺⁺一橋大学社会学研究科

akikoyokoyama1110@gmail.com

キーワード：琉球諸語、奄美、沖永良部、消滅危機言語、言語復興、表記法

1 はじめに



図1：沖永良部島、上平川集落の位置

本稿は沖永良部島の上平川集落（鹿児島県大島郡知名町字上平川）で話されている琉球諸語（以下「ひょーむに（çoo+muŋi “上平川+ことば”）」とする）の言語資料を提示する。言語資料はひょーむに母語話者（1957年生）の創作物語「みちやぬ ふい（土の

声）」の第一話全文を収録する。また言語資料を記録するための現代日本語共通語のひらがなをベースにした表記法（以下「ひらがな表記法」）を提案することも本稿を目的とし、ひらがな表記法を整備するための言語音の調査も報告する。

ひょーむにを含む琉球諸語・諸方言（地域言語）は、流暢な話者が概ね 60 歳以上であり、母語として獲得している子どもがいない、世代間継承が断絶した消滅危機言語である。各地域言語の言語体系を記述・記録する研究者の数・能力は限られており、これに依存するだけでは多くの地域言語が近い将来消滅してしまう。しかし、母語話者や地域住民が容易に使用することができ、かつ異なる言語音を一貫して書き分けられる表記法があれば、研究者による地域言語の記述が進んでいないうちから、母語話者や地域住民がある程度の言語記述を行うことができる。さらに母語話者や地域住民がこの表記法を用いることで、地域コミュニティの手で言語資料を大量に記録することも可能である（山田 2015）。UNESCO（2003）が提案する言語の消滅危機度測定では、表記法の有無と言語記録の質・量が危機の度合いに大きく影響し、消滅の危機にある言語が表記法を持つこと、質の高い言語資料を多く蓄積することが、消滅危機度が下がることを含意している。さらに、本稿で言語資料として提示するような消滅危機言語を用いた創作活動も、言語の消滅危機度を下げることによって大きく貢献する要素である。

本稿で提案するひらがな表記法は、著者が言語資料の作者とともに言語音・音素を短期間で特定しながら、小川（2015）が提案する琉球諸語のための統一的表記法を参照して作成した。記述の進んでいない琉球諸語の数は、長期間滞在してフィールド調査を行う研究者よりはるかに多く、本稿の手法が他の琉球諸語の初期調査およびひらがな表記法整備の際に、コミュニティと協働で言語の記述・記録を効率的に進めるガイドラインとなることが期待される。

1.1 先行研究

沖永良部語は、口蓋化の音変化（ki→tɕ）を経た東部方言と、音変化を経なかった西部方言に分かれることが知られている（真田・奥間 1986）。ひょーむには西部方言に属する。沖永良部語に関する最も包括的な先行研究は平山（1986）である。平山（1986）は、東部の和泊、国頭集落、西部の知名、瀬利覚集落の音韻、形態、統語論の一部を報告している。近年では Lubbe and Tokunaga（2015）が西部の正名集落、東部の国頭集落の文法概略を発表したほか、国立国語研究所が東部の出花、国頭集落、西部の瀬利覚、田皆集落における語彙、文法調査の結果を刊行する予定である。ひょーむにに特化して報告した先行研究は管見の限り存在しない。

2 言語音の特定

ひらがな表記法は、基本的に開音節を単位とした表記法であり、頭子音と音節核となる母音の組み合わせを一文字で表す。よって、地域言語が持つ言語音を母音と子音に分けて特定することが、表記法整備の初期段階として必要である。実在する開音節に対応する文

字が全て含まれるような文字セットを準備してひらがな表記法を作成する。つまり、その言語の音として特定した子音・母音が、実際に開音節の頭子音・音節核となるかどうかの調査は、ひらがな表記法作成時にはそれほど突き詰めず、論理的に可能な全ての組み合わせに該当する文字を用意し、言語記録が蓄積され、音韻論的記述が進むにつれて整理していく方針を採用する。

以下では、表層的に観察される母音と子音を特定する。使用するデータは全て、著者が2015年9月と12月に行った調査で、言語資料の作者である1957年生の母語話者から収集した。言語資料「みちやぬ ふい」の語彙173語¹と、その追調査と、横山が沖永良部島国頭集落で収集している調査データをもとにした調査で得た語彙150語²の計323語をデータとして用いる。

2.1 母音

ひょ一むには表1でまとめる五母音の短母音と長母音（母音の連続VVとして表記する）を持ち、表2、表3で示す対立が観察される。例えば表2において、[i]と[u]の対立は、最上段の[i]の行と右端の[u]の列が交差する欄に、**tiati** “手当”と**kutu** “こと”（t_#環境）として示されている。

表1：ひょ一むにの母音

	前	中	後
高	i, ii		u, uu
中	e, ee		o, oo
低		a, aa	

表2：短母音の（準）最少対

	i	e	a	o	u
i		sudi 袖 φude 筆	teimi 爪 ama 母	tiati 手当 tinto 空	tiati 手当 kutu こと
e			φude 筆 uda どこ	hate 畑 tinto 空	akuce 退屈 ueu 後ろ
a				ura あなた mihediro ありがとう	sata 砂糖 satu 里
o					tinto 空 kutu こと
u					

¹非自立語25語（助詞類20語、文末詞5語）、活用語48語を含む。異なる活用形も含めると213語。

²活用形・派生語も含めると159語。

表3 : 長母音の最少対

	i	e	a	o	u
i		jii 柄 jee 祝い	jii 柄 jaa 家	tii 手 too 蛸	jii 柄 juu 湯
e			çee 蠅 çaa 坂	hee 灰 hoo 水路	jee 祝い juu 湯
a				taa 田 too 蛸	jaa 家 juu 湯
o					too 蛸 tuu 十
u					

表4の語彙を用いて、各母音の第1フォルマント(縦軸)、第2フォルマント(横軸)を計測した。表4中で下線を引いたHトーンが実現する各母音を持つ語彙を3つずつ用意し、それぞれ3回ずつ母語話者が発音したものをそれぞれ計測した。その値を二次元に配置した母音空間図を図2に示す。各母音と音節を成す頭子音をそろえることはできなかったため、ばらつきが見られるが、五母音は音響的にもおおむね明瞭に区別されていると言える。

表4 : 母音空間図作成に用いた語彙(下線部が計測した母音)

i	e	a	o	u
miz <u>i</u> 水	hate <u>e</u> 畑	nama <u>a</u> 今	zo <u>o</u> 門	φut <u>u</u> çei 今年
nab <u>i</u> 鍋	akuce <u>e</u> 退屈	hagan <u>i</u> 鏡	samp <u>o</u> ウズラ	wud <u>u</u> i 踊り
tui <u>i</u> 鳥	aite <u>e</u> 相手	uda <u>a</u> どこ	ho <u>o</u> 水路	agu <u>u</u> 友だち

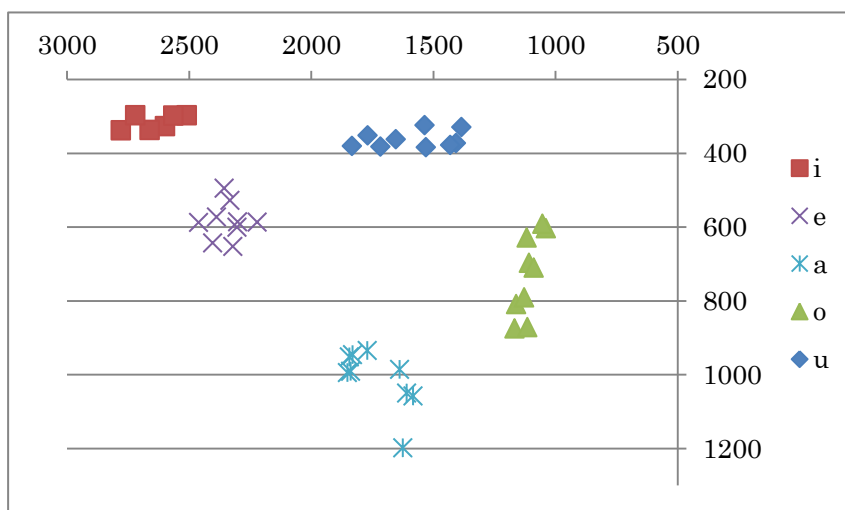


図2 : 母音空間図(縦軸:F1, 横軸:F2)

母音の長短は弁別的であると思われるが、これを示す最少対は観察されていない³。長母音を含む語例のみが観察され、その長母音が最小語制約およびメロディー制約⁴による長音化に由来せず、調査協力者が短母音との置き換えを「それはひょーむにの語彙ではない」と判断した語を以下に列挙する。不十分な証拠ではあるがこれらの語例にもとづき、ひょーむには母音の長短が弁別的であると結論付ける。

- | | | | |
|----------|----|---------------------|-------------|
| (1) [ii] | a. | ciikusa | “カタバミ” |
| | b. | hooracagiisanu | “嬉しそうな” |
| (2) [ee] | a. | meenabi | “若い娘” |
| | b. | heepa | “二の腕” |
| | c. | teenee | “丁寧” |
| | d. | deezoobu | “大丈夫” |
| (3) [aa] | a. | maamii ⁵ | “豆” |
| | b. | baaba | “おばあさん” |
| | c. | n'aatca | “明日” |
| | d. | taaueagi | “ツンとすました様子” |
| (4) [uu] | a. | muuru | “みんな” |
| | b. | euuki | “ごちそう” |
| (5) [oo] | a. | hooracan | “嬉しい” |
| | b. | deezoobu | “大丈夫” |

2.2 子音

表5にひょーむにで観察される子音の表層形をまとめる。

³ 語末では母音の長短の対立がなく、長く実現するものは、メロディー制約（注4参照）または最少語制約（自立語は2モーラ以上）を満たすためのものと考えられる。

⁴ 本稿では議論しないが、語彙的メロディー指定が HHLH である語彙が、3モーラ以下の音韻語（自立語（+付属語））の場合に、一部のモーラが長音化することが観察されている（例：uzu]ru=[mu “野菜＝も” vs. uzu]u]ru “野菜”、a[b は a から b にかけてのピッチの上昇を、a]b は a から b にかけてのピッチの下降を表す（[と]の標識は上野（2006）による）。

⁵ 語末の ii はメロディー制約によって長音化した母音。属格標識=nu が付くと maami=nu となる。

表5：ひょーむにの子音（表層形）

調音方法		調音点		両唇音	歯茎音	(歯茎) 硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂/ 声門音
		無声	有声					
破裂音	無声			p	t, ts	tɕ	k	q
	有声			b	d		g	
摩擦音	無声			ɸ	s	ɕ, ç		h
	有声				z	z		
鼻音	非喉頭化			m	n	ɲ	ŋ	ɴ
	喉頭化			m'	n'	ɲ'		
弾き音					r			
接近音	非喉頭化			w		j		
	喉頭化			w'		j'		

[p], [z], [ts]は、分布がオノマトペか借用語に限られるようである。以下にこれまで得られた語例をあげる。

- (6) [p] a. sampo “ウズラ”⁶
 b. pateipatei “パチパチ”（擬音語）
- (7) [ts] a. kutsu “靴”
 b. aisatsu “あいさつ”
- (8) [z] a. hanzaci “人が集まるときなどに縁側を庭に延長したもの”
 b. urizummaami “うりずん豆（シカクマメ）”
 c. zubora “怠けること”

半母音[w], [j]と鼻音 [m], [n]に、喉頭化(C')・非喉頭化(C)の対立があり、以下の（準）最少対が存在する。ひょーむにの喉頭化子音は、例えば[m']は、子音の開始点までは声門を閉鎖して空気圧を高め、両唇の開放と同時に声門閉鎖を開放する調音方法で構音される。

- (9) a. wanu “私” b. w'aa “豚”
 (10) a. juu “湯” b. j'uu “魚”
 (11) a. maa “ここ” b. m'aa “そこ”
 (12) a. naa “名前” b. n'aa “もう、もっと”

⁶ sampo は沖永良部 4 地点で確認されており（国立国語研究所調査による）沖永良部語の中では定着している語彙だと思われるが、与論語、沖縄諸語には存在せず語源は不明。

3 ひらがな表記法

ひょ一むには以下で示す音節構造を許す。音節核となる母音以外は全て非義務的である。この音節構造を拍音とし、ひょ一むにで許されている拍音の表記法を作成する。

(13) (C)(G)V(V)(N) C: 子音、V: 母音、G: 半母音、N: 鼻音

琉球諸語統一的表記法（小川 2015）にもとづいた、ひょ一むにのひらがな表記法を、発音表記、語例とともに表 6 に示す。この表記法は、現代日本語共通語のひらがなに補助記号を加え、以下の形式に沿って琉球諸語の全拍音を表記できるよう設計されている。

(14) 【補助記号】 【主仮名（大文字）】 【補助仮名（小文字）】 【補助記号】

小川（2015）では主仮名の前に 4 つの補助記号が使われているが、ひょ一むにでは喉頭化音を表す「´」（「ちよん」と呼ぶ）のみを使用する（例「´ま」[m'a]）。また仮名文字の後に続く補助記号は、ひょ一むにでは「い」に続く「`」（「てんてん」と呼ぶ）のみを使用する⁷。喉頭化音の他に現代日本語共通語に無い拍音には、[ji], [j'i], [wu], [w'u]があり、それぞれ「い」「い´」「をう」「をう´」を使用する。

(15) a. 「いー」 [ii] “胃” b. 「い´ー」 [jii] “柄”

(16) a. 「うとう」 [utu] “音” b. 「をうとう」 [wutu] “夫”

表 6 では、横方向に母音を、縦方向に子音（子音と半母音の組み合わせを含む）を取り、それぞれの組合せを拍音として、各セルで表記を提示する。語例は概ね言語資料内の語彙を例示したが、言語資料に該当する語が無い場合は、調査データから補足した語を用いている。灰色の欄は使用語例が観察されていない拍音を表しており、ひょ一むにに存在しない拍音というわけではない。小川（2015）で表記が設定されていないものは、ひょ一むにで観察される「ひえ」をのぞき本稿でも表記を提案せず、同様にセルを灰色にしている。

Cje に関しては小川（2015）で報告されている「しえ」[ɕe]と「じえ」[ze]に加えて、ひょ一むにでは[ɕe]が観察され、これに「ひえ」を新たに提案する。また、[ɕ], [z], [tɕ], [ç], [ɲ] は、破裂音と同様に[s], [z], [ts], [h], [n]に半母音[j]が続いたもの（[sj], [zj], [tsj], [ɲj]）の表層形とする分析が可能である。Cje は未観察のものが多いが、語例が観察された場合はこの分析を仮定して以下の方針にもとづき、新たな表記法を用意する。

⁷ 小川（2015）は、現代日本語共通語で濁点および半濁点が付く仮名文字（「ば」「ぱ」など）を、主仮名として扱っている。

(17) Cje に関する方針

- i) 基本的には（基底形で）半母音[j]無しの拍音と同じ子音を持つ Ci を表す主仮名に、小文字の「え」を補助記号として付す（例：「き」＋「え」＝「きえ」）。
- ii) Ci を表す主仮名に小文字の「い」を補助記号として用いる「てい」「でい」「つい」「ふい」は、これらの主仮名に小文字の「え」を付し、「てえ」「でえ」「つえ」「ふえ」とする。

Cw は現時点では「くわ」[kwa]のみが観察されているが、沖永良部語国頭方言では「ぐわ」[gwa]も観察されている（例：magwa “孫”）。表の体裁の都合上「くわ」のみを最後に提示したが、新たに観察された場合は以下の方針にもとづき表記法を作成することとする（小川（2015）と同じ方針）。

(18) Cwa に関する方針

- i) 基本的に Cwa を表すには、子音を同じくする Cu の主仮名に、小文字の「わ」を補助記号として付す。
- ii) Cu に小文字の「う」を補助仮名として用いる「とう」「どう」は、これらの主仮名に小文字の「わ」を付し、「とわ」「どわ」とする。

軟口蓋よりもかなり奥に舌背（後舌面）を接触させて作られる（口蓋垂）無声破裂音[q]は、語頭位置かつ[o]の前にのみ現れ、語頭位置では[o]の前には軟口蓋無声破裂音[k]は現れない（[k]は他の全ての母音の前に現れる）。よって(19)の音韻規則を仮定し、表 6 では[qo]を子音[k]の行に含める。

- (19) a. qoi “肥やし”
- b. qoi “鋤”
- c. k → q / word[_o

表6：ひょーむにのひらがな表記法と語例

	a	i	u	e	o
∅	あ a あぐ agu 友だち	い i いち itei いつ	う u うじゆる uzuru 野菜	え e	お o おー oo 泡、粟
k	か ka かみゆん kamjun 食べる	き ki きー kii 気	く ku くさ kusa 草	け ke けーたん keetan かけた	こ ko(→qo) こい qoi 鋤、肥やし

kj	きや kja	kji	きゅ kju	kje	きよ kjo
	わきや wakja 私たち		きゅーしが kjuueiga 来るが		
g	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
	がん gan そう	ぎーさぬ giisanu ～そうな	しぐとう eigutu 仕事	じょーきげん zookigen 上機嫌	ごくらく gokuraku 極楽
gj	ぎや gja	gji	ぎゅ gju	gje	ぎよ gjo
	ぎゃー gjaa カヤ (植物)				
s	さ sa	すい si	す su	せ se	そ so
	さいご saigo 最後		すば suba そば (傍、側)		そー soo 竿
e	しゃ ea	し ei	しゅ eu	しえ ee	しよ eo
	しゃー caa 下、舌	しー eii 縁 (へり)	しゅーき euuki ごちそう	あくしえ akuce 退屈	
z	ざ za	ずい zi	ず zu	ぜ ze	ぞ zo
	はんざし hanzaei 座敷を庭に延 長したもの		うりずんまーみ urizummaami うりずん豆		
z	じゃ za	じ zi	じゅ zu	じえ ze	じよ zo
	じゃま zama 邪魔	いじ izi 行き	うじゅる uzuru 野菜	なーじえ naaze 無いか	にじよさい nizosai かわいそうに
t	た ta	てい ti	とう tu	て te	と to
	たーうしゃぎ taaueagi すました様子	ていだ tida 太陽	とうびやがたん tubjagatan 飛び散った	はて hate 畑	とー too 蛸
tj	てや tja	tji	てゅ tju	tje	てよ tjo
d	だ da	でい di	どう du	で de	ど do
	うだ uda どこ	まんでい mandi たくさん	むどうたん mudutan 戻った	でーじょーぶ deezoobu 大丈夫	=どー =doo =よ
dj	でや dja	dji	でゅ dju	dje	でよ djo
	=でや =dja =のだ				=でよ =djo =だよ

ts	つあ tsa	つい tsi	つ tsu あいさつ aisatsu あいさつ	つえ tse	つお tso
te	ちや tea みちや mitea 土	ち tei ちら teira 顔	ちゅ teu ちゅー teuu 人	ちえ tee	ちよ teo ちよーねー teoonee 少し
n	な na なま nama 今	ni	ぬ nu ぬー nuu 何	ね ne ねま nema 寝床	の no のーぎー noogii のこぎり
ɲ	にや ɲa しらにや ɲiraɲa しないと	に ɲi にじよさい ɲizosai かわいそうに	にゅ ɲu	にえ ɲe	によ ɲo
n'	'な n'a 'なーちや n'aatea 明日	n'i	'ぬ n'u	'ね n'e 'ねー n'ee 少し	'の n'o
ɲ'	'にや ɲ'a 'にやーとらん ɲ'aatun 玉城(集落名)	'に ɲ'i	'にゅ ɲ'u	'にえ ɲ'e	'によ ɲ'o
h	は ha はぎ hagi 足	hi	ほう hu	へ he へーさ heesa 早く	ほ ho ほー hoo 肌
ç	ひゃ ça ひゃー çaa 坂	ひ çi ひんび çimbi 毎日	ひゅ çu ひゅー çuu 今日	ひえ çe ひえー çee 蠅	ひよ ço ひよー çoo 上平川 (集落名)
ɸ	ふわ ɸa ふあー ɸaa 葉	ふい ɸi	ふɸu ふい ɸui 声	ふえ ɸe	ふお ɸo
ɸj	ふゃ ɸja	ɸji	ふゅ ɸju	ɸje	ふよ ɸj
p	ぱ pa パチーパチ ⁸ pateipatei パチパチ	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po さんぽ sampo ウズラ

⁸ オノマトペはカタカナで表記する。

pj	ぴや pja	pji	ぴゅ pju	pje	ぴよ pjo
b	ば ba すば suba そば (傍,側)	び bi ひんび çimbi 毎日	ぶ bu ちぶる teiburu 頭	べ be =んたべ =ntabe =まで	ぼ bo
bj	びや bja びゃー bjaa ニラ	bji	びゅ bju	bje	びよ bjo
m	ま ma まんでい mandi たくさん	み mi みー mii 実	む mu むーる muuru みんな	め me めー mee 前	も mo もーきゅん mookijun 儲ける
mj	みや mja きちみゃー kiteimjaa 聞いてみよう	mji	みゅ mju たるみゅん tarumjun 頼む	mje	みよ mjo
m'	'ま m'a 'まー m'aa そこ	'み m'i	'む m'u 'むいのこし m'uinokoci 思い残し	'め m'e	'も m'o 'もーり m'oori ようこそ
m'j	'みや m'ja 'みゃー m'jaa 猫	m'ji	'みゅ m'ju 'みゅん m'jun 思うこと	'みえ m'je	'みよ m'jo
j	や ja やわらたまー ぬ jawaratamaanu 柔らかい	い` ji い`る jiru 夜	ゆ ju ゆくわ jukwa 良い	いえ je いえー jee 祝い	よ jo よー joo そっと、じっと
j'	'や j'a	'い` j'i	'ゆ` j'u 'ゆー j'uu 魚	'いえ j'e	'よ` j'o 'よー j'oo ほら穴
r	ら ra ちら teira 顔	り ri ふり φuri これ	る ru たる taru 誰	れ re	ろ ro みへでいろ mihediro ありがとう
rj	りや rja なりや narja なれば	rji	りゅ rju	rje	りよ rjo

w	わ wa わぬ wanu 私	うい wi	をう wu をうらどうたし wuradutaei 叫んでいたの	うえ we	うお wo
w'	'わ w'a 'わー w'aa 豚	'うい w'i	'う w'u	'うえ w'e	'うお w'o
etc.	くわ kwa くわんきや kwaŋkja 子どもたち	ん m~n~ŋ~N いんが jinga 男	ーVV むーる muuru みんな	っ CC	

4 言語資料

ひょーむに母語話者（1957年生）による創作物語「みちやぬ ふい（土の 声）」全文を言語資料として提示する。接語（付属語）境界を「=」、複合語境界を「+」で表示し、(20)で例示する五段の記述方法を用いる。1行目のひょーむに文と2行目の日本語文は、意訳や分かち書きも含め、絵本（松村ほか 2016）として出版した原文のままとする。ただし原文では登場人物の台詞を太字で表しているが、本稿では「」で表記する。

(20)	みちやぬ	ふい	←原文（ひょーむにひらがな表記）
	土の	声	←原文（日本語）
	みちや=ぬ	ふい	←分析形（ひらがな表記）
	mitca=nu	φui	←分析形（表層形発音記号）
	土=の	声	←語釈

物語要約

畑の野菜たちに御用聞きに行ったゆきぐわー（ゆきちゃん）は、種を残そうとする雑草のカタバミの願いを聞き入れ、引き抜くのを一日待つことにする。帰り際、日照り続きで苦しんでいた土の声を聞き、土の手入れをして帰る。翌日カタバミを引き抜きに行くと…。

[1]	あくしえ	しゅんどー
	たいくつだなあ	
	あくしえ	しゅん=どー
	akuce	εun=doo
	退屈	する=よ

- [2] ひゅーわ ぬーむ しゅーぬ くとぅ なん
 きょうは なにも することがない
 ひゅー=わ ぬー=む しゅーぬ くとぅ なん
 ɕuu=wa nuu=mu euunu kutu nan
 今日=は 何=も する こと ない
- [3] はてち いじ ぬーか しゅーぬ くとぅ なんか きちみゃー
 はたけに 行って なにか おてつだいすることが ないか きいてみよう
 はて=ち いじ ぬー=か しゅーぬ くとぅ なん=か きち みゃー
 hate=tei izi nuu=ka euunu kutu nan=ka kitei mjaa
 畑=に 行って 何=か する こと ない=か 聞いてみよう
- [4] うじゅるち ふい けーたん
 やさいに こえを かけた
 うじゅる=ち ふい けーたん
 uzuru=tei ɸui keetan
 野菜=に 声 かけた
- [5] 「むーる ぬーか しゅーぬ くとぅ なーじえ」
 「こんにちは なにか おてつだい しましょうか」
 むーる ぬー=か しゅーぬ くとぅ なーじえ
 muuru nuu=ka euunu kutu naaze
 みんな 何=か する こと ないか
- [6] たーうしゃぎ しー たるむ ひんと しらん
 ツンとすまして だれも へんじをしてくれない
 たーうしゃぎ しー たる=む ひんと しらん
 taaueagi eii taru=mu ɕinto eiran
 ツンとすました様子 して 誰=も 返答 しない
- [7] はてぬ しーぬ はなちむ ふい けーたん
 はたけのまわりの はなにも こえをかけた
 はて=ぬ しー=ぬ はな=ち=む ふい けーたん
 hate=nu eii=nu hana=tei=mu ɸui keetan
 畑=の 縁=の 花=に=も 声 かけた
- [8] 「ひゅーわ まーにおーとぅん」
 「きょうは まにあってまーす。」
 ひゅー=わ まーにおーとぅん
 ɕuu=wa maaniootun
 今日=は 間に合っている

- [9] むーる ほーらしゃぎーさぬ ちらし ひんと しー くりたん
 みんな ニコニコしながら こたえてくれた
 むーる ほーらしゃ ぎーさぬ ちら=し ひんと しー くりたん
 muuru hooraea giisanu teira=ei çinto eii kuritan
 みんな 嬉しい そうな 顔=で 返答 して くれた
- [10] くさちむ はなし しー みちちゃん
 くさにも はなしかけてみた
 くさ=ち=む はなし しー みちちゃん
 kusa=tei=mu hanaci eii mitcan
 草=に=も 話 して みた
- [11] 「どーか ‘なー ‘ねー ふぬ まま よー しみてい くりり」
 「おねがいだから もう すこし このまま そっと しておいて くれよ」
 どーか ‘なー ‘ねー ふぬ まま よー しみてい くりり
 dooka n'aa n'ee funu mama joo eimiti kuriri
 どうか もう 少し この まま そっと させて くれ
- [12] 「なまがでい しにぶしゃなん」
 「まだ しにたくないよ」
 なま=がでい しに+ぶしゃ なん
 nama=gadi eiji+buca nan
 まだ 死にたくない
- [13] なま さいごぬ はな さかさんでい しゅーぬ とくるとでや
 「いま さいごの はなを さかそうと しているところなんだ」
 なま さいご=ぬ はな さかさん=でい しゅーぬ とくると=でや
 nama saigo=nu hana sakasan=di euunu tukuru=dja
 今 最後=の 花 咲かそう=と する ところ=だ
- [14] なーちゃんたべ まちくりり
 「あしたまで まってくれよ」
 ‘なーちゃ=んたべ まち くりり
 n'aatea=ntabe matei kuriri
 明日=まで 待って くれ
- [15] 「わかたん わかたん」ち ちぶる なーでいたんきや
 「わかった わかった」と あたまを なでると
 わかたん わかたん=ち ちぶる なーでいたん=きや
 wakatan wakatan=tei teiburu naaditan=kja
 わかった わかった=と 頭 なでた=なら

- [16] パチーパチ シーくさぬ みーぬ とぅびやがたん
 パチパチ カタバミのみが げんきよく はじけとんだ
 パチーパチ シーくさ=ぬ みー=ぬ とぅびやがたん
 pateiipatei eiikusa=nu mii=nu tubjagatan
 パチパチ カタバミ=の 実=が 飛びちった
- [17] しぐとうしまちやぬ はなぬ わかりぬ あいさつぬ きかたん
 おしごとを すませた はなたちの さよならの あいさつが きこえた
 しぐとう しまちやぬ はな=ぬ わかり=ぬ あいさつ=ぬ きかたん
 eigutu eimatecanu hana=nu wakari=nu aisatsu=nu kikatan
 仕事 済ませた 花=の 別れ=の あいさつ=が 聞こえた
- [18] 「ひゅーわ たるむ あいて シー くりらじえ」
 「きょうは だれも あいて して くれぬのか」
 ひゅー=わ たる=む あいて シー くりらじえ
 çuu=wa taru=mu aite eii kuriraze
 今日=は 誰=も 相手 して くれぬか
- [19] 「みじらしゃなんやー」
 「つまらないの…」
 みじらしゃ なん=やー
 miziraea nan=jaa
 おもしろい ない=な
- [20] むどうらんでい しゃんきや うだかんでい あびゆぬ ふいぬ しゃん
 かえろうと すると どこかで よびとめる こえが した
 むどうらん=でい しゃん=きや うだ=か=んでい あびゆぬ ふい=ぬ しゃん
 muduran=di eaŋ=kja uda=ka=nti abijunu φui=nu eaŋ
 戻ろう=と したら どこ=か=で 呼ぶ 声=が した
- [21] うしゅ むこたしが うじゅるむ はなむ くさむ あていなぬ ほんかどう しゅーる
 ふりかえるが やさいも はなも くさも しらんぷりだ
 うしゅ むこた=しがうじゅる=む はな=む くさ=む あていなぬ ほんか=どうしゅーる
 ueu mukota=eiga uzuru=mu hana=mu kusa=mu atinanu honka=du euuru
 後ろ 向いた=が 野菜=も 花=も 草=も 知らない ふり=ぞ⁹ している
- [22] よー しゅーてい きー ちきてい きちみちやん
 じっと みみを すまして きいてみた
 よー しゅーてい きー ちきてい きち みちやん
 joo euuti kii teikiti kitei mitcan
 じっと して 気 つけて 聴いて みた

⁹ いわゆる焦点助詞=du の語釈は「これぞまさに」などの「=ぞ」とする。

[23] がん しゃんきや はぎぬ すばんてい ふいぬ しゃん

すると あしもとで こえがした

がん しゃんきや はぎ=ぬ すば=んてい ふい=ぬ しゃん

gan ɕaŋkja hagi=nu suba=nti ɸui=nu ɕan

そう したら 足=の そば=で 声=が した

[24] 「わぬでや わぬでや へーさ きー ちち くりりでや」

「わたしよ わたしよ はやく きづいてちょうだい」

わぬ=でや わぬ=でや へーさ きー ちち くりり=でや

wanu=dja wanu=dja heesa kii teitei kuriri=dja

私=だ 私=だ 早く 気 付いてくれ=だ

[25] わが がんし だりちきとうし わからじえ

「わたしが こんなに つかれきっているのが わからないの」

わ=が がんし だり+ちきとう=し わからじえ

wa=ga ganci dari+teikitu=ei wakaraze

私=が こんなに 疲れ=きっている=の わからないか

[26] しんがり ふいし をうらどうたしわ みちや やたん

しわがれごえで さけんでは つちだった

しんがり ふい=し をうらどうた=し=わ みちや やたん

ɕingari ɸui=ei wuraduta=ei=wa mitea jatan

しわがれ 声=で 叫んでいた=の=は 土 だった

[27] 「あべー うらどう やていな あべあべー がんしむ だりちきてい」

「あら あなただったの あらあら こんなに やつれてしまつて…」

あべー うら=どう やていな あべあべー がんし=む だり+ちきてい

abee ura=du jatina abeabee ganci=mu dari+teikiti

あらー あなた=ぞだったか あらあら こんなに=も 疲れ+きつて

[28] 「ひんび ていだぬ ていーちきとうんとう ほーぬ ありたさやー」

「まいにち カンカンでりだから おはだが あれたのね」

ひんび ていだ=ぬ ていー+ちきとうんとう ほー=ぬ ありたさ=やー

ɕimbi tida=nu tii+teikituntu hoo=nu aritasa=jaa

毎日 太陽=が 照り+つけているから 肌=が 荒れた=ね

[29] 「にじょさい… しまだな あたんやー」

「かわいそうに… ごめんなさいね」

にじょさい しまだな あたん=やー

nizosai cimadana atan=jaa

かわいそうに すまないで あつた=ね

[30] 「きー ちかだな あたんどー」

「きがつかなかったわ」

きー ちかだな あたん=どー

kii teikadana atan=doo

気 付かないで あった=よ

[31] 「すぐ ほーぬ ていあて しらにや ならん」

「すぐ おはだの おていれを しなきゃ」

すぐ ほー=ぬ ていあてい しらにや ならん

sugu hoo=nu tiati eirapa naran

すぐ 肌=の 手当て しないと ならない

[32] 「さーさ ほー むまー」

「さあ マッサージを はじめましょう」

さーさ ほー むまー

saasa hoo mumaa

さあ 肌 揉もう

[33] てーねーに みちやむみ ちじきたん

ていねいに つちの マッサージを つづけた

てーねー=に みちや+むみ ちじきたん

teenee=ni mitca+mumi teizikitan

丁寧=に 土+揉み 続けた

[34] がん しゃんきゃ フクフク やわらたまーぬ ほー なたん

すると やわらかい おはだに なった

がん しゃん=きゃ フクフク やわらたまーぬ ほー なたん

gan ean=kja φukuφuku jawaratamaanu hoo natan

そう した=なら フクフク 柔らかい 肌 なった

[35] みちやわ ほーらしゃぎーさぬ ちら なてい ふいにむ はりぬ むどうたん

つちは ニコニコした かおに なり こえにも げんきが もどった

みちや=わ ほーらしゃ ぎーさぬ ちら なてい ふい=に=む はり=ぬ むどうたん

mitea=wa hooraea giisanu teira nati φui=ni=mu hari=nu mudutan

土=は 嬉しい そうな 顔 なって 声=に=も 張り=が 戻った

[36] 「あー ごくらくどー」

「あー きもちいいわー」

あー ごくらく=どー

aa gokuraku=doo

あー 極楽=よ

[37] 「いきういぬ いじてい きちやんどー」

「いきかえったわー」

いきうい=ぬ いじてい きちやん=どー

ikiui=nu iziti kitean=doo

勢い=が 出て 来た=よ

[38] 「ふりし また ちゃんとう しぐとう しらゆんわー」

「これで また ちゃんとおしごとが できるわ」

ふり=し また ちゃんとう しぐとう しらゆん=わー

φuri=ei mata teantu eigutu eirajun=waa

これ=で また ちゃんと 仕事 できる=わ

[39] うぬ いる うーあみぬ ふたん

その よる おおあめが ふった

うぬ いる うー+あみ=ぬ ふたん

unu jiru uu+ami=nu φutan

その 夜 大雨=が 降った

[40] ちぎぬ あさ むーるち あいさつ しんぎや いじゃんきや

つぎの あさ みんなに あいさつを しに いったら

ちぎ=ぬ あさ むーる=ち あいさつ し=んぎや いじゃん=きや

teigi=nu asa muuru=tei aisatsu ei=ngja izan=kja

次=の 朝 みんな=に あいさつ し=に 行く=と

[41] うじゆるむ はなむ くさむ じょーきげんぬ ちら しゅーたん

やさいも はなも くさも きもちよさそうな かおを していた

うじゆる=む はな=む くさ=む じょーきげん=ぬ ちら しゅーたん

uzuru=mu hana=mu kusa=mu zookigen=nu teira euutan

野菜=も 花=も 草=も 上機嫌=の 顔 していた

[42] しーくさぬ すばち いじゃん

カタバミの そばにいった

しーくさ=ぬ すば=ち いじゃん

eiikusa=nu suba=tei izan

カタバミ=の そば=に 行った

[43] 「わー しぐとうわ しだんどー」

「ぼくの しごとは おわったよ」

わー しぐとう=わ しだん=どー

waa eigutu=wa eidan=doo

私 仕事=は 済んだ=よ

- [44] 「なー ぬーむ ‘むいぬこしわ なんどー」
 「もう なにも おもいのこすことは ないな」
 ‘なー ぬー=む ‘むいぬこし=わ なん=どー
 n'aa nuu=mu m'uinukoci=wa nan=doo
 もう 何=も 思い残し=は ない=よ
- [45] 「いちんたべむ むーるが じゃま なゆんきや いかんとう たるまー」
 「いつまでも みんなの じゃまに なったら いけないから たのむよ」
 いち=んたべ=む むーる=が じゃま なゆん=きや いかん=とう たるまー
 itei=ntabe=mu muuru=ga zama najun=kja ikan=tu tarumaa
 いつ=まで=も みんな=の 邪魔 なる=と いけない=から 頼もう
- [46] 「うぬうち わー くわんきやが じゃま しんぎや きゅーしが たるみゆんど」
 「そのうち ぼくの こどもたちが じゃましに くるだろうが なかよくしてくれよ」
 うぬ うち わー くわ=んきや=が じゃま し=んぎや きゅー=しが たるみゆん=ど
 unu utei waa kwa=ŋkja=ga zama ei=ŋgja kjuu=eiga tarumjun=do
 その うち 私 子ども=たちが 邪魔 し=に 来る=が 頼む=よ
- [47] はら きみたぬ いんがぬ ふいぬ しゃん
 かくごを きめた おとこの こえがした
 はら きみたぬ いんが=ぬ ふい=ぬ しゃん
 hara kimitanu jinga=nu fui=nu ean
 腹 決めた 男=の 声=が した
- [48] しーくさ はがいぬじゃんきや うりずんまーみぬ ちら いじゃちゃん
 カタバミを ひきぬいたら うりずんまめが かおを だした
 しーくさ はがい+ぬじゃん=きや うりずんまーみ=ぬ ちら いじゃちゃん
 eiikusa hagai+nuzan=kja urizunmaami=nu teira izatean
 カタバミ 引き+抜いた=なら うりずん豆=が 顔 出した
- [49] 「みへでいろどー ふりし よーやく わきやちむ ていだぬ あたゆんどー」
 「ありがとう これで ようやく ぼくたちにも おひさまが あたるよ」
 みへでいろ=どー ふり=し よーやく わきや=ち=む ていだ=ぬ あたゆん=どー
 mihediro=doo furi=ei joojaku wakja=tei=mu tida=nu atajun=doo
 ありがとう=よ これ=で ようやく 私たち=に=も 太陽=が 当たる=よ
- [50] 「なまから きばてい あき なりや まんでい みー ちきゆんどー」
 「これから がんばって あきになったら いっぱい みを つけるぞ」
 なま=から きばてい あき なりや まんでい みー ちきゆん=どー
 nama=kara kibati aki narja mandi mii teikijun=doo
 今=から がんばって秋 なれば たくさん 実 付ける=よ

[51] 「‘なー わきや くとわ しゅわ しーぐりなんどー」

「もう ぼくたちの ことは しんぱいしないでいいよ」

‘なー わきや くと=わ しゅわ しーぐりなん=どー

n'aa wakja kutu=wa euwa eii + gurinan=doo

もう 私たち こと=は 心配 し+なくていい=よ

[52] 「わきや しゅーきわ ていだどう やんとう ‘なー でーじょーぶどや」

「ぼくたちの ごちそうは おひさまだから もう だいじょうぶだよ」

わきや しゅーき=わ ていだ=どう やん=とう ‘なー でーじょーぶ=どや

wakja ejuuki=wa tida=du jan=tu n'aa deezoobu=doja

私たち ごちそう=は 太陽=ぞ だ=から もう 大丈夫=だよ

[53] 「うぬうちに しーくさぬ くわんきやが じゃま しんぎゃ きゅーぬ はじ やしが」

「そのうち カタバミの こどもたちが じゃまに くるだろうが」

うぬ うち=に しーくさ=ぬ くわ=んきや=が じゃま しん=ぎゃ きゅーぬ はじ や=しが

unu utei=ni eiikusa=nu kwa=ηkja=ga zama eiη=gja kjuunu hazi ja=eiga

その うち=に カタバミ=の 子ども=たち=が 邪魔 し=に 来る はず だ=が

[54] 「うぬ くるにわ ‘なーひ ふでいとうんとう」

「そのころには ぼくたちは もっと おおきくなっているから」

うぬ くる=に=わ ‘なーひ ふでいとうん=とう

unu kuru=ni=wa n'aaçi φuditun=tu

その 頃=に=は もっと 育っている=から

[55] 「うぬ くわんきやとうむ ゆくわあぐ しー いかゆも」

「そのこたちとも なかよくやっっていけるさ」

うぬ くわ=んきや=とう=む ゆくわ あぐ しー いかゆ=も

unu kwa=ηka=tu=mu jukwa agu eii ikaju=mo

その 子ども=たち=と=も 良い 友だち して行ける=よ

[56] しぐとう しまちゃぬ しーくさわ ゆりぬはかに うちゃん

おしごとを すませた カタバミは ゆりのはかに おいた

しぐとう しまちゃぬ しーくさ=わ ゆり=ぬ はか=に うちゃん

eigutu eimateanu eiikusa=wa juri=nu haka=ni utean

仕事 済ませた カタバミ=は ユリ=の 墓=に 置いた

[57] ‘まーわ はなぬ みちやち むどうゆぬ ねまどう やーる

そこは くさや はなが つちに かえる ねどこだ

‘まー=わ はな=ぬ みちや=ち むどうゆぬ ねま=どう やーる

m'aa=wa hana=nu mitca=tei mudujunu nema=du jaaru

そこ=は 花=が 土=に 戻る 寝床=ぞ だ

参考文献

- 上野善道（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130. 1-42.
- 小川晋史（2015）『琉球のことばの書き方』東京：くろしお出版.
- 真田信治・奥間透（1986）「沖永良部島における口蓋化音の分布域」『琉球の方言』8. 法政大学沖縄言語研究所.
- 平山輝男（1986）『奄美方言基礎語彙の研究』.角川書店.
- 松村雪枝・山田真寛・横山（徳永）晶子・元木環・浅川友里江（2016）『みちやぬ ふい』ていんがまシリーズ1 みちやぬ ふい. 京都：言語復興の港.
- 山田真寛（2015）「島民による琉球与那国語の自然談話資料蓄積プロジェクト」『日本方言研究会第100回大会発表原稿集』甲南大学.
- UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages.（2003）“Language Vitality and Endangerment.” <http://www.unesco.org/new/en/culture/themes/endangered-languages/language-vitality/>（最終アクセス日 2016年2月28日）
- van der Lubbe, Gijs and Akiko Tokunaga.（2015）“Okinoerabu grammar.” In Heinrich, Patrick, Shimoji, Michinori and Shinsho Miyara(eds.) Handbook of Ryukyuan Languages. Berlin: De Gruyter Mouton.

**書評: Alexandra Y. Aikhenvald *The Art of Grammar —A Practical Guide—*
Oxford: Oxford University Press, 2015, xxiii+380pp.**

林 範彦

神戸市外国語大学・jinozu@yahoo.co.jp

キーワード：フィールド言語学、参照文法、言語調査法、文法執筆

「現地調査は楽しい。なにしろ自分がノートに書き取っていることの殆どすべてが今まで世に知られていなかった新情報なのである。しかし本当の苦勞は、帰国後それらの資料を整理し、まとめ、発表までもって行く段階にある。年を単位のつらい日々には堪えねばならぬ。」(土田 1978: 36)

1 はじめに

本稿は Aikhenvald 氏¹の最新刊の著作である *The Art of Grammar —A Practical Guide—*² の書評である。本書は同氏の豊富な現地調査に基づいた言語研究と 30 年に渡る参照文法の読破に裏打ちされた類型論的分析の経験則の集大成と言える。端的に述べれば、言語研究者がいかにしてよい文法を記述し、また他の参照文法をいかにして読むべきかをまとめた書籍であると言えよう。本稿ではこれから現地調査に基づく言語学(通称「フィールド言語学」)を始める人だけでなく、これまでいくぶん経験を積んだ研究者にとっても有用な 1 冊であることを述べたい。

本稿の構成は以下のとおりである。まず 2 節では本書の各章の概要および要点を簡潔にまとめる。そして 3 節で 2 節での内容をふまえ、本書の特長と問題点の指摘を行う。4 節で(特にこれから始めようとする)フィールド言語学徒に対する本書の利用法と今後読み進めるべき関連文献を提示する。5 節で本稿を締めくくる。

2 本書の構成

本書は全部で xxiii + 380 ページである。本文に入る前に、“Preamble (前置き)”として本書で書かれていることを簡潔に述べている。その後、15 章に渡る本文では、いかにして明解で完成度の高い個別言語の文法を書くべきかが解説されている。巻末 (pp.317–331)には本書に関連する言語学の術語 334 項目の簡明な説明が付されている。本文を読む際には適宜参照しておくべ

¹ 著者の研究に関する情報は現在の所属先である James Cook University のウェブサイトでも閲覧できる。

<https://research.jcu.edu.au/portfolio/alexandra.aikhenvald> (2016 年 1 月 13 日閲覧)

² 本書の邦題をつけるとすれば『文法を書くための技術 (こつ) —実践的な手引書—』とでもなるだろう。

きだろう³。

本文の章立ては表 1 のとおりである。

表 1 本書の章立て

第 1 章	Introduction: to write a grammar (序章: 文法を書くには)	pp.1–29
第 2 章	A language and its setting (言語とそれを取り巻く状況)	pp.30–45
第 3 章	Basics (文法記述の基礎)	pp.46–58
第 4 章	Sounds and their functions (音とその機能)	pp.59–80
第 5 章	Word classes (語類)	pp.81–102
第 6 章	Nouns (名詞)	pp.103–128
第 7 章	Verbs (動詞)	pp.129–156
第 8 章	Adjectives and adverbs (形容詞と副詞)	pp.157–170
第 9 章	Closed classes (閉じた語類)	pp.171–204
第 10 章	Who does what to whom: grammatical relations (誰が誰に何をするか — 文法関係)	pp.205–224
第 11 章	Clause and sentence types (節と文のタイプ)	pp.225–244
第 12 章	Complex sentences and clause linking (複文と節連結)	pp.245–266
第 13 章	Language in context (文脈における言語)	pp.267–285
第 14 章	Why is a language the way it is? (言語がかくの如くある理由)	pp.286–305
第 15 章	How to create a grammar and how to read one (参照文法の書き方と読み方)	pp.306–316

各章はフラットな形で書かれているが、実質的には 4 つのカテゴリーに分割できるだろう。すなわち、表 2 のようにまとめられる。

以下では、この 4 つのカテゴリーの概要を述べる。

³ 言語学の術語は研究者によって異なった意味で用いられることもしばしば見受けられる。英語で書かれた言語学の教科書には巻末に同様の術語集を掲載しているものも多い (Payne 2006 など)。しかし、そのような教科書の術語説明は簡便なものにすぎない。よって、更に詳しい説明を求める場合は言語学辞典を適宜参照すべきであろう。Crystal (2008), 亀井ほか (1996), 斎藤ほか (2015) などは参考となる。亀井ほか (1996) は特に構造主義言語学や言語学史に強く、詳細な記述に定評がある。一方、Crystal (2008) や斎藤ほか (2015) は最新の理論言語学の用語についても触れており、コンパクトな説明は初学者に特に適しているだろう。

表 2 本文部分のカテゴリー

[1]	文法を書くために必要な知識や心得	第 1 章・第 3 章
[2]	文法に盛り込まれる内容	第 2 章および第 4 章から第 13 章まで
[3]	言語の歴史的な側面の利用	第 14 章
[4]	文法のより良い作り方と読み方	第 15 章

2.1 文法を書くために必要な知識や心得

現地調査を通じて、個別言語の文法を書くためには、ある一定程度の知識や心得が必要となる。本書では第 1 章と第 3 章で簡単にまとめられている。

第 1 章では適切なグロスの振り方やわかりやすい用語の使用、説明順序への配慮、現地調査の方法論など、言語調査を行い、文法執筆に入る前の準備段階について整理されている。

第 3 章では言語学の基本的な前提知識を最小限に記述している。音体系・語の単位・屈折と派生の区別・語類の区別の方法・句と節の定義など、言語学の初歩的でありながら、誤りやすい事項を丁寧に整理している。

2.2 文法に盛り込まれる内容

ある個別言語の文法が 1 つの参照文法として機能するためには、包括性がまずは求められることとなろう。本書の第 2 章および第 4 章から第 13 章では、何が盛り込まれるべきかが解説されている。

第 2 章では、執筆対象となる言語の、とりわけ言語外的知識や背景について、その調査と記述の重要性を説いている。対象となる言語は、どれくらいの話者人口をもち、話者たちはどのような生態環境で暮らし、どのような社会構造をもっているのかなどについて、読者はまず示される必要がある。これ以外にも、言語構造の基本的な類型、すなわち、形態論的な類型や語順、音韻体系の概要なども、文法の中心に入る前に示しておくべきだと述べている。

第 4 章から第 12 章までは表 1 に示したタイトルからも推測できるように、言語構造の中核的部分において、特に記述されるべきことを整理している。著者の Aikhenvald 氏は世界の諸言語に対して幅広い見識を有している。しかし、やはり専門とするアマゾン地域の諸言語と、現在所属する大学のあるオーストラリアの諸言語の事例から具体的な知見が披露されていることが多い。

第 4 章では音素分析とともに、文法内で音素をどのように提示すべきかを述べている。子音では調音点の表示において受動器官(両唇音や歯茎音など)のみを提示している場合が多い。本書では可動器官(舌尖など)も合わせて記述すべきであるとしている。またこの章では区別が困難な接辞(affix)と倚辞(clitic)の区別についてもまとめているので、初学者には特に有用である。

第5章では語類の記述についての注意点が整理してある。各語類は一般的に意味と相関するため、その設定基準に意味を用いたくもなる。しかし、本書では形態統語的基準を中心に据えるべきであると明言している。また、本章では名詞・動詞・形容詞の各語類の下位分類についても概説している。

第6章では名詞句の記述に関する留意点が整理してある。性・数や名詞クラス、類別詞の問題をはじめ、所有構文・格標示・派生と複合についても言及している。特に数と類別詞の記述に注力されていることが伺える。

第7章では動詞およびその周辺事項の記述に関する問題を扱っている。動詞にまつわる事柄としては、テンス・アスペクト・ムードに始まり、モダリティや証拠性 (evidentiality) の問題⁴、方向や移動に関わること⁵、結合価の増減 (valency-changing derivation)、動詞連続、さらに一部の言語に見られる名詞抱合に至るまで多岐にわたる。特にデータ観察の際に注意が必要となる、受動・逆受動・使役・適用態については、その特徴を **Box 7.1** から **Box 7.4** でそれぞれ整理している。動詞に関わる問題は内容も豊富なため、文法執筆にあたっては特別な章を設けてもよい言語もあると述べている。また動詞的な語彙と動詞句の構造に関する言及は参照文法において重要であるとする。

第8章では形容詞と副詞の記述に関する留意点と形容詞・副詞の派生法について整理してある。形容詞は名詞あるいは動詞と形態統語的に類似した特徴を持っているため、それぞれの統語範疇との区別が難しい場合が多い。形容詞は特定の意味範疇に集中的に分布することもよく知られている。しかし、あくまでも統語的機能 (名詞修飾を行う・属性叙述を行う) にそって形容詞を他の語類と切り分けることが肝要である。他方、副詞は形容詞以上に文法的な規定が難しいことが多い。多くは動詞を修飾する。また特定の意味範疇 (様態・類似・評価・程度・位置・時間など) に集中的に分布することを述べている。

第9章では閉じた集合をなす語類として、人称代名詞・指示詞・冠詞・疑問詞・量化詞などの記述に関する留意点が整理してある。各言語において閉じた集合をなす語類の種類は多様であろう。本章末の表 **9.16** では著者の調査しているマナンブ語の閉じた集合をなす語類の一覧を、名詞句の主要部となりうるか・前置/後置修飾のいずれなのか・格標示が行えるかなどの基準に基づいて整理している。また、「小辞 (particle)」という用語は様々な種類の機能辞を指示する可能性を含むため、抑制的に用いられるべきであると述べている。

第10章では項と格標示に関する問題を概説している。本書では統語的な核となる項として S (自動詞の主語), A (他動詞の主語), O (他動詞の目的語) を、周辺的な要素として E (拡張された項) を認める。これらと格標示体系との関与のあり方 (対格言語・能格言語の問題や非典型格標示の問題など)、またコピュラ節や無動詞節の項とのつながりを記述する。また S, A, O は意味役割 (動作主・被動者など) と 1対1 に対応しないため、混同しないように強く警告している⁶。

⁴ 本書では ‘non-spatial setting’ として整理している。

⁵ 本書では ‘spatial setting’ として整理している。‘non-spatial setting’ に比して、簡潔な記述におさえられている。

⁶ 意味役割・格・情報構造・統語機能のレベルの区別が重要であることは角田 (2010: 177–239) でも

第 11 章では節と文のタイプについて、節内部の構造・節の統語的機能・語用論的機能と発話行為の関連性などから整理している。コピュラ節や無動詞節は特にその内部構造に着目し、存在・所在・所有・属性・同定などの意味的関係性に注意すべきである。また統語的機能においては主節と従属節の違いに十分留意すべきである。そして陳述・疑問・命令などの発話行為に関係する文のタイプの記述では、動詞の形態や語順、イントネーションなどによって区別されることも心に留めておきたい。

第 12 章では複雑な文と節連結の記述の問題を扱っている。重文の記述に始まり、関係節や補文の問題、交替指示 (switch reference)、軸項 (pivot) 構造や節の相互関係の記述の問題を概説している。特に 1 文を構成する複数の節の意味的関係を記述するには 2 種類の方法が考えられる。すなわち、意味からはじめて、それに対応する節の形式はどのようなになっているのかを検証する方法と、節を構成する形式を整理するところからはじめて、その形式がどのような意味タイプに対応するのかを考察する方法である。著者は後者が好ましいと述べている。

第 13 章は文法と文脈の関係性について言及している。話題や焦点といった情報構造の問題を整理し、文がどのような形で語り (narrative) を構成するために結び付けられるのか、コミュニケーションの有り様や発話の型 (speech formulae) などの問題をここでは論じている。また、各言語話者のもつ文化に応じて、語彙に様々な使い分けがなされることもある。参照文法ではそのような語彙の問題についても詳述するのが望ましいとする。

2.3 言語の歴史的な側面の利用

第 14 章は本書で唯一歴史的な側面について言及している。系統を同じくする言語間の共通する特徴や、借用をはじめとする言語接触の問題などについてである。しかし、それはあくまで共時的な記述を行うための説明原理の 1 つとして用いているにすぎない。本書では対象言語と関連言語の祖語の再建を促すという意味ではなく、むしろ対象言語がなぜ現在のような状態に落ち着いているのかを説明するための道具として通時的理解を利用せよと促しているのである。またこの章の後半では話者コミュニティの住む生態環境や社会構造に関する学術的配慮が参照文法の説明にも寄与すると述べている。

2.4 文法のより良い作り方と読み方

第 15 章は最終章として、フィールド言語学徒が個別に調べてまとめ上げた文法現象などを参照文法の形としてどのように盛り込んでいくのか、また他の研究者が書いた参照文法をどのように読むべきかを解説している。著者はここで、すべての文法現象について参照文法が説明できるとは限らないが、「ある形式が他と『自由に』交替可能である」⁷と述べることは最後の手

強調されている。

⁷ フィールド調査を行っているときよく遭遇するのが、「A という表現は B という表現と同じ意味だ」とか「これは A と言っても良いし、B と言っても良い」というコンサルタントの助言である。当該の言語をよく知らない調査者は非常に困惑する。基本的な前提として形式が異なるのは意味機能の違いに依拠するという考えがあるからだが、本書でも述べられているように、時に「男ことば」「女

段とすべきだ、と主張している。また多くの小節を含む長い章よりも、個別的なテーマにしたがった章を多く配置するほうがよいとする。他方、文法説明に必要な類例は最小限にとどめるべきで、何十も例を挙げて冗長な解説をするのは好ましくないとしている。

そして参照文法は統合的なものであり、読者はよくやりがちな拾い読みではなく、最初から最後まで一貫して読むことがやはり求められるとも述べている。

3 本書の特長と問題点

3.1 手始めに何を調べるべきかを明確に伝えている

日本の大学では「言語調査法」や「フィールドメソッド」を教える講座は非常に少ない。アメリカの大学のように言語学科の1つの大きな役割として言語調査法の教育を掲げているのは大きく異なる。そのため、特に日本で教育を受ける言語学徒やこれまで言語学の教育を受けてこなかった人々に対し、本書はフィールド言語学の目標に向けてなすべきこと、方法論の全般を概説する点で、大きく貢献する。

フィールド言語学に関連する書籍は理論言語学のそれには比すべくもないが、いくつか存在する。その代表例としては表3のものを挙げられよう。

表3 フィールド言語学に関連書籍

書名	図1での略号
Burling (1984 [2000])	LFL
Bouquiaux and Thomas (1992)	SDUL
Chelliah and de Reuse (2011)	HDLF
Dixon (2010a)	BLT1
Dixon (2010b)	BLT2
Dixon (2012)	BLT3
Gippert (et al. 2006)	ELD
Newman and Ratliff (2001)	LF
Payne (1997)	DM
Payne (2006)	ELS

本書(図1では‘AG’と省略)を含め、評者がこれらの関連書籍の相関性を図示化したものが以下の図1となる。なお、略号は書名の頭文字を利用して付けてある。

どのような書物にも大きなテーマが存在し、そのテーマと関連する周辺的な部分は副次的に扱われるものである。表3に掲げられたフィールド言語学関連書籍もそれぞれのテーマにしたがって読み進めるべきで、各々に記述の強弱が見受けられる。ただし、図1の相関関係と本稿

ことば」や世代差などの社会的要因が絡む場合がある。同一意味範疇で複数の形式が交替可能であるような助言を受けた場合、可能な限りその差異の要因を探ることが求められよう。

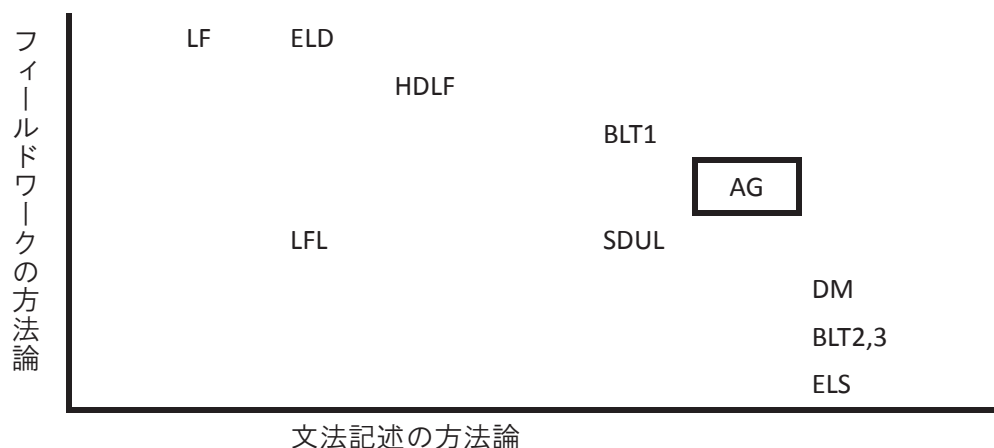


図1 フィールド言語学関連書籍の相関関係

での評価はあくまで評者の主観的な印象を元に述べられていることを了解されたい。

まずここに掲げた11冊を「フィールドワークの方法論」と「文法記述の方法論」の2つの観点から整理した。縦軸の「フィールドワークの方法論」では、上に行けば行くほどその方法論の記述(エリシテーションやテキスト採集の方法や、現地コミュニティとのつきあい方など)が多くなり、下の位置ではフィールドワークの方法論の記述は少なくなる、ということを示している。横軸の「文法記述の方法論」も同様に、右に行けば行くほど文法記述の方法論(参照文法に盛り込む内容、具体的には音韻論や形態統語論の記述すべきテーマなど)が多く示され、左に行けば行くほど少なくなることを、表している。例えば、LFは文法記述の方法論には強くないものの、フィールドワークの方法論には非常に強い。一方、ELSは文法記述の方法論を大いに展開しているが、フィールドワークの方法論はほぼ説明がなされていない。

本書は黒枠で囲ったAGで表示している。評者の印象ではフィールドワークの方法論についてLFL, SDUL, DMなどよりも詳しく記述しながらも、全体的には文法記述の方法論をコンパクトに、しかしわかり易く丁寧に記述し、横軸では大きく右に配置され则认为している。本書の読了後は、文法記述の方法論についてはDMやBLT2,3を、フィールドワークの方法論についてはBLT1あるいはLFやELDを読むと、本書の内容を十分に補完できるだろう。

3.2 分析で迷いがちな部分についても明快かつ簡潔に解説

言語学の初学者をはじめ、多くのフィールド言語学徒は音韻論の分析においても、形態統語的な分析においても様々なデータに困惑させられる。例えば、ある音と類似する特徴をもつ別の音が音韻的に対立する関係にあるのかや、音韻語と文法語の違い、形態素の境界、格標示と項構造の問題、テンス・アスペクト・ムードや証拠性、さらにはボイスなどの文法現象の分析で当該言語がどのような特徴を真に有しているのか、一見して迷うことがある。

本書ではしばしば判断に迷うような派生と屈折の違い(表3.2)や接辞と倚辞の区別の仕方(表4.6)などについて表にして整理してある。分析の際のチェックリストとしてこのような整理は

大いに役立つだろう。

もちろん詳しい解説は **3.1** にも挙げた Dixon (2010a, b, 2012) などを参照すればよい。言語学の初学者は他書をやはり参照すべきである。他方、すでに経験豊富なフィールド言語学徒や基礎的な言語学のコースを修了した博士課程の学生などは知識の整理や確認のために本書を用いることは大いに役立つだろう。本書では分析における注意点⁸を含めて、類型論的な情報がコンパクトにまとめられている。そのため、簡単に重要事項を確認するには本書は非常に有用である。

3.3 各言語データの出典が見にくいことと表記の一貫性

特に第4章から第13章では多くの言語データについて、具体的な説明を加えている。ただし、それらの中には著者のオリジナルのデータではないものがある。それら著者が独自に収集したデータが出所でないものは各章末の **Notes and sources** (注と参照文献) を見なければならない。しかし、当の **Notes and sources** はデータのソースだけを載せているのではない。他に参照すべき文献もあわせて掲載している。よって、本書で引用された例のソースとの区別が一見してわかりづらい。データのソースについては、引用した箇所でも明示しておいたほうがわかりやすかったのではないかと思われる⁹。

データのソースの引用における問題の一例を挙げよう。**5.6** 節では形容詞の下位分類について述べている。その中で日本語には「屈折型の形容詞 (inflected adjectives) [イ形容詞に相当]」と「いわゆる『非屈折型』の形容詞 (so-called ‘uninflected’ adjectives) [ナ形容詞に相当]」があると説明している。そして、この説明のソースについて **Notes and sources** を見ると、日本語のソースについては一切言及していない。推奨文献としては Dixon (2004, 2010a, 2010b) が挙げられている。しかし、それは日本語のソースではない。実際にこの分析は Backhouse (2004) などに依拠していると推定されるが、本書には参考文献でも提示されていない。やはりソースの提示方法は改善すべきだろう。

またこれに関連して、データのソースや参照した文法が多様であるにも関わらず、ソースの表記法をそのまま本書でも採用して例を挙げているため、時として読者に誤解を与えかねない

⁸ いくつかの箇所で注意点 (WARNING あるいは TO REMEMBER) が強調されている。フィールド言語学の初学者だけでなく、経験者にとっても重要な箴言であるので、よく理解しておくべきだろう。以下、評者の整理を掲げる。

WARNING: 「意味役割と統語関係の区別の重要性」 (p.222)
 TO REMEMBER: 「すべての言語に記述すべき文法があること」 (p.5)
 「辞書とともに文法も現地コミュニティに喜ばれること」 (p.9)
 「類型的類似性と歴史的系統の区別の重要性」 (p.35)
 「自由な交替を抑制的に認めること」 (p.311) [脚注7も参照]

⁹ もちろん、多くの言語からデータを引用する際にこのようなやり方も便利な部分があるのかもしれない。実際、Dixon (2010a, b, 2012) でも本書と類似したやり方をとっている。しかし、Dixon (2010a, b, 2012) では多くの箇所でやはり一般的なソースの提示方法もっており、本書とやや異なると思われる。

事例も散見される。

例えば、本書では東南アジアの言語として Enfield (2007) のラオ語文法をしばしば引用している。本書でも p.273 に以下のような語彙が Enfield (2007: 166) のとおりに引用されている。

(1) *lèèn1* ‘run’, *nam∅-kòòn4* ‘CLASS.TERM:LIQUID-chunk’, *phùùn4* ‘floor’, *lèka∅* ‘LINKER’

(1) の語彙に見られる母音の /è//ò//ù/ は本書 4.2 節で引用されたユフップ (Yuhup) 語 [アマゾン地域; マク諸語、本書は Silva and Silva (2012) から引用] の例のように低声調の母音をあたかも指すように見える。しかし、実際にはこれは Enfield (2007) で独自に採用された表記法である。/è/ は /ɛ/ を、/ò/ は /o/ を、/ù/ は /u/ を表す。誤解を生まないためにも、表記をわかりやすく工夫しておくべきだろう。

3.4 音声学・音韻論の説明について

本書は第 4 章で、音声の記述に関する手順を示している。これは類書である Payne (1997, 2006) などと異なった優れた特徴と言える。音声学・音韻論は形態統語論の記述と分けて、独立に論じられることが多い。その点で多くの書籍でも単著にまとめられることが一般的である。本書は文法執筆においてどうしても避けられない分野として位置づけている点は重要なポイントだと考えられる。ただし、説明の順序や内容については若干の工夫があってもよかったですのではないかと思われる部分もある。

例えば、4.1.1 節の子音の記述では子音体系のサンプルを表 4.1 に示している。この表では閉鎖音系列において両唇音と歯茎音に無声無気音・無声有気音・有声無気音の 3 対立を有しているのに、軟口蓋音には無声無気音しかないことや、流音に /l, r, ɹ/ の 3 対立を見出している。もちろん、この表自体はあくまでサンプルであるため、類型論的に非常にいびつな体系でもよいとは言える。しかし、もう少し一般的な体系のものを出して説明しても良かっただろう。

また表 4.1 では /w/ を dorso-velar と labio-velar をまたぐ音と位置づけ、両唇音との近接性を重視して、両唇音の隣に配置している。この考え方自体は理にかなったものではある。ただし、両唇音の列全体を軟口蓋音の右隣に配置した表は非常に特異なもので、/w/ の位置づけを重く見過ぎた結果であると言わざるをえない。両唇音は一般的に表の左端に位置づけられることによって、調音器官の先頭をイメージできるようになっている。本書のような方法も確かに理解できる。しかし、表では一般的なものを載せ、本文の説明で「言語によっては両唇音を軟口蓋音の右隣に配置した表としてもよい」といった形で補っても良かったのではないだろうか。

説明の順序などについても一考の余地がある。

4.1.1 節の子音の箇所では、発声についても言及している。確かに有声音や氣息音についても発声と関与する。しかし、ここできしみ声 (creaky) や息漏れ声 (breathy) にまで言及してしまっている。一方で、より強くこれらが関与する母音のところでは説明がない。これら「特徴的な」発声についてはやはり適切な場所で説明するほうが特に初学者には良かったと思われる。

同様に 4.1.2 節の母音のところ、成節子音についても言及している。しかし、本来はその次の音節構造の小節 (4.1.3 節) で説明すべきだったと思われる。ついでながら、ここでは成節子音

の符号に ‘.’ を用いている。これは印欧語比較言語学での慣習である。一般的には文法記述には国際音声字母 (IPA) を用いるため、無声音を表記する ‘.’ に代わって、‘.’ を用いるべきだろう。

更に付け加えると、様々な内容をコンパクトに詰め込もうとするあまり、説明に物足りなさを感じる部分も存在する。例えば、音韻語と文法語の違いなども第4章で扱っている点は非常に重要である。一方で、本書では超分節音に関する記述がその分薄い。確かに多くの言語学関連書でも分節音の記述に比べて、超分節音の記述は少なくなる。本書でも多分にもれない。

超分節音の術語の使用法については分節音のそれに比べて実は多様である。評者は早田 (1999) に倣い、「アクセント」を「音韻語内の卓立位置」とし、また「声調」を「当該言語で規定される有限個の超分節要素」と見なしている¹⁰。この立場に立てば、日本語の東京方言はアクセント言語に、鹿児島方言は声調言語であると分析される。

しかし、本書では術語の対立項が「ストレス」と「声調」であり、「ピッチ」は「ストレス」の顕現される要素の一部として見なされている (4.2 および 3.1 参照)。つまり、本書では「ストレス」を一般的に言う「アクセント」と同義に用いている¹¹。また「声調」は「ピッチの違い」によって、「語と意味を区別する」と述べている。これでは「ピッチを用いたストレス言語」と「声調言語」の区別ができない。このとおりにアジアの言語を記述すると、読者に誤解を与えかねないだろう。他の章の記述における鮮やかさが第4章では見られなかったのは残念である¹²。

¹⁰ 実際の早田 (1999) での「アクセント」と「声調」の説明は以下の通りである。

「「アクセント」はそれが当該単位 (例えば単語) の「どこに有るか」ということが問題になるものである。第1音節にある, 第2音節にある, 後から2番目の音節にある等々。」(早田 1999: 9)

「「トーン」とは, 当該単位 (北京語なら音節) に有るのは「どれなんだ (どのトーンか)」ということが問題になるものである。北京語には四声すなわち4種類の音節単位のトーンがあるが, 当該単語のトーンはその四つのうちのどれなのか, ということが情報になる。」(早田 1999: 9)

¹¹ 上野 (2011) によると、英語圏では「強さアクセント (つまり、ストレス)」を「アクセント」と呼ぶことが多い。古本真氏 (私信コメント) によると、バントゥ言語学でも「ストレス」と「アクセント」を同じ意味で用いるようである。そして、キャットフォード (2006) や Ladefoged & Johnson (2011) をはじめ、多くの音声学の入門書などでは「ピッチ」と「ストレス」を対立する概念として捉えている。キャットフォード (2006) と Ladefoged & Johnson (2011) では「アクセント」という用語を用いていない。一方、日本語で書かれる斎藤 (2009) や早田 (1999) などでは、この両者を包含する概念として「アクセント」を用いる。

基本的に英語で書かれた教科書は印欧語をはじめとしたストレスを持つ言語の音声学的解説が中心であり、ピッチは、イントネーションの問題を除けば、ストレスの付随的特徴の一部として理解される。そしてピッチが語義の弁別に用いられる場合はトーン (声調) であると見なされる。Ladefoged & Johnson (2011: 260–261) ではストレス・トーン・ピッチの区別の問題を整理しているが、日本語について最終的に「ピッチ・アクセント」の言語としながらも、その性格付けとして「ある意味トーンとストレスの間に位置づけられるケース」としている。Aikhenvald 氏の本書の立場もキャットフォードたちの立場に近いものであるとも言えるかもしれない。ピッチが語義の弁別に用いられるという点だけであれば、日本語と中国語は同じ音調システムをもつと分析されるが、東アジア諸語の研究者の多くは受け入れないだろう。日本語や東アジアの諸言語におけるアクセントの議論が西洋のものとは噛み合っていないとみなせる。

¹² 著者は複数の言語の詳細な文法記述を行っている経験豊富なフィールド言語学者であるが、経歴を考えると、文法記述の問題を主体に研究してきた。そのことが、本書の音韻論の取り扱いの薄さの要因の1つとなっているのかもしれない。

4 フィールド言語学徒、そして日本語話者の言語学徒のために

本書を通読して得られる情報はすこぶる多い。特にアジアを中心に研究活動する言語学徒にとっては、南北アメリカやオーストラリアの先住民語の情報をわかりやすく伝えてくれることは、視野の拡大に大いに役立つ。以下では、フィールド言語学徒、そして日本語話者の言語学徒が本書をどのように活用し、また今後どのように学習や研究を進めていくべきか、管見を述べて、本書評を締めくくりたい。

4.1 フィールド言語学徒にとっての本書

学位取得あるいはその他の目的で未知の言語を研究しようとするフィールド言語学徒にとって、新たなフィールドに赴く行為はまさに旅そのものと言えよう。気ままにあてもなく好きな場所を訪れる旅は非常に楽しい。ただし、フィールド言語学徒の旅は現実的にはさほど自由なものではない。限られた時間と資金に縛られながら、着実に成果を上げることが昨今特に求められている。そのような厳しい条件の中、本書の果たす役割はまさにその副題に示されるように「実践的な手引書」なのである。

フィールド言語学には、現地へ行く前の準備に始まり、現地調査、そして調査によって得られたデータの整理と分析、その成果公開が一連の仕事として存在する。以下では、フィールドワークへの準備から調査そのものの段階と、文法記述を行う段階について、本書と関連文献の読み進め方を提示しておきたい。

4.2 フィールドワークのために

まず、現地へ行く前には pp.20–29 に示される **Appendix: Excursus – Linguistic Fieldwork** (付録: 追記 – ことばのフィールドワーク) および **Box 1.1** “Essential principles for successful fieldwork in linguistics” を読んでおくといいたい。ここにはフィールド言語学で行うべきことが(かなり理想的に)書かれている。まず、文法分析は媒介言語によるエリシテーション(elicitation)による調査ではなく、テキストないし会話の収集データに依拠することが最も重要であると述べられている(動物相や植物相の語彙調査はエリシテーションが有効であるとも述べている)。また調査者はできるだけ早くに対象言語の運用能力を高め、対象言語によって参与観察できるようになるべきであるとも述べられている。録音や録画機材などの装備はできるだけ最小限にとどめるべきだといった実践的なことについても整理されている。

これを読んだあとは、本書が思想的に共鳴していると考えられる Dixon (2010a) の第9章 “Field Linguistics” を読むといいたい。そこではフィールド言語学徒がすべきこと、そしてしてはならないことが簡明にまとめられている。

さらにもっと具体的なイメージを掴みたいという場合は、Newman and Ratliff (2001) がフィールドワークの方法について詳細に検討しているので有用であろう。Newman and Ratliff (2001) ではフィールド経験の豊富な言語学者が言語研究プロジェクトの立て方から、協力者と調査者の関係、モノリンガルアプローチ(媒介言語を用いずに調査する方法)などについてつぶさに述

べている。こちらは目的に応じて読み進めることによって、方法論についての理解を深められるだろう。

日本語話者の言語学徒は、質問調査については林 (2004)、フィールドワークの方法全般については宮地ほか (監修 2010, 2011) などとも有用なので、参考になる¹³。特に林 (2004) は日本でよく用いられる方法について、その長所と短所を整理している。

いずれにせよ、フィールドワークに行く前に、言語学に対する最低限の基礎知識は必要である。特に言語学の初学者は気をつけたい¹⁴。本書の第 3 章はそのためにはまず読んでおくべきである。また Dixon (2010a) の第 1 章から第 7 章は特に熟読に値しよう。日本語話者の場合は、この他に風間ほか (2004)¹⁵や斎藤 (2010)¹⁶が便利である。各々記述に強弱があるが、標準的な教科書として用いることができる。

上記に掲げた参考文献はいずれも概説的なものである。実はフィールドワークは言語分析の実践そのものであり、分析の訓練をある程度積んだ上で臨むのがやはり好ましい。日本語で書かれた言語学の教科書は言語データの分析の訓練を促すものが極まれであるのが残念である¹⁷。一方で、英語で書かれた教科書 (Fromkin ed. 2000, Payne 2006, Akmajian et. al. eds. 2010 など) では基礎的な訓練を行える練習問題が付されているものがある。また別冊でワークブック (Ottenheimer 2006, Farmer and Demers 2010 など) が施されているものもある。特に初学者はできればある程度取り組んでおきたい。

そして、本書はとりわけ音声学や音韻論に対する扱いが弱い。これだけでは実際に音声の聞き取りや音素分析、語彙調査といった言語調査の特に最初に行われる仕事にたどり着けない可能性がある。そのためには音声学の訓練や音韻論の基礎の把握、音素分析の訓練は別の教科書

¹³ フィールド言語学は言語人類学的調査の一部として位置づけられることも多い。言語人類学的調査については宮岡 (編) (1996) などとも参考になる。

¹⁴ 言語学も他の諸科学と同様、細分化の歴史を歩んできたことにより、各研究者が専門とする領域も非常に小さい範囲に絞られる傾向が出てきた。しかし、フィールド言語学の目標は研究対象言語の全体像を明らかにすることである。音韻論だけ、形態論だけ、あるいは統語論だけの研究が不可能な学問領域である。各研究者により得意な分野が偏ることはある意味必然的なことだとしても、全般的な視野を持って臨みたいところである。また、フィールド言語学という手法は言語人類学や社会学・心理学とも強く関連する。人間の社会的関係性の問題を意識しながら言語学上の問題を解き直すことや学際的な観点も重視されつつある。この点についてはバーリング (1974), ハイムズ (1979), Duranti (1997), Foley (1997), Enfield (2002), 唐須 (編) (2008), エンフィールド (2015) などが参考になるだろう。

¹⁵ この本はまさに現代言語学の基本事項をバランスよくまとめている。特に第 5 章の類型論、第 6 章の歴史言語学、第 7 章の音声学・音韻論は言語学の初学者は熟読しておくことよと思われる。残念ながら、この本では社会言語学について扱っていないので、他書で補う必要がある。また統語論については本書と並行してやはり他書も読んでおくべきだろう。

¹⁶ この本は風間ほか (2004) と異なり、社会言語学まで含んだ全般的な記述がなされている点でバランスが取れている。しかし、全般的なことに目配せしようとするあまり、各項目の記述が少なく、初学者にはむしろ向いていない側面もあろう。「入門」と銘打たれているが、一旦基礎を終えた学習者の覚書として利用するほうがよいかもしれない。

¹⁷ 日本語のものの中でも柴谷ほか (1981) や東京大学言語情報科学専攻 (編) (2011) などは解説と練習問題が付いている。後者は体系性という観点からはややバランスを欠いたところがあるが、初学者の知的好奇心をかきたてる工夫と巻末の練習問題の解答例がある点は長所と言える。

(Katamba 1989, Roca & Johnson 1999a, 1999b, Odden 2005, キャットフォード 2006, Ladefoged & Johnson 2011¹⁸ など) で補っておくべきだろう¹⁹。音声記号の理解や音声学の事項についてはプラム・ラデュサー (2003), 城生ほか (編) (2011) を手元においておくとよい。

4.3 よりよい文法記述をめざして

フィールド言語学の仕事は調査だけではない。冒頭の土田 (1978) にも示したように、整理・分析・発表という気の遠くなるような作業が続く。本書は何を調べるべきかという点でとても有益な情報を提供してくれている。特に本書の第2部ともいべき第4章から第13章はいずれも各文法書が記すべき内容を整理してくれている点では必読といえよう。

ただ、本書は世界中の文法書の細かい情報を示したわけでもなければ、類型論的な考察を行った書物でもない。あくまで文法をより良く書くための「ガイド」なのである。よって、一字一句本書にしたがって文法を執筆しても、他の研究者の興味をひく文法は一向に書けないだろう。本書では多くの文法書で書かれているテンス・アスペクト・ムードの問題や、ボイスの問題、語順の問題などについては簡単に触れる程度となっている。しかし、これらはいずれも大きな問題である。各問題につき一章を割くべき価値がある。参照文法執筆の際、本書のまとめのように、軽く触れる程度では済まされない。

これらの文法現象を執筆する際、当該言語の特徴をあぶり出しながら、類型論的な位置づけを行うには、Shopen (ed.) (1985a, b, c), Shopen (ed.) (2007a, b, c) が大いに役立つだろう。いずれも音韻論に関する記述は皆無であるが、文法の各部門に関する類型論的概説は有用である。Shopen (ed.) (2007a, b, c) は Shopen (ed.) (1985a, b, c) の改訂版の位置づけである。しかし、両者では異なる執筆者が担当する章もあり、いずれの版も参考になる²⁰。

また著者の Aikhenvald 氏とともに研究仲間である Dixon 氏が編集している、各文法項目の類型論的考察をまとめた研究書が近年盛んに刊行されている (Dixon & Aikhenvald 2000, 2002, 2004, 2006, 2009, Aikhenvald & Dixon 2001, 2003, 2006a, b, 2013, 2014 など)。これらは特に冒頭の概説とともに、読者の研究対象の言語と地域的あるいは系統的に近い言語の章を中心に読み進めることで、記述の焦点がつかめることと思われる。いずれも本書の内容の理解をさらに

¹⁸ Ladefoged & Johnson (2011) は第6版である。2015年には第7版として Ladefoged & Johnson (2015) が出版されたが、評者は未見である。第6版はCDが添付されており、音声の聞き取り訓練などに効果的である。

¹⁹ この他にも国際音声字母 (IPA) と実際の音声との対応を知るには以下のウェブサイトも有用である (いずれも2016年2月16日閲覧)。

i) 東京外国語大学言語モジュールによる音声記号の解説サイト

<http://www.coelang.tufs.ac.jp/ipa/>

ii) 国際音声字母の学習促進サイト (注: 国際音声字母協会のものではない)

<http://www.internationalphoneticalphabet.org/ipa-sounds/ipa-chart-with-sounds/>

iii) カナダ・ヴィクトリア大学言語学科の解説サイト

<http://web.uvic.ca/ling/resources/ipa/charts/IPAlab/IPAlab.htm>

²⁰ 例えば、文の種類に関する章は、Shopen (1985a) では Jerrold Sadock と Arnold M. Zwicky が、Shopen (ed.) (2007a) では Ekkehard König と Peter Siemund が担当している。

深めるはずである。

そしてとりもなおさず、特に読者の研究対象の言語に地域的あるいは系統的に近い言語の参照文法を通読しておくことは、読者自身の文法記述においても大きな力となろう。また自身の文法記述の際に、近隣の言語で問題となっているテーマを意識しながら、研究を進めれば、完成した自身の文法は対照言語学・言語類型論・歴史言語学の観点から参照されやすくなると思われる。

なお、日本語話者にとってはエヴァンズ (2009)²¹が参照できることは大きい。これは講演録であるが、記述文法を書くにあたっての心構えがコンパクトに、かつバランスよくまとめられている。

5 おわりに

本稿では Aikhenvald 氏の最新刊の *The Art of Grammar* の概要をまとめ、その特長と問題点を指摘し、特にこれからフィールド言語学を行う人々、あるいは言語学を始めようとする人々に対する推奨文献を記述した。最後に、評者自身の自戒も込めて、以下の 2 点を今後の注意点として述べ、筆を擱く。

1 つは、フィールドワークで得られる経験は個別事象の集合体であることである。それゆえに、他のフィールド経験は傾聴に値し、大いに参考となるものの、そのまま別のフィールド調査に当てはめることはできない。フィールド言語学徒は 1 回 1 回の経験を積みながら、独自にフィールド言語学の方法論を紡ぎ上げるしかない。他のフィールド言語学徒との情報交換は積極的に行うべきであるし、フィールド言語学に関する文献はやはり読むべきである。しかし、それらの他者からもたらされた知識を金科玉条とすべきではない。

もう 1 点は、学術共通語として用いられる英語での論文執筆・文法執筆である。著者は数多くの言語の調査経験をもち、多くの言語を解する異能の言語学者である。ここで、本書の参考文献を見ていただきたい。大変残念なことに、本書では英語あるいは西欧語以外で書かれた文法書はほぼ無視されている²²。これを研究者の怠慢だと批判することはたやすい。しかし、どれほど多くの言語学徒が自分の知らない言語で書かれた文献を読むために、その言語を 1 から学習し始めるのか、相当に心もとない。つまり、英語以外で書くことは、畢竟、読者をかなり狭めることにつながる。

²¹ これに加えて、エヴァンズ (2013) は危機言語 (消滅の危機に瀕する言語) の問題を扱った書物であるが、特に第 10 章は危機言語を扱うフィールド言語学徒にとって重要な心構えが書かれている。

²² 著者は日本語・中国語・朝鮮語、その他アジアの諸言語にも強い関心を抱いているように見える。膨大な研究の蓄積のある日本語・中国語・朝鮮語に対しても、英語以外で書かれた文献 (当該言語で書かれた研究) は一切参照されていない。東南アジアの諸言語もラオ語が多く引用されているのは Enfield (2007) が本書の方針と親和性のある形で書かれた英語による参照文法だからである。タイ語も引用されているものの、東南アジアの大言語であるベトナム語やクメール語は一言も言及されていない。もちろん、本書のようなコンパクトな書籍ですべての言語に言及することは無理である。しかし、それ以上にベトナム語とクメール語に信頼に足る英語で書かれた参照文法が見当たらない (あるいは極めてまれである) ことのほうが問題となるのである。

母語で論文を執筆することはもちろん大切である。そして、それは母語の言語生活におけるかけがえのない営為である。ただし、ここでより重要なのは文法などの執筆に用いられる英語は、もはや文化の 1 要素ではないことである。論文の英語はコンピュータソフトや数式と同じように、完全に道具のようなものとしてみなされるものである^{23 24}。母語でも旺盛に研究活動・論文執筆を行いながら、特に重要な学術的貢献がなしえるものについて英語で成果を積極的に公開することは 21 世紀の言語学徒にとってもはや免れ得まい²⁵。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2001. *Areal Diffusion and Genetic Inheritance — Problems in Comparative Linguistics —*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2003. *Studies in Evidentiality*. Amsterdam: John Benjamins.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2006a. *Grammars in Contact — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2006b. *Serial Verb Constructions — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2013. *Possession and Ownership — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. and R. M. W. Dixon. (eds.) 2014. *The Grammar of Knowledge — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.

²³ 英語非母語話者は英文の巧拙に拘泥してはならないとも評者は考える。まずは内容を正しく理解してもらえようように訓練するためには、英語の学術論文の執筆経験が豊富な練達の研究者に添削してもらおうのがよいだろう。英語話者なら誰でも英語論文の達人ではない。それは論文の言語が文化に根ざしたものではなく、道具に限りなく近いからだと思われる。ある種の英語論文の「型」のようなものを身に付ければ、余裕のない非母語話者は美文を書く必要はない。明快性・論理性にのみ、まずはこだわり続けるべきであろう。

²⁴ もちろん英語で成果を発表しただけで、読まれるわけではない。内容の充実を図ることが最も肝要である。それと同時に成果を公開する場所についても十分留意すべきだろう。口頭発表については大きな国際会議に挑戦すべきである。また論文発表については国内外の有力な雑誌に投稿するのも重要である。一方で、最近は Academia.edu のような論文をウェブ上で公開できる仕組みも整っている。また紙媒体での雑誌だけでなく、ウェブ上でアクセスできる学術誌も増えている。このような環境を有効に活用したい。

²⁵ 更に自戒を込めてこれに付け加えるならば、言語学徒が現地コミュニティへの学術的還元を行うために、現地の共通語による辞書・文法書・テキスト集などの作成にも積極的に取り組むべきであろう。辞書やテキスト集が現地コミュニティに歓迎される点については本書でも p.25 に書かれている。

また最近技術の進展に伴い、紙媒体の辞書などに並行して、現地共通語と研究対象言語の音声つき対照語彙集やフレーズ集を作成し、現地コミュニティに配布することも貢献の 1 つと見なされるようである。Transcriber などは音声つき語彙集の作成に向いており、また SayMore や ELAN は動画とともに記録できるソフトとして用いられる。特に電子機器を用いることができるコミュニティにはこのような新しい記録方法も大いに歓迎されるだろう。

- Akmajian, Adrian, Richard A. Demers, Ann K. Farmer and Robert M. Harnish. 2010. *Linguistics. — An Introduction to Language and Communication.* (Sixth Edition) Cambridge: The MIT Press.
- Backhouse, Anthony E. 2004. Inflected and Uninflected Adjectives in Japanese. In R. M. W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.), *Adjective Classes — A Cross-linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Bouquiaux, Luc and Jacqueline M. C. Thomas. 1992. *Studying and Describing Unwritten Languages.* (English Translated Version) Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- バーリング, ロビンズ (Robbins Burling). 1974. 『言語と文化』(高原脩・本名信行 訳) 京都: ミネルヴァ書房.
- Burling, Robbins. 1984. [2000.] *Learning a Field Language.* Prospect Heights: Waveland Press.
- キャットフォード, ジョン カニソン. (J.C. Catford). 2006. 『実践音声学入門』(竹林滋・設楽優子・内田洋子 訳) 東京: 大修館書店.
- Chelliah, Shobhana L. and Willem J. de Reuse. 2011. *Handbook of Descriptive Linguistic Fieldwork.* Oxford: Blackwell.
- Crystal, David. 2008. *A Dictionary of Linguistics & Phonetics. (Sixth Edition)* Oxford: Blackwell.
- Dixon, R. M. W. 2004. ‘Adjective classes’ in typological perspective. In R.M.W Dixon and Alexandra Aikhenvald (eds.), *Adjective Classes — A Cross-linguistic Typology —*. pp. 1-49. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. 2010a. *Basic Linguistic Theory. Vol.1: Methodology.* Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. 2010b. *Basic Linguistic Theory. Vol.2: Grammatical Topics.* Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. 2012. *Basic Linguistic Theory. Vol.3: Further Grammatical Topics.* Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. 2000. *Changing Valency — Case studies in transitivity —*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. (eds.) 2002. *Word — A Cross-Linguistic Typology —*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. (eds.) 2004. *Adjective Classes — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. (eds.) 2006. *Complementation — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W and Alexandra Y. Aikhenvald. (eds.) 2009. *The Semantics of Clause Linking — A Cross-Linguistic Typology —*. Oxford: Oxford University Press.
- Duranti, Alessandro. 1997. *Linguistic Anthropology.* Cambridge: Cambridge University Press.

- Enfield, Nick J. (ed.) 2002. *Ethnosyntax — Explorations in Grammar & Culture —*. Oxford: Oxford University Press.
- Enfield, Nick J. 2007. *A Grammar of Lao*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- エンフィールド, ニック J. (N. J. Enfield) 2015. 『やりとりの言語学—関係性思考がつなぐ記号認知文化—』(井出祥子監修, 横森大輔・梶丸岳・木本幸憲・遠藤智子 訳) 東京: 大修館書店.
- エヴァンズ, ニコラス (Nicholas Evans). 2009. 「記述されていない言語の文法を書くには」(稲垣和也 訳) 大西正幸・稲垣和也 (編) 『地球研言語記述論集 1』 pp. 1–34. 京都: 総合地球環境学研究所.
- エヴァンズ, ニコラス (Nicholas Evans). 2013. 『危機言語 —言語の消滅でわれわれは何を失うのか—』(大西正幸・長田俊樹・森若葉 訳) 京都: 京都大学学術出版会.
- Farmer, Ann K. and Richard A. Demers. 2010. *A Linguistics Workbook*. (Companion to *Linguistics*, Sixth Edition) Cambridge: The MIT Press.
- Foley, William A. 1997. *Anthropological Linguistics: An Introduction*. Malden: Blackwell.
- Fromkin, Victoria A. (ed.) 2000. *Linguistics: An Introduction to Linguistic Theory*. Malden: Blackwell.
- Gippert, Jost, Nikolaus P. Himmelmann and Ulrike Mosel. (eds.) 2006. *Essentials of Language Documentation*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 林徹. 2004. 「外国語研究と質問調査」『日本語学 —現代の質問調査法—』(2004年6月臨時増刊号) pp. 55–63. 東京: 明治書院.
- 早田輝洋. 1999. 『音調のタイポロジー』東京: 大修館書店.
- ハイムズ, デル (Dell Hymes). 1979. 『ことばの民族誌 —社会言語学の基礎—』(唐須教光 訳) 東京: 紀伊國屋書店.
- 城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男 (編). 2011. 『音声学基本事典』東京: 勉誠出版.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編). 1996. 『言語学大辞典 第6巻 (術語編)』東京: 三省堂.
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健. 2004. 『言語学 第2版』東京: 東京大学出版会.
- Katamba, Francis. 1989. *An Introduction to Phonology*. London: Longman.
- Ladefoged, Peter and Keith Johnson. 2011. *A Course in Phonetics*. (6th edition, International Edition) Boston: Wadsworth.
- Ladefoged, Peter and Keith Johnson. 2015. *A Course in Phonetics*. (7th edition) Boston: Wadsworth.
- 宮地裕・甲斐睦朗 (監). 2010. 『日本語学』(特集: フィールド言語学の第一歩) 2010年10月号. 東京: 明治書院.
- 宮地裕・甲斐睦朗 (監). 2011. 『日本語学』(特集: フィールド言語学と文法) 2011年5月号. 東京: 明治書院.
- 宮岡伯人 (編). 1996. 『言語人類学を学ぶ人のために』京都: 世界思想社.
- Newman, Paul and Martha Ratliff. 2001. *Linguistic Fieldwork*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Odden, David. 2005. *Introducing Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ottenheimer, Harriet J. 2006. *The Anthropology of Language — An Introduction to Linguistic Anthropology: Workbook, Reader —*. Belmont: Wadsworth.
- Payne, Thomas E. 1997. *Describing Morphosyntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Payne, Thomas E. 2006. *Exploring Language Structure: A Student's Guide*. Cambridge: Cambridge University Press.
- プラム, ジェフリー K・ウィリアム A. ラデュサー (Geoffrey K. Pullum and William A. Ladusaw) 2003. 『世界音声記号辞典』(土田滋・福井玲・中川裕 訳) 東京: 三省堂.
- Roca, Iggy and Wyn Johnson. 1999a. *A Course in Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Roca, Iggy and Wyn Johnson. 1999b. *A Workbook in Phonology*. Oxford: Blackwell.
- 斎藤純男. 2009. 『日本語音声学入門 [改訂版]』東京: 三省堂.
- 斎藤純男. 2010. 『言語学入門』東京: 三省堂.
- 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編). 2015. 『明解言語学辞典』東京: 三省堂.
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓 (編). 1981. 『言語の構造: 理論と分析 音声・音韻編』東京: くろしお出版.
- Shopen, Timothy. (ed.) 1985a. *Language typology and syntactic description I: Clause structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 1985b. *Language typology and syntactic description II: Complex constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 1985c. *Language typology and syntactic description III: Grammatical categories and the lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 2007a. *Language Typology and Syntactic Description (Second Edition) Volume I: Clause Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 2007b. *Language Typology and Syntactic Description (Second Edition) Volume II: Complex Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shopen, Timothy. (ed.) 2007c. *Language Typology and Syntactic Description (Second Edition) Volume III: Grammatical Categories and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Silva, Cácio and Elisângela Silva. 2012. *A Língua dos Yuhupdeh: Introdução Etnolinguística, Dicionário Yuhup-Português e Glossário Semântico-Gramatical*. São Gabriel da Cachoeira: Pró-Amazonia.
- 東京大学言語情報科学専攻 (編). 2011. 『言語科学の世界へ— ことばの不思議を体験する 45 題』東京: 東京大学出版会.
- 唐須教光 (編). 2008. 『開放系言語学への招待 — 文化・認知・コミュニケーション』東京: 慶應義塾大学出版会.
- 土田滋. 1978. 「外国語の現地調査を志す人のために」『月刊言語』(1978年9月号. 特集: 野

外調査の言語学) pp. 30–36. 東京: 大修館書店.

角田太作. 2010. 『世界の言語と日本語 (改訂版) —言語類型論から見た日本語—』 東京: くろしお出版.

上野善道. 2011. 「アクセント」城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男 (編) 『音声学基本事典』 pp. 305–311. 東京: 勉誠出版.

補足

なお、本書中で評者が発見した誤植、あるいは修正すべきではないかと思われる箇所について以下の表に示しておく (該当箇所は太字にする)。

		誤 (修正すべき箇所)	正 (好ましい表現)
p.5	9 行目	<i>nO</i>	<i>nɔ</i>
p.68	4 行目	/botl/	/botɫ/
p.68	4 行目	/sædn/	/sædn̩/
p.72	4 行目	the bilabial trill B	the bilabial trill B
p.74	8 行目	-ŋ	/ŋ/
p.83	15 行目	Salish, families,	Salish families,
p.83	15 行目	predicates, and	predicates and
p.226	下から 15 行目	In Tschangla	In Tshangla
p.243	5 行目	on Tschangla	on Tshangla
p.293	下から 5 行目	Enfield (2004a)	Enfield (2002)
p.293	最終行	Enfield (2004a: 3)	Enfield (2002: 3)
p.342	2 行目	Enfield, Nicholas J. (ed.) 2004.	Enfield, Nicholas J. (ed.) 2002.
p.342	4 行目	Enfield, Nicholas J. 2004a.	Enfield, Nicholas J. 2002.
p.342	5 行目	Enfield, Nicholas J. 2004b.	Enfield, Nicholas J. 2004.

謝辞

本稿作成時には、倉部慶太氏・藤原敬介氏・古本真氏に草稿をお読みいただき、ご指摘・ご助言を大いに参考にしました。記して感謝申し上げます。

Abstract

Review: Alexandra Y. Aikhenvald *The Art of Grammar — A Practical Guide*— Oxford: Oxford University Press, 2015, xxiii + 380pp.

Norihiko HAYASHI

Kobe City University of Foreign Studies

This is to review a recent publication of field linguistics entitled as *The Art of Grammar* by Alexandra Aikhenvald. This book is a truly informative and substantial guide for field linguists to illustrate from “how to prepare for field trips” to “how to write and read a reference grammar,” which includes a kind of typological summaries of phonological and morpho-syntactic features in the world languages and warnings for language descriptions. This book helps the beginners of linguistic fieldwork to understand what to do in the field and what to write in a reference grammar, though if they do not know the fundamentals of linguistics they should complement them by reading other materials suggested in this review. For professional linguists (or Ph.D students), this book is useful as a checklist for linguistic fieldwork and analyses.

Keywords: field linguistics, reference grammar, field method, grammar description

言語記述研究会例会報告

第 60 回 (3/29/2015) ~ 第 70 回 (3/12/2016)

第 60 回 2015 年 3 月 29 日 (日) 13:30~17:00

於京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

研究発表 植田尚樹

「モンゴル語ハルハ方言の母音の長さについて —位置による母音長の違い—」

研究発表 白田理人

「奄美喜界島諸方言の音変化 —諸方言間の音韻対応に関する予備的報告—」

第 61 回 2015 年 4 月 26 日 (日) 13:00~17:30

於京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

研究発表 落合いずみ

「セデック語パラソ方言の “t” から始まる動詞に関する考察」

研究発表 古本真

「スワヒリ語マクンドウチ方言の弱化した指示詞について」

研究発表 脇坂美和子

「湖北方言のテキストに見る接尾辞の多機能性について」

第 62 回 2015 年 5 月 23 日 (土) 13:30 ~ 17:00

於京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

研究発表 野島本泰

「ブヌン語動詞形態論 (第二部) 語彙的接頭辞」

研究発表 牧野友香

「スワヒリ語の動詞語幹における全体重複について」

第 63 回 2015 年 6 月 28 日 (日) 13:30 ~ 18:00

於京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

学会報告 落合いずみ

「SEALS25 海外学会報告 —東南アジアの陸と海を廻って—」

研究発表 山本恭裕

「イロカノ語の節補語に現れる動詞のアスペクト・時制表示について」

研究発表 Nishaant Choksi

“Toward a Typology of Concern: A reanalysis of the ethical dative in relation to possession”

第 64 回 2015 年 7 月 26 日 (日) 13:30 ~ 17:00

於京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

研究発表 植田尚樹

「モンゴル語ハルハ方言の第 2 音節以降の母音の有無について —音声事実と音韻解釈—」

研究発表 山本恭裕

「イロカノ語のイデオフォンの形態論・音韻論・統語論」

第 65 回 2015 年 9 月 27 日 (日) 13:00 ~ 17:30

於京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

学会報告 伊藤雄馬

「ICAAL6 海外学会報告」

研究発表 稲垣和也

「インドネシア語の所有」

研究発表 白田理人

「奄美喜界島上嘉鉄方言の形容詞 —-sa(r-) 形と -ku 形の相違—」

研究発表 古本真

「そこに境界はあるのか —スワヒリ語カエ方言の動詞末尾辞の分節可能性について—」

第 66 回 2015 年 10 月 10 日 (土) 10:30 ~ 17:00

於京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

研究発表 Izumi Ochiai

“Notes on historical reduplication in Seediq”

研究発表 藤原敬介

「バングラ語の『人魚構文 (体言じめ文)』とその周辺」

研究発表 Nathan Badenoch

“Quick Review of Expressives in Southeast Asia”

研究発表 大西正幸・Durga Datta

“Bangla Expressives”

研究発表 Nathan Badenoch

“Bit Expressives”

研究発表 Nishaant Choksi

“Expressives in the Munda Languages: Some Reflections on Santali and Mundari”

第 67 回 2015 年 11 月 8 日 (日) 10:00 ~ 18:00

京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

研究発表 Kim Jee Hong

“Non-canonical ending systems in Jeju Korean”

研究発表 Naoki Ueta

“The duration of full non-initial vowels in Khalkha Mongolian:
from the perspectives of speech production and perception”

研究発表 脇坂美和子

「湖北方言の愚痴命令文」

研究発表 落合いずみ

「セデック語パラン方言の方位表現 —上り坂・下り坂を枢軸に—」

調査報告 千田俊太郎

「調査報告」

学会報告 山本恭裕・落合いずみ

「海外学会報告 “13th International conference on Austronesian linguistics”」

第 68 回 2015 年 12 月 26 日 (土) 13:30 ~ 18:00

京都大学文学部第 10 演習室 (総合研究 2 号館)

学会報告 吉岡乾

「International workshop on Noun Modifying Expressions (NMEs)
in South Asian Languages の報告」

研究発表 鈴木博之・四郎翁姆

“Evidential system in Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams (Dartsendo, Sichuan)”

研究発表 山田真寛

「琉球沖永部語上平川方言の音声表記について」

第 69 回 2016 年 2 月 6 日 (土) 13:30 ~ 18:00

京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

研究発表 山本恭裕

「ビデオ課題実験によるタガログ語移動表現の種類の検討と移動様態の粒度」

研究発表 大竹昌巳

「契丹語格接尾辞の数による分裂現象」

第 70 回 2016 年 3 月 12 日 (土) 13:30 ~ 18:00

京都大学文学部第 9 演習室 (総合研究 2 号館)

研究発表 野島本泰

「20 世紀初頭のブヌン語巒社方言における 2 つの歯擦音
—『巒蕃ブヌン語集』におけるカナ表記からわかること—」

研究発表 落合いずみ

「埔里北蕃語と現代セデック語 —ある手稿の物語」

研究発表 植田尚樹

「モンゴル語ハルハ方言の接尾辞の母音長について」

編集後記

『言語記述論集』第8号に掲載の論文・書評は、以下の方々（匿名希望の方も含む）が読み合わせにご参加くださいました。詳細なコメントの作成にご協力いただいたことに、この場を借りて編集部から心よりお礼申し上げます。

伊藤雄馬	植田尚樹	大竹昌巳	大西正幸
長田俊樹	倉部慶太	重野裕美	白田理人
鈴木博之	千田俊太郎	林範彦	古本真
宮川創	山田真寛	吉岡乾	脇坂美和子

『言語記述論集』第8号は、これまでの7年、7つの号の積み重ねの上にあります。本号は、これまでの方針を受け継ぎながら、体制の再編を行いました。編集会議にご参加いただいた皆様、メーリングリストでご意見をいただいた皆様のご助力に感謝いたします。

『言語記述論集』は記述言語学をテーマに押し出した、日本国内においても国際的にも稀少な学術雑誌です。今後とも本誌が皆様に愛され永く続き、多くの論文が寄稿されるよう切に願います。

(2016年3月 落合いずみ記)

言語記述論集 第8号

Journal of Kijutsuken

Descriptive Linguistics Study Group Vol. 8

編集長：千田俊太郎

副編集長：落合いずみ

編集委員：倉部慶太・白田理人・脇坂美和子

Editor-in-chief : TIDA Syuntarô

Chief-assistant : OCHIAI Izumi

Editors : KURABE Keita, SHIRATA Rihito, WAKIZAKA Miwako

言語記述研究会

Kijutsuken:

Descriptive Linguistics Study Group

2016年3月30日発行

ISSN 2432-244X